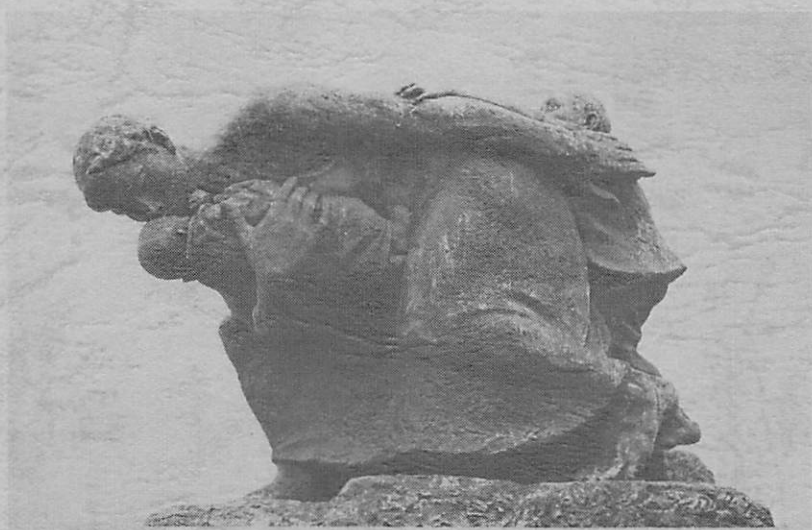


日本被団協 原爆被害者調査

資料集Ⅱ

「あの日」の証言（その2）



日本原水爆被害者団体協議会



日本被団協原爆被害者調査資料集Ⅱ

「あの日」の証言（その2）

発行にあたって

日本被団協が実施した「原爆被害者調査」（'85.11～'86.3）には、「あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、など」についての設問が含まれている。

この資料集は、それへの自由な回答の中から、第1集にひきつづき、さらに500例を選んで編集したものである。

それぞれは、回答者の原爆についての〈原体験〉を、凝縮された形で示すものであり、そのイメージは40年後の今日なお、被爆者を激しい情動—恐怖、怒り、悲しみ、悔いなど—へ誘い、被爆者の反原爆の思想と運動を支えるものとなっている。

原爆がもたらした「あの日」の“状況”は、被爆者にとっては、思い出すのもつらいことであり、また、それを伝えることばもないようなものであった。

この証言を読まれる方々は、そのような困難をのりこえてあえて筆をとった人たちの、気持を汲みとりながら、その一言一言から、原爆のもたらした「人間の想像を絶する地獄」（基本想「意見」）とは何であったのかを再構成してみたい。

なお、厚生省が昭和60年度に実施した「原子爆弾被爆者実態調査」には、さらに多くの被爆者の「証言」が書きこまれているとのことである。「原爆は人間にとって何であったのか」を永く人類の歴史に刻む資料として、被爆国政府は、その全容をありのままに公表すべきである。

最後に、この資料集作成にあたっては、「〈原爆と人間〉研究会」（一橋大学）および斎藤喜作氏の献身的な協力をいただいた。付記して、心からの謝意を表したい。

目 次

発行にあたって

凡 例

広 島

長 崎

	頁		頁
I. 直接被爆	7	I. 直接被爆	169
(1) 2.0km以内	7	(1) 2.0km以内	169
a) 男	7	a) 男	169
b) 女	35	b) 女	189
(2) 2.0km～3.0km	89	(2) 2.0km～3.0km	208
a) 男	89	a) 男	208
b) 女	99	b) 女	217
(3) 3.0km～	111	(3) 3.0km～	230
a) 男	111	a) 男	230
b) 女	122	b) 女	244
II. 入市被爆	128	II. 入市被爆	261
a) 男	128	a) 男	261
b) 女	149	b) 女	271
III. その他	165	III. その他	280

表紙写真：「嵐の中の母子像」本郷新・作（連合通信）

凡 例

1. この証言に関する設問は、次のとおりである。

【問4】あの日や、その直後のことで、いまでも忘れられないこと、恐ろしく思っていること、心のこりなこと、などがありますか。あるとすれば、どんなことですか。例を参考に、なるべく、その状況や、あなたの思いがわかるように書いてください。

◇例◇

- ア) 人びとの死んでいる姿や、生きていた人たちの苦しみのようす、
死んでいった人びとの死にかた
- イ) それを見て、あなたが感じたこと
- ウ) 水や助けをもとめる人びとに、なにもしてあげることができず、
心のこりに思っていること、など

2. 本資料集に収録した証言は、問4への回答の中から「原爆は人間にとって何であったのか」について、よく伝えている500例を、任意に抽出したものである。

3. 証言はすべて原文のまま。ただし、表記の誤りや、漢字、仮名づかいについては、改めたところもある。また、特定される人名は△△…◇◇…で、編集にあたって補った部分は文中〔 〕で示してある。

4. 500例の証言は、被爆地、被爆状況（爆心からの距離）、性別、被爆時年齢区分によって分類、編集した。

各証言のあとの〔 〕（ ）内は、次の事項を示している。

〔被爆地、被爆状況（爆心からの距離）、性別、被爆時年齢〕（整理番号）

被爆時年齢は、昭和20年から生年を差し引いた数を記した。そのため本文中の年齢と若干相違するものもある。

「あの日」の証言（その2）

正 誤 表

(誤) P13 [広島 直爆 1.0 Km 男 16歳]
(13-12-106)



(正) [長崎 直爆 1.0 Km 男 16歳]
(13-12-106)

に訂正し、この証言を
P. 176 (42-1384) の後に挿入する。

(2008) 第 10001 號

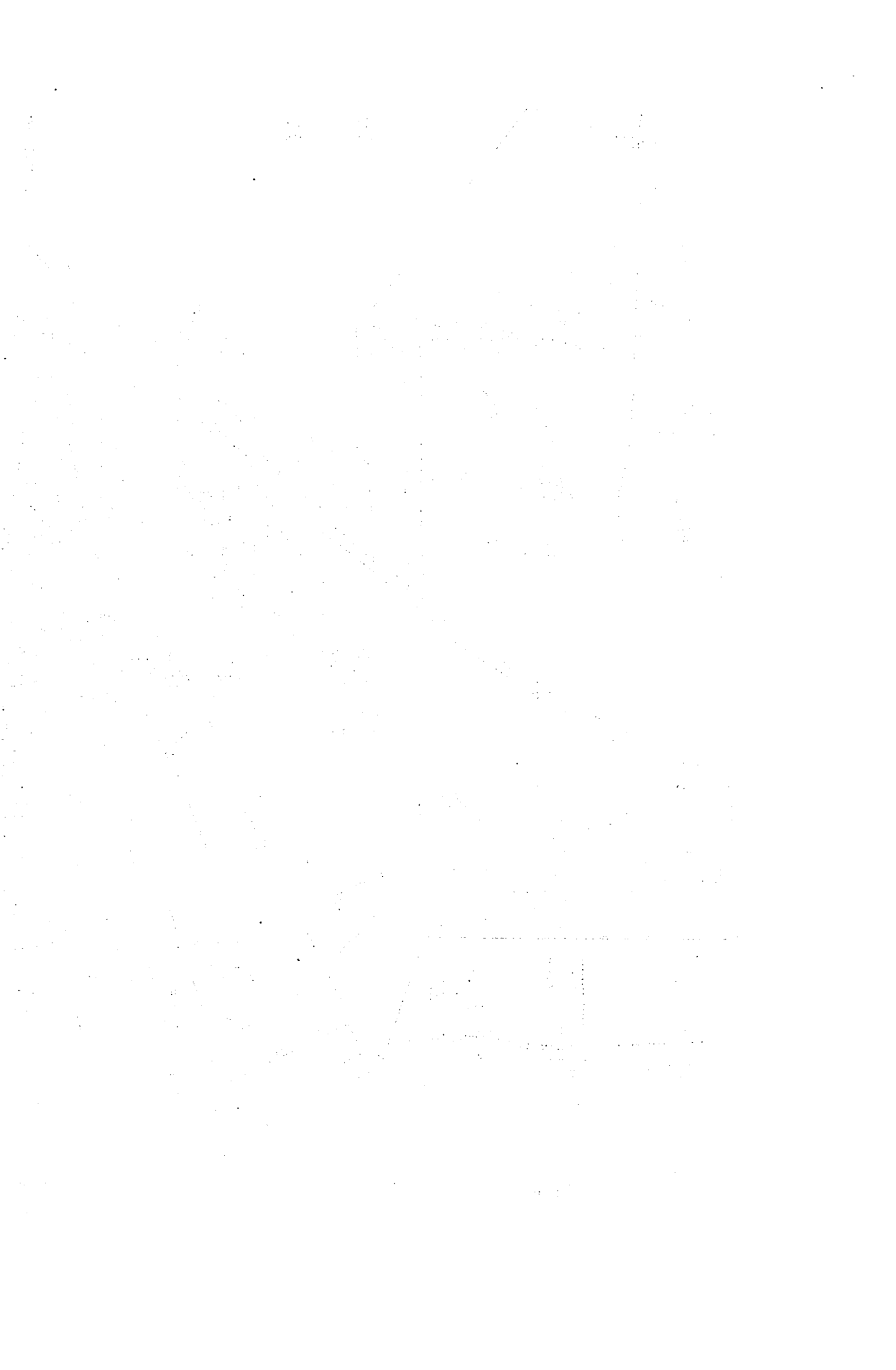
通 告

【第 10001 號】第 10001 號 (第 10001 號)
(1001-1001)

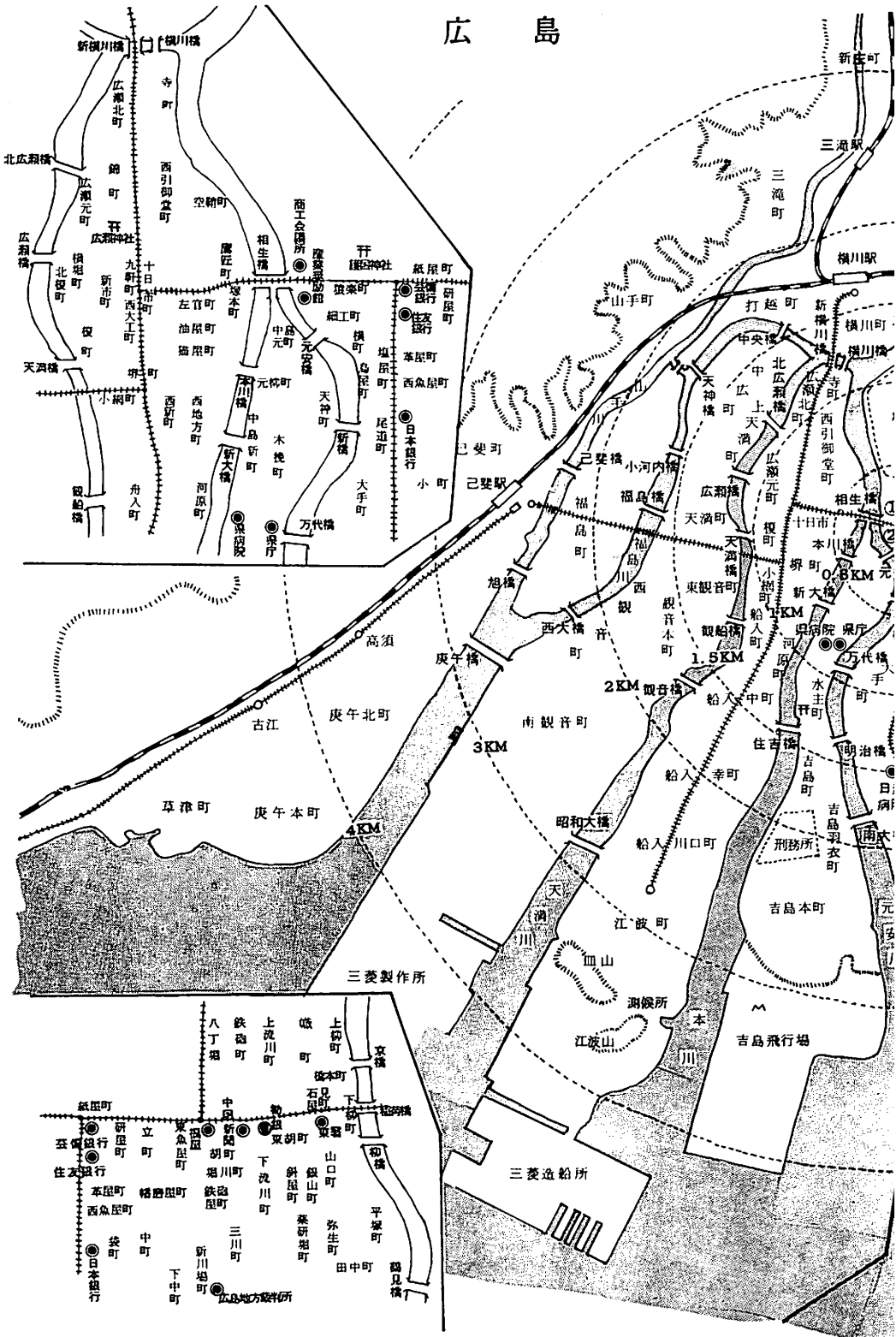
【第 10001 號】第 10001 號 (第 10001 號)
(1001-1001)

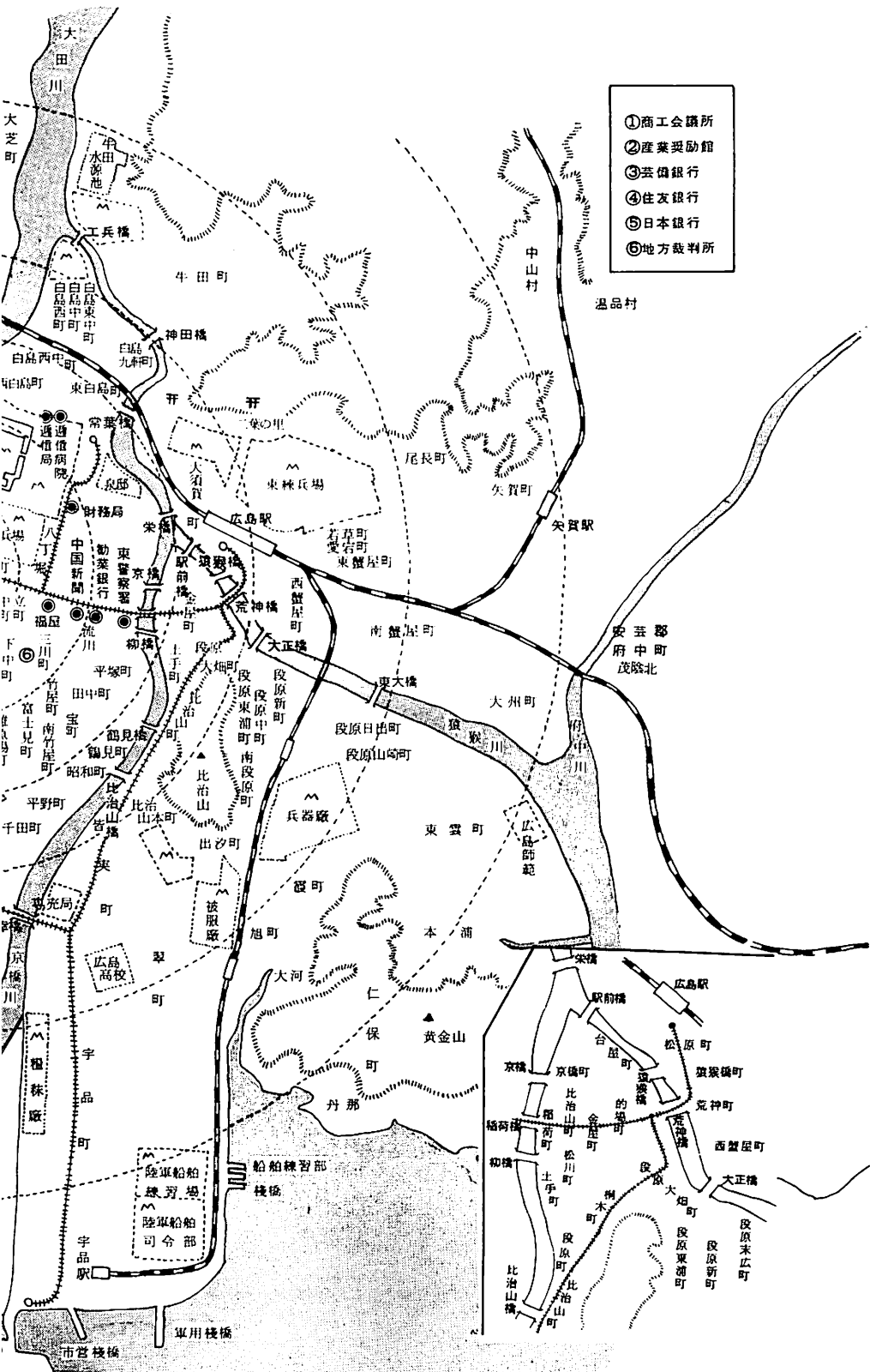
第 10001 號 (第 10001 號)

第 10001 號 (第 10001 號)



広島





- ①商工会議所
- ②産業奨励館
- ③芸僑銀行
- ④住友銀行
- ⑤日本銀行
- ⑥地方裁判所

大田川
大芝町
牛田町
白島東中町
白島中町
白島西町
白島西中町
東白島町
白島町
常葉橋
通債局
財務局
東警察署
中国新聞
八丁橋
三川町
富土見町
千田町
京橋川
宇品町
宇品駅
市営棧橋
軍用棧橋

神田橋
開
開
大須賀
東練兵場
尾長町
矢賀町
西蟹屋町
南蟹屋町
東大橋
段原日出町
段原山崎町
段原東中町
段原新町
段原末広町
段原東浦町
南段原町
比治山
比治山本町
出汐町
旭町
仁保町
丹那
陸軍船舶練習部
棧橋
陸軍船舶練習場
陸軍船舶司令部
宇品

中山村
温品村
安芸郡
府中町
茂原北
大州町
大正橋
東大橋
段原日出町
段原山崎町
東雲町
本浦
京橋
京橋町
比治山町
松原町
西蟹屋町
大正橋
段原末広町
段原新町
段原東浦町
比治山橋
比治山町
和橋
土手町
段原町
比治山町
京橋
比治山町
松原町
西蟹屋町
大正橋
段原末広町
段原新町
段原東浦町
比治山橋
比治山町

I. 直接被爆

(1) 2.0Km以内(直爆)

a) 男

① 9歳以下(被爆時)

母と姉、妹と私と同じ部屋で被爆した。私は下敷きになったが、傷を受けなかった。姉と妹は焼死。母は重傷を負いながらなんとか助かった。

40年たったいま、満員電車の人ごみの中でもまれる時、また、部屋の壁に向かって座ったり、立ったりすると息苦しく感じ、頭の中には下敷きになっていた、あの息苦しさが、当時のまま浮かんでくる。

下敷きになっていた姉と妹を、火のまわりが早くて助け出せなかったこと。私(8歳)自身、当時は逃げることに夢中で、後になって時がたつとともに、あの日なすべきことをしなかった、見捨ててしまったという意識が、どうしてもとれない。

水をみると、特にきれいな川の流れをみていると、いつの間にか水ぶくれの、まっくろい死体がただよっていた河があらわれてくる。

[広島 直爆1.5km 男 8歳]

(13-23-041)

姉、当時21歳、家の下敷きになり、下の方から、この柱をのけてくれたら出られる、足が抜けない、鋸を取ってくれ、といていたけれども、鋸なんて見つかるわけがない。その近くにいた母が私の声を聞いて、膝に深い傷をつけてはい出してきた。もう1人15歳(当時)の姉が腹わたを出してうめいていた。声は男の声、水をくれ、のどをついて殺してくれ、と叫んでいた。

私9歳(当時)はわれた瓦を拾い、防火水槽から汚水をくみ母に手渡した、ほとんどこぼれてしまっていたが……。

人間の無力を感じた。まだ生きていた2人の姉、母は2人の子をおいて逃げた。私に手をひっぱられて……。お前1人がいなかったら、子のそばから離れなく、一

緒に死んでいったであろう。

〔広島 直爆1.5km 男 9歳〕

(34-5493)

- ①水を下さい。弱々しい声で水を求める坊や。水を飲ませてあげた。ほとんどの体の部分がやけどをしていた。二度目に水をもっていった時には、坊やは死んでいた。お線香をあげて、私は泣いた。
- ②河原に避難のため逃げた。夜の、悲鳴にも似た、我が子をさがし廻る母親のさげび声。我が子の名前を呼びながら、対岸を行ったり来たり、背に赤子をくくりつけて、一夜中の悲鳴。
- ③もう二度と、あの時の悲鳴にも似た、苦しみの声は聞きたくない。平和な地球でありますように。

〔広島 直爆2.0km 男 9歳〕

(11-0124)

② 10歳台 (被爆時)

当日の出来事は無我夢中であつたので、また無欲顔ぼうの心理状態で、考えることも行動することもできない程であつたので、精神的異常の状態で、人々に追従するのみであつた。そのことが忘れられない。

恐ろしいと感じた(後に)のは、老人でなく若い人や子供が、朝には元気な姿だったのが無残に死に、灰となったことである。

〔広島 直爆1.5km 男 10歳〕

(28-0077)

姉△△（当時女学校2年生、14歳）と私（当時小学校5年生、10歳）が重傷で、体も動かすことが出来ず、うじ虫が体にいっぱいたまるままで、寝たきりの日々……。母も怪我をしていたが、一生懸命私達を看病してくれていたのも心強く感じていた。

そんなあの日、8月17日の夕方、姉が母に「私はもうだめだからターちゃん（私のこと）だけは助けてやって」と言う会話が私の耳に入って来た。そして私の顔が見たいと、むりやり自分の体を母に起こさせて（姉は頭に大きな穴があいていた）同じように動けないで寝ている私の顔を、優しい目でジッと見つめ（ニッコリと笑っていたのかも知れないが、顔がグシャグシャで表情がわからない）「母ちゃんに助けてもらいんさい」と言った。その夜、姉は14歳の生涯を終えた。私にとって一生忘れることの出来ない、姉と姉の言葉である。これを今書きながらも涙が出て来てとまらない。

〔広島 直爆2.0km 男 10歳〕
（34-7197）

当時私は小6の子供であったが、下敷きとなった人々のウメキ声、救助を求める声を聞きながら、どうすることもできなかった。

逃げる途中、川土手のあたりで苦しんでいた人たちに、サビた空カンで水を飲ませ「アリガトウ」と礼を言われ、言いようのない気持になった。

〔広島 直爆1.5km 男 12歳〕
（34-5177）

ア-1) 1.7キロ離れていた段原小学校は、一瞬にして全壊。ちょうど登校していた学友30人は、倒壊校舎の下敷きとなり、セメントモルタルの壁のため、約20人は脱出できず「出してくれ」「助けてくれ」の声を出しながら、火災

のため生きてまま焼死した。その声が今も耳にこびりついている。

ア-2) 学校を脱出しての電車の道に出ると、真黒い顔に逆立った髪、てんでに右に走り、左に走り、だれもが大きく口をあけ、何やら喚いていた。だれもがぼろ布を肩や腕にひっかけている程度、ほとんど裸に近い。そして凄まじい形相をして、その赤黒い顔や腕から、部分的に白っぽく何かめくれた感じでたれさがった、火傷のための皮膚であることが分かるのに、かなり時間が必要だった。

ア-3) 大正橋付近の川にとび込んで、火傷の痛みからのがれようとし、川の流れて流されていった多くの人々の姿。

イ) 火災がいまだに火傷するほどでないのに、大火傷している理由が理解できずにいた。

ウ) 安芸中野に逃げ、寺院に泊まったが、火傷を負った20人近い人のうめき声で、一晩中眠られなかった。

医者はいたが、火傷の薬がなく、赤チンやホウサンを皮膚にぬる程度の治療で、翌朝には10数人の死体が庭に並べられていた。

[広島 直爆2.0km 男 13歳]

(13-35-002)

○昭和20年8月6日、周囲の急変に驚き、まず学校へ連絡に〜と出かけたものの、街中の猛火に前へ進めず、やむなくひき返したこと。

○体表をツタツタに引き裂かれ、木片が眼に突きささったままの人や、腹部が裂けてぶらさがった腸を両手で庇いながらヨタヨタ避難する人々のこと。

○全身血だるまになりながら、逃げのびた島の小屋で横たわったまま、水をください〜水を〜を言いながら息をひきとっていった人々のこと。

○学友をさがすため、臨時に設けられた収容所をつぎつぎと探しまわったこと。

○処理にあたる兵隊と一緒に、遺体を積み上げ、油に火をつけたものの、途中で上にかぶせたトタン板をはねのけて上半身を起こした死体に、肝をつぶし逃げ出したこと等々。

この世の地獄の体験は、40年経った今も、昨日のここのようにはっきりと思い出すことができる。

〔広島 直爆2.0km 男 14歳〕
(13-15-036)

被爆当日、広島駅から歩いて、西広島の高須へ歩いたが、市内は死体と悲鳴や絶叫のるつぼでうまり、どうしてあげることもできないまま通り過ぎたことを思い起こします。「水をくれ」「助けてくれ」のうめき声を聞きながら、通り過ぎる苦しさは何とも言えません。

翌日は、川という川が全面、水ぶくれした死体でうまり、何とも言えない情景でした。

また、自らも頬のやけど、左腕、左足のやけどで苦しみながらの行進で、早く家に帰りたいの思いだけでした。

〔広島 直爆2.0km 男 14歳〕
(34-4414)

- ①背中一面の火傷の老人が、ねころぶことも出来ず、頭をカベにつけ、背中は壁にふれないようにして、両ひざを立てて座っていたが、翌朝見ると、そのままの姿勢で死んでいた。
- ②四つんばいの男の人が来るので見てみると、両手をやけどして、両足裏を火傷して、1cm位の水ぶくれなので、歩けない人がいた。
- ③女の人が右手を上げて、ソロリソロリ、ゆっくりこちらに来るので見ると、右目に木片が突きささり、抜くことも出来ず、すごく苦しんでいた。
- ④朝になると、憲兵が死人を2人でかかえ、広場につみ重ね、油をかけ焼いていた。その時の臭いが鼻についたのが、今でも鼻につくことがある。

〔広島 直爆0.5km 男 15歳〕
(34-7275)

- ① 全身火傷の患者の患部が化膿し、表面が黄色いカサブタになり、中に膿が溜っている。そこからウジがわいてくる……。鼻をつく臭気と共に、まさに生地獄だった様子は忘れられない。(父も母もそのような状態であった。)
- ② 人の命が生命として取扱われない(患者治療、死体処理も含めて)異常な状況の恐怖は拭い切れない。

〔広島 直爆2.0km 男 15歳〕
(13-17-013)

自分が逃げることにのみ汲々として、助けを求める人を見殺しにしたことが、今も心に重くのしかかっている。

橋の上に横たわっていた人を、渡る時にふみつけざるを得なかったが、それは死体ではなく生きていて、「助けてくれ」と叫んで足をつかまれ、その人はそのまま死んでいった。

原爆被爆者は被害者にはちがいないが、私の場合加害者でもある。それが今でもつらい。

〔広島 直爆2.0km 男 15歳〕
(34-5626)

S20年8月9日、長崎市浦上爆心地より800米ぐらいの所で被爆す。

佐世保海軍水交社より、9日朝5時頃、連絡のため海軍中佐をサイドカーに乗せ、

7時30分か8時前に長崎の三菱ドックに着いた。10時40分頃帰ることになりましたが、中佐殿が帰りがけに浦上のいとこのところに立ち寄る。いとこの家の近くでオートバイを停めて休憩す。そこに男の子4人か5人が遊んでいた。その子供の中の1人が私に美しい貝殻をくれた。5歳ぐらいの男の子が、自分も家にきれいな貝殻をもっとるけん取りに行くと言って、私のそばから走って行った。私はそれを見ていたら、子供が走っていった方向に防空壕があった。その壕から防空ずきんをかぶったお母さんが赤チャンをオンブして、3歳ぐらいの子の手を引きながら出てきたんです。私の方へ10米ぐらいのとこまで近づいて来たとき、走って行った子供とすれちがった。ちょうどその時、オレンジ色とカメラのフラッシュのような光が頭上を走ったのです(私はレンガ塀で高さ4米、倉庫の陰に)。そしたら、お母さん達が走って行った子供と一緒に、一瞬にしてそこから消えたんです。蒸発したんです。その時私が見たものは煙じゃないんです。水蒸気みたいなものが、そのお母さんと男の子からポウーと上がったのを見ました。もうそこにはなんの姿もありませんでした。

〔広島 直爆1.0km 男 16歳〕
(13-12-106)

着ているものは焼け、体も焼けただれて、それでもわずかに焼け残った切れはしで下の方をおさえながら、夢遊病者のように爆心地の方からとぼとぼと逃げてくるおびたしい人の群れ。それは若い娘さんも、お年寄りも見わけのつかない凄惨な姿であった。

僕の耳や鼻の中、体のいたるところにつまっている砂ぼこりを洗おうとして行った太田川の水面上には、いくつもの死体がぼかりぼかりと浮かびながら流れてくる。しばらくすれば海に出て、もはやその遺体を探すすべもない人達の。

〔広島 直爆2.0km 男 16歳〕
(13-12-068)

相生橋の東詰（現在の商工会議所）付近の旧中国配電KKの変電所の建物（煉瓦造）が破壊され、その煉瓦の塊（約1 m立方以上）の下敷きになって亡くなった男性が、被爆後約2ヵ月以上も放置されていた状況。

また、三瀧山の火葬場に被爆者の死体は何十人と山のように積まれ、火葬が間にあわず山の中に放置された方々。

〔広島 直爆2.0km 男 16歳〕
（13-27-036）

- ア) 木造倒壊物の下敷となり、意識が戻っても体が動かず、目も土塵がいっぱい入って痛くて開けられず、火の燃える音が近づいて顔が熱くなった時は、もう駄目だと思っても、15歳の少年だった私は泣きわめいた。
- イ) 助け出されて空洞の火薬庫の土手に休んだ時、広島の上空に突き上げる煙か雲か、黒い固まりが後から後から上がり、やがて真黒になった恐ろしさは忘れられない。
- ウ) 女子学生一団の裸体の行列。真黒で血が流れ、髪が地肌が見えちぢれ、布切れや瓦や板切れで恥部を覆い、水をくれと言う歯だけが異常に白かった。可哀相で哀れで神々しくさえ思えた。
- エ) 8月17日野犬の夜襲があり、屍体や動けない人々を喰いちぎった事件。朝の日の中にスサマジイ地獄を見た。軍用犬だったと後で聞いた（兵器廠東南の角の収容所で）

〔広島 直爆2.0km 男 16歳〕
（27-0356）

父母兄姉とも広島県双三郡の石原の父の実家に着きましたが、9月1日に兄姉とも原爆症のため死亡。その翌日に父、そして6日に母と、一週間のうちに四人と

も死亡し私一人になりました。

〔広島 直爆2.0km 男 17歳〕

(13-14-019)

1. 兵舎裏で被爆し、机の中に閉じこめられ助けを求められたのに、炎の廻りが早く、どうしてやることも出来なかったが、他に5、6人助けだしたのがせめてものすくい。
2. 縮景園を通過して京橋川の中州、常盤橋より少し下流で休んでいたとき、初め広島駅方面より、次に京橋川下流より、ものすごい火の龍巻がおこり、今まで泉邸の岸辺にたくさんいた人々の姿がなくなっていたこと。直後に雨が降って来て、橋の下にかけこんだが、それが黒い雨だったとのこと……寒かった。
3. 宿舎の寺で、隣にねている人が、翌朝に息を引きとっていたこと。
4. つかれて、道ばたの箱の中にならば、死体とまちがわれたこと。
5. 川の中を流れる死体をも、不思議とこわいとか、何の感情もわいてこなかった。あの時、気持、今でも分からん。
6. ニギツ神社前で、翌日坂〔町〕の人に出会ったこと。

〔広島 直爆1.0km 男 18歳〕

(34-4316)

私は当時広島県庁内政部会計課県費係に所属していましたので、西広島より市内電車に乗り、天満町電停、土橋間にさしかかったとたんに被爆しました。

その朝にかぎり入口より中に入りたくなくて、車掌さんに、入りなさいと叱られ、とたんにピカッと光り、幸いすぐ降りられましたが、どちらを向いても暗がり、何も見えませんでした。少しして、己斐の△△さんと言う同僚が降りて来て、抱き合って泣きました。その時たしか県庁の主事の方だと思いますが、私の無キズを見

て、なでながら、両親は健在ですか、早くお帰りなさいと言って、そのままおれて死なれましたが、何故か私は、その時、その方を抱き起してあげる気にもなれず、ただ自分達の逃げるのが必死でした。

水槽のそばに、赤ちゃんを抱いて、乳首の所だけ皮がついて、親子ともズルムケになって、助けを求めて泣きさげんでいたり、私の手を引っ張って、連れて逃げてくれと言われても振り切って、同僚と手を取り合って電車の鉄橋沿いに、枕木の焼ける上を、必死で走りまくりました。途中、屋根の下から父母を呼び、さげんでいるのを、耳をふさいで逃げました。目の玉がブラ下がりて死に、首がモゲて死んでいましたが、今にして思えば、あの時は自分が生きることしか考えていませんでした。

福島町あたりまで逃げた時、黒い雨に遭い、空からは機銃掃射に会い、友達と抱き合っ、たしかあれはチンチヨ船の機械だったと思いますが、その下にかくれ、飛行機が見えなくなったので出ましたが、ヤケタダれた人をまでも空からネライ撃ちしたのも見ました。

[広島 直爆1.5km 男 18歳]
(34-5277)

当時建物疎開に2日間かり出され(理工科系統に在学中のため入営延期で徴兵を免除されていた)、第1日目が市役所裏の雑魚場町で、軍隊の倒した建物の後片付けをしていた際、AM8:15のピカドンに屋外で直接受けた。一転、にわかには暗黒の世界に押し込められ、光々〔燦々〕とした太陽が月夜に様変わりし、盲目になったと錯覚した。一時刻をおいて次第に太陽は黄色味を帯びてくるにつれ、方々からうめき声が聞こえ、自分自身生きていることが初めて自覚した。

同級生2組約90名いたが、周りには4~5名も見つからず、火は方々から発火し始め、倒れた建物の下から"助けて"の声があちらこちらからも出て来た。4~5人の同僚と下敷きになった人を引き出したものの、兵隊から逃げろ、逃げろ、吉島の飛行場に行け、との声に、同僚と共々鷹野橋、住吉橋を経て飛行場の防空壕まで行き、夜までそこで過ごした。

火事はますます広がる一方なので、自宅のある段原に帰りたく、1人抜け出し、どこを歩いたか分からないが、途中の水道水を飲みながら、比治山を越して段原に帰った。幸い山裾に位置していた自宅は、斜めに傾いてはいたが焼けずに残っていたので、初めて助かったと座り込んだ。母が血だらけ、やけどを見て、治療してくれた。

〔広島 直爆1.0km 男 19歳〕

(13-27-014)

- 1) 同じ建物にいた戦友が、建物の下敷きになり、助け出そうにも出されず、そのうち火がまわり、目の前で足や手、また頭の順で焼ける様子。地獄なり。
- 2) 馬を飼っていたが、馬屋に繋がれたまま焼けるさまは、可哀想よりはむごかった。今も目に浮かぶ。
- 3) その時は、自分も動く(歩く)ことが不自由で思うように出来ず、自身が脱出することで一生懸命であった。
- 4) 戦友といっしょににげる途中で、川に飛びこむも、戦友は力つきて泳げず、そのまま死んだことを、10日後ぐらいに知った。いっしょに泳いでいるとばかり思っていた。自分自身のことで精いっぱいだったとはいえ、助けてあげられなかったこと、つらかった。

〔広島 直爆1.0km 男 19歳〕

(34-7106)

広島市西観音町自宅にて出勤(広島工業専門学校機械工学科1年、学徒動員として三菱重工業)のため、ゲートルを巻き終り、再度しめ直しをして完了直後に被爆。もう一秒遅ければ外で被爆のため即死かも。玄関先にて、壁もガラスも一瞬にしてふきとび、気がついたときには、私の30cmばかり後方の梁も落下して、時間とし

て1～2秒。危険物体から数十センチはなれた、生の空間にいたということは、奇跡としか思えない。

(今も心残りのこと)

当時、母は病気のため海田市町船越の親戚に疎開。父(当時広島県立第二中学校教員)と二人きりの生活のため、自宅より4軒目の奥さん(ご主人は戦死、小学生の二人の子供は学童疎開、名前は△△さん……この氏名がはっきりしていない。年齢は30歳前後だったと思う)が毎朝、夕、食事の面倒をして下さっていた。

当日はいつもより早く、台所で調理して下さっているの、今日はお早いですね、と挨拶したところ、これより婦人会から疎開作業で、土橋の方へまいりますとのことであった。

それから1時間余後に被爆したのだから、どうされたか気がかりであったが、夕方、お婆の見えないことで、翌朝土橋あたりまで出かけた。川べりは死体の山で、土橋あたりも、家も焼きはらわれ、いたるところ焼きこげて、男女の区別もつかぬ死体があったところ散乱。だめと断念して帰路についたのだが、今心残りは、2人の疎開児童がどうされているのか……。お父さんは戦死され、お母さんも疎開先で犠牲になられた様子なので、そのことを確認しないまま過ごしておられるのではあるまいかと。風のうわさで、埼玉辺りに住んでおられると耳にしたこともあるが。

こうした悲劇は、いたるところにあるように思えてならない。それから2日後にも探し歩いたが、死体はどんどん運ばれ、うつ伏せの人も腐乱してウジ虫の巣となり、全く見当がつかなかった。多くの人々が一瞬にしてなくなられた。その中でも、この奥さんのような死に対して、心残りではない。残された二人の子供さんは、今もって消息不明である。

[広島 直爆2.0km 男 19歳]

(13-40-001)

③ 20歳台（被爆時）

- ◎地獄そのもの（生きている人も、死んでいる人も、人間には見えず、身ぶるいをした）。
- ◎家屋の中で助けを呼ぶ声（40代の女性）が、今も耳に残っている（何も出来なかった）。姿は見えなかった。
- ◎トラックでの字品方面への被爆者輸送時に、軍人らしき者の「女、子供と年寄り
は乗るな。男の若者のみ乗れ。戦争はこれからだ」は生涯忘れられない。
戦争とは？を骨の髄まで考えさせられた。

〔広島 直爆1.5km 男 20歳〕
(34-5713)

ア) 原爆の絵画に表現されている状態と全く同じで、今更その当時のことを思い出すと、ゾッとします。

それは、文章では表現出来ません。

イ) 当時は、極限の心理状態で何の感情もわかかなかったように記憶しております。

ウ) 当時、私は入隊後3ヵ月のコチコチの初年兵で、自分の部隊の兵隊と同一行動をとるのに精一杯でした。牛田の作業場へ避難する途中、やけただれて、はだかの民間の女の人から、「兵隊サン、タスケテ」の聲がかかったことを今でも記憶にのこっております。

軍人のため、民間人に対し当時何の手助けもせず、そのままにしてその場を立ち去ったことが、本当に心残りでなりません。

〔広島 直爆2.0km 男 20歳〕
(13-17-054)

○比治山の麓には、暁部隊船舶司令部所属の工作隊の手によって、縦横無尽に（無数の）防空壕が掘られ、人、器材をはじめ、数多くの食糧が貯えられていた。投下時には、壕の出入口がふさがれて、生き埋めにされたまま放置された。

○川沿いで、カレ木とともに死傷者をうず高く積みあげ、ドラム缶からガソリンを浴びせて焼却作業をし、灰がらを川に投げ捨てていた。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕
(01-0009)

駅前で被爆した後、市街を抜けて郊外へ逃げたわけですが、その途中まず駅前の防空壕に入った時に、若い女性の方が左脚のつけ根から切断されて出血が激しく、何とか止血してほしいと本人から頼まれましたが、私ではどうにもしようがなく、見殺しのようなことになりましたのが気に残ることでした。

逃げる途中、橋上にタコのゆでたような顔をした人達がいっぱいに折りかさなるようにして、死んでいる人も、かすかに息がある人も、じっと空をみたまま身動きもせず横たわっていました。胸に迫るものがありましたが、自分の命を守らなければという思いが先に立って、足早に立ち去りました。

〔広島 直爆2.0km 男 21歳〕
(23-0297)

私たちに取って信じられない出来事。幸い私は動けた。多くの戦友や動けない者の手当てを手伝った。薬がない、ホウ帯もない。シャツを破って油をしませぬる。顔を拭いてやる、生き残った動ける者の精一ぱいの協力に、皆涙流した。

一夜明けて大半が冷たくなっていた。わからない、むごい、私は必死で友をゆさぶった。その私も3日目には高熱を発して倒れたのです。

あの時、明日を信じる事が出来なくなった。

思い出は生きる限り、忘れないと思います。

[広島 直爆2.0km 男 21歳]
(26-0016)

相生橋の下に大勢の人が座っていたが、潮が満ちて来たらどうなるだろうかと哀れに思った。

婦人が倒れている側を通る時、兵隊さんこの子だけ助けて下さいと言った。見れば腹の下に小さな乳飲子がいた。可哀想に思ったが、どうしてやることも出来ず、立ち去ったが、今でもその声は忘れられない。

[広島 直爆1.0km 男 22歳]
(34-4952)

知っている女性を訪ねていったら、その女性が部屋の中で、天井にぶら下がって死んでいた。(今でも夢に見る)

鳥を揚げたような黒こげの死体。

その夜、疲れて寝たが、朝起きてみると、死体の上でねていた。

知っている人が「水、水」といっている。顔を見てもわからず、声でわかる。

飼っていた土佐犬が4倍にもふくれ上がり、毛も抜けてしまった。

10年間位、夏になると夢でうなされた。

[広島 直爆1.5km 男 22歳]
(13-52-001)

当時、私は比治山合同通信所に勤務しておりました。防空壕内に設置された通信所ですが、被爆当日は、朝8時すぎ、通信所前の仮眠所（天幕張り）内におりましたところ、せん光とともに爆風で、仮眠所は吹き飛んでしまいました。あわてて壕内に逃げ込みました。しばらくして出て見ると、市街地は至るところ火災が起こって燃え続けておりましたが、比治山へも負傷者が続々と登ってきて、至るところに倒れております。そのほとんどが、衣服は脱げ、全身ヤケドの状態でした。そして水をくれと叫んでおります。しかし上司は、ヤケドの人に水をやるとかえっていけないと言うのです。特に幼稚園児らしき、カバンを肩かけた子供達の姿はあわれでした。

結局、これらの人達は、当日の夕方あたりから、翌日、または翌々日あたりに、通信所の近辺で息絶えてしまいました。まさに死人の山でありました。

しかし私達通信兵は、本来の職務遂行のため、通信所を離れることは許されませんでした。

今でもこれらの人達に、救いの手を差し伸べることの出来なかったこと、慚愧の至りに堪えません。

〔広島 直爆2.0km 男 22歳〕
(10-0005)

爆発後すぐ爆心地近くに入り、電車が所々で焼けながら動いて、中に乗っていた者を道路に、焼死者を両側にふりまくように落とした様は、今までの戦場でも空襲でも見たことのない広い範囲で、何が起きたのかわからず、助けることもなにも出来なかった。

火災の中を生きている者に、逃げろと言うこと以外に何もしてやれなかった。知らない街でのことで、方向も分からず、夢中で、初めは火災も小さかったが、死者の水分が無く、炭化した身体がまだ動いていた。

比島戦場でナパーム弾でもこれほどひどく焼けたのは見なかった。爆心らしい所は上からの圧力か、道路電車通りは何とかたどって歩けたが、火災の起きていたのは城の建物や大学附近等、外の方から内へ、また、外へと広がったようだ。

次の日に自分の所属の参謀本部二課の方へ連絡がとれて、体験と見た様子を生かして防衛対策のため台湾に送り帰された。これは戦中で最後の日本本土からの出国となったらしいが、あまり知られない。

〔広島 直爆2.0km 男 22歳〕

(13-21-001)

この目で見たものは、誰もが歩行出来ないまでに大火傷を負っていた。中には生死をさまよい歩いている者ばかり、髪の毛は焼け落ち、半袖はボロボロであった。

一人の男の人が茫然として、黒焦げの子供らしき仏をボンヤリ見守っている。その内男は、何を思ったかどこへやら行った。間もなく焼けたトタン板を持って来た。仏にふれるとバラバラになることを知り、トタン板ですくい上げて、小脇にかかえてどこかへ消えて行った印象は、未だ脳裏から去らない。

〔広島 直爆1.5km 男 26歳〕

(13-23-052)

当時広島県安佐郡深川村深川小学校に負傷者を収容に行った時、教室はもちろん校庭に藁を敷き並べただけで、まったくの炎天下に幾列にもごろ寝のまま、教室内では、水をくれ、水をくれと言っていた。軍医らしい男の声で「どうせない命だ、飲ませてやれ」と言う声。校庭の方はすでに水との声もなかった。その中に1人の少年がいた。「君いくつなの」「僕10歳です」「お父さんやお母さんはどうしたの」「お父さんもお母さんもどうなったか分かりません。兵隊さん、今日は部隊へ帰るんですか」「うん、今日は部隊へかえって、明日また来るからね、しっかりするんだよ」「ハイ」寂しそうな少年の声だった。

山の中で仮小屋を建てただけの仮寝である。眠れぬままに夜は明けた。広島市中は夜を徹して燃え続けていた。朝の点呼も、朝食もそこそこに、深川小学校へと急

いだ。私は少年の元気な声を期待して小学校へと……。しかしどうだろう、校庭に転がっていた負傷者は全部死んで、どこかへ運び出されていた。あの少年も息を引き取った後だった。燃えさかる広島空を仰ぎ、親、兄弟の名を呼びながら死んで逝ったことだろう。なぜ昨日の中に住所、氏名だけでも聞いて置かなかったのか、少年に対して私自身が悪いことをしたように、心をさいなまれ、あの日の少年のために毎年1個の灯籠を流している。その名も「原爆死無名少年之霊」。実に空しい思いである。

私はさらに「君を殺したのはアメリカと日本政府だ」後はやり場のない無念の涙。アメリカ政府も日本政府も何ら反省の色もなく、非核三原則、平和憲法くそくらえとばかり、核戦争への道をひた走りに走り続けている。本当の被爆者の苦しみが分からぬのか、見て見ぬふりをしているのか、核戦争三分前と言われるこの時代を心底から憂えているのは、身をもって苦しみ続けた我々である。二度とあの悲惨な核戦争を起こさせてはならぬ。地球を守れ。生きとし生ける全ての尊い生命を固護せねばならぬ。独裁者第二のヒトラー、中曾根、目を大きく見開いて見よ。何が運命共同体だ。うぬぼれもいい加減にしろ。原爆犠牲者の霊よ安らかに眠るな。中曾根を呪い殺してやれ。俺が殺してやりたい位だ。どんなに平和を叫んでも、我々の血の叫びは耳に入らないのか。私も被爆者だとぬけぬけと言うな。本当の被爆者なら核廃絶を叫び、国家補償に基づく被爆者援護法を制定せよ。貴様のような奴に一国の首相になる資格はない。野望に燃えた風見鶏、貴様のような奴は俺の命の在るかぎり終生呪い続けてやる。

〔広島 直爆2.0km 男 26歳〕
(13-23-020)

最後中隊当番で、朝礼にでていなくて光をうけることまぬがれた。当日ねていても良い許しがでて、ねていた。何がなんだかわからなかった。気がついたら兵舎のはりの下じきになっていた。爆じんで一寸先が見えなかったし、わからず、何時助けだされたかわからなかった。助け〔てくれ〕た人、兵だったか今でもわからない。それより後比治山中隊の掘ったどうくつにはこぼれた。

忘れることの出来ないことは、途中女の方が荷車上で出産して、そばで年寄りの母親でしょうか、泣きさげびながらいた。へそのおがとびだしていたのが目についたが、私達どうしようもなく、あとから、あとから被爆した人々でおしあげられた、あの姿未だに心に残る。

私はどうくつに入るなり、自分の重傷に気がつき失心した。そして運よく私残っていたトラックに重傷だけ宇品の一般？病院に収容されました。そこも地獄の中で、何とも申し上げる言葉になりませんが、それより岡山市の陸軍病院におくられましたが、やはりここでも地獄で、毎日、いや一時間おきくらいに死んで行くのです。今度おれの番かと、何度思ったか。

こんな悲惨で、生きて帰りましたが、こんなこと私書くことも話しますこともできません。心残りは我が人生中死ぬまで続くでしょう。今私は慢性変形脊椎症で手もふるえ、手足も思うようになりません。ただただ原爆遭難諸精霊の冥福いのるだけです。

書きたい事たくさんありますが、いつか皆さんの前で話したいと思っています。

〔広島 直爆1.5km 男 28歳〕
(13-40-010)

被爆後隣家の方が、父がつぶれた家の下敷きになって出られぬ故助けてくれと言われたが、私の方でも当時3歳の子供が被爆で行方不明、探しており、間もなく火の手がまわって来て、子供も見つからず、隣家の方に何もしてあげられなかった。

100mか200mの距離、川まで逃げる間、柱の下、瓦の下で生きて出られぬ人を数人見ました。けれど何もして上げることが出来ませんでした。

己斐小学校（第1救護場所）へたどり着いたら、午後4時頃、火傷、皮膚が焼かれ、まぶたがつぶれ、体中水ぶくれになった人がいっぱい、学校の廊下は鉄道の枕木を並べたように、動かぬ被爆者で埋まり、時折水をくれ、水をちょうだいとの言葉とうめき声だけしか聞こえませんでした。

4～5日後、焼けた家の跡地に子供はと、探しに行きました。子供は7～8mほどの距離にあった手洗鉢の下に、一握りの黒い塊りとなっておりました。

〔広島 直爆1.5km 男 28歳〕
(34-4410)

当日避難する時、兵舎の下敷きになって助けを求めている兵士を見ながら、自分の負傷をかばい、他の兵士に助けられて山に逃げた想い、助けることが出来なかった悔やみが未だに心残り、その後の安否が気遣われています。

帰って、家に落ち着いても、爆音の音、昼は入道雲が覆い、その度ごとに恐怖を感じ、半年位それが続いて、翌22年に入ってようやくその思いも消えました。

〔広島 直爆2.0km 男 28歳〕
(13-22-036)

原爆を投下された広島は、3日3晩燃えつづけ、紅蓮の炎は天をこがした。

私は兵舎の倒壊で負傷し、太田川ぞいの河川敷きに部隊があらかじめ設営していたテント内で、全身に走る痛みをこらえていた。

空は名状しがたい色に変わり、太田川の土手を避難する人達の列が続いていた。

2日目の朝、仮設治療所が出来たからと、上官のすすめで戦友の肩を借り、その場所へ行く。体育館の板の上に負傷者がごろごろしている。重傷者は毛布で囲いされた別の床に収容されていると言う。苦しそうなうめき声が、あちこちでしていた。その内、顔見知りの隊の軍医が、軍刀の柄を左手でぐっと握り、衛生兵2人連れて、足早に診て廻ってくる。青白んだ顔、血ばしった目であった。私の前に立つ「どこをやられたか」答えようと軍医の顔を正視したとたん、もう次の方へ歩を移していた。軍医の判断がどこにあったかすぐわかった。この凄惨な状況下では、私の傷など問題外であったであろう。

その夜、重傷の見習士官が死んだ。息を引きとる間ぎわ「お母さん、お母さん」と母の名を呼んだというのを私は耳にした。

3日目の朝、部隊の移動が決まり、私はトラックで山近い農家に分宿した。そし

て8/15日終戦となる。(書くも語るも苦しくなるほど痛恨の体験である)

[広島 直爆2.0km 男 28歳]

(13-23-029)

私は被爆と同時に兵舎の下敷になりました。一時気をうしなしました。気がついた時、兵舎の下敷になったのだなと思い身を動かしてみましたが、木の角棒のはりの下敷になって横を向いて身動きも出来ず、ただただバリバリと近くが焼けているように思われました。

三十分ぐらいオーイオーイと呼んだが、だれも助けに来てくれる人なく、このまま焼死するのかなと思った時、何とも言えない感じでした。それから一人の戦友に助けられ兵舎の屋根に登った時、広島市中に家がなくなちこちで火災が発生、兵舎前の営庭の戦友は数人やけどしてのたうち廻っている姿を見た時、ざんこくやなと思った。私が助けられた戦友と共に同じ兵舎の負傷している戦友を助けて、三、四百米はなれた広場まで行き、次の戦友助けてその場に行けば、前の戦友は死んでいるような有様でした。

もう当時のことは思い出したくありません。

[広島 直爆2.0km 男 28歳]

(27-0707)

④ 30歳台(被爆時)

白島町にあった工兵隊兵舎内で被爆しました。

8月5日の夜、一晚中呉方面の空襲で眠ることが出来ず、6日の朝起床が遅れ、ちょうど朝食時でした。大きな爆音と黒煙、黄色の光線とともに一瞬の内にあの大きな兵舎が倒れ、爆風で舎外にとび出された人、兵舎の材木の下敷きとなってほと

んど兵士は死にました。不思議にして命ながらえた私は、倒れた兵舎内から10時頃までかかっていたのがれ出たのですが、すでに兵舎は延焼中でした。外はその朝多くの招集兵の入隊と見送り人の人で、庭いっぱい死んでいる人、苦しみもだえている人で、ほんとうに言い表わすことの出来ない地獄でした。助けを求めてへばりついて来る人を振りはらい避難しなければならぬその時の思いは、どうしてあげることも出来ず、鬼の思いでした。現在でも心残りです。

〔広島 直爆2.0km 男 30歳〕
(34-4616)

上記〔例示〕のごとく数十、百以上の死体や、いまだ死にもだえて水をもとめる人、一人一人を見て回り、水面上に流れている人、はだか姿で焼けただれた姿、女も男もなく、今でも面前に浮かんでいます。

水筒の水がなくなり、水をもとめる小さな子供等、どうするすべもなく、頑張りなさいよとしか、元気づけるしか、しかたがなかった様子、現在も目に見えるようです。

やけどの兵隊さんを助け、歩行するに、つかまえる所なく、ズボンのバンドのみつかみ、山路を歩行したことなど。

のどがかわいて、黒い雨が降ったのはばにたまったつゆでのどをうるおしたこと等。

〔広島 直爆2.0km 男 30歳〕
(34-7146)

S20年8月6日午前8時15分のあの爆撃は、今思い出しても恐ろしくなります。被爆して郊外に逃げて行く途中、着る物を着ているのか着ていないのかわからない、皮膚がポロポロとぶら下がり、顔は誰か男か女かわからないような身体で郊

外へと逃げて行く様。また、家の下敷きになり、助けてくれ、この奥に子供が下敷きになっているから、と叫んでいるお母さんもそのままにして行かねばならない。最早火が次々と追いかけて来るので、仕方なく逃げて行かねばならない。また、自分もけがをしているので人の事もかまっていられない。早く逃げねば此方の命が危い。

郊外の近いところに会社のグラウンドがあり、そこまでたどりつき応援の医師の仮治療を受けて、やっと我にかえって見れば、グラウンドにいっぱい被災者が寝転がっていた。どれも皮膚がボロボロにぶら下がり、また、吐く人の汚物は黒ずんだような物で、医師もけがをしながら、その時は食用油のような物を火傷に塗ったりしていた。患者は水をくれと言うけど水道の水はなく、次から次へと死んで行った人が、家族のことを叫びながら苦しんで死んで行く姿を見て、自分だけ助かって申し訳ないと思ったが、それも束の間、今度は我にふりかかって来て、髪は脱けて来るし、けがをした頭、背中、足等が痛み出し、ついに寝たきりとなり、死の宣告も受けたが、神仏のおかげで3年の治療でどうにか少しづつ働けそうになり、色々と健康のことについて被災者と話し合い、どうにか今日にいたった。でもあの時の光は赤、黄、黒のすさまじい光と音、また、黒い雨が夕立のように降って来て、なんともいえない無気味さであった。

〔広島 直爆1.0km 男 31歳〕
(23-0069)

学徒動員で子供を30名位引率していました。子供達は一応家にたどりついたらしいのですが、全員死亡しました。私1人助かっています。

その時のことを思い出し、ぞっとします。

〔広島 直爆1.0km 男 31歳〕
(34-4236)

被爆直後家の下敷きになり、壁土に埋もれたので、呼吸困難となり、無我夢中で瓦礫の中から這い出たところ、近所の人が私と同様大黒柱の下敷きとなって「助けてくれ」と叫んでいたが、あいにく火の手が回って救助のすべがなかったのは悲惨で、同情に堪えなかった。

次に避難先の宇品の病院では、全身火傷を負った5～6歳の子供が、室内に収容されている負傷者の合間を縫って、苦しきのあまり夢中でさまよって、時折つまずいて、その都度皮膚がすりむけていく様相は、全く地獄絵そのものであった。

〔広島 直爆1.5km 男 32歳〕
(13-31-020)

妻の母が家の倒壊の下敷きとなったが、私、妻、長男（当時8カ月）すべて負傷、かつ火が迫って来てとうてい救出不能であった。

〔広島 直爆2.0km 男 32歳〕
(13-12-025)

1. 痛さの感覚が失われ、恐ろしかった。
2. 知人で、抱いたり、手を取ったりすることが、体のぼろぼろのため出来なかった。思い出したくない。

〔広島 直爆2.0km 男 32歳〕
(34-3533)

死亡した母にとりすがって、幼児3人がいない光景。大やけどをしてうなっている人々のありさま等も横に見て、太田川の土手へとにげたこと。方々から裸のまま、幼児をおんぶしている12歳ぐらいの子供が助けを求めているのを、みのがして逃げたこと、等を思い出し、今でも夢にうなされて、目が覚めることがある。

〔広島 直爆2.0km 男 33歳〕
(13-15-001)

騎兵出身のため、左の長靴を履き終わった時被爆倒壊。右足は靴下のみ。

後方部隊連絡援助のため駆走中、男女性別分からぬ黒焦げになった人でも、三米位這いずった砂地に跡がある。私の見解では、一番悲惨なのはNo2の被爆者、4日目で死んだ人達です。顔は1日で南瓜大になり、全身20～30mmの水疱瘡となり、2日目破れ油汗が流れ、赤く筋肉が現れ凸凹し、3日目化膿し、あたかもカラーの世界地図のように残っているのは両手の爪、足の裏、男の象徴付近は二重に履いていたため火傷はないが、手の指はただれ紅葉の如く広げて、集団で同じ姿。疲れ果て数分間横になると、肉に石が食い込むため絶叫して立上り、肌は赤ピンク、化膿の○(不明)隆起した油汗は溪谷の如く、これほどの生地獄はあるだろうか。4日目に判別付かぬ人となり死んで行く。4日間苦しんで上記のように黒焦げになった人でも、瞬間3米位這っていると同時にこの4日間位で死んでおった人も、割合に内臓が良いためさまよい歩行よろめきながらの姿を集団で、想像して下さい。未だにこうして書いていても眼前に浮かび涙がうるむ。

私も動作が三秒早ければ右の靴を履き2米先にでたはず、すると上記のようになっただけです。

〔広島 直爆1.5km 男 34歳〕
(11-0055)

ピカッと光ると同時に音も共にしたかと思えば、一寸先も見えない煙というかほこりといってよいのか、その一瞬の出来事。暗れて視界が見えるようになれば、広島町は火の海とかしていた。やけどの人々が走り、痛いいたいと泣きさけぶ声と共に、助けてと言う悲鳴と共に、人の波がおしよせて来る。

学校のあとにけが人を収容した。手当てとてほどこすすべもない。その内1人、2人と死んで行く人、泣きさけぶ声、本当に言語につくせない。それが毎日毎日続いた。

なお部隊の兵が10人、1月位して帰営して来た。その人々が頭の毛が、つかみ引くと痛みもなくぬけるようになった。そうすると帰って来てから毎日死んで行く。10人の者がついに1週間の内に死んで行った。最後まで正気で、家の事、子供の事を頼んだと思ったらそのまま死んだ。その事を見ていたので、毎日頭髪のぬけることを心にかけてくらしした。この事だれが知ることもないでしょう。

〔広島 直爆1.5km 男 35歳〕

(23-0339)

今日の日差しも暑いなと思っていたとき、青いせん光が目の前を走った。何も覚えていない時間が、?秒か ?分かが過ぎて、気がついてから、行かねばならない方向を見ると、大きな炎が渦巻いている。

痛い体を引きずるようにして帰る道すがら、この目で見たものは、路上に点々と転がっている人の姿。生きているのか死んでいるのかさだかでない。なかには硝子の破片が体中に突き刺さり苦しんでいる人もいる。

家の軒下に畳を敷いて寝ていたが、日差しが強くなって暑い。どのような爆弾にやられたのやら、これで死ぬのかなとも思ってもみた。

突然目の前に人影がする。横の水筒に手が延びて来た。両手とも手首あたりから指先までズルリと皮ふがめくれて、指先に絡まっている。顔はスイカのように丸くふくれて、人間の顔ではなくなっている。せがまれるままに水を差出すと、一口、二口と飲んで一寸頭を下げて、フラフラと泳ぐような姿で歩き出したが、バタッと倒れて動かなくなった。近寄ってみると、もう虫の息で死も近そうに見える。

時間がたつにつれ、同じような人達がゾロゾロと歩いてくる。数も増して来た。目の前の路上でくずれるように倒れる人が出てもどうしようもない。倒れている人に水を含ませても、口も動かず目も一点を見つめたまま。あの姿で倒れることは、即死を意味していることに気付いたが、手の打ちようがない。すさまじい地獄絵図が現実にも今日の前で……

目頭に涙がにじみ、玉になって頬を伝う、体の痛みなど感じないほど。罪のない人達が戦争の名の下に、むぞうさに路上で命をすてている。なぜこんなむごいことをと、頭の中をよぎる。

家族も体中傷だらけであったが、何とか生きていてほっとしている。

[広島 直爆2.0km 男 35歳]
(40-0692)

8月6日通勤途中の電車の中で被爆し、ガラスの破片で顔等負傷し、農家の防空ごうの中にひなんし、一時位して未だあちこち火の手が上がっている時、家にいる7歳の長女、5歳の長男がどうしているかと心配でじっとしておられず、三篠町の自宅に帰り着いたが、子供達の姿はなく、妻と二男の3歳の子供は町内の勤労奉仕にかり出され子供達はいない。妻と3歳の子供は夜になっても帰って来ず、あくる日から近所の人と一緒に毎日毎日、東西南北山手の学校にいる被災者をさがしましたが、妻と二男はとうとう帰って来ず、長女と長男は祇園町のお寺にいたことがわかりましたが、妻と子供1人はとうとう帰って来ませんでした。

さがし歩いている時、川の土手に死んだ人、おじちゃん水をくれと、苦しそうな声を出す、どうすることも出来ませんでした。死んだ人、苦しむ人、多くの方がごろごろして、まるで地獄でした。

妻と子供は土橋という所で、近所の人達と皆爆死したことがわかり、合同葬した骨をもらい、市役所に死亡届を出し、その後小さい二人子供をつれ、九州久留米に知人をたより、子供と三人で下宿して働きに行きましたが、妻がいたらと思い、子供と一緒に涙したことは度々でした。妻を返せ、子供を返せとさげびたくります。

〔広島 直爆2.0km 男 35歳〕
(40-0739)

ア) 川の一隅で、水が渦巻いている所で、下士官3人の死骸がその渦巻と同様にくるくるとうずまいていた。また、夫が前、妻が後ろで盥を支え、泣きながら道を歩いていた。中を見たら真黒焦げになった子供の死骸があった。この二つの姿は未だに忘れられない。

ウ) 広島駅裏広場に被爆した多くの老若男女が、そろそろと集まってきた。その中からやっと聞きとれる位の、力ない声で「兵隊さん、お水ちょうだい」と哀願する声が耳に入った。しかし上官から水を与えたら死ぬから与えてはいけないと指示を受けていたので、水は与えなかった。しかしどうせ助からなかったであろうから、欲しい水を腹一杯のましてあげればよかったと、未だに残念に思う。

〔広島 直爆2.0km 男 37歳〕
(34-8908)

⑤ 40歳以上(被爆時)

0.5kmで直撃を受け、人事不省で当時の記憶は無い。(1週間以上)
その後のことも、記憶がさだかで無い。

〔広島 直爆0.5km 男 40歳〕
(13-29-002)

1. 家内が玄関戸の硝子の破片で10数カ所のけがをしたが、頭部の出血が止まらず、汗をかき青ざめた顔に血がべっとり流れ落ち、恐ろしいぎょうそうになり、とほうにくれたことが今でも眼に焼きついている。
2. 自宅から文理大グランドへ避難の時、平素から親しかった近所の奥様に助けを求められた。その奥様は建物疎開奉仕で屋外で被爆したため大やけどで、着衣も焼けてボロボロであり、皮膚は焼けただれツララのように垂れ下がっていた。グランドまで抱くようにして連れて行ったが、腕にふれる度にヌラヌラして、ゾツとしながら頑張ったことを今でも忘れられない。

[広島 直爆1.5km 男 42歳]
(13-31-018)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

母でしたら大ケガをしていましたので良くわかるのですが、私は赤ちゃんでしたので、何もわからなくて申し訳ございません。13年前に亡くなっておりますので聞くわけにもまいりません。

母がかばってくれたので、私はケガをしないですみましたが、母は顔と右半身大ケガをしました。

[広島 直爆1.0km 女 1歳]
(13-23-059)

私は幼かったためおぼえていませんけど、母はその時に死亡し、父が私をだいて地御前までにげ、そこで一夜をすごし、翌朝線路を歩いて向洋まで帰ったそうです。

その途中、私が水をひどく欲しがり、何度も近くの家へ寄って水をのませてくれたと聞いています。

地御前まで行くまでに、双子の赤ん坊が、おくるみにくるまって泣き叫んでいたけど、私一人つれて逃げるのが精一杯だった。今思えば何とか一緒につれて逃げられなかったかと心残りでならないと、何度か口にしては涙ぐんでいました。その父も昨年7月に母のもとへ行ってしまう、もうその当時の話は聞くことが出来なくなりました。

私は原爆のために母を知らず、母のお腹には私の妹か弟がいたというのに、兄弟にもめぐまれず、原爆が投下されていなかったら、私の人生ずい分変わったと思います。

〔広島 直爆2.0km 女 1歳〕
(34-9014)

防空壕の中には多数のケガ人がいて、死人がどんどん投げ込まれていた。私もその中へ死人と間違われ、もう少しで死ぬところでした。近所の人が、当時2歳だった私が生きているのに気付いて一緒に連れて出て下さいました。

兄は5歳で、ぐうぜん外の道にいて、私を連れて母を探しました。母は大勢の人達と一緒に川の中にいました。顔の皮がむけていたので、私は母ではないと大泣きしました。

その当時の事は、2歳だった私が憶えている訳がないのに、いつもこのこうけいがうかできます。

〔広島 直爆2.0km 女 2歳〕
(34-7132)

私は当時3歳、母に背負われて牛田方面に逃げたそうです（金谷町から）。

今は色あせて、血の色も定かに目に浮かびませんが、牛田の山中でゴザの上に髪をふり乱した女の人が、血だらけで大勢、横になったり、座っていたり、泣いていたり、赤ちゃんを抱いた人もお乳もケガをして、血が流れて汚いのに赤ちゃんに飲ませていました。

私も母とそこでやっとひと休みしました。私が43歳のこの年になるまでに、身近に起きた地獄絵図です。よく原爆映画を小学生の頃見ましたが、そのどれよりも一番恐ろしい真実の出来事です。

私が大変水を欲しがったそうです。とても山中のことで貴重な水ですが、ある女の人がふるえる手で差し出してくれたそうです。子供は日本の宝だからといって…

もうこれ以上書けません。すいません。つらくて。

〔広島 直爆2.0km 女 3歳〕

(34-6212)

原爆の日、朝近所の友達の所へ遊びに行く途中、ピカーと光り、気がつくとも地面に倒れており、周りを見わたすと、どの家も炎があがり燃えていましたのでこわくなり、もえている家の中に逃げ、祖母に会った時、かわらや柱がくずれてきました。家の中からどのようにしてにげだしたか記憶がありません。

この先の記憶は、母と2人で己斐の山に逃げる途中、どこの家か分からないけど、燃えている家の中で、布団の上に赤ちゃんがねているのが目につきました。私の記憶では、赤ちゃんを助けだしたい気持ちがあったと思いますが、母に強く手を引かれ、そのまま山の方に逃げました。その時のやりとりは忘れましたが、たしか母にしかられたように思います。

己斐の山に行った時、多くのおり、雨にうたれ、ふるえていたと思います。山から帰りの記憶はありません。山から防空壕に帰りましたが、よその人で満員になり、私達は入れず、防空壕の上での生活がはじまりました。

病人、けがをして寝ている人が多く、幼いながらも怖かったです。

〔広島 直爆0.5km 女 4歳〕
(34-5903)

当時小学校の2年生でした。夏休みの登校日で、近くのお寺に友達の子と2人で行きました。

飛行機の音で△△君が窓の所に行って空を見て、B29と言ってすぐ、ドカンと大きな音とともに家が崩れ、△△君は屋根の上にふき飛ばされて、泣いていました。

道は人々が泣きながら行ったり来たりして、くずれた家の中から、助けてと言う声が、あちこちから聞こえ、家に帰ることも出来ず、そのうち雨が降り出し、2人で山の方へ逃げて行きました。雨も小降りになったので、人に道をききながら、家に帰ることが出来ましたが、その頃に△△君の顔が、お化けのようにはれて、とても可哀想でした。私の両親は無事でしたが、△△君の両親は亡くなられ、△△君も2日ぐらいして亡くなりました。

やけどをした人がたくさんおられ、水、水と言いながら、毎日亡くなって行かれ、毎日、毎日、人を焼く臭いは今も忘れることが出来ません。

道には半焼けの死体のごろごろ。私達も兄の生死を求めて、毎日街を歩きましたのに、現在生きてられるのが不思議な思いです。

子供達には、こんな思いはさせたくないと思います。

〔広島 直爆1.5km 女 7歳〕
(04-0370)

○被爆の後町内で野原に寝てる時、近所の方で学徒動員（女）の人が、やけどをして皮がはげ、私のとなりで寝ていて、痛い、痛いと言って私の髪の毛を引っばったりされて、ねむれなかった。とても可愛がってくださってた方だけに、今でも思い出されます。なくなられました。

○稲光りがするたびに、8月6日の事が頭からはなれず、自分でも自分がおかしい

のではないかとよく思い、病院へ行ってみようかと思うほど、恐怖に思っています。

〔広島 直爆2.0km 女 7歳〕
(40-0540)

恐ろしく、心にのこっているのは、たくさんの死体をふんで逃げた事。

ひどいやけどの人、私の手足をつかんで、水をほしがった人。そんな人はらいのけて、自分が生きたいばかりににげた事。

物の下じきになって、私に助けをもとめた人もたくさんありましたが、そんな人に手もかさずにげた事。

死体の山をふんづけてにげた事がゆえに、現在にいたるまで病気で、あるいは人生に、思うように幸せになれないかと、よくなやみます。

〔広島 直爆1.5km 女 8歳〕
(34-6228)

祖母の実家へ避難していたので無事だったが、当日仕事に出かけていた父親が被爆し、家族を心配して帰ってきた。祖母だけがとつぎ先で被爆した様子で、心配して次の日家族9人（父母、兄弟7人）で探しに入った。

町は全てなくなり、人の通り道だけ細くあけられ、両側には死体が並べられてあった。生きている人もうごめき「水をちょうだい」と口々に言っていたが、川も死体でいっぱい、くんであげられることは出来なかった。祖母は発見されたが、ひどい姿らしく「子供達にみせてはいけない」という父親の意見で別々にされたが、子供心にみたさでのぞいてみると、おこしをつけた前の部分をのぞいて全てやけどで、顔などひどく、別人のようであった（80%以上のやけど）。

兄、姉は毎日学校の校庭で死体をやく作業のお手伝いに出かけていった。トラッ

クが死体を運んでいき、もくもく煙が上がっていた。

〔広島 直爆2.0km 女 8歳〕
(13-53-031)

私は母と2人で自宅にいましたが、気がついたら前の部屋から真中の部屋を通りこして、奥の部屋のタンスと仏壇の間まで飛ばされていました。母は柱の下敷きになっていましたが、男の人に助けられました。

母と2人で福島川の橋の下で2晩過ごし、2日目に父と会えました。私は父と2人で姉と妹を探しに行きました。妹(当時8歳)の通っていた小学校は、全滅して焼けつくされていました。授業を受けてるままの形で死んだ生徒たちの白骨が並んでいました。妹の骨がどれかも分かりませんでした。

姉(当時13歳)は学徒動員に出ていましたが、本家の使用人だった人の所までたどりついて「私は△△の△△△だけど、助けてちょうだい」と言ってきたそうですが、その人が水をもって来てやった時には、もう息絶えていたとのこと。本家の家屋敷の松の根元に横たわっていた姉の遺体は、着物はほとんどなく、髪の毛がほんの少し残っているだけで、顔は変形し、ぼうちょうして、まっ黒けになっておりました。

〔広島 直爆1.5km 女 9歳〕
(13-23-103)

② 10歳台(被爆時)

- ア) 人間とは思えない黒こげの死体。
- イ) かみの毛はさか立ち、衣服一つまとわない。
- ウ) 体のひふがくさり、うじが出る。

エ) かみの毛がぬげ、できものができ、人からきらわれ、だれもよりつかない。

[広島 直爆1.5km 女 10歳]

(34-4511)

当時は小学校5年生だったが、学童疎開はしなかった。

玄関の前に立っていて、気がついたら家の下敷きになっていた。母が助け出してくれた。その時には家が燃えていた。

避難する途中、父母兄弟とはぐれた（両親は兄弟がつれて逃げたと思っていた）。6日は東練兵場で野宿した。火傷をしていたので、目がだんだんと見えなくなっていった。次の日に矢賀に行った。

1週間後、近所の人で連絡で、父がさがしに来た。私の姿が変わっているので、何度も私の前を通りながら気がつかなかった。人が「この子だ」と言っても信用しなかった。私が必死になって「お父ちゃん」と言ったら、はじめて分かってくれた。そして兵器のように運ばれ、次の日に八本松の親戚に行き、1ヵ月ほど世話になった。火傷をしていたので、日時とか場所とかがはっきりと記憶にない。

[広島 直爆1.5km 女 11歳]

(34-7229)

私は白島国民学校校舎木造2階で被爆し、下敷きになり、頭、顔、右目、背中、両手等ガラス片で傷を負われ、何とか助かり、外へ出ることが出来ました。

一変した町並みは、死体はゴロゴロ、歩いている人はまっ黒になり、頭の毛はさかだち、ちぢれ、目の玉はとび出し、頭がパツクリ口をあけ、皮膚はズルッとむけてたれさがり、男女の区別さえつかず、何が何だかわかりませんでした。

家に帰る道すらなく、また、火の手も上がり、仕方なく風上へと、今の安田学園裏土手へ、水槽の水をかけ火の中を逃げ、木にもたれて今まで起こったことを考え

ながら、気が遠くなって来て、とてものどが渴き、苦しくなりました。その時だけか「しっかりしろ、ここで眠れば死ぬぞ」と、自分のタオルを切って出血止めをして下さいました。私はお礼を言うことができず、その方に私の命を助けていただいたのに……今でも心が痛みます。

私は最後の力を出してまた歩きました。水源地まで来た時、グラマン機が急降下して来て、まるでとどめをさすようにダダダッと何発かうち、何人かの人が倒れました。私はたしかに草むらに伏せて見ていました。こんなにひどい事があってよいもののでしょうか、この出来事には私は一生忘れることがないでしょう。

そして、今の戸坂小学校へついて、また死体の山にショックを受け、また安心したのか意識不明になり、4～5日眠りつづけました。その間2週間家へ帰れなかったので、両親はあっち、こっちの収容所を歩き廻り、私をさがしたそうです。そして、見つからないので死んだと思い、校舎の焼けあとから少しずつ骨を持ち帰り、お供えしてくれていました。2週間後に両親、兄弟みんな元気で逢えて、本当に夢のようでした。家族には逢えたけど、仲の良かった学友の消息が分かりません。とても残念です。

まだまだ多くの悲惨さが胸の中にこみ上げて来ますけど、どう表現してよいかわからない。とにかく40年前の出来事ではなく、昨日の出来事のように、決して忘れることは出来ません。私は体も心もズタズタになっています。

〔広島 直爆1.0km 女 12歳〕
(34-7102)

半身、頭のとっぺんからつま先まで、ちょうど片半面、焼けただれた（まっくろに）2歳位の女の幼児が、片手に救援のおにぎりをもって、誰もかまう人もなく、地べたにペタンとすわって、火のつくように泣いていたこと。あんまりだ、どうしてこんなことが。

己斐国民学校の校舎の中で、野原で訓練中に真っ向からやられた兵隊さんたちが、ちょうど白いくさったおかいこか “きく” のようになって、ならべられていて、ま

だ生きていたこと。

下敷きからはい出して、道路に出たら、あの広島市が何もなく、素通しの広野原になっていたこと。

逃げる時、前の人の、うしろをふりかえって市内の方を見た顔が、目は一つだけ、白と赤（ピンク）の、のっぺらぼうで、その目を動かして市内の方をはるか見た。家族のことか。身体もすっかり、白とピンクのかたまりだった。

〔広島 直爆2.0km 女 12歳〕
（04-0405）

その直後は、頭、顔より血を流し、助けをもとめる人々、倒れてうなっている人、話に出来ないほどの状態です。

私と母は、避難する時、井戸水を大きなヤカンに入れて逃げる途中、路上に倒れている人が、水を下さい、水を下さいと叫ぶのです。私と母はヤカンの口より1人ずつに飲ませてあげましたが、大勢なので1人の人に多く飲ませることが出来ません。中にはヤカンの口をはなさない人もいました。母が、貴女1人だけでなく皆が水がほしいのよ、と言ってなだめていました。

大火傷をしていても薬もなく、倒れている人達にもどうすることも出来ず、自分達が避難するのが精一杯でした。

ヤカン一杯の水を、少しずつでも多くの人々の口元に流してあげたこと、その状況が心に残っておりますが、あの人達にたくさんの水を飲ませてあげることが出来なかったことが残念ですが、あの時はどうすることも出来なかったのです。生き地獄です。

〔広島 直爆2.0km 女 12歳〕
（13-22-028）

生き地獄で、友人の体の上半身全体が火傷で、彼女と一緒に逃げて、乳首も全くなって焼けただれて、死に水をあげて、最後を看取ったその様子。むごさが頭から離れない。

おばあさんが線路にねて、両手をさし出して「水を」「水を」と訴えているのに、人はみな無視して逃げていく光景。

1週間後、母に背負われて東練兵場に治療に行った時、けが人がたくさん座って「水をちょうだい」といっていた。それが、私の治療が終わって帰りには、ほとんど息が切れていて、本当に生き地獄だと思った。

まだまだ思い出すとぞっとすることがあるが、言えないので、この位にしてほしい。

〔広島 直爆2.0km 女 12歳〕
(34-7235)

被爆後、けがと火傷をした弟を連れて、風上の江波方面へ逃げました。たくさんひどい火傷の人達が、路上に行き倒れのようにうずくまり、水、水と言う姿が忘れられません。皮膚はわかめのようにぶらさがり、顔は全員丸くはれて、本当に全員同じ顔形でした。

逃げまどう私達の頭上で、艦載機の機銃掃射があり、ぐったりしていた弟が、わずか10センチ位の窪地に顔をふせて、私がおの上にかぶさり、低空飛行が遠ざかるのを待ちました。本当にこの世の地獄です。

一晩江波のカボチャ畑で、市内が火の海となり燃えつきる様子をぼんやりと眺めて過ごしました。

翌日、焼け野原の市内を横切って、家族と一緒に戸坂の親類宅まで歩きました、途中、何百、何千の黒こげ死体を見ながら。馬の黒こげ死体もたくさんでした。私は初めての被爆でしたので、これが爆弾という物かと、物凄い物だと思いました。

〔広島 直爆1.5km 女 13歳〕
(13-20-095)

私の父は橋上で被爆しましたので、左半身を火傷しました。あの夏のあつい日、広島市観音町より宮島沿線の廿日市まで、日中のやけつくような日差しの中、歩いてゆきました。健康人でもなみたいていことではないのに、左半身火傷の身であそこまで歩いていきました。その時の父の気持はどんなであったかと思うと、とてもやり切れない気持です。そして父は8月8日の夜8時頃地御前のお宮の中で死んでいきました。

左半身火傷をしていても何一つ治療してもらえず、食べるものもほとんど「のど」を通らぬまま死んでいきました。子供としてこんな情けないことはありません。この気持（私）は死ぬまで忘れることはないでしょう。

〔広島 直爆1.5km 女 13歳〕
(13-35-011)

炭化して両手を伸ばして死んでいる人、仁王さんのように赤黒くヤケドをし、川に飛び込み、2～3回浮き沈みしてそのまま流された人、私も熱くて仕方がなくても「川に入ったら死んでしまう」と自分自身に言い聞かせて避難しました。

また、死んだ乳飲子をだいた母親が「もう一度オメメを開けてオッパイを飲んでよ」と気がふれんばかりに泣いていた様子等、走馬灯のようによみがえって来ます。

最初は自分達の頭上に爆弾が炸裂したのかとおもっていたが、家族に連絡が取れなかったりしたため、地球が爆発したのかとおもった。あの時の熱線が脳裏にこびりついているため、稲光、落雷が精神的に怖い。

〔広島 直爆1.5km 女 13歳〕
(34-5003)

兵隊さんが生きているか死んでいるか確認するため、銃剣でばーん、ばーんとたたいて、亡くなっていたらトタンに乗せて運び、あらいもをころがすように穴に投

げ込んでいた。そして山のようにになると焼いた。

子供だったので興味半分のところもあったが、おむすびの配給をとりにいきがてら目にしたこと。その後おむすびを手にし、お腹がすいていても、みたことが恐ろしくて、食べる気持になれなかった。後日親から、みたらいけないと注意された。

水を求められたが、兵隊さんから水を飲まずと死ぬのであげたらいけないといわれ、それを守った。だが、死ぬのだったらあげておけばよかったと、今も思う。

〔広島 直爆1.5km 女 13歳〕
(34-7219)

あの日の事は生き地獄で、口では言い表わすことは出来ない。

とても悲しく、自分の性格では話すことは出来ない。許して下さい。

〔広島 直爆1.5km 女 14歳〕
(13-23-076)

私はまだ子供でしたが、あの時の事だけは今でも目に浮かんできます。何と云っていいやら言葉にはいいあらわせません。おそろしいのとこわいのとで、この世のじごくと思いました。小さいながらこんな戦争を起こした人達をうらみました。

私は2、3日間は死人やら病人などと一緒に過ごしました。親のところへ帰るにしても帰られず、私の家へ帰る途中は市内の方が焼けていると言って帰してもらえず、でも家へ帰りたいので電車道をつたいつたい死人の上を歩いて帰りました。泣き泣き、痛いのと母のところへ帰りたいので精一杯、恐いのも忘れて、母が生きているかと家へ帰りたいが、???〔不明〕目の前が真暗で、死人が重ねて死んでいることも目に入っても、人間の黒こげの彫刻を見るようでした。

こんな恐ろしい出来事があるでしょうか。

〔広島 直爆1.5km 女 14歳〕

(34-5450)

横川駅につき、駅前から歩いて三滝大橋の工場（くつ工場）へ動員で行くところだった。むこうからトラックが動員で出かける人をのせに来たところ、ピカッと光り、私はちょうど子供で背がひくいので、トラックの陰になり、道のむこう側の家の方へふきとばされ、なにもわからなかった。

気がついたときは家の下敷きになっていて、夢中ではい出しました。ピカドンといいますが、私にはピカッのあとは、まわりのものがガラガラッとくずれる音だけがのこっていますから、ピカガラと言っていました。

逃げるときの恐ろしさだけは忘れられません。あっちへいき、こっへいき、ぞろぞろ歩く人たちは、皮をひこじった人、顔が裂けて骨までみえる人、まっくろの子供を抱いた母親……パニック状態ですね。いくらいっても表現しきれません。とにかく私はこわかった。黒い雨にもあたりました。

三滝の工場では、安田高女1、2、3年生が仕事を始めたところで、建物の下敷きで助けようとしても、はりは重く、とても私たちでは助けられず、危険だからまた逃げるよう先生にいわれ、祇園町の被服廠にいき、1週間そこにいました。先生が家に帰るのは危険だからと止めたのです。

のち、三滝の工場のところへいきましたら、女学生はみなきれいに白骨になっていました。私たちが、だれとだれがいたはずだと教えましたが、とにかく、だれがだれやらわからなかったんです。

〔広島 直爆1.5km 女 14歳〕

(34-6173)

当時、広島女子商業一年生（12歳）。8月6日、学徒動員で貯金局4階の事務所朝礼がすんだ後、ピカーと光った瞬間、真暗闇になると同時に爆風で頭、顔を

ぶっつけられ、その場で倒れる。足がたたない。体が動けない。皆さんの逃げていくのが見える。約三時間後、ひとり残された血まみれの私はタンカで運び出される。外は火の海、熱い。毛布をかぶせられる。日赤病院はやけどやけがをした人が山のように右往左往。兵隊さんにトラックに乗せられ、宇品に運ばれる。兵隊さん4人で手足を押え付けられ、麻酔なしで頭、顔の傷口を縫う。痛さをこらえて、泣く泣く水を下さいと叫ぶ。(今、水をのむと死んでしまうぞ)と言われながら、コップに5分の1もらったのんだ。(やっと助かった命だ、大切にしろ)と言われて、あとはがまんをした。

その夜、宇品から舟で大竹小学校に運ばれた。教室はすぐにいっぱいになり、目をやられた人、やけどをした人、痛さに悲鳴をあげる人、水ほしさに自分の尿をしびにとり、それをのむ人、背中にうじむしがわき、かくこともできない人、そして次々と死んでいく人。私は足がたたなくて、牛のようにはいつくぼって歩くのがやっとでした。両親に会えたのは8月6日から20日目のことでした。

9月に母が大八車にのせて、アメリカ軍医に治療してもらった。

3年後、顔の傷口からガラスの破片がでた。

(広島 直爆1.5km 女 14歳)
(40-0830)

観音町から己斐の山に避難する時に見た市中の劫火、大声を上げながら走って私達を追い越して行った裸の人達、己斐小学校に集まって来た被災者、道端に倒れて水を求める人、翌朝その人達はほとんど死んでいました。土橋から十日市あたりを、死体をまたいだりしながら帰宅しました。

以後8月15日まで(14歳の女学生でしたが)、生き延びることは出来ないと虚無的になっていました。

それから後も多くの怪我人、ひどい火傷の人達を見て来ました。背中一面にわいた蛆、以来蛆という言葉が口に出ることが出来ません。

死んで行った人達に何も出来なかったことは、一生の重荷になっています。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕
(13-14-013)

思い出したくは無い。

水欲しさに川に入ったのでしょうか、川面にうつぶせた女体の長い髪の毛が、水の流れてゆれていた姿。本当に水が欲しかったのでしょうかね。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕
(23-0389)

まだ女学生でしたので、人々のあとを歩いているのみでした。早く家に帰りたいの一念で、また考えてみると放心状態で、右往左往していたのみでした。人の死体を見ても、恐ろしく思う心のよゆうもありませんでした。

どうしたのか、どうなったのかの繰返して、つぶやきながら歩きました。
あの当時のことは一生忘れません。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕
(27-0061)

当時は子供でしたが、自分の学校(昔、進徳女学校)がのこっていると思い、学校に帰りましたが、そこには何もなくて、校庭の(ぼうくうごう)の中にたくさんの先生や生徒が死んでいるのを見ました。

ただ一面の焼野原をさまよい、たくさんの人がたおれている中をあるいて、誰とはなしに人についてゆきました。

3日目頃に広島より倉橋まであるいて帰りました。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕
(34-4417)

全身裸で、わかめのようにボロボロになった皮を引きずりながら、終日途絶えることなく被災者の列が宇品港へむけて続いた。もう歩くことができない人が、道端に倒れて助けを求めている。

わが家（お宮）へやっとたどり着いて一旦落ち着いた人も、ここは危険だから似島へ送るよという軍隊の命令で、再び港まで歩いて行くことになったけど、1km足らずの距離が大変時間がかかった。あまりにも人数が多いので、担架で運ぶ方もクタクタになった。宇品港にはたくさんの人が道端に寝かされていた。

中学生が足元で「お宮のお姉さん、僕は△△△△です。連れて帰って下さい」と頼まれたけど、怪我人を運んでいる途中だったので「おうちの人に知らせてあげます」といってその場を離れた。家族が行った時には、すでに死亡していたと聞いた。

あんなにひどい状態の中なのに、神様の前で死人を出しては「不敬」になるので、火傷や怪我がひどく助かる見込みがないと思われる人は、隣の幼稚園に移動させた（戦時中のこととはいえ、ひどいことです。生きた人より神様が大切なのでした）。

お宮には比較的軽傷の人を収容しましたが、ところが無傷だった人が血を吐きながらゴロゴロと死んでいった。

幼稚園児と思われる子どもが、火傷をした先生に連れられて逃げて来ていた。先生は死亡された。子供は引き取る人もなく、お宮の廊下の手すりにもたれて、あどけない声で歌をうたっていた。 ”ぱっと開いた赤ちゃんのおてては可愛いモミジの手” という歌詞が今も耳に焼きついている。

収容所は9月末で閉鎖された。あの子はどうしたんだろうかと、歌とともに思い出される。

〔広島 直爆2.0km 女 14歳〕
(34-5812)

1. 流川（中心地500m内）で30歳台の女性の被爆者が、私達4人の学生で板戸を拾い囲いを作って（川の中）雨をさけている処へ来られ、仲間入りを頼まれた。その時11時前、無傷のその人は1時間位自分の被爆状況を語っていたが、その内はき気をもよおし、段々ひどくなりぐったりしてきた。3時頃私達の工場の部長の、学徒をさがす声で集合するのに立ち退く時は、一人で歩けない様子。友人と共に川岸まで連れて行って別れた。氏名を聞いたのを今では忘れて残念に思っている。3時頃川の崖下にはぐったりした人はいっぱい集まっていた。
2. 今思うと、女学校、中学校の1、2年の家屋そかい作業に行った子たちか、真黒に焼けて電車路上に、1人は立って、1人は横に倒れていた。立っている方に「この子死んで立っているのかしら」と言ったらかすかに動いた。これも名前を聞けばと、いつまでも可哀想で忘れられない。
3. 瀕死の状態の母でも、幼児は安心してすがっている、また、母は子を案じている母子の姿に、戦争のむごさを痛切に感じた。

〔広島 直爆1.5km 女 15歳〕
(13-14-106)

一瞬家の下敷きになり、あの日、兄が助けてくれなかったら私達は死んでいました。また、逃げる途中、多くの人がボロボロの服を着て、顔もずるずるにむけ、その時はヤケドだとは知りませんでした。

川の側まで行き、水に入ろうとしましたが、真茶に川の底まで原爆が落ち〔ママ〕魚がういていてとても入る気になりませんでした。人のことを気にする余裕などなく、生後2ヵ月の弟、3歳の妹、6歳の妹、母と私が一目散で逃げ（兄と姉とはぐれ）恐ろしさでいっぱい、私達多少の怪我なのですが、着のみ着のまま、救急袋もどこかへ飛んでゆき、なすすべを知りませんでした。

〔広島 直爆1.5km 女 15歳〕
(13-53-021)

私達は吉島の飛行場から江波の小学校に收容され、母の亡くなる20.9.14日まで、そこでの生活になります。

一つの教室にたくさんの人と生活、一家5人家族の人がありましたが、みんな寝こんでしまい、元気なお兄さんがいましたが、その人もたおれ、腰のあたりにお茶わんをふせたくらいの大きさにうじ虫がわき、いたい、いたいと言っていました。誰もどうしてあげることも出来ず、そのうちに別の所へつれて行かれ、亡くなられたそうです。

私の母も後半身やけどで、何の手当も受けず亡くなり、同室の人も亡くなっても何日もそのまま、いろいろの事が心にのこっています。

〔広島 直爆1.5km 女 15歳〕
(23-0404)

S20年8月6日AM8時15分、原子爆弾が投下されたのです（空中爆発のため広範囲に及ぶ被害）。熱線は炸裂した瞬間の火球の温度は数百万度と言われ、鉄が溶ける温度が1530° ガラスの瓶が700~800° でとけていきます。鉄が溶けて行く温度よりはるかに高かったわけです。爆心地から280m離れた所で5000°の熱線があったといわれ、銀行の開店を待っていた人は原爆の炸裂により蒸発して、残されたのはその人の人影だけだったそうです。当時の広島の人口が40万人、その内37万前後が被爆し、死者は20万余、その内動員学徒が6000余人とも言われています。当日から1週間~10日間に被爆者の身体に急性放射能症状となって、男女の区別なく髪の毛は抜けて丸坊主になってしまい、鼻、口、耳等から血とうみが出て、さらに身体全体に紫色の斑点が出ます。また高熱が出てひどい下痢、下血したり、皮膚に湿疹のような吹き出ものができます。これが急性放射能障害で多くの被爆者が死んで行きました。

私も少し髪の毛が抜けたり、ひどい下痢と下血があり、皮膚には吹き出物のようなひどい湿疹が出来、汗がいつまでも出てなやまされました。真赤に焼けた夜空を仰ぎながら、三日三晩野宿をしました。からからにのどが乾き、水がほしくても、水をのめば死ぬと言われ、なかなか水ももらえませんでした。

私は15歳の時、旧制女学生3年生の時被爆、爆心地から1.5kmの地点で熱湯を浴びせられたような熱さと同時に、すさまじい爆発音が耳をつんざいたのです。1~2m先に飛ばされていました。倒れた建物の中から逃れ出たのですが、道らしき道はなく、一面瓦礫の散乱、大きな建物まで亀裂が入ったり倒壊したのです。あちこちで火災が発生し、火の手があがる中から助けを求める声“助けて、助けて、梁の下のこの子だけでも”と言う悲痛な母親の声、姿はみえず、瓦や梁の〔下〕からやっと姿を見つけても、私達女学生の手で梁を動かすことも出来ず“人を呼んで来ます”と言ってその場を立ち去り、通りがかりの人に声をかけても誰も来てくれません。そのうち兵隊さんが手をかして下さいましたが、火の廻りが早く助けることも出来ず、目の前で生きながらにして焼け死んで行かれたのです。

何の罪もない人間が焼き殺されたのです。まるで生きた人間の火葬でした。目の前で助けることも出来なかった無念さ、悲しみ、くやしさを、その場に釘づけになり、ただぼうぜんとしていました。火の勢いは早く、逃げ道がなくなる、早く早く急がされ、後髪を引かれる思いで阿鼻叫喚の中を、涙はほほを流れるままに耳をふさいで去りました。

今でも紙屑や木片をもやすことが出来ません。あの時の事が思い出されて、焼け死んで行かれた人々を思い出すのです。40年たった今なお、サイレンになやまされます。

〔広島 直爆1.5km 女 15歳〕
(40-0740)

爆撃があつて数時間後に雷鳴があり、真黒い雨が降り出しました。黒い雨は夕立のように烈しく降り、川の水が急増し、雷鳴が爆音のように聞こえて、敵機がまた襲来して来たのではないかと、皆が逃げまどい、木蔭にかくれたことが、子供心にたいへん恐ろしく思いました。

また、竹やぶで一夜を明かした時、たくさんの人達が避難しておりましたが、皆が一様に、げいげい吐いておりました。

たいしたけがや、火傷のない人でも、3日後くらいで、ばたばたと死んで行きま

したので、不思議に思いました。

その人達が、皆水を欲しがり、水をくれ、水をくれ、と言われるのに、水を飲ませれば死ぬからと注意され、飲ましてあげることが出来ないのを、何かとても悲しく、むごく感じましたが、その人達が死んだ時、ああ叱られても飲ませてあげればよかったと、小さい胸に後悔の念をいっぱいを感じ、今でも忘れることが出来ません。

〔広島 直爆2.0km 女 15歳〕

(01-0047)

- ①家の下敷きになり、生きながら焼かれてしまった多くの人達。
- ②顔中ケロイドで、お化けのごとき母親が、自分の小さな子を膝に抱き、座っていたかと思うと倒れ、また起き上がり、倒れては起き上がる地獄絵が、子供心に脳裏に焼きついて離れない。
抱きかかえられていた赤ん坊は、今、生きているのであろうか？ 生涯忘れられない記憶となった。
また、死体の目玉が20cm位上に、筋肉とともにとび出ているものや、人間、馬の胴体だけのもの等。
- ③市内を3日間、父とともに弟を探し求め、己斐国民学校で(教室で)やっと弟の遺体と対面でき、夜となってしまった。
小学校の校庭には、足の踏み場もない〔ほど〕死体のごろごろと横たわり、物音しない夜の暗闇に、遠くから死体の骨を犬が噛んでいる「カリカリ」とした不気味な音が聞こえ、父にとりすがって泣いた。恐ろしいあの日の光景が、幼い自分にとってショックを受けました。
人の世の出来事として、このような残酷な、地獄があるのでしょうか。
- ④弟の遺体を、校庭で父自らの手で茶毘に付した状景の悲惨さは、生涯忘れることが出来ない。

〔広島 直爆2.0km 女 15歳〕

(11-0166)

- 当時「警戒警報」も解除になっていて、電柱の上に登って工事をしていた人が、そのまま死んでおられた。
- お隣の方は、大きい柱の下敷きになっておられても、力がなく助けることも出来ない中に、火が回って来て、私たちもやっとの思いで逃げた。
- ◎一瞬にして地獄図となったためか、発狂してまっ裸になって、燃える火を見て「あーきれい……」と手をたたいていた20歳位の美しい女性のこと。
- 川の中を渡って、長束方面に避難したが、翌日その中に死者がいっぱいだったこと等、思い出してるうちに気分が悪くなります。
- 私の母が、家の下敷きになっていたが、瓦等取りのぞき、はい出て、助けられた。

〔広島 直爆1.5km 女 16歳〕
(13-35-019)

私は学徒として広島地方貯金局に動員していました。

原爆投下直後、逃げるため階段まで来ると、そこには掃除婦の母親について来ている3歳くらいの女兒が倒れて、そのお腹には腸がはみだし渦になっていました。目はパッチリあけて「お姉ちゃん」と言ったが、私はどうしていいかわからず、かかわっていれば私まで逃げられないような気がして、後髪をひかれる思いでそのまま逃げたけど、今でも銀色に光った腸の渦巻いた光景が脳裏に残って、残悔の思いで一パイだ。

御幸橋のところで、毎日宇品のとさつ場に行く牛数頭が、やけただれて死んでいた様は地獄であった。

建物疎開に行った学徒が黒こげになっている姿をみて、罪のない人達が、なぜこんなひどい目にあわなければならないのだろうと、くやしくて泣いた。どうしてもこの仇はとってあげると敵がい心に燃えたけど、今では人間が悪いのではない、戦争が悪いのだから、絶対戦争はしてはならないと思う。

〔広島 直爆1.5km 女 16歳〕
(34-4387)

- 私はけがをして逃げる時に、若いお母さんが死んだ首のない赤ちゃんを背おって、なきながら逃げておられる姿を見て、たまらなくかわいそうで、ともに泣いた。
- 横川橋の下の川の中でのこと。川を渡ろうとした小学生（3、4年くらいの女の子）が、深いため渡りきれず、浮いたり沈んだりしながら、助けてー、助けてーと叫びながら、とうとう流されて行ったのを見ても、自分もどうしてあげることもできなかった。今でもその声が耳の底に残っていて忘れられない。
- 饒津神社のところが常盤楼のところで、男の人とも女の人とも見さかいのつかないほどひどいやけどをした方が、私をみて、「おねえさん、水をください」と何回もいわれた。私はひどいきずをしていたが、常盤楼のポンプを押して、ころがっていたべんとう箱のようなものに汲んであげたら「おいしい、おいしい」といってむしり取るようにしてのまれたが、見ているとまもなく死んで行かれた。何とも言えない気持で、しばらく立ちすくんでいた。
- 私は女学校4年生で、学徒動員に出ている被爆した。大内越峠を越えて中山町のある家のところまで帰って来て、ふとその家の前の鏡に自分の姿がうつったのを見て、自分の姿のあわれなことにおどろいて声をあげて泣いた。頭髪は乱れ、着ていた白いシャツは血でそまり茶色、モンペは半分下はなく、上はぼろぼろでさがっている。顔は32ヵ所けがで（後からわかった）、目はつぶれて片方見えなかった。
- 私は府中小学校でけがの手当をしてもらい、夕方7時ごろ父母が迎えに来てくれた。うれしさのあまり声が出なかった（母もしばらくは茫然としていた）。

〔広島 直爆1.5km 女 16歳〕
（34-5427）

光しか見えませんでした。気がついた時は、瓦礫にうまっていました。火の手が上がり、火が迫ってきたので、必死で猿猴川の方へ向かいました。一緒に働いていた友達がどうなったか、また、どうやって川まで行きついたか覚えていません。火に追われて押し寄せる人によって川に落ちて流されていました。ずい分の死体や怪我をした人が流れていました。頭の上は火の熱気が渦を巻いていました。木につか

まっておぼれかけていたら、腕がちぎれかけた青年と彼の母（のような人）が、私が流されないよう手をつかまえていてくれたのです。あの人達がその後どうなったのかわかりません……。

私はそれでも比較的水泳ができたので、なんとか反対側へ泳ぎついて、それから、どうやってかわかりませんが、三篠の自宅に帰りました。でも、一面焼け野原で、家も何もありませんでした。そこで、私のことを心配して探し回っていた母と出会うことができたのです。もうお互いに会えないと思っていただけに、2人とも大変なうれしさでした。

〔広島 直爆1.5km～ 女 16歳〕
（34-7190）

原爆後、私達父と娘（私です）自分自分の家族のこと、自己愛のためだれ一人助けに来てくれませんでした。父は片方の目があとで失明いたしました。左の目の上を深く傷を受けたため、血がたらたらと落ちていましたし、ほうたいもなく、はだしで、私は家に火がまわったため熱風をあおり、肌は皮膚がはがれぶらさがっていました。

父と娘（私）は二階にいましたので、階下に母親が、それに姉がいましたので、父は助けにむかおうとしましたので、私は必死になって父を止めました。

父娘は広島駅に向かおうと歩きかけましたが、火が廻っていて前に進むことは出来ず、とおまわりをして東練兵場へ逃げました。たくさんの方がいました。父はもう歩けなくなってジーンと目をつぶって寝ていました。

そかい先に行きたいと思いましたが、汽車のことが分からず、広島駅の方へむかいましたら芸備線が出るとのこと。私はその汽車に乗ればそかい先に行けるのです。父をつれてその汽車に乗りたい、しかし父は動くことが出来ないし、どうしてよいか分からず立っていましたら、そこへタンカをもった人が通りかかりましたので、どうしても私の父をのせてくださいと、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も私の力の限りたのみました。一人の人は足をとめました、前を歩いていた人がさっさと行ってある人をのせたのです。それでも私はその場所までついて行きました。

父を助けてください、歩けないのですから。広島駅についていきました。待っていないさい、かならずむかいに行きます、と言われましたのに。

私は子供でした。日がくれるまで立っていましたら、私の目の前で芸備線の汽車が白いケムリをあげて、汽車が出て行きました。その汽車を見送りながら、とめどなく涙が流れてぼうぜんと立ちつくしました。

父と娘は仕方なく二人で歩き始めました。父はユカタをちぎって目にほうたいし、私とはぐれると思って、父と私は手を、ユカタをちぎって手をむすび、二人でゆっくりと小幅で、むゆう病者のようになってそかい先にむかいましたが、その時は真夜中というよりか午前2時頃に戸坂小学校につきました。水がのみたくて、のどがかわいて……。

今この書類を書きながら涙が出て仕方ありません。

〔広島 直爆2.0km 女 16歳〕
(13-21-004)

私はあの日は女学校から皆実町の専売局に動員されておりました。ピカッとそれは明るい光でした。専売局中の電気が一ぺんにショートしたのかと思いました。

「ブスッ」とにぶい音がして、次の瞬間は何かにたたきつけられた感じでした。それからどれだけ時間がたったのか分かりません。気がついた時は、あたりは真暗闇でした。人の気配は全くありません。手さぐりで歩き出しました。箱がガタガタにちらかっていて、一足進むのも容易ではありません。薄茶色の闇の中をチラホラと歩く人の姿が見えて来ました。あたりは大分明るくなり、人の顔が見えるようになっていました。

こわれた家の側で「水、水はありませんか」という声が聞こえました。「水はここに出ていますよ」とおしえてあげました。その人は夢中で水を飲んでいました。よく見ると、それは一人の兵隊さんでした。身体中灰色でした。何の灰をかぶったのかしら。服は着ていません。皮のバンドの所々に、よれよれのものが下がっています。肩から斜めにかけて皮ひものところにも、何かよじれて下がっています。なにげなくよく見ると、それは軍服の一部ではなく、皮膚がよじれて下がっているの

でした。はだかになっている腕のあちこちにも、皮膚がむけてよじれたようになって、ぶらさがっています。大きなくつ、腰のまわりの持ち物等で兵隊さんであることは、はっきり分かります。

[広島 直爆2.0km 女 16歳]
(13-23-094)

火に追われながら逃げる途中で見た、全裸に近い姿の人々の皮膚が、ボロが下がったようにめくれていた様子。

逃げ道を火にさえぎられて、仕方なく川に下りたが、そこではけがややけどをした大勢の兵隊達が水を求めて泣き叫び、それを自分もまたけがしている若い将校が、軍刀を杖に叱咤激励して歩いている様子。

夕方近く、ようやく燃えつきた川辺の家で、大地をつかむようにうつぶせになった黒こげの死体。

私自身ガラスの破片によるけがで出血がひどく、友人に助けられて逃げるのがやっとで、何一つ役立って上げることは出来なかった。今も目の前にやきついているこれらの事柄は、死ぬまで離れることはないでしょう。

[広島 直爆1.0km 女 17歳]
(13-27-046)

トイレの中で被爆し、とにかくどうして出たかわからないが、外へ這い出していた。外へ出てみたら、すぐ火の海だった。友達数人と戸坂方面へ向かって逃げて行った。外へ出た時、友達が無傷で死んでいるが、誰も何も出来なかった。

また、同僚が腸がとび出たり、頭が割れて道路へひっくりこけていたり、気が狂ってうわ言みたいなことを言ったりしていた。それらの人に、誰も声もかけず、自分だけが逃げるのが必死じゃった。

今になって思えば、骨もどうしたのかわからない。家族にも連絡もしてあげられなかったと思うと、可哀想なことをしたと思うが、あの時はどうしてあげることもできなかった。

〔広島 直爆1.0km 女 17歳〕
(34-5887)

この欄は最期まで書くか書くまいか迷っていて、先の方を書き終えてしまいました。が、やっぱり書く気になれません。

ここの頁がすらすら書きおおせる位なら、今まで過去40年の間に手記めいたものの原稿用紙5、6枚はらくに書けていたでしょう。ですが、空欄のままというのも一番広いスペースだけに申しわけないので、◇例◇ア) イ) ウ) を基盤に一言書いてみましょう。

ア) 人々の死にざまは、千差万別、生きてる人の苦しみの様子は、私の目にした限りにおいては七転八倒の人は一人も見なかった。皆静かで、半死にの人達ばかりだったのでしょ。幼児は泣ける子は泣いてましたけど、その泣き声も途絶えた時が息絶えた時らしかった。

イ) 死体をもても、次々、ぞくぞく、バタバタ死んでいっても、何も感じなかった。

ウ) 行列して避難してきた人達は、私の唯一の財産、蓋のない薬缶をみつけてスーッと取って口飲みし、それはスーッと手から手にブン取られていった。私は薬缶を見張ってヨタヨタと付いて行き、水が無くなった時、可哀想で、足の怪我と火傷の事忘れて、川へひらりと格好良く水汲みにドブン！柵にしがみついてエイッと這い上ろうとしたけど駄目だった。白衣の傷病兵が引っ張り上げて下さった。ひょっとしたら命の恩人といえるかも知れない。しかし、その彼も1週間とは生きていられなかった筈。御冥福を祈ります。

この方の事は忘れてはならないと、忘れていません。

〔広島 直爆1.5km 女 17歳〕
(13-19-025)

家族は内海の島に住み、わたしだけ広島へ出ていた。16歳。

被爆直後、燃えている橋を渡って逃げたが、その橋はわたしが渡り終わったとたん、落ちてしまった。さらに数分?逃げていったところ(稲荷町か?)周りが燃えている家の屋根に、赤ん坊を抱いた母親が叫んでいた。「この赤ん坊を投げるから、受けて下さーい!」わたしは「赤ん坊が死ぬ!一緒に降りて来てー!」と叫び、そのまま火に追われて逃げ出したが……。その母親と赤ん坊は死んだんでしょうね。そのことを思い出すと、みじめで、苦しくて、悲しくて、いまでも誰にも言えない。そのことを思うと、そのことが頭にこびりついていて耐えられなくなる。

そのあとは、うめき、うなりが、叫喚の声とまじり合って、いまでも頭の中に残っている。

わたしは医院に勤めていて、救護班だった。ちょうどモンペも上着もなん枚も重ね着していたが、周りを逃げていく娘さんたちは裸同然。わたしの身につけているものを少しずつ脱いで、いく人かの人に着せかけてやった。そのときはもう泣きながらであった。

cf.8月5日、友人3人と映画をみに行った。夕方帰ってきたとき、院長が「5日から6日にかけて、水攻めか火攻めかで、広島がやられる。それなのにどこへ行ってたんだ!」と怒った。

「準備しておけ!」と言われたので、6日朝にかけて、わたしたちは身に着物を重ね着する用意をしていた。

院長は、憲兵からこのことを聞いたのだと言った。

〔広島 直爆1.5km 女 17歳〕
(13-40-006)

書けと言われても、今思い出してもぞーとするような口にも出せない悲惨な様々の事があまりにも多く、あの日の一例のみ記します。

逃げろ逃げろと言われる声に、ぼろぼろに焼けただれたモンペを引きずり、市内より市外に向かって牛田方面へ皆ぞろぞろ、時には小走りで、きず口の痛みや血の流れているのも知らず無我夢中でにげた。

途中電車のまるこげ電線のブラブラしたのから火をふき、その下をくぐり、道路わきの家のつぶれた下からはタスケテーの声にもどうすることも出来ず、しばらく行くと、牛の毛に火がつき狂ったようにあばれ、馬が（荷馬車）走り出し、犬がとび出す中を、こわさも忘れただ逃げた。

市内を出て太田川の川岸まで行くと、橋のむこうの対岸はめらめらと火の海、行くことも帰ることも出来ず、川原の砂に下りた。ぞくぞくとあたりは一面の人々、よくみると男か女か判別のつかぬ黒い顔、口びるはめくれ鼻も大きくなりやけただれ、そこまでやっと来て倒れる人。兵隊さんたちのうめき声、水、水と水をもとめて水面につっこみ、それまでとなる人。隣に横になってる人から、手を手をといわれ握ってあげているとつめたくなって行く。やけどに水をやってはだめといわれても、見るに見かねて手ですくって飲ませて上げる。今になって後悔するが何ともせつない事だ。

そんな二、三時間過ぎた時、また敵機来襲、かんさい機のへんたいが旋回し、低空でバラバラ人をめがけて撃ってくる。私達動ける人は川水の中に半身つかり、頭上にくる度に頭をかくし水にもぐる。やっと襲撃が終り、対岸も全部焼け、夕方になり火のおさまった後、一人の憲兵さんにたよって田舎まで連れて行ってもらった。やけあとを歩くたびにゴム底の裏がとけるにおいのする熱気の中をくぐる。本当に生地獄そのままだ。

〔広島 直爆1.5km 女 17歳〕
(40-0245)

落ちたしゅんかんに「てい電」になったように空が暗くなった。

己斐のはしまで逃げたころ、黒い雨にふられた。古江に家があった。

何がなにやらわからず、友だちと一緒に逃げるのに精いっぱいだった。しかし、牛や馬も人間と一緒に川にうかんでいたこと、忘れられない。

[広島 直爆2.0km 女 17歳]
(34-6161)

(大変勝手ですが、短歌でお答えいたします)

ヒロシマの焦げし死体につまづきて躓きて彷徨ひし十七歳の夏
鉄橋の下を流るる焼死体兵あり女学生あり見て渡るのみ
炊き出しのむすび食ひにき襦袢のごと死体集めて焼かるる傍(かたへ)
熱き瓦礫を素手に掘りみる鬼女を見き父の名を呼ぶわが母を見き
焼死体蛆わく生者搔き分けて父呼び廻るわが父の名を
万の死者焼きたる臭ヒロシマの臭よりいまに逃れ得ずわれ
焙りたる魚肉獣肉また酢牡蠣の類われの食はざる理由を聞くな

—旧かな—

[広島 直爆2.0km 女 17歳]
(34-6270)

私は広島第二陸軍病院看護婦生徒第二期生として、勉強をいたしていました。仲良しの△△生徒と二人で並んで勉強をしていた時原爆が投下されました。家屋が倒壊して下敷になり、私は気を失って記憶がありませんでしたが、友達が皆んなで助け出してくれたそうです。××生徒が私を連れて逃げてくれたそうです。次々と友達がバトンタッチをして三角州の中まで来た時、私は焼けヒバシをつきさされたような痛みを感じて正気になり、気がついたら一歩もあるくことが出来ませんでした。竹が生えている所までひきずって行かれ寝かされました。ここはどこかしらんと、

首を上げて見ようとしたのですが動きません。喉がかわいてたまらず、そばにいる人に、水をのまして下さいとたのみましたが、私も動けませんと言われ、川の中はたくさん人が死んで流れていました。空は真っ赤で広島中がもえていました。

水があってもものむことも出来ず、砂漠の中で一人寝ているような気がいたしました。その時空が真っ黒になって大つぶの雨が降り出したのです。恐ろしい放射能の雨とも知らず、天の助けとばかり、せめて雨でも飲んでと一生懸命口をあけましたが、身体がぬれるばかりで口の中には入りませんでした。夕方になり、△婦長殿友達四人で小さな舟に私をのせて、自分達は水の中に入って対岸に渡してくれました。大きな橋のある土手の上にねかせられ、三日目に戸坂に収容されました。病院では入りきれず、少しでも動ける人はよそに行き、重傷者だけ残りました。傷にウジがわき、看護婦さん水を下さいと言ってものましてももらえず、たえきれず夜中にはい出して田圃に首をつっこんで死んでいました。

仲良しだった△△生徒は、腹がやぶれて腸が10cmほど出て、三日目に死亡したそうです。私のどなりに寝ている方が次々となくなり、私も生死の境を行ったり来たり、母の必死の看病で命をとりとめました。

私は皆さんに助けってもらったばかりで、今日を行きて来しました。△△生徒の御両親がこられて、娘のかわりにどうか早くよくなって長生きをして下さいと言われたことが、忘れることが出来ません。

身体が弱いため志した看護婦になれず、残念に思っています。

〔広島 直爆1.0km 女 18歳〕
(27-0523)

8月6日7.30分(行って来ます)の一声が最後に、再び両親に会うことは出来ませんでした。当時私は18歳、三菱広島造船所に挺身隊として行っておりました。幸か不幸か時間のずれで私一人助かりました。

一人子だった私は、何が何やらさっぱりわからず、自分が生きているのか死んでいるのか、今思いますと、とにかく自分を取り戻すのに無我夢中でした。

造船所も怪我した人、やけどの人、息もたえだえの方々が次から次へと運んでこ

られ、もうその光景は生きながらの地獄の様でした。

私も両親のことが気にかかり、三日目、やっと市内に入ることが出来ました。私の家は広島大手町三丁目、爆心地から0.5km位の所です。途中まだ道路のアスファルトはやわらかく、ゴムぐつや下駄でははまり込みそうで思うように歩けないので、会社でワラゾウリをもらってまいりました。途中はもう右も左もやけどした人、亡くなっている人、どこが顔か、口かまったくわからなく、まっくろにやけただれた人、大きなまっ黒い石と思ったら、それは牛があおむけに目をあけたままたおれて死んでいました。ただ、生きているのか死んでいるのか、つったっている馬。とにかく道路はしかばねの山でした。

くるしいうめき声の中から、赤肌のむけた手をのぼして（お姉ちゃん、お水、お水を一杯下さい）と、何人の人に言われたことか。しかし、私はその方達の最後の願いも聞いて上げることが出来ませんでした。何人の人々のしたい〔死体〕を踏んだことか、心の中で（すみません。ごめんなさい）手を合せながら、両親を探すのに精一杯だったのです。こうしなければ自分の家に向かって行くことが出来なかったのです。

川という川にはまっかにやけただれた、ふうせんのようにふくれ上がった人間のしがいがいっぱい浮かび上がっていました。市中は何とも言えぬ悪臭で、したいの上、けがした人の、そのいたる所、ウジがもう所せましとはいまわっていました。

私の両親を、5日目やっとみつけることができました。もう人間の炭になってどうすることもできませんでした。二人とも首はなく、手、足らしい形はありました。あおむけに片足を立てたような形で、台所らしい場所で死んでいました。父親は庭の防空壕の土の中で死んでいました。

とにかく書きたい事は山ほどありますが、思い出すとくやしさを、腹立たしさが増してまいります。私は、毎年くる8月6日、思い出したくありません。

〔広島 直爆2.0km 女 18歳〕

(13-12-050)

家から出た時、火がもうまわっていて、火のトンネルのようになっている中を、朝からお店に（玉つき）遊びに来ていた男の人に助けってもらって逃げた。

比治山の下のところで黄色いものを吐いた。

お母さんが下敷きになっていたが、声がしていた。2人で何とか助けようとしたが、「お母さんはもうここで成仏するから、お父さんの所に行きなさい」というはっきりした声を聞いた。後でお父さんに言うと「わしがいたら、助けていたろうに」と言ったので、私はつらかった。

△△さんが「火がまわってきたから、早く逃げよう」と言うので、どうしていいかわからないまま、母を置いて逃げた。このことは話したくないし、思い出すのはいやです。

自宅の下に住んでいた同じ年の女性と、比治山で一緒になった。同じ所で被爆していて、6日の夕方、おむすびを1コずつもらったが、その子は食べる元気がなかったの、私は2コ食べた。その子は9月に亡くなられた。同じように原爆に遭ったのに、かわいそうに思う。

〔広島 直爆1.0km 女 19歳〕
(34-7240)

8月6日は、市役所1階の職場で仕事についたときでした。

部屋の中でふきとばされ、背中にガラスの破片がたくさんささっていました。中庭に逃げると、そこには大勢の人がいましたが、衣服に火がついている人や、ひどいケガ人ばかりでした。

兵隊のような人が、危険だからここから逃げるようにいうので、女友達5人と吉島飛行場へ逃げました。みんな身体中にガラスがつきさささっていました、橋に火がついている所を走って通り抜けたり、夢中でにげました。もう恐ろしいというような感覚もなくなっていました。

飛行機の下にもぐって、夕方までいて、それからまた御幸橋の方へでて、段原大畑町の家まで帰ってみると、家はやけ、いく所もないので、友人をたよって仁保へ

いき、ぶどう畑のところへカヤをつって、そこに泊めてもらいました。

9月か10月には、また、市役所に戻りましたが、その後結婚の時やめました。

一緒に逃げた友人は、みな助かりましたが、逃げる時、あれだけたくさんの方が「助けてー！」と叫んでいたのに、とても助けられる状況ではなかったのですが、やはり、あの人たちはどうなっただろうかと、心のこりです。

〔広島 直爆1.0km 女 19歳〕

(34-7241)

腸を引きずりながら、それでも生きて歩いていた人がいたこと。

真赤にやけた体で、ふくれあがってなくなっていた人の死にかた。

横川の興和ミシン針で針をつくる会社（兵隊さんの靴をぬう会社）で、学徒動員で行っていて被爆し、たくさんな学友が、くろこげになってなくなり、上からおちて来た針が、顔や体に何百本とつきささり、亡くなった友達の姿がわすれられません。

父は私をさがすため、毎日この工場にかよい、黒こげになった女学生をならべてあるのを、毎日毎日私ではないかと、この工場に来てさがした話をきき、また、その中にモンペのやけこげの「がら」で我が子とわかり、まるですみみたいに真黒の子をおんぶして、かえって行かれたお母さんの話をきき、今でもわすれられません。

〔広島 直爆1.5km 女 19歳〕

(13-23-036)

行方がわからないのですから、死んだんだと思い、あきらめている我が子の事。

自分だけ助けられて、一度引き返した千田町の家屋は、まだ焼けていませんでした。家の下敷きから、助けてー。あの声は、今でも忘れることが出来なくて、自分をさいなむのです。あの時、後をふり返った時、ものすごいいきおいで炎が走って

来たのです。

〔広島 直爆2.0km 女 19歳〕
(13-21-040)

私は広島駅の中で被爆しました。気が付いた時は、周りは真黒でなにも見えませんでした。少しする内にすこしずつ明るくなり、出口に行く周りには、苦しむ人達や死んだ人達でごろごろしていました。不思議となにを見てもなにも感じませんでした。自分が生きてよかったとも、水をほしがっている人を見ても、くるしんでいるのを見ても、ただだまって皆どこへ行くともなく歩き回りました。

後でわかったのですが、私の友達が1人不明になりました。それが私にとって被爆にあったより、なにより、私にとって一生ついてまわる苦しみです。一緒にいて私が生き残ったことで、友達の家族をひどく悲しませました。

いろいろとありましたが、40年の年月が少しずつやわらげてくれたようです。この心のきずは、思い出しても身ぶるいのするような、長い年月でした。人に話したこともありませんでした。その頃は人が見ても少し変になっているのではないかと思ったそうです。

〔広島 直爆2.0km 女 19歳〕
(34-8214)

③ 20歳台（被爆時）

被爆直後、軍需監理部（中国）のあった福屋デパートのデスクの下敷きになり、しばらく意識を失っていましたが、気がつき、すぐ4階から階下へ、同課の人と外へ出ましたが、避難する途中、河原に赤チンを塗ったような、身体の焼けただれた人々、市内電車の中のほとんど炭化した死体が折り重なっている姿、未だに目に焼

きついて離れません。

泉邸から1丈も下の河原に飛び降り、向こう岸へ丸太にかじりついて、必死で泳いだことも忘れられません（当時泳げなかったもので）。

長い長い横川の鉄橋を一步一步渡り、己斐の駅近くまで来た時、レースのブラウスを着た女の人が立っていましたが、皮膚の出ている部分だけ、レース模様のところが火傷していたのに、本当に驚きました。

弟は広島市立一中の1年生で、建物疎開の奉仕で被爆。翌日軍の方に助けられ、家（五日市）に8日に帰って来て、10日に亡くなりました。意識は大変しっかりしていましたが、顔はふくれ上がり、手足も火傷もたくさん、可哀想な姿でした。被爆直後は、友達と君が代を歌ったりしたそうです。

〔広島 直爆1.0km 女 20歳〕
(13-33-007)

警戒警報解除〔後〕に起きた原爆投下は、一瞬にして広島を生き地獄にしました。一瞬真暗くなり、爆弾と思わず伏せました。同時に外に待たせていた子供が気になり飛び出しました。子供はいませんでした。

たくさんな人が倒れ、歩いている人は魂のぬけたような人ばかりで、倒れている人は顔が皆んな同じように腫れあがり見分けはつきません。自分の子供を探すのに精一杯で、水や助けを求めている人たちに何もしてあげられませんでした。

自分のいた家は倒れ、一日中探して歩いて子供は分からず、東練兵場で建物の焼ける炎を見ながら夜の明けるのを待ちました。駅で子供と別れた場所へ最後の望みをかけて行って見ました。子供の無事を書いた立札がありました。（△子ちゃんは無事だから日本製鋼所にお出でなさい。△△小尉）と書いてありました。その時の嬉しさは足が地に着いていない思いでした。お礼を申し上げたかったのですが、お会いすることは出来ませんでした。感謝しながら戦後の混乱の中を過ぎてしまいました。そのことが心残りになっています。また自分の家族を探すために、助けを求める人たちに本当にすまないことをしたと思います。

〔広島 直爆2.0km 女 20歳〕

(33-0153)

周囲が火に包まれて、30人ばかり逃げおくれたものだけが、溝（どぶ川）の中に体をうずめ、水が煮えたぎる熱さになり、10人位の方が熱い熱いといって亡くなられました。火の通りすぎるまでの苦しかったことは、忘れることができません。

そのあと、ものすごい雨が降り、血だらけの私の体を洗い流され、残った10数人の方が、私のためにお経をあげて下さったのを覚えています。みんな死ぬと思われたのだそうです。

それから、兄の背にすがり、大芝公園に避難しました。たくさんの方が水を要求されながら死の世界に旅立たれました。

私の眼はなんにも見えませんでした。死の誘いの手がなんとか伸びてきましたが、この時私は、なんとしても生きたいと心の中で叫びつづけました。

母や兄のお陰で今日まで元気です。あの時の傷ついた人達の苦しみ、うめき声は、いまでも私の耳の底からうづいてきます。

〔広島 直爆2.0km 女 20歳〕

(34-9025)

町会の事務所に勤めていたので、原爆がおとされた時肩や足にけがを負ったが、夢中で自宅の方へかえって見たがすっかりつぶれてどこか分からず、その内方々から火が出て、母をさがして走っているうち大やけどした母と隣家の夫人にばったり会った。二人つれて川をこえて、火の出ない方ににげる。軍隊の病院へつれて行ったが中に入れてもらえず、外の防空壕へ入った。そこで黒い雨に遭って、仕方なく二人を被服廠まで、近くにあった荷車にのせてはこぶ。そこは火傷の人や、けがの人がひしめいていて、地獄の様相だった。母は顔、両手、首など見るも無ざんやけどで、その日から血便で、意識不明になってしまっていて、何か注射をと思っ

ても、何もしてもらえず、食糧もなく、私も発熱でうごけず。隣家の夫人は真黒にやけどしていてどうすることもなく三日後に亡くなった。周りの人も次々と亡くなり、昨夜まで元気だった女の子が朝には冷たくなっているというような有様で、何か死というものにまひしてしまったような気がした。

父のことも気になったが、動けないままさがしに行くことも出来ず、どのようにして亡くなったか未だに分かっていない。母にせめてビタミン剤の注射でもといういろさがしたり、自分の家の焼けあとに避難場所標を立てたりで、夜になって帰る道々死体をそこそこで焼いている風景を見て、もうこれ以上のつらい事、こわい事はないのじゃないかと思った。

母は奇跡的に助かって、ガンにはかかったが現在も生きている。

誰にも話したくなかったし、軽く話せる事ではないので、誰にも話していない。ここに書くのもとても気の重いことであった。

〔広島 直爆1.5km 女 21歳〕
(13-12-200)

友人と2人で己斐の山ににげるとき、途中の民家の玄関でやけどした人が油をもらって、身体にぬっていた様子や、翌日父の故郷に帰るとき、市内で水槽に水ほしさに頭をさげたまま死んでいた人達、重なりあって死んでいた人達の姿は忘れることが出来ません。

無知な田舎の人達から、私たちのそばにくるとうつるとか言われたことは、どんなに悲しかったことか。

〔広島 直爆1.5km 女 21歳〕
(13-27-002)

あの日、ともかく家に帰ろうと、横川の方向へ歩きました。事務所の中で被爆したので火傷はせず、ガラスの破片で血は流れていても、行きかう人達に比べればましな方でした。何度も屍につまずきころびながら、気持悪いとか、恐ろしいとか思うことなく、夢遊病者のように、あちこち火の手が上がっているのに、廻り道をしながら、どこをどう歩いたのか、未だに思い出せませんが、家まで帰れました。

途中焼けただれた手で、水、水を下さいとうめく人に「もうすぐ水を配って下さいますよ」と気なくさめ言いながら、何度素通りしたことか、今にも焼け落ちそうな橋の上で、私に何が出来るだろうと、自分を慰める。

家にいない姉を案じるひまもなく、動ける私は、竹やぶに避難しているたくさんのおぼろげな人達に、薬も、何もなく、世話のしようもなく、焼けた皮膚を黒い雨に打たれ、痛がっている小さい子供たちを、私の身体でかばってやる位しか出来ませんでした。

〔広島 直爆1.5km 女 21歳〕

(34-5133)

家の下敷きとなりはい出した時は、あたりは暗く、裏手より真赤な火の手が上がっていました。真黒に焼けただれて皮膚がはがれ、ぶらんとさげて逃げて行く人々、死体(人、犬等)はあちらこちら、また、水槽の中へ入りかけて息がたえている人、まるで地獄にいるよう、倒れた人は水を求め、助けを求める声、今も耳に残っています。でも、どうすることも出来ず、目をつぶって、心の中でおわびを言いながら、吉島の飛行場へ、半裸、ハダシで、大ケガをした母を助けながら避難しました。

目的地もやはり死体と、黒びかりするほど油を体にぬってもらったヤケドの人達がウナって、ゴロゴロしておられた。

少人数の軍医さん、衛生兵さんに治療をしてもらう人の列、しかし、薬も水等も飛行機で送られてなかなか大変、水も私達の口に入りそうにないので、ボウフラのわいた水槽の水を手ですくって飲んだり、今思えばゾウツとします。夜になるとギイギイと死体を運ぶ舟の櫓をこぐ音、また、時々空襲警報発令のサイレン、逃げる所はなく、ただ小さくなって眠れぬ夜を幾夜すごしたことでしょう。

その中でお産をした人がいました。家族、知人はなく一人で、こわかったでしょう。死んだ赤ちゃんを抱いたまま、泣いてばかり、その様子、胸がいっぱいになり、忘れられません。自分の子供を亡くしたばかりなので、やさしい言葉もかける勇気がなかったのです。あれも、これも、いやな悲しいことばかりです。思い出すのはイヤです。まとまった事が書けません。お許し下さい。

〔広島 直爆1.0km 女 22歳〕

(34-4944)

思い出せばきりがありません。

電車のつり皮にぶら下がったまま黒こげになり、腹巻だけ焼け残った男の人。対岸を両手を上げ、軍袴だけの上半身裸の軍人が狂気のまま走って行く姿。両手の中から一瞬のうちにわが子をうばわれて気が狂い、わが身の怪我也気づかず、子守り唄をうたっていた母の姿（親戚の人）。全身赤紫色にピカピカになり、幽霊のように「おかあさん」と言いながら両手を前にして、ふらふらとやっと歩いている女子学生。母親は息がないのに、まだ生まれたばかりの赤ちゃんが、エナをつけたまま、か細い声で泣いていた様子。眼がとび出し、眼孔が大きく空洞になっていた男の人。片手のない人も皮膚が新ジャガのようにチリチリになり、または指の先にボロのように皮膚をぶら下げて、やっと河原にたどりつく人。

皆そのまま河原で座ったり、寝転んだり、潮が満ちてそのまま流された人も大勢いました。

河原の土手でも、それこそ、またいでもまたいでも通り抜けられないような負傷者ばかりでした。

〔広島 直爆1.5km 女 22歳〕

(13-17-009)

私は体が動かず、いたみをこらえている時に、そばでむらさきになって亡くなられた方に、こわれた皿で水をくんで、動かない体を引きずり、口元にあげたことを、今でも良かったと思っています。

[広島 直爆1.5km 女 23歳]
(34-6120)

被爆後、何とか生きのびてきた人達が、川の水をみて、かわきと暑さと、傷の痛さに、後から、後から、押されるように川の中に入り、そのまま死んでいった姿。それを止めることもできず、ただ呆然と見送る岸辺の人達。否、水の方に行く元気もなく、ただ横たわっている人達。やけどの人達は「小便をかけてくれ、小便をかけてくれ」と叫んでいました。

私は工兵隊の傍らまで逃げましたが、兵隊さん達がそれこそ並んだマッチ棒のようにねかされていました。

また、街中へ友人をさがしに出かけた折、墓地の広さを求めて逃げて来たと思われる人達が、真黒コゲで折り重なって死んでいました。髪の毛の多少で男女を見分けたものです。

また、生き延びた隣組の人の中には、防空壕で難を免がれたため、そのおそろしさで一日で白髪となり、人相が変わりわからなかった人もあります。

また、ふさがった傷の下で、うじ虫が動いていたのも本当です。

隣人と助け合って可部まで逃げましたが、長男さんは中学生の身で、焼けただれた体で親を求めて帰りましたが、絶命しました。隣の娘さんは日銀に勤めていましたが、爆風にとばされ、隣のビルの屋上に叩きつけられ、後日洋服の端し切れで死を知らされました。それでも皆家族が帰ってくるのではとの思いで焼跡を去ることができずにおりましたが、その折集めて焼いた死体の臭いと青い炎は忘れることが出来ません。

尽きることなく思いが湧きますが、呆然として何もしてあげられなかった思いもあります。この恐ろしい原爆を作ったもの、また、これを使った者が一番悪い気がします。また、祖国愛だけを教えこまれた親や、私達を思い、教育の大切さを感じ

じるとともに、現在の平和がどんな犠牲の上に成り立ったかも知らせる義務があると思います。

[広島 直爆2.0km 女 23歳]
(13-32-041)

- 逃げる途中、道端でたおれ「ころして！ころして」と言っていた女学生の姿。自分も年寄りの手を引いていたので、どうしてあげることも出来なかった。
- 地下防空壕から子供を引っ張り出していた母、そして祇園の国道を、子供を3人殺したと言いながら逃げて来る母（子供を引っ張りあげているうち自分の着物に火がついたので、ごめんネ、ごめんネと言いながら）
- 逃げる途中油の雨に逢い、橋（三滝）の下に避難した時、川上では足や手を洗い、その下では水をのんでいる。そして顔一面大きくひぶくれになった子供（三篠小の運動場にいたとのこと）等。
- 逃げて来る人が、赤チンで手当てを受け、赤鬼のようにになっている姿が忘れられません。

生地獄とはこんな状況かと、おそろしくなりました。二度とこんな事はあってはならないと思います。

子や孫に戦争のおそろしさに遭わせたくないと思う。

[広島 直爆2.0km 女 23歳]
(34-5286)

気がついたら焼け野原で、遠くの福屋やドーム、駅の方まで見えた。
私を助けようとした人が、柱を持ちあげることができず、目の前で「なんまいだ」と手を合わせて逃げていった。

その後、足の方から火が燃えてきて、もうだめかと思ったが、柱がゆるんできて逃げ出すことが出来たので、己斐橋に向かって走った。

〔広島 直爆2.0km 女 23歳〕
(34-5940)

私は千田町より御幸橋を渡り、比治山のふもとを北へ、高田郡にある自家をめざし、やっとのことで広島郊外緑井にたどり着きました。そこで治療を受けるため、お寺に設けられた救護所へ寄りました。そこには、しかし医師はたったの2人。境内にはトラックが続々と運び込む重傷者であふれていました。

土の上に寝かされて、順番を待つうち、一人また一人、新しい死体にハエが群がっています。遺体はタンカで隣の畑に運ばれ、警防団員が手足をつかんで、炎の中へほうり込む。そのたびにひときわ黒い煙が渦巻いて青空へ。

私の目前で倒れた女の人が、動かなくなりました。そこへタンカが来て、体を持ち上げたその時、まだ私は生きておりますとかすかな声、すると、これはまだ生きているのかとこともなげにそう言うと、警防団員は、その女の人を地べたに下ろして行ってしまいます。いたわりの声をかけるでもなく。私はその時、生きていても口がきけない人は、つぎつぎに畑に運ばれ、生きているのに炎の中にほうり込まれたにちがいないと、40年たった今でも、その時の事を思い出し、涙しております。

〔広島 直爆2.0km 女 24歳〕
(09-0005)

あの惨状をそのままペンや口で表現することは不可能です。映画、テレビなども、あくまで似せて作ったもの、本当は被爆者でなければ決して分からないことです。

警戒警報が解除されて、人々がホッとしたときに、突然太陽が爆発し、ヒロシマを根こそぎ飛散させたのです。そうとしか思えません。

ボロになった人々が、七転八倒してモガキ苦しむのを見ながら、自分が助かることしか考えなかった私は、現在でもその人々の怨念が私に襲いかかってくるような思いで、いたたまれないのです。それは私がまだ生きているから。

日頃差別されていた町内の朝鮮の人たちが、自分の国の言葉で、断末魔をノタウチマワッテ絶叫していたのも、この40年間忘れられないのです。

〔広島 直爆2.0km 女 24歳〕
(13-47-003)

母をたすける気もしないで、自分だけ戸坂にある親類の家に逃げました。皮がズルズルにたれた人が歩いていて、バツタリたおれて、次々にたおれて死にました。

私は家の中でしたので、ヤケドはありませんでしたが、母が家の下にいるはずなのに、全く思い出さずにいました。あとでさがしにいきましたが、死体もみつかりませんでした。そのむくいで、無理やりイトコと結婚させられるはめになったのだと思って、15年あきらめていました。

むごい姿の人たちにかこまれていて、やけどをしていませんでしたので、はずかしいようでした。自分がその人たちに何をしてあげたのか、思い出せません。何もしないで、その人たちの死体をふみつけて、逃げたのだと思います。

今でも、よく夢を見てノイローゼだと言われています。

〔広島 直爆2.0km 女 24歳〕
(13-52-002)

こわれた建物の中からぬけ出し、青空が目にはいった時の感激、一生わすれることは出来ません。家族のことも気になりましたが、附近から火の手があがりましたのでこわくなり、一刻も早く建物そかいしたところへと急ぎました。途中助けを求める人もありましたが、自分のことだけでいっぱい手をさしのべることが出来な

かったのが、今では悔やまれてなりません。

広場へついたらまるで地獄絵さながら、焼けただれ皮膚をぶらさげた人の連なり、幸い自分は無傷でしたので、なぜこんなことがと信じられませんでした。

比治山では、女学生がみんな真赤なふくれた顔をして、親がみても我が子とは判断つかないと思えるよう、みな同じ姿で水を求めていた様子が、まぶたに焼きついています。

[広島 直爆1.5km 女 26歳]
(13-14-005)

私はあの時刻、横川駅にいました。ピカ、ドンという音とともにまっ暗やみになり、直撃弾にやられたと思いました。自宅（東観音町）にいる母と子が気になり、多くの人々が郊外へと逃げるのと反対に進みましたが、途中、家の下敷きになり助けて！という声がしますが、私の力ではどうにもなりません。また、フトンをかぶって川へ下りる段の所まで来て、そこで力つきた血だらけの男の人もたくさん見ました。

母親らしい人が、もう虫の息で、裸の幼い子とその乳房にすがっていたのを、つれて逃げようと抱き上げましたが、その子は火のついたように泣き、母からはなすことが出来ませんでした。今でもあの時の幼い子が忘れられず、無理にでもつれて逃げた方が良かったのか？と自問自答して、忘れられません。

[広島 直爆1.5km 女 26歳]
(34-5924)

叔父の家から帰宅中、三篠1丁目の路上で、生後41日目の長男を抱いていて爆した。

日傘をさしていたが前半身をヤケドをした。長男も半身をヤケドをした。三滝の

自宅にすぐ帰って、1日ほど近所の竹ヤブの中に避難した。その後3日ほど家にいたが、手当てがしてもらえないので、長男は三滝の家に置いて、私は大芝小学校に行った。小学校で40日位いたが、その間に母が長男がもうだめだからと言ってつれてきてくれた。そして私のそばで死んだ。

まもなく夫が復員してきたが、母から食糧や物資をもらっても私の面倒を全く見てくれず、誠意もなく、いやみばかりを言うので離婚をした(20年末)。

それから1年位寝たきりで、母の世話になった。薬草をせんじてのませてくれた。

[広島 直爆2.0km 女 26歳]
(34-5873)

④ 30歳台(被爆時)

屋外で背面から原爆の光線を受けた私は、比治山の砲兵团司令部へ逃げて行き、防空壕の中で手当てを受けました。途中道の両側には、やけどをした市民が各所にうづくまって、兵隊が食油をぬってあげておりました。体の三分の一以上やけどをした人は助からないという事でしたが、一週間以上意識不明を続けてやっと命をとりとめ、四カ月後に故郷へ帰ることが出来ました。

比治山からもえつづける広島市街をながめながら、戦争によって受ける一般市民の苦しみを思い、二度と戦争などすべきではないと思いました。比治山へ避難して来る人々の話は身の毛もよだつような事ばかり、家の下敷きになっている人に火が迫って来たので、皆でひっぱり出したら、負んでいた赤ちゃんの首がなかったとか、顔がやけただれて目も口もわからないような人がひいひい泣いてねている話など聞きました。

私も背中にやけどを受けて50日位うつぶせにねていたので、直接市中をみてあるくことは出来ませんでした。話を聞くだけで、戦争の悲惨さをしみじみ感じました。

[広島 直爆2.0km 女 31歳]
(23-0328)

意識不明になって、気がついた時は、雲がちこめてあたりはうす暗かった。周りを見わたすと、まったく地獄絵だった。そのまま死にたいと思って「そのまま、そのまま」と叫んだ。つぎに、少したつと急に生きたいと思って、防空壕の方へ駆けよると、防空壕はうごめく人でいっぱいに入れなかった。

体が焼けるようで、じっとしておれなかった。そのうち、やけどで歩けなくなり、すわりこんでいた。まわりはまったく、生き地獄そのものだった。

〔広島 直爆2.0km 女 31歳〕

(34-7242)

31歳で被爆。

三菱高射砲隊の人が、腰から上にひどいこと火傷をされていて、水を下さいといわれたのであげたら、飲まれてすぐボタンと倒れて亡くなられました。一緒に行動した人達も、それぞれ火傷、怪我をして、下着などボロボロになっていましたが、私が一番ひどかったようです。

着ていた物がボロボロになった人達が、布団をかぶり、シーツをまとい、救護所に来ていた。総合グラウンドにむしろが広げられ、テントが張られ、救護所になっていたが、次々たくさんの人が運び込まれてくるので間に合わず、足りないところなど日よけなどなく、えん天下に傷ついた人々がころがされていた。

一樽に白い薬が用意され、こえ柄杓でかけられ、ほうきで塗られ、裏返しにされ、また同じことを、中には亡くなっていた人もおられたのではなかったかと。無残だったのは、人生これからの若い人達がたくさん傷ついて、救護所にいらしたことです。

動員の12～14、5歳の男の子が、帽子が爆風で飛ばされたのか、髪の毛が無くなり救護所に並んでいた。

救護所で子供が、肉親、親戚の人を探し求める声が哀れで、自分の傷が痛むのと一緒になり、眠れない夜を過ごしました。

水を下さいといわれたので、素直にあげたのですが、今思うとあの放射能の入った水をどうしてあげたのだろうか、それが心のこりというか、悪かったというか、申し訳ない気持になります。

被爆した時、近くにハス田があり、青々としていた葉が枯れ、かさかさになった。

〔広島 直爆2.0km 女 32歳〕
(34-5874)

1. 骨だけに焼けた人間や、真黒に焼け男女の別も分からず、脂が顔面に見えた。
2. 兵隊が一人、西練兵場の壕の前で立ったまま空を見上げて死んでいた姿。
3. 緑色の鼻水をたらして、眼は見えず、それでもトマトを食べたい、食べたなら死んでもいいと言った人。
4. 紙屋町交差点の焼け残った電車の中に、一人だけ黒コゲになって残っていた人。

〔広島 直爆1.0km 女 33歳〕
(13-33-021)

とにかく、おそろしくて東練兵場へ逃げた。子供を連れて逃げなくてはいけない(子供3人、産後間もない)。4歳の子をせおって、ちいさい子を抱っこして、今の中山(今のよう道はよくない)へにげた。

3日目に帰ったらガラガラ(でなにもない)で、兵隊さんの半分になったのや、頭がないのがいて、おそろしかった。

〔広島 直爆2.0km 女 33歳〕
(34-5919)

爆心地から0.5kの自宅に夫(歯科医院開業、西新町防空救護班長を任命されたため疎開できず、警報発令時、救護所に出動)。五人の子供と私は2k離れた己

斐町の親戚に疎開中被爆。

近くに己斐小学校救護所があったため、街から逃げてきた上半身裸の焼けただけ、または血を流しながらの人たち、ふくれ上がった顔、手先に灰色の皮をブラ下げた行列、皆無言でフラフラ歩いていた姿。

翌朝、道傍に累々と死体があり、目にも鼻にも蛆がウヨウヨとしていた。

7日廃虚の街を右往左往歩いて自宅の焼跡で夫の遺骨発見、頭蓋骨を二片はずして持ち帰る。女子供のみで、残った遺体は遂にそのままにして引揚げた事が今でも悔まれる。多くの無縁仏と共に処理されたであろう。

夫を捜しに行く途中、中学生、女学生など動員学徒のおびただしい遺体、「水を頂戴、水、水」と叫んでいた少女、誰にも見守られず、次々と死んでいったであろう。思い出すとたまらない。

[広島 直爆2.0km 女 34歳]
(28-0029)

私は白島線の満員電車に乗っていて、満1年6ヵ月の長女を抱いていたが、そのまま気を失っていました。子供の泣き声に気がついた時は、電車の中には1人もいなかった。

外に出た時は身うごきも出来ないほど中央から人が押し寄せて来ました。私は(にぎつ神社)の前までにげて来ましたが、そこには赤十字の旗を立てて、多くのけが人を見ました。その中で(兵隊さん水を下さい)と叫んでいて、まもなくぐったりとなった人。また、破れた水道管まではって行って、水を口にしたら死にました。

後ろに立っていた女の人が、私の抱いている子のことをみながら、私は柱の下になった子が火に焼けながら(お母さん、お母さん)と呼ぶのをどうすることも出来ず逃げてきました、と話してくれました。

まさに生き地獄とはこれの事だと思い、いまでも心に残る残酷な状態であります。

[広島 直爆2.0km 女 34歳]
(34-4519)

家の下敷きとなり、火傷で顔の皮がたれさがり、目が見えなくなり、あばら骨が見える位怪我をした主人をつれて、江波へ逃げました。近所の人「△△のおばさん助けて!」「水をちょうだい」といったが、主人の手当てをまずしなければと思い、「後で来てあげるからネ」といって江波へ避難しました。江波で治療してもらい、防空壕に主人を入れておいて引き返して来ましたが、「助けて」「水を」と求めた子供や近所の方は、亡くなったり、その場所からいなくなったりしてまして、頼まれた時にしてあげられなかったことが、今でもくやまれます。

〔広島 直爆1.5km 女 35歳〕
(34-7223)

近所の若いおくさんが、腰から下火傷していたので、子供を背負い、1人手をつなぎ、本人と、本人の実家廿日市まで連れて行ってあげた。その人も3日目には亡くなったと聞きます。あの人、この人も亡くなったというように毎日聞きました。

廿日市から帰り、小河内の道に血まみれになりふくれて、大きな牛がころがったようになっていた。くずれた家の中などからは、亡くなった人の手、足、首が見えていて、家のそばを通るのが恐くなり、離れた所を歩くようにした。

三滝の陸軍病院より兵隊さんが走って来るのをみたら、体の皮膚がむけ、ぼろを着たようになって走っていた。女の方は前だけおしめをたらししたようにして、見えていて可哀想だった。

天神山の防空壕の中では、近所の人達も亡くなっていった。小銭を貯めていたおばあさんが、お金を上げるから水を1杯といったが、あげたらだめということで、誰もあげなかった。

三滝への道では、誰かが来て並べたように、整然と並んで亡くなっていた。

川に流れてくる死体を、とび口でひき寄せては、あっちの畑、こっちの畑と毎日焼かれていた。

母親が亡くなっているのにわからず、子供が火がついたように泣き叫んでいた。傷がないのにガスを吸ったのが原因か、亡くなっていく人もあり、学徒の生徒達も1日、2日おきに亡くなっていった。生地獄でした。

〔広島 直爆2.0km 女 35歳〕
(34-6163)

広島駅前で電車を待っていたら、黄色のセンコウが目にはいり、爆風で吹きとばされた。背中や頸にヤケドをしたが、元気だったのでニキツ神社に逃げた。

神社では次々とケガ人が運びこまれて来た。中には裸に近い姿の女学生がいたので、私の着ている服をぬいで着せてあげた。

みんなが水をほしがるので、一人にのませてあげたらブーッと吹き出した。水をあげてはいけないと言われるので、それからはやめた。しかし、どうせ死ぬのなら一口でものませてあげればよかったのにと、今でも悔やんでいる。

そのうちに下痢をする人が増えて、横たわっている人がみんな下痢をするので、その処置をするのに走り回った。なぜ下痢をするのか原因が分からないので、不思議な気がした。

〔広島 直爆2.0km 女 35歳〕
(34-7221)

子供ら（3人、長男、次女、三女）と一緒にいるときに被爆。自宅の下敷きになる。長男（5歳）は無傷、私は全身だぼくと傷だらけ、出血が多い。次女、三女は火がまわって助け出せなかった。

日赤の地下室へ長男とのがれ、その後は動けなかった。

〔広島 直爆1.5km 女 36歳〕
(13-23-019)

被爆直後

隣組の方々と8時集合で、密集地帯の建物強制疎開の屋根瓦を、一同手おくりして運んでいた。いきなりピカもドンもなく真暗くなり、顔が熱くて、あちこちではウナリ声が聞こえ、地球がどうかなったのか、このまま死んでしまうのかと思ひ、悲しくなる。

どうすることも出来ず、しゃがみ込んでいた。そのうち少しずつ明るくなり、元通り明るくなった時の驚き。何ということだろう、建物は全部ペしゃんこで、はるか彼方まで見渡せた。

一緒に瓦おくりをしていた従姉妹はどこへ行ってしまったのか。大勢並んでいた人々も建物の下敷きになったり、わずか2、3人ボロボロの格好でボヤーとしていた。近所の奥さんの服装も、ぼろぼろのわかめをわずかに身につけている有様で、地面にぺたんとすわっていて「奥さん、ひどかったわねー」という。私もボンヤリしていた。地獄の有様とはこんなことをいうのか。

屋根の上を歩いて我が家にたどりつく。お隣の奥さん、家の下敷きの中に出ることも出来ず、外のご主人（隣組長さん）も頭に直接被爆して、痛い痛いと言ひながら、今出してやる、子供たちはどうしたかと、外と下敷きとで話している。その奥さんの声が忘れられない。

あちこちから煙が出て、火事になるらしい。きっと下敷きのまま亡くなられたに違いない。私も顔がちりちりして、腫れて来て、手で目を開けないと見えなくなる。とにかく安全地帯へと、途中死体や怪我人を見ながら、宇品の楠那小学校へたどりつき、2階の重病人室に入れられ、それきり動けないまま1週間位、高熱とうわごと、目も見えず、この時も死ぬのかと思う。周りの重病人が次々死んでいくようだ。

その後の状態

田舎の実家で2ヵ月半、病人状態でねたり起きたり、その後毎年夏になると、ひどくだるくなる。30年5月から8月頃ひどい症状で、この時初めて原爆症と分かる。

現在

41年頃からやっとな原爆症も軽くなり、現在は始終腰が痛くなり、高熱続きで入院したり、急性難聴で入院したり、痔が痛いやら、膀胱炎を起こしたりで医者通いで過ごす。

[広島 直爆1.5km 女 38歳]
(13-20-046)

◎この世の地獄と思いました（その一例）

①朝会の始まる前でしたので、運動場で遊んでいた児童が被爆した。その姿は急に頭髪が白髪になり、家に親がおんぶしてつれて帰った時は、顔がはれ、目が見えなくなり、声も出さずそのまま死んでいった。

集団疎開にも、縁故疎開にも行かれなかった児童です。

②学校が一部焼け残った（兵隊の宿舎になっていたため、兵隊さんが消火したため）それで臨時の病院となり、被爆者が運ばれて手当を受けていました。その時医者が手当をされているのを見たのですが、全身のうち背中の方が焼けただれ、皮膚がはがれてまっかな筋肉が見え、うじがいたり、はえがたかっていました。ただ赤チンキを塗られるだけの手当ででしたが、終りの人はくすりが不足してつけてもらわれなかった人も大勢でした。

[広島 直爆2.0km 女 38歳]
(13-12-218)

目の前がパンとした。

逃げる時（己斐の方へ）ずっと死亡者が並んでいて、恐ろしかった。

食糧がなく難儀した。子供のことが心配。

畑へ食べ物を取りに行き、土を掘っていると、男の人の手が出てきたこともある。

子供がひきつけをおこし、医者に連れて行こうにも、器具もなし、医者も皆死んで、おらず。結局子供を死なせてしまった。

[広島 直爆2.0km 女 38歳]
(34-5019)

⑤ 40歳以上（被爆時）

子供が一人おらんかったと思ったら、偶然でくわしたが、全然口がきけなくなっていた。次の日の3時頃「おかあさん」と一言だけ言って死んだ。体はきれいだったのに。

〔広島 直爆2.0km 女 42歳〕
(34-5026)

あっちにころげ、こっちにころげ、死んだる人をよけて通った。
「あ△△さん、助けて」といわれたが、自分が恐ろしいばかりに逃げた。
この世の地獄だと思った。泣いてすがってこられた。

〔広島 直爆2.0km 女 45歳〕
(34-5017)

共済病院に運ばれて横になっていると、上半身裸の娘さんが一人で「どすん」
「どすん」と入って来て、あいているベッドに横たわって、しばらくして「お母さん」と二言ぐらいつぶやいて亡くなってしまった。

〔広島 直爆2.0km 女 50歳〕
(13-12-099)

⑥ 年齢不明

- ①まだ生命の息があるのに、引っぱって行き、油をかけて焼いたこと。
- ②水、水と叫ぶのに、誰一人水をあげなかったこと。（末期の水をあたえるということなのに、ただただ心残りなり）

〔広島 直爆1.5km 女 年齢不明〕
(34-4528)

c) 性別不明

1. 上腕の筋肉の中をうじが動き廻っているのを見て、うじを取ってくれえ、と悲痛な声を上げていた人。この人は死んだ。
2. 妹の治療から死に至るまでの様子。
3. 十日市の歩道で、若い母親が赤ん坊を背負い、その上に電信柱が落ちたものでしょう、電信柱と赤ん坊がくすぶっていた場面。
4. 鉄道病院から、体から血がふき出し、まるでお化けのかっこうで避難していた人達。
5. 電線か木の上にとまっていたすすめでしょう。羽根を焼かれて、飛び上がろうとしても飛べないで、逃げていたすすめ。

〔広島 直爆2.0km 性別不明 14歳〕
(34-5739)

寒い、寒い、水を下さい。身体3分の1のやけど。水をやれば死は必定、でも苦しませるよりは、水をやって楽にしてやるのが良いと思って、水をやった。一口のむと、うまいと言った後は、なにも言わない。その人は死んだ。

[広島 直爆2.0km 性別不明 22歳]
(09-0032)

(2) 2.0Km～3.0Km (直爆)

a) 男

① 10歳台 (被爆時)

私が広島にいたのは8月6日一日だけであったが、当日恐らく何百の死者や死に瀕した人を見ているだろう。あの光景は忘れられないし、今でも記憶の底から思い出してくる。40年の空白を埋めて記憶を呼び覚ますことなど他にないだろう。

[広島 直爆3.0km 男 16歳]
(23-0378)

1. 人の死寸前に水を求め、与えると3分位で死亡した。ただただ軍の命令で、救助に出発前、若い人には絶対に水を与えてはいけない。ある程度の年齢者には与えてもよい命令。与えてよかった。若年者に与えなかったことに後悔している。
2. 被爆者の全身からは、ちょうど水をかぶったように(白血球か?)ビタビタになっており、腕の皮は手先の爪で止まり、足元までブラ下がり、夢遊病者のごとく歩いておる。頭髪は女の人はない。男は帽子を着用か、あたかも裾刈りをしたように髪が無い。
3. 中学生くらいか、女の子が、私は舟入町の薬局店の娘であるとかすかに話し、路上で倒れておる。顔はヤケドで黒く、唇ははれあがり、何を言っておるのが最初は判明しにくい、そのように言って、連れていってもらおうよう必死に願うも、

団体行動でままにならず、そのまま通過した。今でも残念でなりません。

4. 救助活動中、天満町の四叉路附近で、ミカンの缶詰工場あり、その缶詰を取って患者に与え、非常に喜ぶ姿は満足でした。よいことをしたと思っております。どうせみな焼かれる運命の缶詰、一部は音をたてて爆発しておった。

以上は8月6日午後から7日の夕方までの実状。

5. 4日間、市内全域救助活動をなした。学校内にあった実習工場は、病院の代用であった。学校前のドラム缶工場では、出産した婦人あり、伊藤軍医が(中尉)出産の作業をなした。

書きつくせない状況多くあります。

[広島 直爆3.0km 男 16歳]
(34-4416)

段原町で直爆後、10時ごろより師団司令部に連絡をする任務をもって比治山橋上に至り、さらに中心部に入ろうとして午後2時ごろまでいた。

やけど、けがをした人を無数にみた。死んでいく人、すでに死んでいった人をどれだけみたかしのれない。

でもそれは、悲惨というよりも戦争とはこういうものだと思う気持の方が強く、ただものをみるようにみていたといったほうがよいのかもしれない。一ひととしての、人間としてのこころを(その日だけではなく、長い間かけて)失ってきていたためなのであろう。

悲惨、無惨—地獄であるということは、戦後、すこしずつ「人間であること」を回復し、自覚していく過程で“認識”するようになっていった、といえる。

[広島 直爆3.0km 男 17歳]
(13-12-043)

翌日市内に入り、広島城の濠におおぜいの兵士や市民が肩まで水に浸かって助けを求めているのに、どうすることもできませんでした。

数週間後、広島陸軍被服支廠のコンクリートの倉庫のなかで、何十人もの負傷者が糞尿にまみれ、うじ虫だらけの体で死んでいくのを、（外傷者の治療や職務で忙しく）ただ痛ましく見ているだけでした。

鶴津公園内の茶店で甘酒を売っていたおばあさんが、当時は甘酒もなく「蚊くすべ」を売って、細々とくらしていました。カタカナしか書けないので「オカクスベコ〔粉〕アリマス」と店に貼り出していたのですが、たぶん爆死されたでしょう。罪もない老婦人を殺した軍隊という狂気の集団に憤慨を覚えました。

〔広島 直爆3.0km 男 18歳〕
(13-12-156)

ア) 全市いっせいにもえていたこと。

イ) 山陽防ふに消火に行って帰るおり、川から2人ほど顔から手足まですっかり皮がむけた人が出で来た時。

ロ) 江波に帰った時、舟入の署長が頭にホウタイ姿で私に、君舟入の橋の下に何人ものかれているのでタンカで連れて来い、と言われ困った。人に話してもだれも行かないので、工場の中にあつた電動車を動かして、三度ほど火をのがれながら何人かを運んだ。最後に（民間人）姉らしい方が、お願いですから弟をのせて下さい。その時弟は腰がわるく、姉はうでに骨が見えるけが、弟がイタイヨーと泣くと、姉が乗せてもらっているのだからがんばれと。

二) 夕方（7日）流川の銀行内に広島消防（広島県）にいて伝令に行った帰り、中国新聞と福屋の所に来たおり、人一人いない。二部隊方面に赤々と死体を焼いている様子、何とも言えない気持になった。

まだありますが、書き切れません。

〔広島 直爆3.0km 男 18歳〕
(13-27-021)

私はけががたいへん軽かったので、直ちに市の中心部へと入って行きました。途中郊外へ避難中の群衆、皆ほとんど裸に近い状態でやけどで皮膚はただれていました。

ある橋のもとに親子らしい二人づれが呆然と立ち、炎の中へ消えて行きました。助ける間もありませんでした。

夜は天満川の堤防上に並べられた重傷者が、月の光に照らされて、その中水を求めて川へふらふらと落ちて行く人々の姿。あまりの悲惨さに私達身動きも出来ませんでした。

悪臭を放つ死体を集めて火葬するときの悲しさ。完全に燃えきらないままの骨を拾って帰る肉親の姿。

まだ書き足りないほどの被爆者の姿。本当に筆舌に尽くし難い光景や体験の連続でした。

〔広島 直爆3.0km 男 18歳〕
(40-1089)

恐ろしく思っている事。

焼死体を山のように積み上げ、焼却処理している傍らで、まるで無感動に、放心状態に眺めていた自分自身の姿。

心残りな事。

火傷者収容施設で、水、水を！という声を聞きながら「水を飲ませたら死ぬる」……の一念で、水をあげなかった事（結局その人達は死んでしまった）

〔広島 直爆3.0km 男 19歳〕
(34-5294)

② 20歳台（被爆時）

- やけどして、皮をぶらさげて、手を前にたれて歩く様子。
 - 真黒く焼けこげた死体。
 - 川面に白く、豚のように何千と浮いた死体。
 - 道路に並べられたたくさんの焼死体。
 - 頭の毛が全部抜けた、友人の姿。
 - 胸が裂けて、肺臓がきれいな葡萄状の気胞がふくらんだり、縮んだりする様子。
 - 焼けた人々が路上に倒れて「水を下さい」と求めている姿。
- 等今でも忘れられない。

〔広島 直爆3.0km 男 20歳〕
（13-31-041）

被爆直後から司令部内で、次々運ばれたり、2～3人で肩を組みながら逃げて来る人々の姿、また、小さい兵団司令部では薬品も少なく、午後には手当も受けずに庭に、廊下にコロがされた人々をまたぎながら、通信線の復旧工事をやり、「兵隊さん、水を下さい」と言う人々を無視して、何も出来なかったことが（私は逃げたのかも知れない）今も心が痛む思いである。

海辺の砂浜に、翌日の夜から穴を掘り、疎開で倒した家の木を組み、死体を積み上げ重油をかけて燃し、警報が出ると水をかけ、解除でまた点火するという事実を毎日、広島を離れるまで見て来た。夜、死体を焼く臭いから逃げて、テンマ舟で宇品湾までこぎ出して、広島方向に無数の火柱を見た時の気持も忘れられない。月だけがヤケに明るかったのを覚えている。

米国の“ザ・デイ・アフター”を見たが、遠くの小さいキノコ雲etc. 映画ではアノ惨状はやはり描ききれないと思う。でも知らない人たちのためにも作らないよりは良いと思う。

〔広島 直爆3.0km 男 20歳〕
（23-0419）

- イ) 約10m位前方で機関車に給水中の駅員が、ギャーッという叫び声と同時に、その場にプチつけられるように倒れた。
- ロ) バラバラと大粒の雨が降り、恐る恐る目を開けたが、目前は真暗闇。暫くして、破壊された広島駅の本屋の残骸の間から見た光景は、夜霧のロンドンのようだった。
- ハ) 建物疎開のため、駅前にいっぱいいた地方よりの応援者は、駅前広場の東北隅に吹き寄せられ、頭部は胴体から離れていた。市電は線路から離脱して、押しつぶされた民家にめり込んでいた。
- 二) 猿猴橋詰より見た広島中心部は、大きなキノコ雲の下にあり、地獄絵そのままだった。この時初めて爆撃されたのは駅ではなく、市中心街であったことに気付いた。
- ホ) 猿猴橋は渡れず、松原町沿いに南下一河を泳いで東雲町に出たが……川の中は死体がいっぱい。かきわけながら泳いだ。東雲町から出汐町に至る間、焼けただれた人の救援(陸軍に協力)、延焼中の家屋の下で助けを求める婦人の救出、路上に据んで水を求める負傷者など……正に地獄絵そのもの……!
- ヘ) 4日目にやっと本部(大手町3丁目旧銀行集会所)に着いたが各階の死者は全裸。体は目、口をのこし全身墨を塗ったように真っ黒。……とても書けない……本部にいた403名は全員死亡。遺体を確認出来た人はそのうち10数名のみ。
- ト) 当日着ていた服、下着は洗濯してくれていたが、約1週間後、着ようとして手にふれた途端、バラバラに崩壊してしまった。
- チ) 小生と交替で4日目より約1週間救援活動をした部下の△△海軍中尉は、1週間目に食欲ゼロ、その後1週間位で血を吐いて死亡。(本人は空襲時は宮島近くにおり、被爆していない。)

〔広島 直爆3.0km 男 23歳〕
(13-17-056)

原爆をうけ、やけどをした人、傷ついた人の右往左往する被災者のなかに、腕にぐったりした弟を抱き、うつろな眼で、茫然自失として、橋のたもとにたたずんで

いた少年の姿が、脳裏に強く焼きつき、忘れることができない。

〔広島 直爆3.0km 男 25歳〕
(11-0070)

衛生兵として救護にあたる。並べられている患者が、痛くて向きをかえると、となりの患者にぶつかり、その患者がまた痛くて動き、となりの患者とじゅずつなぎのようになり、最後の人はドブに落ちてしまうなど、口では言いあわせない。

〔広島 直爆3.0km 男 26歳〕
(13-23-089)

見渡すかぎりのガレキの山。足をふみいれても、焼跡のまだくすぶっている熱いガレキ。ただでさえ暑い8月の日。足がすぐ汗をかいてしまう。軍靴は汗でぬれてしまう。

水をもとめても、体の動けない人達。助けてとたのまれても、すぐ手助けの出来ないこの身。薬品もない私等には、一人一人にかか〔わ〕りあっていられない。このつらさ。心の奥では、ほんとうにすまないなあーと思ったのは、私一人だったろうか、否、そうではないだろう、事故救援隊20人、全員、皆同じ気持であったろう。

負傷者を助け出そうと思っても、タンカも無いし不便でしたが、名だけの救援隊でしたが、今、死んで行く人達には、最期の言葉も聞いてやれなかった心残り、未だに心にわだかまりとなって、残っています。

体にはたいして傷も負っていないが、原因も分からず、数時間の内にバタバタバタと死んで行くという、想像を絶する事が真実にありました。

私は北海道出身なので、広島には全然知人もなく、土地に不案内だけど、焼けただれて原形もとどめないような負傷者であっても、気持はとてもしっかりした人達

でした。親はどうしているか、子供達はどうしているか、私はもう死んでしまうが、後に残った人達の運命まで心配して、息を引き取って行く中で言い残した言葉は、私は〇〇だが、もし肉親、知人に会ったら伝えて下さいと、苦しい息の下での言葉、ヨシかならず伝えるからね、と言ってやるより外がない。〇〇さんに出会ったことは一度もなかった。それが死者に対して、せめてものなぐさみと思っていた。私も、もらい泣きしたものでした。それほど、せっぱつまった状態の連続でした。やがて息を引きとって、死体の始末、泣きながら運んだものでした。

[広島 直爆3.0km 男 28歳]
(01-0133)

軍服を着ていることが、恥ずかしかった。

市民を守るべき立場にあった、兵隊の我々であったが、市民とともに逃げまどうだけで、何もしてやれなかったことがくやまれています。

[広島 直爆3.0km 男 28歳]
(11-0153)

道路には人びとが泣きさけび、助けをもとめる。衣服はちぎれ、血だらけで身をもがく姿。ああもうこの人死ぬと思った。私を見るとかすかなうめき声で水をもとめていたのです。水、水、水、私はとっさに近くの防火用水の水を布ぎれでその人の口にあてると、かすかなうめきと、かすかなうなずき、それがその人の最期でした。その人は男でした。40歳位でしたと思いました。名前も知りません。

私は妻子をなくしましたが、もうたくさんです。戦争で戦地で死んだ人も、原爆で死んだ人も皆同じ日本人です。あのよう一度に多くの人間が死んだことが、世界であったでしょうか、国は、政府は、被爆死亡者になにをしてくれたでしょうか。

もう私達被爆者以外、二度と被爆者を出さないで下さい。

[広島 直爆3.0km 男 29歳]
(23-0241)

③ 30歳台 (被爆時)

どうにかしてちょうだい、どうにかしてちょうだいと、焼けただれた弟に泣きつかれて、何もしてやれないまま、鷹匠町 (いとこ) に救いを求めた。(おそろしくなって逃げ出したのかも知れない)

苦しんでいる人達。無惨に死んでころがっている人達。その人達に手を貸すどころか、さけて、さけて、走り逃げた私。電車の中のおびただしい白骨、焼け落ちた鉄骨の電車に、手も合わせなかった私。遠くから火が押しよせるような気がして、どこをさまよい歩いたのか。いとこ4人の死体はどれであったのか、思い出そうとすると気がくるいそうになる。

8月6日と7日は、私にとって一生忘れ去ることの出来ない重荷だ。今でも夜中に思い出して、あの時私の手段に間違いがあって、助かる多くの人を見殺しにしたのではと、悔やまれる。許してほしい。許してほしい。

8日の午前、やけただれて、水ぶくれになって、うじまでわかせた弟の死にやっと間にあったが、あれほどどうにかしてちょうだい、どうにかしてちょうだいと、頼まれながら、何一つしてやれなかった、それどころか逃げだしたこの兄を、弟よ、許してほしい。心からわびる、この兄だ、許してほしい。許してほしい。

[広島 直爆3.0km 男 30歳]
(13-22-001)

- 1) 母親が赤ん坊を胸の下でかばっていた。母親は死んでおり、その赤ん坊を軍隊に連れて帰ったところ、上官に怒られた。それで毛布で赤ん坊をくるみ、大宮神社に隠した。翌日(8月7日)見知らぬ人にその子を引き取ってもらった。赤ん

坊を預かっている間、自分でごはんを口に含んで柔らかくしたものを、赤ん坊に与えた。

- 2) 若い女の人が、赤ん坊を背負っていたが、背中の赤ん坊の首はなかった。
- 3) 1人の兵隊が、倒壊した家のはりに足を押さえられていた。その足を帯剣で切り落していたが、骨までは切れなかった。結局は逃げ出せず黒焦げになって焼死しているのを翌日（8月7日）発見した。

1) の赤ん坊が、その後どうなったのか、大変心のこりである。

〔広島 直爆3.0km 男 33歳〕
(34-7085)

思い出したくも、考えたくもありません。

〔広島 直爆3.0km 男 35歳〕
(13-30-001)

④ 40歳以上（被爆時）

似島の陸軍検疫所内の臨時救護所には、数百名の人が収容されていた。軍医以下十数名が看護に当たっていたが、ほとんど火傷のチンク油塗布位の処置であった。

多くの人達は「兵隊さん、お水をちょうだい」と悲痛な叫びを上げていた……が、水を全員に与えることさえほとんど不能に近かった。

次々に死者が出る。口の聞けない人達も多く、身につけていたものを記録するだけの人達も多かった。遺留品は黒ズロース1、などの悲惨な者さえあった。

数日後、中心地を通過して、徒歩で五日市の自宅まで帰ったことがある。中心地あたりと思うが、広い鉄網で囲まれた工場跡地の前を通った。その鉄網に髪の毛が

絡まり、立ったままの全裸の若い女性の死体があった。両眼を大きく見開いて、片手を高く上げて、生きているように見えるが、完全に死体であった。ただ一礼してその場を去ったが、その顔は40年後の今でも忘れることは出来ない。

〔広島 直爆3.0km 男 40歳〕
(13-29-003)

8月7日市内に居住していた親族の住所を巡回してみたが、全部焼けてしまった家屋の中で、白骨が残っているだけで、誰のものか判別もできない状態だった。

途中で本川橋のたもとで、兵士が焼けた死骸を積み上げて、石油をかけて焼いていたが、その中にまだ動いている者があるのを見つけ「これはまだ生きているぞ、ちょっと除けとけや」と言っているのを見た時は、人間はあまりの大きな被害に遭うと、平時の人間的感情を失ってしまうものかと思って、あまりのことに言うべき言葉もなかった。

〔広島 直爆3.0km 男 41歳〕
(34-5308)

b) 女

① 10歳台(被爆時)

おうちご峠を越えて中山に逃げたが、その夜、山を越えて「わあん、わあん」と大合唱が聞こえてきた。「あれは何?」と母にたずねたら、「あれは山のふもとまで逃げて、力つきて倒れている人のうめき声だ」と母が言った。「水」とか「おかあさん」とか言いながら、倒れている人の声だったのである。今も耳に残っている。

そのあくる朝、我が家に帰る時、山のふもとにたくさんの死体があった。

夜は栄橋付近で兵隊の行列に出会った。足なみをそろえた軍靴の音が「ザク、ザ

ク」と聞こえて来た。その時、戸板などに死体を山積みして、かついでどこかに持って行っていた。

橋のたもとには人が横たわり、足の親指だけびくびくと動いていた。みんな何時間か後には息たえた人たちである。

魚を焼くと皮がペロんとはげるが、それを見ると今でも背の皮をひこじりながら歩いて逃げている人、水槽の中に入ったり、出たりして、泣いていた人を思い出す。

〔広島 直爆3.0km 女 11歳〕
(34-5629)

11歳の子供であった。

全市がそんな状況になっているなどとは思わず、自分の所だけだと思ってにげた。両親がわからず。自分はいなかへ行った。9～10日くらい。両親は五日市の方へいたが、兄弟2人が死んだ。下の子は赤ちゃんだったので、家の下で死んでいた。上の子はにげる途中死んで、火葬にされたいらしい。

その当時、家族はバラバラであった。

家族の介抱をした。無我夢中であった。

〔広島 直爆3.0km 女 11歳〕
(34-5882)

姉妹のようにして育った親類の女の子が、朝礼の校庭で被爆しました。背中一面に大やけどをして、近所の人に助けられましたが、意識がはっきりせず、ただ「水をちょうだい」をくり返すだけ。水を飲ませると死ぬからだめといわれて飲ませなかったが、8月12日、とうとう死んでしまった。水を飲ませてあげればよかったと、今でもくやまれる。

〔広島 直爆3.0km 女 12歳〕
(23-0200)

全身の皮がとれ真赤になった人々が、橋の上に大勢並んですわり、話をしていた。意識がはっきりしていたということはどんなにか苦しかったでしょう。

己斐の竹やぶにさしかかったとき、“助けてよー、助けてよー”と言う女の人の声でふと見ると、全身チョコレート色のはだかの女の人が横になっていました。私たちは何もしてあげられないで、ただ見ぬふりをして通りすぎた。

途中、目の前で動けなくなった中学生のそばも、5歳位の女の子が道ばたにすわって目で助けを求めているのに、そのそばも通りすぎて市内からのがれてしまった。

今、ちょっとしたけがでも、すぐに救急車が来ます。私はどんなひどい死に方をしても不満に思うまいと思っています。

〔広島 直爆3.0km 女 14歳〕
(13-12-069)

火傷して両手を水平にあげて歩いている姿、よく見ると上肢の皮膚がたれ下がっていたので恐ろしくなり、それに自分が少しでも当たるとずるずると皮膚の表面がはがれるのが、どちらを見てもいる事。空襲でまた防空壕に飛び込むと、そういった人々（中学生）が多く、私達はとても気の毒だったが、後（翌日）家に帰れたら、家族は私の血だらけの姿を見てびっくりしていた。これは自分ではわからなかった。

また、投下時きのこぐもを見たので、また、あの光を見たので、今でもきょうふで、人に聞かれてもなるべくもう思い出したくなく、だまってしまう私です。

※これははっきりとは言えませんが、いなくまが人々より異常にこわいのです。ある人がピカドンを見たのでそうなったんだろうと言われて“ぎくっ”としました。

これは本当に困ったことで、びくびくするので人に笑われています。

〔広島 直爆3.0km 女 15歳〕
(23-0230)

当時挺身隊として観音町の兵器会社に勤務、被爆。それぞれ解散。帰宅途中、南観音大橋を渡ると、直接被爆にあった方々。爆風と原子爆弾で、衣類、白い布だけちぎれ、少し残った状態、およそ全裸に近いほど、やけど、けがをした方々が、今の県商高に死者の行列そのものでした。目を向けて歩くことが出来ませんでした。

当時姉と二人、水主町に住んでおり、何はともあれ姉を探してと、その日宇品の友達のところ泊めていただき、翌日姉をさがしにまいりました。宇品から水主町に行く道程、水や助けをもとめる人びとと多く出会い、本当に生地獄でした。17歳の私、今もって姉の事のみ案じ、死者に対し申し訳なく思います。

原爆が落ちた時、事務所内において、電線のヒューズがショートした感じでしたので、帰る途中の被害の大きさに驚き、直接光線に当たった方々の顔は、およそはれ方がバレーボール位の顔になり、誰と分かるものではない状態、さぞや生地獄の苦しみは、あまり筆舌に表わせない位です。

色々原爆映画を観ましたが、そんなものでなく、憐れです。本当に地球いずこにおいても、二度と原爆が使われないことを祈っております。

〔広島 直爆3.0km 女 17歳〕
(13-53-006)

この項が一番最後になりました。とても書きづらく、出来れば書きたくないのです。ということは、あの日から再び私達一家の団らんはなく。朝別れた妹や父が、めぐり逢えたことだけでも感謝しなければならないようなひどい仕打ちに逢い、野宿、仮寝の日々……あの日この目で見て、体がそれから体験したこと、筆舌につ

くせません。

語り部になって、語りつぐ使命があると人は言うけれど、この言葉が、あの光景の何分の一をつたえうるか、この手にどれほどのことがかけるか、これが私の思いです。

〔広島 直爆3.0km 女 18歳〕
(13-19-051)

断水で水が無く、焼けた家の前に貯水槽がありましたので、5、6人で一生懸命のんでるうちに、死体が見えて来ましたので驚きましたが、生きるためにはしかたがありませんでした。今に思えば、その水の中には放射能がかなり含まれていたと思います。生きていることが不思議です。

〔広島 直爆3.0km 女 18歳〕
(13-37-003)

被爆当時の私の働き場所は暁6140部隊の宇品地区で、被爆者の看護活動をしていました。

被爆者の死にかた、苦しみかたを毎日目の前にして、何も出来ずただただ看護するだけで、どうにも出来ず、でも一生懸命でした。ヤケド等で体にウジがわいて、体にウジで「トンネル」ができた。とても人間の体とは思えなかった。

家族は家がやけて、バラバラに逃げてましたが、やっと3日後会えたようでしたが、私のところまで来ることが出来ず、(大けがをした弟(小学校2年生)がいるので、母が来られないため) やっと母と会えたのは終戦の前日、私が下痢がはげしく、血便が出て働けないので、船で廿日市に送ってもらった日でした。

弟は頭全体キズだらけ、身体も頭もガラスの破片が入っているので、大変な姿でした。妹のことも分からないと聞かされ、9月の末、やっと私が歩けるようになって

たので、色々聞いて回りましたが、やっと分かった時は死者名簿でした。私の看病した女学生と同じ症状で亡くなったと思うと、考えるだけでたまらない気持です。

今までなるべく考えないように、思わないようにしてましたが、やはり語らねばと思いましたが、書きました。

[広島 直爆3.0km 女 19歳]
(13-23-099)

- ① 妹を探し歩き、黒こげの死体を引っぱり、何か目印をと探したこと。
- ② 中心地の元安川には、死体の顔が水ぶくれして、折り重なって浮かんでいたこと。
- ③ 日赤病院の中に入りきれず、前庭まで病人や怪我人があふれ、うめいていたこと。
- ④ 8/6日夜、爆心地からぼろぼろの衣類、どろどろの死人のような人達が、泣き、うめきながら宇品の凱旋館に向けてぞろぞろと……。私も血みどろになって治療を手助けしましたが、水を飲ませると死んでしまわれるので、涙を押さえて、心を鬼にしてあげなかったことが、たいへん悔やまれます。
- ⑤ 筆には書き表わせません。

[広島 直爆3.0km 女 19歳]
(13-27-044)

② 20歳台 (被爆時)

直後のこと

私は3kmほどはなれていた路上でピカッと光に遭った時、100Wの電気の球を顔にあてたぐらい、とても熱いと思わず声が出ましたが、爆心地の方はさぞ熱いことだったと思います。

老人、耳のうしろのほうの皮がむけて、血だらけになって、ほこりまみれで(耳

がいたいでしょう)と申しましたら(どこが)と言ってヤケドもケガも、いたい所もわからずにげて来たようでした。人に言われて初めてケガをしていることに気がついたようでした。私も路上でしたので、何もしてあげることが出来なかったので、申し訳ないと思いました。

おばあさんが腰をまげて、血だらけの足をひきずって助けて下さい、助けて下さいと、西へ、西へとあてもなくにげて行く姿は、今も思い出すと涙が出ます。

二、三日してから、八月九日頃

年の頃なら10歳位だったと思いますが、顔が黒くなってはれ上がって、目も見えん位はれて、言葉ははっきりしていたが、親とはぐれたらしいかった。みんなで病院につれて行きました。

老人が血だらけパンツ一枚はいて、あとはだかで、仏壇だけもって、橋の下で住んでいました。食べるものがあるのかなァと思いました、どうすることもして上げれなくて残念でした。

この世の地ごくを見ました。

[広島 直爆3.0km 女 22歳]
(23-0040)

兵器補給廠の仮事務所であった女子商業学校の横の小道を、比治山へ登ろうとする焼けただれた女生徒が、裏庭へ迷いこむのか10数名、民間の方々が数名入って来られ「水、水」と欲しがられ、はじめ10数人の方には手動ポンプの水を飲ませたが、「飲ませてはいけない」と上官の方が注意され、水を飲むことを止めたが、後から来る人の、水を欲しがる声と、横川の〇〇へ連絡して下さい、母ちゃんに来るからと言いながら、目が見えなくなり、声が聞き取れなくなった女生徒、兵器庫で次々と亡くなった人に水を飲ませて上げたかった。

妊婦が兵器庫で仮死のまま赤子を産み死なれ、赤子が生きていたのに取り上げて育てなかったことなど、数かず。

〔広島 直爆3.0km 女 23歳〕
(34-2019)

ただ一発の原爆による物質的損害の大きさに、言いしれない脅威を感じた。

近所の知人などが次々と死に、放射能の影響で悩んでおられるのを目撃、それが70年もつづくと言われていたのに驚きと怒りを感じた。とにかく一発の原爆のもたらした人および物質の大きさに恐怖をおぼえた。

私は当時東京に在住し、8月6日以前にたびたびB29の爆撃を経験し、被害も見聞していたが、広島の原爆投下のもたらした被害が、余りに大きかったので、日本の敗戦は当然のことと思っていた。(その当時の感想)

〔広島 直爆3.0km 女 26歳〕
(13-20-100)

私は船舶司令部に勤務していました。8月6日、その日私は頭痛のため勤めを休みました。8時15分頃は(フトン)の中でねそべっていたと思います。そのおかげで何ひとつけがをせずたすかりました。

私の近所に住んでいた私と同じ年の従姉妹が、広島県庁へ出勤途中で被爆したのでしょう、お昼頃、みしらない男の人がおぼの家へ、「△△子さんのお宅ですか、お母さんはおりますか、△子さんが(被爆)大けがをして住吉橋のたもとにいますから早く助けに行ってください」と言って男の人はかえられた。それを聞いて、私の父とおぼがリヤカーを用意して、タオル、ゆかたをもって、おぼをリヤカーにのせて、父は住吉橋へといちもくさんにはしって行った。住吉橋へようやくたどりつく。△子の姿はどこにもいない。死体処理の兵隊さんがいたので聞くと、この辺の人は皆死体処理場へ持って行ったとのこと、おぼがあまりにもかわいそうなので、そのままだまっておぼをつれてかえったそうです。おぼは未だに私が広島へときたま行きますと、私の顔をみながら、あの時のことをいいます。(もっと早く行けば

よかった) と?

おばは今年で88歳になりました。

[広島 直爆3.0km 女 28歳]
(13-22-041)

当日4歳になる長男が外で遊んでいたのですが、家の中に助け入れようと、玄関の式台に片足を降ろしたわずか1秒間で、私と二男の(1年2ヵ月)の一生の運命が変わってしまったことが残念でなりません。

私はその時、両眼を失明し(木片が眼に入って)二男は頭部に木片が突きささって意識がなくなり、1年間生死の境をさまよいました(爆風により玄関の戸が飛び散った)。

二男はそれまでカタコトの言葉も発語し、普通だったのに、後遺症として知能の発達が障害され、また、運動失調が起こります。

[広島 直爆3.0km 女 28歳]
(34-7236)

③ 30歳台(被爆時)

主人を探すため、市内の救護所をたずねました。何十人も負傷者がならべておかされていました。のぞきこんで通り、主人を探しました。負傷者が私の足くびをつかまえて、水をください。水をのませて下さい……と、何人もの人からうたえられました。私はお茶を少しもっていたのですが、のませてあげませんでした。皆さんにあげるほどなかったのです。それにまわりの人々が、のませない方がよい、のむと死ぬ、と言っていました。でも、その人たちは水を、水をといいいながら、のまないで死んでしまわれたのです。少しでも口にに入れてあげればよかった、申しわ

けないことをしたと、未だに後悔しています。

紙屋町の交差点で、何十体の死体を集めて油をそそぎ、火葬にしていました。舌を長く口外に出し、眼球はとび出し、両手を上に上げた姿でした。この世の地獄をしっかりとみました。

二度とこんな姿をみるようなことがあってはならないと思います。（主人は似島に収容されていました。）

〔広島 直爆3.0km 女 30歳〕
（34-5131）

比治山町の収容所に4日間父を看護しておりました。たくさんの人達のうめき、水、水の声の中において、水を飲ませてはならぬと言われて、たまりませんでした。

2日位から、もう飲みたい人にはあげて下さいとのことで、何人に飲ませてあげたでしょう。感謝の言葉を出す人、出せない人、痛い痛いと言う人。

私の父はやけどがひどく、顔は目もあけないほどでしたが、痛いとは言わなかった。爆弾の種類も知らず、お国のためとじっとして、4日目に亡くなりました。

わめいていた人が静かになった。ばたばたしていた人達が静かになったと思えば死んでいました。女学生等たくさん、硬直した体をおこして下さいとか、家の人達はどうしてるかとか、聞かれても何もおしえてあげられない悲しみ、もうこんな事は二度とあってはならないと思いました。地獄があるなら正にこれかと後から思いました。この中に4日間、よくいたものと思います。

なるべく思い出さないようにしていますが、父の命日には、いやでも思い出して、何もしてあげられなかったことを悔みます。

〔広島 直爆3.0km 女 34歳〕
（13-37-001）

原爆の投下された時刻は、両親（実母）と私と三人朝食をすませた直後で、家の中にいたため火傷は免れたが、物凄い閃光が走り周りがくずれ落ちたようだった。父母は壁やガラスの破片で、顔や背に負傷したが、私は不思議に傷はなかった。裏山に防空壕を掘っていたので、老父母を連れそこに逃げたが、家なみ同じような被害をうけていた。

そのうちに市内は火の海となり、広島駅辺りも10時頃には火に包まれた。正午過ぎから避難民が広い練兵場も我が家もいっぱいになった。焼けて衣服はぶら下がり、焼けただれ眼球のとび出た人等で、ふらふらと歩き、うづくまってうごけなくなった人等、皆水をほしがった。水道はとまり出なかったが、井戸があったので、その水を上げ、衣類のない人は着物を上げた。

夜になり真赤な焼けトタンが大空をとびかい、警防団の人が火の粉に注意とどなる声を聞いたが、どうしようもなかった。近所の糞葺きの家には火がついて焼けおちた。立木の青葉もこげた。人々はそのまま大方絶命した。何とも言えぬ死臭がただよい、二日位は蚊も蠅もいなかったが、その中に死体に蛆が発生、軍の人等〔が〕来て、昼夜練兵場で火葬をした。近所の人々の死体も皆練兵場で火葬にした。

家は軍の宿舎になった。電気もつかず新聞ラジオもなく、8月15日の終戦も知らなかった。この地獄の惨状は思い出したくもない。

〔広島 直爆3.0km 女 35歳〕

(13-12-126)

- 1) 20年8月6日、その日の午後4時過ぎ頃、隣の主人が仕事場から、チギレたシャツ一枚のまますっ飛んで帰られた被爆者姿が、今でも眼の底に残っています。その被爆者は、その夜防空壕の中に寝たまま、全身丸バレになり、目もあてられない身体になっていた。
- 2) これより先、私方では主人の戦死の公報を受けていたので、1歳半の長男と4歳半の長女、遺児2人を連れて、九州の実家へ逃げ帰りました。8日に社宅を後にした時、己斐駅までの間ガレキを踏み越えて行く途中、川原ではたくさんの死体を荷馬車からテコで降ろしていました。

汽車に同乗した人も、ほとんど傷だらけの人でした。汽車は8日夜の空襲で徳山駅で明かし、9日の朝宇部駅で乗り込んだ人の新聞に（広島に原爆投下された）と大活字で載っていたので、原爆を初めて知った。

九州へ帰った後、△△さん（広島で被爆された御主人）の家族もすぐに長崎の諫早に疎開された由の便りに、重態だった御主人は手足の指の間にはウジ虫だらけのまま床につき、3日後に亡くなられた由ですが、年取られた奥さんと6年生の男、2年生の女の遺児がいたけど、その後音信不通です。

私家族が疎開してから、広島のことを気になったので、長男一人背負い、広島へ行き、焼け残った駅に立ち、ただただアゼンとなりました。見渡すかぎり焼野原を見た時、言葉さえ出ませんでした。それよりも単線電車で降りて二度びっくり。被爆後2ヵ月足らずの日に、停留所は死屍の山に驚き、そのうえ、いっぱいはい廻ったウジ虫のため死屍の数さえわからなかった有様に、悲しみを越え、ただただ怒りに燃えた次第で、同じ人類でこんな悲惨なことがあって良いものでしょうか。

40年過ぎても、自分達の身体に何かの異常でも現れるのではないかと心配したり、戦没遺族であり、被爆体験者として、戦争反対と核廃止を唱えます。

〔広島 直爆3.0km 女 35歳〕

(13-22-042)

④ 40歳以上（被爆時）

たくさんの親戚や他人のけがや病気を思うようにお世話が出来ず、苦しまれるのをどうすることも出来ず残念です。重病の者を比治山小学校へ連れて来いとのことで、雨戸をタンカがわりに4人でかかえて行きましたが、教室もローカもいっぱいのが人で、運動場へずらっとならべ、炎天下42度も熱のある従姉を何時間も苦しませ、ついに死去され、死体も土手に穴をほって木で焼きました。忘れることは出来ません。

近所の娘さんが大やけどをして、全身ずるずるで、もちろん着物もやけ、顔もはれ上がり、命からがら帰って来られましたが、始めはどこの子供かと思っていられましたが、お母さんと言われた声でわが子とわかり、びっくりして抱きあげようとせられると、皮膚がずるずるむげたそうです。

〔広島 直爆3.0km 女 45歳〕
(34-7228)

(3) 3.0Km～(直爆)

a) 男

① 9歳以下(被爆時)

- 屋外で遊んでいて、頭上を2～3機の飛行機がかすめて飛んでいった直後、ピカッと光り、あたりがしばらく真暗になり、その異状さにおどろいて家に逃げ帰った時は、血みどろになっていたこと。
- その直後の防空壕の中に、朝鮮人を町内の人がなかなか入れてやらなかったこと。
- 3日目の疎開途中、軍人の指示で防空壕に入った。その中で人々のやけど等のキズ口にウジがたかり、異様なにおいとその光景。
- 陸軍病院(現県病院)前に、皮膚がたれ下がった人等の長い行列と、そのあたりから丹那方面にかけて赤サビた電車の列。
- 当時の空襲警報のサイレンは、今の時報等のサイレンと連鎖して、いやな思いをします。

(以上の事は、未だ4歳ぐらいの私にも、はっきりと記憶されているほどのものでした。)

〔広島 直爆3.0km～ 男 4歳〕
(34-5800)

火傷のひどい若い母親が、赤ん坊を抱いて水を貰いに来たので水を与え、そのまま自分は遊びにいってしまった。少し経って帰って来たら、その場で若い母親が死んでいたのがびっくりした。その時の恐怖は、今でもはっきり記憶している。

〔広島 直爆3.0km～ 男 6歳〕
(13-12-158)

8月6日当日、多くのけがをした人は見かけましたが、その中でも、ある母親が女の子を抱いて「病院はどこでしょうか？」とたずね、子供を早く医者に見せたい！と言っていたが、その時、頭部をけがした女の子（3歳ぐらい）息たえた。母親はそれが分からず、母親もけがをしていたが、必死になって子供をかかえてた姿が忘れられません。

〔広島 直爆3.0km～ 男 6歳〕
(34-5997)

② 10歳台（被爆時）

倒壊した家屋の下敷きになった人の救助を求める声が、今でも耳についている。

〔広島 直爆3.0km～ 男 10歳〕
(34-5503)

御幸橋の上でたくさんの人が、焼けこげてうめいていたが、その中で、焼けぶくれてもうすでに息たえていた母親の乳房にすいついている、同じく焼けぶくれていて小さな赤ちゃんの姿が忘れられない。

母親は息たえていても、左手でしっかり赤ちゃんを抱いていた。

〔広島 直爆3.0km～ 男 15歳〕

(34-5413)

8月7日、市内に入った私は、まるで夢を見ているような状態であった。突然「水をくれ！」という叫びが聞こえた。見ると、ガレキの上におお向けに横たわっている人があった。上半身が真っ白に、トーフのように煮えていた。顔はほとんど形もくずれ、指をふれるとぐじゃとつぶれそうに見えた。トーフそっくりであった。その姿を見たたん、私の記憶はすっかり脱落してしまった。その日何を見たのか、何をしたのか、何一つ思い出せない。その場所が市のどのあたりだったかもわからない。

いっしょに歩いた学友（2人）の話では、一日中市の中心部を歩きまわったというのだが。

あの姿がいまも私に呼びかける、「水をくれ！」と。

〔広島 直爆3.0km～ 男 16歳〕

(13-15-081)

被爆後数日間、横川橋近くの友人の家に身を寄せていたが、市内が鎮火するとともに、友人とその祖父に付きそわれて、西引御堂町の私の家の焼け跡へ、両親をさがしに行きました。父の骨を発掘して、歯の状態から間違いのないのを確認したけれど、母がコンクリートの間にはさまれて、ミイラ状になっている姿を発見した時には、そのあまりにもむごたらしい姿に恐怖を感じ、その場では母であることを否

定して、父の骨だけを携えて帰りました。その後2～3日たって、再びその場所へ行った時には、すでに死体処理がされて、母の姿はそこにありませんでした。この母への不幸な思いは、今もなお新鮮に脳裏に焼きついて忘れ去ることも出来ず、一人悩んでいるのです。結果として死亡確認をしていないことから、戸籍上は今もなお生きていることになっています。

〔広島 直爆3.0km～ 男 16歳〕

(34-5797)

ア) 広い校庭のような場所に並べられていた焼けた死体、水を求める声、どうしてよいかわからない自分、こんなことを夏の夜に夢みることがあります。

〔広島 直爆3.0km～ 男 17歳〕

(13-14-001)

近所の小学校へ、ヤケドをして、衣服がボロボロになって、皆、老婆あり、子供あり、ただ罪のない人が一瞬のうちに、逃げのびた方々が数時間後に、また、2～3日後に、水、水とうめき声で、死んでいった。水だって飲ませても、脱脂綿にふくませる程度で、飲める状態ではなく、今でも頭の中に焼きついています。

ただ生死をさまよって、あの当時の人々は、住所、氏名もわからずじまいで、次々と焼かれて行くのを見て、子供心に何ともやり切れない思いです。 合掌。

3日3晩燃え続け、その後大雨が降り、1週間位たった頃から、爆心地原爆ドームのそばやら、市内を自転車で通り、友達の家を、安否を尋ね歩きました。

まだ死体があちこちにある有様には、ただただ悲しみに堪えません。多くの友人の御一家、御一族の御冥福をお祈りいたすのみです。もちろん死体もなにもありません。あんなやさしいオバアさん、オバさん達が、皆死んだかと思うと、実に腹立たしく思い、情けない気持でいっぱいです。 合掌。

〔広島 直爆3.0km～ 男 17歳〕

(13-36-006)

- エ) 私は軍人だったので、被爆後の死体等の跡かたづけを行ってきたもので、約10日間死体とともにしてきており、何千人もを焼いてきたので書きつくせぬくらいの事がたくさんある。
- オ) 当日9時頃、約5kmぐらいはなれていた島で、直に光を受け、午後1時頃入市しましたが、死臭も約3時間ぐらいで鼻つんぼになり、死体をのけた所にカワラを並べて二人一組となって、その上で睡眠をした。また入市した時点ではもう焼け野原となっていた。
- カ) 当時は恐ろしさや、かなしみなど、感情どころではなく、もくもくと現実に対して、その処理をしたもので、実にうまく適応した人間になっていた。こううまく事務的になれるものだと、今でも不思議です。
- キ) 死体を焼く時、まだ生きていても気づかなかった方も多くあり、火にいれて分かるもので、何とも言えない気持であった。
- ク) 50体ぐらいで、小さなオケに一パイぐらいのホネが出て（焼きすぎるため）100ぐらいつまかさねて、各所においてあった。
- ケ) 人間的感情は3時間ぐらいで、その後は悲しいとか恐ろしい、汚いなど一切思うことなく、もくもくと働くロボットであった。
- コ) 今思えば、地獄の中で、私は記憶出来るロボットだった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 18歳〕

(17-0032)

8/6

閃光と爆発音を受けた時の一瞬の恐怖と諦観。
屋外へ飛びだした時の頭上をおおう火の玉の雲。

やがて工場内へあふれた病人の姿。
真黒になった人影とうめき。
横たわる人の数。飛びかう蠅の群。
水を求める人の声。

8/7以降

街でみた風景。
道路際に柵をつくり、並べられたにぎり飯の白さ。
動かない、焼けた市電。
川に浮かぶ人影。
広々と拡がる焼けた街。
焼けないで、風圧でおしつぶされた知人の家。

[広島 直爆3.0km～ 男 19歳]
(23-0033)

③ 20歳台(被爆時)

水を求める兵隊の声に、水筒の水を与えた。飲んだ兵隊は即座に息絶えた。何ともやりきれない光景であった。

いまでも「水」「水」ともだえる声が、聞こえてくるようだ。

[広島 直爆3.0km～ 男 20歳]
(03-0141)

多数の方々が体験として語られたり、絵、その他で表現された被爆時の状況は、すべてこの目で、確かにみました。

空襲警報が解除になったとき、敵機が上空に来たのも、そしてセン光がキラメキ、

破壊、そしてキノコ雲が真黒にわき始め、そして天に達するまで観察しました。

皮膚がポロポロになって勤労学生が戻って来る姿や、被爆した小学生が恐怖で気が動転しているのを静めるために、部屋のタタミを立てて、その中に入れてやったり、頭髪が毎日抜けていく姿や、祖先のお墓の周りで、多数の人々が生活している様や、流言と語などの流れなどに、恐れを一層つものらせている被爆者の姿は、忘れられないものですが、あまり発表されていないことで、特に忘れられないことは、街角ごとに、収容された多数の被爆者が、次々と死亡していきましたが、毎日、朝から夕方までに死亡した死体を、夕方とりまとめて焼いたものですが、広島あの暑い風のない夕べに、死体を焼く臭いが街中に漂い、さらに遠い海上にまでとどいていました。

忘れられない光景でした。

〔広島 直爆3.0km～ 男 21歳〕

(01-0059)

- 当日救援のため、宇品より広島市内に入ると、被爆死した真黒に焦げた無惨な姿。生き残った人々は、死体を踏み越えて、全く無言のまま、焼けただれた顔、両手を前に突き出し、静かにうごめくごとく郊外に逃れてゆく。
また、あちこちから救助を求める人々の、泣き叫ぶ悲惨な声を耳にしなが、何もしてあげることが出来なかった。
- また、爆風でつぶされた防空壕の中に、大勢の人々とともに、若い母親が赤ん坊を背負って、泥水の中に埋もれて死んでいた。
川の中は数えきれぬ死体が浮いている。師団付近では、兵隊の死体で足の踏み場もない。
被爆した人々を仮設所に収容す。ほとんど火傷で瀕死の状態。焼けてポロポロの衣類をハサミで切り取り、全身を治療を受ける人々は、苦しい〔と〕呻きつ、息も絶え絶えに悲鳴をあげていた。水がほしいと言うので水を飲ませると、みんな死んで行った。まさに生地獄であった。
- 原爆ドーム付近のマンホールの中から、助けを求める女の人を救助。全身火傷で、

裸同然で、焼けただれた顔を気にしていた娘さん。

○5～6歳位の男の子で、全身火傷で顔が焼けただれて目が見えない。その子供は、両親や兄弟のこと、自分の家にあった物とか食べ物など、その他いろいろな話を、一晩中語り通して、明け方水がほしいと言うので、私が水を飲ませると、その子供は死んで行きました。話を聞いていた兵隊は、みんな泣いていた。5～6歳位の坊主頭の子供を見ると、いつも思い出す。

〔広島 直爆3.0km～ 男 21歳〕

(01-0106)

(1) 陸軍の独立守備部隊として祇園町におり、投下された後、中央軍命令で搜索目的で爆心地に入ったので、一般市民、負傷者等の救助活動はしてはならないと指示された。被爆のため負傷した人達を多く目撃しながら、一切手が出せなかった。

極めて悲惨な状況を見、また体験した。

(2) 一個人としての行動は出来なかったが、ただ2～3の戦友と、大きなやけどを負って倒れていた子供(4～5歳)(6～7歳)2人をトタン板に乗せて、火焰から遠ざけ、空き地の一角に寝せて来た。手を合わせて。今でもこの光景が心の底に残っている。

〔広島 直爆3.0km～ 男 21歳〕

(13-16-040)

○何千人もの人が、兵隊さん、助けて下さいと呼ばれた。自分は兵隊だったが、どうしようにもなかった。

髪の毛をふり乱して、シミーズ1枚の女の人。死んだ赤ん坊を抱いた人。皮膚を

たれ下げて歩いた人。思い出すのもつらい。

○牛舎の草を投げ上げるように、死人を「イチニノサン」と投げ積んで、焼いた。石油をかけて焼いた。丸太みたいだった。川へは、足でけとぼして投げこんだ。舟につみこんで、焼く所までロープでひきあげたりして、運んだ。

○自分たちは兵隊だったので、食べ物や水はあったが、やけどのひどい地方の人（広島の人）たちは、ただ、ねかされていた。「兵隊さん、水下さい、水下さい」とせがまれても、上官が「水をやったらダメだ」と怒鳴られ、できなかった。→泣いて絶句してしまいました。

一番心のこりで、口にも出したくないようでした。

〔広島 直爆3.0km～ 男 22歳〕
(01-2026)

大河小学校に仮救護所を設置。負傷者の手当てに従事し、死亡者の死体焼却をしました。

校庭にアンペラを敷き、シートにて覆い、薬品は食用油位しかなく、水をもとめられましたが、朝になると水のみ場に多数の人々が倒れ、死亡しており、また、ウジ虫が身体の各部をはいまわり、痛いので取って下さいと叫んでおりました。

ローソクのわずかな明かりをたよりに少しでも頼まれた事とは思いましたが、時々刻々と死亡し、夏場のために腐って行くので、止むなくだびにふして、氏名不詳の多数の処理をしました。

「兵隊さん、お水を下さい」との叫ぶ声が、今でもはっきりと耳の底に残っています。

〔広島 直爆3.0km～ 男 22歳〕
(13-17-055)

被爆直後、ボロをまとったようになった人々が、さまよい歩いていた姿。ハシル、ハシル、水を求める姿。朝になると、水飲み場に押し重なって死んでいる姿。

やけどのあとが水ぶくれとなり、そこが潰れ、化膿している姿。

防空壕に並べられた死体の中から、我が子を見つけ、死体をブラサゲて歩いている母親の姿。

後のことを考えてか、十分に薬品を使用しない救済施設の状況など、心のこりなことが、いっぱいあった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 23歳〕

(01-2023)

私の隊は野戦病院となり、約1500人位被爆者を収容し、負傷者の看護兵として勤務。負傷者は痛みと苦しみで泣き叫び、火傷はのどがかわき、水をくれと皆で大声で叫び続けるので、軍医は重傷で助からぬような者には水をやるように命令が出たので、私達は患者に大きなやかんで水をあげると、息をつかずに飲みほし(約15～16ℓ)〔ママ〕今までの苦しみと叫び忘れて眠りました。そして数時間。永久に眠りにつきました。

また、朝起きて見ると、洗面所附近には、水を飲みに行き途中で力つき死亡した者が40～50名いました。名前がわからない者は倉庫に入れておきましたが、真夏の温度で腐敗し、悪臭は鼻つき、犬猫同様でした。

生存していた人間から蛆が発生し、耳や鼻に入って、状態は言葉では言い表わすことができません。

戦争は絶対してはならないと、今でもあの時を思うと、心の中が悲しみと情けない気分です。

身元がわからなくて引き取り手のない死体は、昼間まきで燃やした。夜はまだ空襲の心配があるので燃やせなかった。焼けきれない死体のおいが宿舎に入り、とても大変だった。

〔広島 直爆3.0km～ 男 24歳〕

(13-23-053)

昭和20年8月6日は、広島陸軍糧秣支廠の軍属として、疎開先、己斐小学校校舎内の一教室で、勤務しておりました。

「ピカドン」……これは当時の広島市民のみんなが言っていた言葉です。原子爆弾という言葉は、一ヵ月以上も後から知ったことです。ピカッ……と光って、ドンと物凄い爆風に、窓ガラスのみならず、窓枠全体が飛んできました。同室の△△隊長（大尉）は、背にしていた五寸柱が爆風のため折れ、そのため自分の脊髄を折り、そのため一週間後に亡くなられました。

同室内およそ32名は、ほとんど全員、顔、手、体等のどこかに、ガラスの破片がささり、抜け落ちた天井裏のホコリのため、真暗になった中を、ワケの分からぬ叫び声をあげながら、四つ這いで校庭に出ました。

それから何分経ったでしょう、-10分-15分-？ 当時決められていた避難場所（己斐小学校）に、被爆者がぞろぞろと集まって来ました。みんなブツと丸くふくれ、蠟そく色した顔から、手から、火傷の皮がぶら下がり、「治療所はどこですか？」々々々々……と、およそ800人……。この人達は全員死にました。地獄でした。

〔広島 直爆3.0km～ 男 25歳〕
(01-0054)

広島中心地の虫の息の被爆者を兵舎に運び、水を欲しがる人に水を与えたら（上司より水を与えることは禁じられていた）、数時間後に続々と息を引きとっていった。

とても助からない。助からないのなら、こんなに欲しがっている水を上司に隠れて与え、美味しそうに飲んで、満足げに逝った人びとに、禁じられた水を与えたことに対して、私は大変なことを、悪いことをしたとは今でも思っていない。

〔広島 直爆3.0km～ 男 25歳〕
(13-16-029)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

私はまだ幼かったので、くわしく様子を見ていませんが、父が行方不明だったので、祖父母が毎日紙屋町方面に探し歩いて、様子を話していましたが、恐ろしくて耳をふさいでなるべく聞かなかったことを思い出します。

死にかかった人が、水、水と手をさしのべてたようです。大八車に乗せてくれるよう頼んだ人もいたようですが、あまりの多くの人達だったので、無視して歩いたのがつらかったとも言っていました。

[広島 直爆3.0km～ 女 5歳]

(13-21-009)

② 10歳台(被爆時)

本当に見たので、みな恐ろしい。

肩から血をふきながら「助けて」とさけんで、走ってくる人。トラックいっぱい、皮膚がボロボロに下がった人がのっている。「水を下さい」と言って、水をのむと、コロリと死んでいった。様々な状況を思い出す。

子供心(13歳)に「原爆って、何と恐ろしいものか」と、心に焼きついた。

[広島 直爆3.0km～ 女 13歳]

(01-0130)

その日のうちに500人近い人々が金輪島に収容されたが、翌日には3分の1か2分の1の方が死亡された。

一人一人名前を尋ねて名ふだを付けてあげ、その中に近所の方がいらしたが、女学生には何もしてあげられなかった。

眼球がとび出て、それを自分の手で支えながら助けをもとめていた若い女性に会い、びっくりしたけれど救護所まで案内した。

翌日千田町の自宅まで、その翌日大芝まで、まだもえてる所のあるなかを、一人で、焼けただれた人たちとすれ違いながら歩いた悪夢は忘れられません。

小さな防火用水の中にいっぱいの人。人や馬、牛のあふれる川。

思い出さないように努めて40年、はじめて筆をとっています。

〔広島 直爆3.0km～ 女 15歳〕
〔13-12-181〕

8月6日の夕刻、私の勤労働員先であった金輪島に、舟で続々被爆者が輸送されて来て、私達女学生も手伝うよう指示され、作業を中止して出かけたのですが、真黒に焼けただれ、この世の人とも思われぬ姿をちらと一目見ただけでそばに近寄ることが出来ず、ワンワン泣きながら走って帰ってしまいました。今思えばどうして十分に看病してあげなかったのかとくやまれますが、15歳の少女にとって、被爆者の姿はそれほどすさまじく、人間とは見えなかったのです。

一夜明けて8月7日、各自家に帰ってよいとの許可が出て、富士見町（爆心地より1.5km）の我が家に向かう道すがら、たくさんの死骸をみましたが、日がたつにつれあまり驚かなくなりました。それはこの世の出来事とも思えない事態に呆然として、痴呆状態になったためか、人間として順応性が激しく動いて慣れてしまったのか、後者であればそれは恐ろしい事だと思います。

〔広島 直爆3.0km～ 女 15歳〕
〔13-32-003〕

家は全部焼失し、父と実姉（次女）と甥の行方がわからず、姉（長女）の婚家に住まわせていただき（祇園町）毎日探しに出かけました。

先ず7日に母が、夕方頃やっとみつきり、母も直接被爆でしたが、1人だけ助かりました。

1週間位かよって、やっと父が行っていた家の人に会い、その家で亡くなったことを聞き、その屋敷跡から父のものらしいお骨を拾って帰りました。

姉と甥は私の家の敷地内からみつきりました。その間、けが人の収容所など、あちこち探しましたが、それは言葉では言いあらわせない、ひどい状態で、いつも思い出します。

同居させていただいた義兄が、1ヵ月後に原爆症で死亡。一緒に探しに市内に入った姉も、妊娠していた子供が兄が亡くなった後産まれましたが、100日で死亡。姉も24年にガンで死亡。おばあさんと甥だけ残ったのが、何よりも可哀想でした。戦死なら遺族年金でもあったでしょうが……。

姉も手帳などの制度もなく、お金をたくさん使って死亡しました。

〔広島 直爆3.0km～ 女 19歳〕
(13-34-008)

①最初のけが人を見た時は、大層こわかったが、そのうちケガ人を見ても、死ぬ人を見ても、しだいにそれがごくあたりまえのことに思えてきた。

②広島女子商の生徒を、焼けたリヤカーの上に乗せたままあずかったが、記憶が欠落していて、どこで誰から、どのようにしてかがわからない。遺族（その生徒は10日後に死亡）に申し訳なかったなど、記憶の欠落、混乱がある。

③被爆後、「死」に対して無感覚になり、いまも、人間の死への心の動かされ方が少なく、戦争というもののいちばんの悪は「人間性の破壊」であると思います。

〔広島 直爆3.0km～ 女 19歳〕
(13-53-047)

③ 20歳台（被爆時）

一瞬の間に街は灰塵と化し、皮膚がめくれ、その上にガラスの破片がささっている。大人も子供も動物も。生きている人の方が少なく、異様な熱気とくすぼり、新型爆弾（当時そうっていた）が落ちれば、外にいる者は熱にやかれ、家屋の中にいる者は、爆風に家屋ごと圧殺されるか、なくなってしまうすさまじさに、救いのない恐怖を抱き、絶望感が（あの当時、戦に勝つと言われても空しく）、そして、次々と命の失われてゆく人達を、数かぎりなくみながら、それすら無感覚になってゆく心の異常さは、やはり経験者でないと分からないかと思われま

〔広島 直爆3.0km～ 女 20歳〕
（13-32-029）

当時鉄道教修生であったので、生徒が百数十名いた。朝食時に爆撃に遭ったので全員被爆。その中3人だけ無傷、私外2人。その3人で夜通し寝ずに皆さんの看護に追われたり、その中死んで行く人、本当に筆では表現できません。

畳を崩してホグして、あたりの校舎の木を集め、死体を焼く最中に空襲警報のサイレンが鳴る。また死体を焼く火をたたき消し、ブリキの板でかくしていた時のこと、思っただけでも身の毛がよだつ思いでした。時には死体を焼こうと思ってマッチで火を付けた途端に、△△はおりませんかと言っておばあさんが泣きそうになって駆けつけて来られたので、付けたばかりの火をたたき消して、おばあさんに死体を渡した時のことが、未だに目に残っております。

当時自分はケガをした方が良かった？とまで思ったほどでした。当時の苦しみは今更思い出したくありません。

翌々日、海田市の兵隊の応援をいただきました。後日、1ヵ月後に私もついに病傷の身となり、床についてしまいました。

〔広島 直爆3.0km～ 女 21歳〕
（34-5912）

写真を撮うつす時にフラッシュをたかれると、ぞっとする。

〔広島 直爆3.0km～ 女 22歳〕

(13-32-037)

焼けただれて、裸同然の人々が、放心状態で爆心地から何とか自分の家に帰りたく、長束あたりまでほんとうに精神力だけで歩いて来られ、水を求めて亡くなられたこと。その姿は恐ろしく、この世の人とは思えないほど残酷でした。それなのに、何の手当てもしてあげられず、どうしようもなく、今でも残念で心が痛みます。

そんな状態の時、原爆投下まであんなに暗れて、太陽がカンカン照っていたのに、突然空が真っ暗になり、黒い雨がザーッと降り、ズブぬれになりながらも、屋根が飛んでいるので（また、ガラス、家具、戸等が飛び散っている）家にも入れず、竹藪で過ごした恐ろしさは今も忘れられない。その竹藪には大勢の人が避難していたが、次々と亡くなっていった。

〔広島 直爆3.0km～ 女 24歳〕

(13-16-014)

体も痛むが、家が気になり3日目に家に行ってみると、一面焼野原になっており、やけた煉瓦や石が残っているだけ、びん類はあめのように一もちになっていた。防空壕の中へ、こく類、野菜を少し入れていたが、いり米やむしやきになっていた。

主人は被爆の整理、死体運搬等で4日も帰らず、戦時債券が現金に換えられるようになったので、八丁堀まで車にのせてもらってかえに行った。白神社前は、また紙屋町などにも行ったが、その途中上からの太陽と地上の熱の反射で、もう死ぬほどのどがかわいて声も出なかったほど苦しかったのも忘れられない事です。

小学校などに避難〔した〕人たちがいっぱい、収容された人々が、今日もまた明日もと、次々に死んでいった。そして死体を何体か集めては焼いているのをみると、

もう何と言ったらよいかわからないほど、むごいとも、哀れとも、腹立ちとも、見たものでないとわからないほど悲惨。これほど悲惨この上もない、むごい光景を再びおこしてはならないと思います。

まだいっぱいありますが、書いていたら涙が出てきましたのでこれでペンをおきますが、私も足の外傷が化膿して、くすりはなし、車にのせてもらって長い間通院しました。車といっても昔の大八車です。長くなりましたので丁寧な文は省略いたしました。

〔広島 直爆3.0km～ 女 26歳〕
(40-0737)

④ 30歳台（被爆時）

原爆の落ちた朝、私は朝食後茶の間に座っていて、余りにも家がゆれ棚の上の物が落ちるので、驚いて外に飛び出したら、オレンジ色の光を見ました。

その夜、陣痛が起こり、その夜死産をしました。胎児は六カ月でしたので床につきましたので、人々の死体等は見ませんでしたけど、ケガ人は数多く見ました。

〔広島 直爆3.0km～ 女 30歳〕
(13-12-203)

⑤ 40歳以上（被爆時）

長女があれほど苦しい中で、”水をのませてくれ”というのに、水をのませれば死ぬるので、のましてはいけないとまわりの人にとめられた。「お兄ちゃんの中支から帰るまでは水をのまないでがんばる」といった。「お母ちゃん、くさいでしょ」といってウジがからだについたくささを気にしていた。それがいつも忘

れられない。

「戦争さえなかったら」と毎日思う。私は「戦争がにくい」と思う。

昭和21年2月に復員した息子は、私が頭の髪もぬげ、やせ衰えた姿に驚きました。「妹は？」と聞かれて、長女の様子を話した。

10月23日長男は鉄道自殺をしてしまった。昭和23年に自分も死のうと思っただが、教会の人に助けられた。その後仕事のせわもしてもらったが、身体の具合がわるくなった。

[広島 直爆3.0km～ 女 44歳]

(34-5069)

Ⅱ. 入市被爆

a) 男

① 9歳以下(被爆時)

当時海田市国民学校3年生であった。風邪で学校を休み、二階に寝てラジオを聞いていた。突然パッと光が走り、聞いていたラジオがガーンと鳴り消えた。数秒後、大爆発音とともに柵からラジオが落ち、ガラスの割れる音がした。驚いて階下に入り外に出た。隣の船越方面の空から煙がもくもくと上がり、高く高く昇っていく。ものすごい爆弾だと思った。隣の船越に大型の焼夷弾が落ちたと言う人がいた。

昼頃には広島駅が全滅との話が入って来た。3時頃には広島市全滅の話に変わって行った。被爆者が焼けただれて、そろそろと助けを求め、逃げて来る。水を求め、飲んで死んで行く。道ばたにムシロをしき、その上に次々と焼けた人々が並び、1日1コのムスビと水を飲み、また死ぬ。

学校は休みとなり、病人と死体の置場と変わる。便所に立ち、便所に倒れて死ぬ。学校には入れなかったが、大人達の話はすごい。従妹も死んだ。市内からつれて帰

って来た従姉は、ヤケドがうんでくさかった。医者が少なく、父が医者にみせるため苦勞していた。

焼跡から4人（叔母、従姉2人、従妹1人）を引き取り、父も苦勞した。

私の友人（1歳上）も広島市内に入り被爆して言った。「大きくなって必ず赤トンボをヤツツケル」そして死んだ。

父は教員だったため家に数学を習いに来ていた多くの中学生のお兄さん達が、広島から帰って来なかった。帰って来た人々も、歯が抜け、髪が抜け、次々に死んで行った。

悲惨な多くの出来事が一度に起こったのだ。

〔広島 入市 男 9歳〕

（13-20-085）

② 10歳台（被爆時）

原爆により顔、身体の半分が焼けただれ、のこりの半分が服とか顔がそのまま、そのような人が道路や広場でよろよろ歩いたり、路傍に横たわっているのが、未だに忘れられない。

学校に入市して帰りに、タンカに乗せた女性を運ぶのを手伝ったが、ものすごく重かった。水を欲しがるといっても、水もなく、全体がそのような災害に遭っているときは、良いとか悪いとか、痛いだろうが、そのようなことは全然感じられない。あたりまえのこととして、自分の勤めだけしか考えない。

〔広島 入市 男 15歳〕

（34-5032）

あの日の生地獄様は生涯忘れることは出来ません。

〔広島 入市 男 17歳〕
(23-0420)

8/6のAM11:00ころから8/14まで、市内で――よくおぼえているところは、広島女学院専門学校、県立病院あとなど――連日遺体の火葬のために働いた。その数、10数人の仲間と、およそ数百人にのぼったと考えている。大半は性別がわかる程度で、氏名など全くわからなかった。遺骨は何か所に穴を掘り、仮埋葬した。名前のわかるものは、かんたんな用紙にメモし、上司(軍隊)に提出したのだが、どうなっているのだろうか。あの悲惨な状況はどうしてわすれられようか。

〔広島 入市 男 18歳〕
(13-32-019)

- ①死体や負傷〔者〕をまたぎながら救難作業をした。
- ②一番最初の方は、50歳位の婦人で、顔面、手足がヤケドでベロンベロン。
- ③防空壕で、眼がつぶれた少年が、さかんにスクイを求めている。
- ④産業奨励館の中で、自分の子供にほほずりしてない母親。
- ⑤道路の端でコモをかぶせられてごそごそごき「兵隊さん助けて下さい」と。

〔広島 入市 男 18歳〕
(13-32-051)

原爆投下10時間後、本校よりの命により広島救援に向かう。あつい夏の日も山の峰に姿をかくし、うすぐらくなった国道をバスにゆられ広島市へと向かった。市内に近づくとつれ炎と煙で東方があかるくなってゆく、一瞬本当に美しい夜を見た気がした。

着衣はやぶれ、顔も手も真黒な人々が、荷物をせおいもくもくと歩いてゆく。あの人達どうしたんだ。我々は残念ながら何もきかされてない、不思議に思った位だった。バスを降りたとたん、自分の足元に何かが動いて声を出している。その時になってこれは大変なことだとおもわず口に出してしまった。

水、いたいよう、助けてくれと、かすかな声がある。はるか遠くで軍歌もきこえる。何もかも別世界にいるような気持。

我々は軍人である。軍の命令は何事も従わなくてはならない。助かる人のみ助ける。いわれた通り我々は黙々と働く。

水、水、両方の耳がいやというほどきいている。しかし、私一人が何が出来よう。あの人、この人、最後の水ではなかったのか。今思えば、なぜあの時に手を出さなかったのか、悔やんでもいる。しかし、悔やむことでもないかも知れない。

思い出しても悲しい悔やまれることばかり、この思いを私達は今どこにもっていったらよいのか。我々もいつかは皆さんの所にゆかねばならない。

二度と戦争は起こしてはならない。亡くなった同胞、苦しみ、悔やみ、今もなお生きている私達。平和な世界を残しておくのがわれわれの今後の願ではないでしょうか。あまりのことに何も書くことがどうしても出来ません。ただただご冥福をお祈りするのみ。

〔広島 入市 男 19歳〕

(13-21-005)

私は爆弾が落下して40分前後で現場に入ったので、入市当時は火災の発生も少なく、広島市の街地がほとんど焼けつくすまで在りしていたので、市内の様子を目撃した数少ない証言者だと思います（呉海兵団の応急隊として救急車で呉より広島

に直行した)。

- ①陸軍軍服を着用した兵隊が、数多く倒れていた。
- ②市電の鉄塔が倒れ、道端に性別の判りにくい死体ごろがっていた。
- ③今の原爆ドームの近くを流れる川べりは、足の踏み場もないように死体ごろがっていた。
- ④爆心地に近い学校の校庭では、将棋倒しのように人が倒れていた。
- ⑤焼け残りの板切れを集めて、その上に死体を何体かのせて、隣でボーゼンと座っていた人。
- ⑥若い女性がシミーズも切れ切れに、手の皮をぶらさげて、足を引きずりながら歩いていた。
- ⑦長い時間広島市内をうろついたが、家を焼かれ、肉親の死体のそばでも一人として涙を流している人は無かった。

以上が今、当時を思い出しても目に浮かんでくる光景です。

〔広島 入市 男 19歳〕
(23-0244)

7日に整理のため入市しました(軍隊)。

途中水を求める人が大勢いた。兵隊さん水、水と求められ、水を与えると死ぬのは分かっている、そのまま素通りが出来ずに水を与えた。良かったか悪かったのか、今もって分かりませんが、どうせ命なら良かったのだと、自分に言い聞かせています。これだけみじめな死に方はないと思った。見た者でないと分からない位おそろしい、みじめな姿だった。

白島の川べりに死体がずいぶん並んでいた。その死体の整理に当たりました。8月末日まで整理に当たりました。

こんなことは二度と起こってはいけないことだと痛感しました。

〔広島 入市 男 19歳〕
(34-4235)

③ 20歳台（被爆時）

一般市民の黒く焼けた死体、また、赤くただれた死体が、焼跡や、川や、街の水槽に見られた。

防空壕の中で、死期の近づきつつある老母が、自分の救助より、2人の孫の死体を指さし手当てを頼む姿が、思い出されます。

また、小学校2年位の男の子が、両親、兄弟不明のため、軍の宿舎に連れて来ましたが、被爆5日後、朝方私を呼びますので行ってみると、立ち上がれないまま横になっており、外傷がないのに、水を求め、私の手を取り、安心した様子で息を引き取った時のこと等、思い出されます。

〔広島 入市 男 20歳〕
(04-0108)

死体処理中、各家庭の台所流しに手をかけ、ひざをおって黒焦げになっておったのが、また、玄関で両脇に子供をかかえて死んでいた女の人の。

防空壕の中で、親子5人窒息死だと思ふ。場所は忘れたけど、道路にあった防空壕です。着物は焼けただけであつた事。

川は死体が流れてくる。

死体集めて、3、4日位焼いた。焼いた骨を、名前のわかっている人は焼け瓦にまとめ、名前を新聞紙に書いて、並べたが、誰も受け取って行った人がなかった。

〔広島 入市 男 20歳〕
(04-0110)

私は原爆が投下された時は、広島市外の山沿いにある軍隊にいましたので、直接被爆は受けませんでした。その当日、原爆投下6日の夜、救援のため隊員全員が

広島市内へ向かうことになりました。

7日早晩広島へ着いたのですが、駅は焼け落ち、まだ残っているホームの屋根等が炎を上げ、立っているのも熱いくらいでした。市内は全焼で、煙が立ちこめ、この世の様とは思えぬ惨状でした。

その後毎日救援活動（主として死体整理）を始めました。その途中異様な人の列を見たのですが、それは、やけどを負い、皆、たすけてくれ、いたいよ、あついよと叫んで歩いて行きました。多分救護所へ行くところだったのでしょう。また、町には多数の死人が横たわり、中には黒こげの人、半焼けで絶命している人等、いろいろでした。あの状況は全く残酷で、今でも忘れられません。

◎軍隊の規則の関係で、くわしいことは話したくない。

○長崎へ11日に軍隊として入市する。教会の中に死体が山づみになっており、その処理をてつだった。また広島へもどる。東京では黒こげになるが、広島、長崎では半焼けの状態。

〔広島 入市 男 20歳〕

(13-53-037)

あの生地獄の中で、痛切なる弱々しい声で、兵隊さん、兵隊さん助けて下さいと、四方八方より呼ぶ声に応じられなかったこと、今でも非常に悔やんでおります。

チンク油、赤チン等も底をつき、死に際にさかんに水を求められても、水さえも与えることができず亡くなられた方々、今でもあの凄まじき現状が浮かんできます。

戦争と言えども、この恐ろしきこと、また、何にもしてあげられなかったこと、私が死ぬまで脳裏より去らないことでしょう。

〔広島 入市 男 20歳〕

(23-0390)

私が広島に着いたのは、7日の朝だと思います。明るくなるまで駅前の広場にいました。夜が明けるとともにおどろいた事は、駅にはけがをした鉄道員が少しおりましたが、その外は人間に会うことが出来ませんでした。市内どこを見ても死体ばかり、私の行った所は下中町というのですが、小学校のそばでしたが、ここにも校庭には何千人の小学生の死体でなく、焼け死んだ小学生の遺骨の山でした。

本当に、今でも時々思い出します。

もう戦争はいやです。

〔広島 入市 男 21歳〕

(01-0096)

船の上で熱線を受けた。

焼野原に入って、男の人がバケツに灰を入れて持っており、何かと思っていたら「家族の灰だ」と言われ、驚いた。

また、私たち兵隊を受け入れてくれた家で、みんな元気だと思っていたら、1週間たったら、その家のお姉さんのかみの毛が抜け、亡くなった。そして妹さんから死体を焼いてくれと頼まれたのが、今でも思いだす。

〔広島 入市 男 21歳〕

(13-23-071)

- (1) 昭和20年8月11日朝7時頃、広島駅へ列車が到着した。駅前に立って市街地を見渡したとき、すべて褐色の街であり、遠く己斐の山、宇品の港まで見渡すことができ、新型爆弾と言われた爆弾の恐ろしさに驚くだけであった。
- (2) 次に、京都から一緒に列車に乗って来た△△君と、歩いて私の家のある東雲町へ向かう途中、家族の安否を気づかい、膝がガクガクふるえるようであった。途中で行き交う人達の顔と身体の異様さに目をあけて正視できなかった。

- (3) △△君の家は竹屋町にあったが、広島駅から見て焼野原となっており、家が焼け残っている可能性はないため、とりあえず東雲町あたりは焼けていないと聞いたので、2人で家のほうへ歩いた。
- (4) 私の家族は、妹が8月7日朝息を引きとり、父母は負傷していた。昼食をたべてすぐに、△△君の家族を探すべく、原爆投下の中心地へ歩いて行った。
- (5) 広島市役所に△△君の家族が収容されている可能性があると思った。内部がやけただれた市役所の大部屋や廊下に、死んでいるのか生きているのか分からない人がむしろの上に魚のように並べて横たわっており、その身体に真黒に蠅がたかっている様子を見て、嘔吐しそうになった。横たわった人達は蠅を追うちからはすでになかった。人数はおよそ500人ぐらいであったと思う。

[広島 入市 男 21歳]
(23-0031)

1. 広島駅前二階建の建物が瓦一枚飛んでいなくそのまま押しつぶされていた光景。
2. 土橋の渡り口で自転車に乗ったまま被爆死していた。そのそばに4、5頭の馬が半面毛も焼け爆風で皮をはがれ、血肉を露出しかろうじて生きている光景。
3. 救出した人々の姿、眼ははれふさがり、被服はさけ、露出面は焼けただけ皮ははぎとられ血肉があらわれ、杖にすがってよろよろ出てきたり、道にころがっている。川や川べりに水を求めて死んだ死体が累々と積み重なったり、散らかり死んでいる光景。
4. 己斐駅周辺で、中学年齢位の子供を背負うた母親。子供は眼がはれふさがり、被服はさけ、血肉は露出していたが息はしていた。母親曰く「昨日(投下当日)の朝から探してやっと見付き連れてかえります。生きていた、幸いです」。いそいそと西の方角に去っていった。翌日の夕4:00頃と記憶している。
5. その外、畑の中の農家の人が腰を二つ折れにし、くわと足の三点でそのまま亡くなっている光景等、今なお頭に残る。口では言えない地獄絵を眼の前に見せられ被爆の悲惨さを、恐ろしさを経験しました。

〔広島 入市 男 23歳〕

(27-0166)

広島駐屯の通信小隊よりの連絡絶えたため、情況偵察に広島市に向かう。三原駅で下車、小隊駐屯地に徒歩にて、当時広島城（軍司令部）へ。

途中、死者、負傷者の数知れず、惨状、8月の暑さ、筆舌につくすこと出来得ません。正に地獄と言いますか、川には死体が折り重なり、電車はひっくりかえって、焼けただれた死がい道路にちらばり、負傷者は日蔭をさがして、ただ腰を降ろして、救助を求めておりました。食物もなく、あっても腐敗して食べられなく、戦争とはいえ、兵器もなく、抗戦の方法もない一般住民に、このような苦しみをあたえ、惨忍な方法に、いきどおりを感じました。

上官の命令に、通信線、通信施設の応急処理に従事いたしました。広島郵便局、その他、学校の補修中、焼けあとからの死体、電線にひっかかった首等々。負傷者につける薬もなく、現在の平和には想像も出来ません。

戦争のない平和を守るため、戦争のひさんさを、孫、子に伝えて、平和を守りたいと思います。広島原爆投下は、生地獄でした。

〔広島 入市 男 24歳〕

(01-0006)

○救援に入って、トラックを用いて、兵舎に被爆者を運んだ。やけどの薬を塗ったが、翌日にはほとんど死亡した。

○水を飲ませると死んでしまうから、ダメだと言われたが、皆に飲ませた。飲まなくても皆死ぬので……。

○全身や顔が焼けただれて、80歳ぐらいのおばあさんと思って年齢をきくと、20歳前後の人だったので驚いた。

○小学生ぐらいの子供が、外見は何ともないけど、何故か翌日には「水がほしい」

と言って、皆死んでいったのが不思議で、印象が強くのこっている。

〔広島 入市 男 24歳〕
(01-0057)

悪臭が街中に充満し、おびたしいハエが身体中にまとわりついて来て無気味であった。

広島市中に全くといってよいほど人影がなかった(8/14頃)。

広島駅の待合室、プラットホームに被害者がいっぱい横たわり、うつろな眼をしていた(何れも8/14頃)。

〔広島 入市 男 24歳〕
(23-0245)

20年6月17日臨時召集、7月2日作戦準備のため山口市移駐、軽重隊本部の事務官の任務についた。

11:20頃師団より暗号で「広島市に特殊爆弾が投下され、広島市の痕跡を認めず」との電話連絡あり。

8月9日朝、山口を発ち、9日の夜8時頃入市。4名で西部軍管区とあかつき部隊に行った。

その日はいったん山口へ帰り、14日朝から再び入市。市役所を宿舎として毎日救護活動を行った。色々思い出したくないことばかりである。日本銀行内には女性が柱に倒れかかって、顔がゆがんでいたりもした。

一番自分の中に、深く心に残っているのは、死んだ人も危篤状態でまだ息のある人も全部一緒にして、ごみのように投げ込んでそれらを重ねて焼いたことである。

戦争は本当にむごい。それらを見て、こわいなどと思ひもしなかった。

〔広島 入市 男 24歳〕
(34-5946)

爆死した人は、男はうつぶせ、女の人は多くはしりもちをついたかっこうで死んでいる。顔がぐちゃぐちゃでまだ生きている人。水を口に流してあげるとピチャピチャと口を動かす、声も出ない。

S20. 8. 6西部第111部隊（広島師団指令部隣接）へ高射機関砲部隊編成のため動員指令を受けたが、当時山口県下松市へ派遣中（燃料基地の燃料ソカイ応援に、西部第110部隊、山口市より）。従っていったん山口市に帰り軍装を整え、6日夕刻山口駅を発進し広島市へ向かう。度々徐行、停車し、時間がかかったが、広島駅までは行けず、7日朝遅く己斐駅（今は駅名が変わった）まで行ったが、その先は動かないと言うので下車。駅の構内周辺は重傷者、死体が横たわり、軽傷者の一般人（民間人）、動員学徒等、ボロボロの被服を着け、血のりをつけた三角布、ホータイ等つけ右往左往しているのが目に浮かぶ。初めての広島市であり、目的地西部111部隊も何れの方向かもわからず、班長の地図を見ながら大きい道とか、川をたよりに爆心地に近づいて行った。死体や軍馬の死がい等いたるところに、と、だんだん死体の衣類も吹き飛ばされ丸はだかで赤く火ぶくれしたまま死んでいる、半分黒こげになった死体もふえて来る。途中道の右数米の焼野原の黒こげの柱か電柱に、若い赤毛のスラーとした兵隊が、焼針金（8番線位）で何重にも巻付けられ、八方から竹ヤリや焼残りの棒がつきささっていた。余りにもショッキングな風景である。生物の死体も黒くやけこげ、人か犬かわからない。だんだん目的地に近づく、堀割の土手の黒松の大木が根こそぎたおれたり、途中で幹が吹き飛んだり。

西部110部隊の兵舎は何もない。丸いくり石が積み重なっている。その中にドクロが一つ、人間の。吹いて見たら灰（カルシウムの粉）高温で完全に無機物に還元されている。土手の蔭では軍馬が爆風で皮がベロッととはがれて死んでいる。堀には死体が浮かんでいる。

この世のものとは思われない。今でも目に焼き付いている。

〔広島 入市 男 25歳〕
(13-12-205)

8月7日 (あるいは8日)

私は何とか鷹野橋までたどりつくことが出来た。私は当時大手町三丁目吉川旅館に姉と暮っている人がいたので、それを訪ねるはずだった。しかし、熱気と火焰が行手を阻んでいる。周囲は一面火の海である。その時、泣き叫ぶ嬰兒を背負った素足の女がよろめいて行った。それが未だ臉にやきついてはなれない。

〔広島 入市 男 25歳〕
(23-0406)

1週間後に会ったとき、怪我もなく幸運を喜んでいた人が、その10日ばかり後には、発熱、脱毛、血便などで亡くなった。底知れぬ恐怖におそわれた(万代橋東詰)。

救護所で背中に大火傷を負った若い母親が、仰臥することもできず、瀕死の状態で、木箱の上に裸で伏していた。その乳房を赤ん坊が離さないで母にとりすがっていた(可部町)。

〔広島 入市 男 25歳〕
(34-5283)

当日のこと……避難してくる幽霊(?)の群れに目をおおう(広島より海田方面に向かう街道筋で……)。

半裸体、はだして黙々と放心状態の被爆者の行列の波、ヤケドの火ぶくれ、特

に腕の水ぶくれが、たれ下がり重たそう。怪談話に出てくる幽霊の姿にそっくり。この世の生地獄を目のあたりにする。今もその残酷な光景は、目をとじれば生々しく浮かび上がってくる。

2日、3日目……防火水槽に横たわる3、4人の死体も、2、3日後には人形だっこちゃん、黒ん坊にそっくり、はちきれんばかりに2倍にもふくれ上がり、黒光りしてきた死体に、目をそむけた。

2日、3日目……長寿園の土手にズラリと並ぶ死体の中には、まだ生きんとする瀕死のうめき声に、耳をおおいたくなった。

〔広島 入市 男 26歳〕

(13-37-006)

ア) 7日夜半よりトラックで、西広島より入市しましたが、障害物で前進がとても困難でした。紙屋町付近で夜が明けました。各家庭の防火水槽や紙屋町交叉点の焼けた電車の中の死体、河岸ではさらに多くの死体に驚きました。

また、建物はビルや土蔵以外はすべて焼け、倒れ、遠くの山裾が見渡せるほどでした。

イ) 救護所で救護活動をしましたが、大勢の負傷者の血や膿の臭い、水をほしがる人、子供の泣き声、重傷者のうめき声、その中から死体を運び出す有様は、表現のしようもありませんでした。

ウ) 6日救護所に憲兵が訪れ、軍医に負傷者の様子を尋ね、後、これは原子爆弾に間違いないと断言したので、初めて原子爆弾や軍の上層部にはその情報をつかんでいたことを知り、大きな破壊力や被害で、原爆の恐ろしさを知りました。

以上の外、色々と悲惨な状況は生涯忘れられません。

〔広島 入市 男 26歳〕

(34-4549)

入市した14日当時の状況は、一望に見渡せる焼野原で、瓦がどこの町でも叩きつけられたようになっていました。そしてまた、市内には電線が散乱し、網の目になっていました。ただ被爆者の遺体を見ることはありませんでした。

私はまだ25歳で元気盛りでしたから、学校より大八車に被爆者の遺体を一日数回、火葬場に運びました。一回一台に3、4名を乗せて運んだこともあります。茶毘の付すより死者に追いつけず、無理な運び方をしたものです。

照りつける真夏の暑さの中を、数名の者で串山という所まで行き、そこから担架に乗せて小さな山道を、これまた数人がかりで火葬場までの二段構えでしたが、なにぶん戦時中のことで男子の手は少なく、車の後押し、運転助手は皆女性でした。

一回運ぶ時間は、学校—火葬場間1時間以上はかかりました。その日の動員により作業内容は変わりましたが、若い私は担架で被爆者を運び、その上焼くこともかなりしました。遺体にわいたウジは無数で、運ぶ度に地面に落ち、馴れるまでは身震いがする心境でした。山道を運ぶ道中は、木陰に立ち小休止も時々しましたが、休めば自然に遺体に目が行き、ウジのトリコになるため、無理して跣足で運んだこともあります。

初め焼く場所も一カ所でしたが、後には2カ所になり、重油をかけて焼く有様でした。一基の台に6、7遺体を載せ、それに割木とワラをかけ、それに火をつけて焼き、まださめない焼却後の遺骨を、それぞれのツボに入れ、まわりに整理して並べました。また、ただでさえ臭い遺体は火を入れ燃え始めると、唾液が口中一杯になり、何か固まる思いでした。死体も火力の盛んな時は、青白い炎となり人体より出る油が音をたてて燃え上がるものです。また、焼くたびに瓦斯のせいか、体の伸縮が激しく、この世の地獄で、私達はさしあたって鬼の存在でした。

紙面に限りあり、ご免なさい。

〔広島 入市 男 26歳〕

(34-5252)

爆発時あの不気味なキノコ雲、太陽の光に映えた紫、赤、黒、オレンジ、色とりどりに屈折しながら、モクモクと空高く吹き上げる悪魔のような、かつて見たこと

のない様相、現地広島市は一瞬のうちに焼土となり、罪なき非戦闘員、老人、婦人、幼な子の命は、虫けらのように、丸太ん棒のように黒こげとなり、また焼芋のよう
にころがっていた。

生き残ったものは、うめきながら足を引きずり、助け合いながら、鉄路ぞいにある
いは道路ぞいに陸続と長い列を作って、ヨロ、ヨロと市内からはい出してきた。
手当するにも薬もなく、町々では毎日死者の葬儀が行われていた。なんとむごいこ
とであろうか、戦争とはいえ余りにも悲惨。形容する言葉もない。

世界中で日本人だけが受けたこの惨事、末長く語り伝えて、平和な世界を求めたい。
我々だけでたくさんだ。もうこんな事はごめんだ。

〔広島 入市 男 27歳〕
(12-0017)

軍隊にて救護活動をしていたが、路上で全身包帯をした被爆者が、火傷で熱いの
か、また苦しいのか、防火用水のある場所に行くとその中に入り、また歩いて次の
防火用水に入っているのを見たのが、印象に残っている。

〔広島 入市 男 27歳〕
(13-14-110)

私は8月8日広島市に入市した被爆者ですから、郊外から市中に入る途中おびた
だしい死者、負傷者、火傷者に会っていますが、その中でも特に強く印象に残って
いるものだけについて述べます。

☆8月7日、私が疎開していた安佐郡久地村字川合、明法寺に、△△△君の母親が
首から背中、全身大火傷で主人に介抱されながら、素足でたどり着きました。被
爆地荒神町から徒歩で28kmの山道を、山や坂をこえて、死ぬまでに一目我が子
に会いたいとの一念で、寺までやって来たのです。私は最初に会った被爆者だか

ら、特に印象強く残っています。

「お母さん、そのやけどはどうしたの」と尋ねても「わからん」との一言でした。「洗濯物を干していたら、後ろからピカッとやられ、アッと思ったがもう間に合わなかった。後はどうなったか全くわからなかった。主人に助けられてやっとここまで来た。家はつぶされていた」こう言うのが精一杯で後は「痛い、いたいよう」と苦しんでいた。

☆8月8日、歩いて広島に入る途中、祇園町までくると、寺の境内、お宮の広場におびたらしい人のけが人、火傷者、死人がいました。広島へ近づくにつれて、数が多くなっているのに驚いた。

☆三篠橋の東詰に2人の歩哨兵が、顔を真黒に焼かれて、手にかたく銃剣を握ったまま、2人とも同じ姿勢でしゃがんで死んでいた。

☆荒神町国民学校の校庭で、教え子（3年生の男子）が頭を割られて、防空壕の中で死んでいた。戦争に役立つ人間になればと、教えていた私は生きていて、教えられた子供は死んでいる。このことは何とも言えなかった。

〔広島 入市 男 27歳〕

(34-5010)

私の家族、全員死亡した。

原爆投下直後（8月6日夕方）、広島県三原市から広島へ入市した。家族をさがして歩きまわった。夜は電車の安全地帯で、負傷した市民の方々と、野宿した。負傷した人が、次々に死んでいった。そんな光景があまりにもたくさんで……。

今は思い出したくない。

〔広島 入市 男 28歳〕

(01-0131)

7日に広島市内には50名位の人達が水をもとめていたが、何もしてやらなかったことが心苦しく思っております。この人達は目をやられうごくことが出来なかった人々で、今でもむねに重いかたまりが取れません。

その時は命令以外は出来ないロボットであったと思います。二度とロボットにならず人間の道をおこうと思います。

〔広島 入市 男 29歳〕
(27-0046)

8月8日に入市して、一面焼野原。道の左右に多くの人が死んで、その姿はまるで仁王さんのように目がとび出し、体が大きくはれあがり、衣類は着ておらず、かなしい有様でした。

私は伯母さんを尋ねて入市した。袋町養生？〔不明〕に救護されておりました。ロビルが大きくふくれあがって、顔は赤く焼けて、生きる力はなく、祇園の知人宅にて養生、12日夕方亡くなりました。水を飲ませますと、カラカラと腹の中を通る音がして、すぐに下に出て来ました。生きることが出来ないことは、9日には感じていました。

〔広島 入市 男 29歳〕
(34-4708)

あの日、原爆が落ちた時、佐伯郡廿日市町宇品造船第2工場にいて、数時間後、自宅の福島町(爆心から2.0キロ)に帰る。

全市が巨大な力で押しつぶされ、炎の中につつまこまれ、ポロ切れのように変わり果てた人々が、至るところに転がり、亡くなったり、うめき苦しみ、もがき、水水と言う声のみちみち、正に生地獄でした。その中を、家内と2人の子供と、わたしの兄、姉、妹の姿を求め、探しまわりました。

書きたいことは山ほどあるが、特にあげるとすれば、学徒動員で市内に入っていた多くの中学生たちが亡くなったことです。

中心からここまで来て力つき、倒れ、そのまま死んだもの、沼の中には最後の水を求めいきたえたもののお尻が、あちらこちらに、また、両手だけ天を抱くように突きだし、指は折れまがり（こくうをつかむように）、そのむごたらしさは決して忘れることは出来ない。

もっとも大事で忘れてならないことは、原爆症のことです。私は6人の身内をこの急性原爆症で失いました。無傷に近い人間が、全身黒斑におおわれ、髪は抜け、血をはき、死んで行きました。早いのは1週間に、また1ヵ月以内に亡くなり、そのつど焼け残りの板切れで、その遺体を焼却しました。

〔広島 入市 男 29歳〕
(34-5904)

④ 30歳台（被爆時）

……昭和町から被服廠へ通ずる道路を中心に、路傍の死体を探索した。遺骸の顔は一様にむくんでおり、黒く煤けているので、皆んな同じようで見分けがつかない。着衣も母のモンペ（勤労奉仕で出たというので、服装はモンペであると想像された）に見覚えがあるにしても、全部が全部黒いモンペで、これまた見分けはつかない。やむをえず軍隊時代中支の戦場を経験したはずであると、自分自身に言い聞かせ、勇気を奮って、死体の金歯ならある程度確認できると思い、口を開けたりもした。……。

（私の自分史から）

〔広島 入市 男 31歳〕
(13-31-021)

広島駅のホーム（荷物用）の上に、焼けてはれあがった兵隊さんがズラリ寝かされて、水をくれと言って苦しんでいたこと。水をやると早く死ぬのでやっては駄目と聞かされていたのでやれなかったが、あとで残念でならなかった。

中心部から被爆者が頭から灰をかぶり、体には赤チンを塗られ、皮膚がはがれてぶら下がったまま、トラックで宇品方面の医院等へ運ばれていたこと。

また、疎開の手伝いに来たという学校の先生が、やけどで皮膚がぶら下がり、赤チンを塗られて、山手（大河住宅）の方にふらりふらり歩いてこられる有様は、何とも言いようがなかった。

私は軍属だったので、すぐ町へ出てみたら、紙屋町で電車が焼け、死体があり、途中では女の人がすっぱだかで、足首にモンペのゴムだけが残って、服は吹き飛ばされたのであろう、頭には灰をかぶり、気が抜けたような格好でふらふら歩いている人に、何人にも出会ってびっくりした。

その他いろいろあったが、その後10年位は焼けあとのいやなおいがぬけなくて（何か焼くと、当時のにおいがすぐにもどってくる）いやな感じであった。

〔広島 入市 男 35歳〕

（13-20-049）

爆弾投下され、数時間後で市内各所には延焼中の時期に、紙屋町を中心に救援作業に出動する。場所によっては舗装が燃えて通れず、消すには水はなしで作業進まず、まさに生地獄と思った。

空地には被爆者の人の海で、悲鳴とうめき声、そしてもがき苦しみもだえている人々の姿は、実に絵で見るとお化け屋敷に見るお化けのようなその凄さ、とうてい言葉で表現できない恐怖にかられました。

被爆のために重傷、目まで潰された母親が、死んでいる乳呑児を抱きしめ懸命に乳を与えようとしている姿。また一方には幼児をかばって死亡している母の胸の中で、泣き疲れて声も出ず、口をあけてかすかに舌を動かして懸命に乳房をまさぐる幼な子の姿。重傷にて身動きも出来ず、ただ助けてと叫びながら用便をそのまま済している人々。力の限り水を求めて兵隊の足にすがりつく人々に、水もなく、空の

水筒の栓をとり口に当ててやると、瞬間口を動かし間もなく息を引取ってゆく人。

また、学校で朝礼の最中に爆弾投下で700名の人々が一瞬にその場に倒れて爆死。互いに手で頭を、顔を覆った姿を処置したときの、その悲惨の状態の他、今思いついても表現出来ず心が苦しく痛みます。でも当時は軍隊であり、命令のままに、よくも14日間作業出来たものだと思っています。

〔広島 入市 男 35歳〕
(40-1075)

⑤ 40歳以上(被爆時)

忘れないこと。(私は陸軍衛生兵として召集中)

(私の隊は陸軍船舶教育隊だったので、空兵舎作業所等がかなりあったので、被爆者を多数運び込んだ。)

被爆程度に応じ、区分・収容したが、重傷者は次々と死んでいった。軍医2、下士官3、衛生兵18では到底手当ては行き届かない。被爆者はどんどん死ぬ。若者(中学生—当時の?)は軍歌を歌いだす。歌いだすと、だんだん顔がふくらんでくる。そして風船のようになる。眼、鼻、口等の凸凹が無くなる。まるで西瓜に眼鼻を書いたようになると死ぬ。女はたいてい、家族の名を呼びながら死ぬ。

空襲警報 — 電燈が消える。(何もできない。)やがて、警報解除。電燈がつく。数人(一部屋で)死んでいる。

この有様を忘れることができるだろうか。

〔広島 入市 男 41歳〕
(13-16-037)

私は舟入本町△△△番地に住んでいたのですが、8月3日だったと思いますが（そかい）をすることについて、田舎の親戚へ行っていたのですが、広島市へ原子爆弾が投下されたと聞き、8月8日に広島に着きましたところ、全部焼野原となっていて、私の住んでいた家も家財もありませんでした。

妹が中島本町慈仙寺に住んでいたのが気に入り、早速行って見たのですが、焼け野原で何も分かりません。ちょうど近所の男の方がおられましたので、尋ねましたところ、あの方は行方不明なのですよと言われますので、どうすることもできず、途方にくれて、心あたりの方に尋ねていたのです。

数カ月たって、ある日電話で、あの日の朝私と電話で話していたから電話室のあった下の方をさがして見よ、言われましたので、早速さがしましたところ、いつも持っていたお金入れが出たので、ここで焼死したのだとわかり、あまりにもヒソウな死にかたをしたことと思います。

〔広島 入市 男 48歳〕
(13-22-012)

b) 女

① 10歳台（被爆時）

中学1年でした。大洲の河より死んで流れている人を5、6体ずつ板にのせて、焼場に運んで行ったのを眺めていた。感情がまひしたのか、じっと眺めていました。

当時と現在では感情も違ってきます。今思えば恐ろしいことがらも、その当時はあまり感じなかったことは、それじたいが恐ろしいことです。

同級生が市内の中学に通学していて半数以上被爆した。4月に小学校を卒業して、あまり勉強もしないで毎日建物そかいばかりさせられ、食物もなく、たった4ヵ月で被爆死した友が可哀想。また亡くなられた友の親御さんに会うのがとてもつらく、生きているのが申しわけないような気がした。

〔広島 入市 女 13歳〕
(34-5838)

- 弟を探して焼跡で見た光景。ほとんど裸で全身火傷の死者の腰に、ワラ縄をまわし、男の人が2人、棒を天びん棒のようにして、そのワラ縄を吊って運んでいったところ。死者はまるで弓のように反って、揺れながら運ばれていった。
- 弟を探しに出て、見つけることができず、歩いて帰宅する途中軍のトラックにひろわれた。トラックはすでに満員で、私の足元には白いほうたいで巻かれた負傷者が横になっていた。私は両足を下ろす余地がなく、片足でトラックの荷台の側につかまっていると、その負傷者の連れとおぼしい女性が「おじょうちゃん、その人の上に足をのせてもええんよ。もう死んどってじゃけえ」と言われた。しかし、どうしてもものせられなかった。

〔広島 入市 女 16歳〕
(13-36-018)

投下直後から何日たった頃であったか……。直接やけどとか傷をうけていなくとも、直ぐに市内に入った人でも、頭の毛とか、まゆ毛がぬけて、血を吐きながら死んでゆくと聞かされてからは、毎日がとても不安でした。

父などは、皆がみていないと思って、寝ている時、そっとおきてはまゆ毛等を引っ張っていたのが、まだ心に残っています。

〔広島 入市 女 16歳〕
(13-40-002)

広島駅のプラットホームに降り立った時、駅前の建物が全くなく、西の山のふもとまで一望できる状態であったのには驚いた。

投下後、たしか3日は経っていたと思うのに、まだ駅前の大きな松の木がブスブスとくすぶっていたこと。

電車路ぞいに歩いていて、黒こげの電車が横倒しになっていたこと。焼けた瓦の上に粉々になった小さな骨を山盛りにして置いてあり、「どなたか心当たりのある方は持ち帰ってください」とやけた門柱に書かれていた文字と、その光景はいつまでも忘れることができない。

〔広島 入市 女 16歳〕

(34-5796)

我が家へ着くまでの道々どころがっている死人、怪我人が、あまりにもひどく、あまりにも多く、地獄だと思う。水を、助けて、と言われながらも、どうにもして上げられず、自分自身が気が狂いそうでした。

直爆の姉は、カッカッともえる火の中に横たわっていた光景は、今も目に焼きついている。一秒でも早くそのお骨を拾いたくても、熱くて拾えず、その想いは筆舌に表わすことは出来ません。

工場の使用人が、我が家へ2人報告にきた。女性の方は、頭の中から全身ガラスがつきささっていた。それを夢中で抜いたが、抜きながら手がふるえ、可哀想で、泣きながら抜いた。流れた血にほこりがついたのか何か、今でもわからないが、真黒、コールタールの中をくぐってきたのかと思えるほどだったことが、不思議でしかたがない。

もう一人の男性は、姉と話をしていた人ですが、舌が口を開けたら、ザクロのように割れ、足の裏も割れていた。熱は40度で下がらず、下痢がひどく、腹の中の物が全部とけて出ているのかと思えるほどの下痢。近くの町立病院は血便が出るので赤痢だと言って、家で隔離しろと、見もせず、薬もくれず、くやしい思いをして、家で隔離をしましたが、近所の人々が伝染病があると、食料を何一つ売ってくれず、本当に苦しい生活の中を、その人は気が狂い、部屋の中を下痢をしながら歩き廻り、

電気のコードで首をくくろうとする、雨戸をこじあけて井戸へ飛び込もうとする、その形相は、今でも脳裏に焼きつき、狂ったままで死んだ。その死体を大八車にのせて、村の焼場へ持って行き、お骨を拾った。

その田舎の部屋は、今でもこわくて入れません。

長い間、いろいろな事が脳裏から消えず、夜ねむれず、うなされる毎日でした。

私は紙一重で直爆はしなかったことが、直爆をした姉、行方不明の祖母、従業員30名のことを思うと、常に心をせめられます。

〔広島 入市 女 17歳〕

(11-0097)

ここでまたあの時の状況や感じたことと一口に言われても、思うだけで心のつまる苦しさがあります。

誰だか、どこの人か知らない人から「おねえさん、水を飲ませてもらえんか」と訴えている。思うように水も……体の側を見ると白い動く物があった。誰の体にも(うじ)。生地獄だ。割り箸のようなもので、そのうじを一匹一匹取りのぞいてさし上げたことが、頭の中にしっかりとやきついています。

(従弟)△△は、私達兄弟と同じように育てられました。かわいい弟でした。学校の命令で広島市上橋に建物疎開作業にて被爆しました。帽子をかぶっていたのでしょう。耳から上は見られるくらい毛髪も少しはございました。が、全身真黒に焼けただけ、顔の皮ははがれ、見る目ももう生地獄そのままです。私の名前を呼び、まあちゃん、ねえちゃん、僕はくやしいよ、死にたくない、生きたいよ、アメリカをやっつけたい、とほそぼそした声で、あの焼けた皮膚に涙がつたわって流れていました。思わず、頑張って生きぬくのだよ、と手をさすった時のあの手を思い出すと、胸がいたみます。

〔広島 入市 女 17歳〕

(13-20-008)

特に、幼い子供の亡くなっているのは、今でも忘れられません。防火用水の中に、水ぶくれで浮いていた4歳位の女の子のことは、強く印象に残っています。

旧浅野図書館にも大勢の死体があったように記憶しています。また、横川橋のところのむしろの小屋がけの救護所から、人々の苦しむ声や、泣き叫ぶ声が出て、耳に残っています。

私は地獄極楽とは、来世ではなく現実の中にあることを痛感しました。何の罪もなく、軍国主義を教育されて、地獄の苦しみの犠牲になった人々のこと、特に、中学生以下の子供達が、何より哀れでした。

私自身もショックから放心状態で、何もしてあげることが出来なかったことを、今になってみれば、たいへん心残りです。

〔広島 入市 女 17歳〕

(13-40-014)

当時私は広島県安佐郡川内村の国民学校で高等科1、2年女子を受持っていました。(現在安佐南区佐東町川内)

原爆投下の翌7日、郡下の若い教員が救援隊として入市しました。

顔は黒くむけ、両手の皮がダラリと下がり、ボロボロの服の人の波が国道54号線を田舎へと逃げて来られ、力つきた人は道端に倒れ介抱されながらも死んで行かれるのです。この有様にまず肝をつぶしました。市内ではまだ火が燃えて、人、牛、馬の焼ける死臭が漂い、防火用水、川は熱さを逃れようと飛び込んだ人が水ぶくれになって死んでおられ、私は体の震えが止まりませんでした。本当にこの世の地獄でした。

次の日からは学校の各教室は足の踏み場もないほどの被災者があふれ、薬も簡単な物しかなく、塗ってあげた次の日にはウジ虫が傷口にいっぱいわいて異臭を放ち、また、下痢や嘔吐をして、肉親の名を呼び、苦しい、水と言いながら次々亡くなられ、水を飲ませてあげる位で何もしてあげられず、ただ合掌するだけでした。

学校も教員自身が被爆死したり、先生の夫、父等が亡くなられて人手は不足し、高学年の児童に手伝わせながら救護に当りました。もちろん、お寺、集会所、大き

い家等は被災者でいっぱいです。死体は戸板等で川原や橋のたもと等でダビにふされ、毎日、毎夜、人が焼かれました。その上に、川内村では2部落あるうち1部落の全戸より1名づつ、建物をこわしに義勇隊として入市しておられ、全員死亡されて、村役場も家族もてんやわんやでした。青年は出征していますし、残された女、子供が毎日広島市内へ死体を探しに出られ、毎日のように葬式が続きました。

学校へは肉親を探して多くの人 came られましたが、生きて引き取られて行く人もありました。中でも私の心に残るのは7歳位の女の子で、横になって動けない所へ父親が来られ、チョコレートと砂糖をおいて私共に頼むと言ひ残し、また軍務にでしょうか、涙ながらに出て行かれ、その子は亡くなりました。どんな事情があったのか判りませんが、その時の父娘の姿が目に残りついて離れません。

家のタル木でもくい込んだような、ひどい怪我を横腹にした中年の女性も、すごい傷口でしたが、ただ赤チンキを塗ってホータイをしてあげるだけで、翌日はウジ虫が中の方までいるのです。お医者さんは村に1人、老人に近い人がおられるだけで、初めの間はどうにもなりませんでした。

また、受持の女子の父は戦死。母が義勇隊で死亡し、女の子三人が残され、農家でしたのでクラス全員で手伝いに（農作業の）行ってあげたりしました。本当に当時の有様は現在の人にはとても想像できるものではありませんでした。

その後しばらくしてから、原爆手帳を取得するため証人になってくれるよう、私を尋ねた子供（もう大人になってからですが）には、三人位証人になりました。

〔広島 入市 女 18歳〕
(23-0110)

生きている人間の、皮膚がヤケドしてたれさがった顔にウジ虫がわいていた。顔をウジ虫がはっていた。ペロンと皮膚がとられ、目が赤ムケになっていた事。

うつろな目をして歩いていた。「こんなにひどいので生きていられない」「生き地獄」だと思った。

はじめてみた、この7～8歳の男の子の姿が、今も脳裏にやきついている。おそらく親をさがして歩いていたと思う。

〔広島 入市 女 19歳〕
(13-19-041)

② 20歳台 (被爆時)

人びとの苦しんでいる様子。着ているものがずたずたにちぎれて、肉が、血が出ていて、生きているのか死んでるのか、物を見るのも出来ずにぐったりして、うずくまっている人達。

畑のなすが木になったまま真黒になっていたり、方々で親を呼ぶ声、子供や老人、男女の区別も出来ない位やけただれて、息たえだえの人達。どうしてあげることも出来ません。

〔広島 入市 女 20歳〕
(23-0384)

広島駅一番ホームの焼けあとに、九州行きの列車がいつ来るとも分からないまますわりこんで、7カ月の腹をかかえて動くことも出来ず、ただじっとすわっていた。

「そかい」で父母の元を離れて山の方に行っていた小学生が、一緒に20人ほどいた。話によると、先生が「広島がやられたから、皆早く帰れ」と言って生徒だけ帰されたそう。駅内で水が一本だけ出っぱなしに出ていた。皆でその水を飲み、食べる物として何一つ無かった。

夜になると、あちらこちらで火の手があがる。子供達がそれを見に行ってくれる。木を井〔桁〕に高くつんで死人の山を焼いているんだよと、子供達は言う。ハエも蚊もない夜、ラジオも何もない夜、変なおいだけがただよう。「ぼくの家も分からない」「私の家も分からない」と皆言う。

少し歩いて見ると、やけた手がレンガの中から片手だけ見える。足の先が見える。「おばさん、見ない方がいいよ」と男の子が言う。この子供達、親にはぐれて一体

今どうなっただろう。私と同じ運命を広島で背負った子供達、元気にいるだろうか。食べ物がないので「サツマの守」で見舞客の持って帰るべんとうを分けてもらって来て、私にも「食べな」と言って食べ物を分けてくれた子供達、今どこで何をしているのでしょうか、もし生きていたら知らせて下さい。

電車のレールも曲がってそっていた。氷屋さんのカキコオリ入れのガラス皿が、きれいな水紋波もようになっていた。

見るもの聞くものすべて、背中の中の毛がヨダツ思いで1週間すごした。

〔広島 入市 女 20歳〕

(40-1165)

8月6日、午後、列車が不通なので、海田市駅下車、広島に徒歩で入ることにして歩きはじめた。国道を広島方面から来る人とすれ違うたびに、やけただれた着物と、真黒になった顔ながら、どの顔もみな安心して、うつろなひとみで、いくらたずねても、ピカーと光ったらドンと大きな音、気がついたら周り一面火の海だったとの事。

向洋をすぎて、広島に近づいてくると、広島空は真赤に燃え上がり、人の群れはさらに多く、沿道には力つきてか、ばたばたと倒れている人が次第に多くなりました。

ただただ恐怖と、驚きで、何をするすべもなく、どこをどう歩いて行ったか、夕方牛田の我が家にたどりついたが、すべて我が家はあとかたもなく焼けくずれ、ただ母一人、庭のすみにうづくまっていた。

あれから40年、道々すれちがった人々のうつろな瞳は、いまでも忘れられない。大方の人は亡くなられたのではないだろうか。

〔広島 入市 女 21歳〕

(11-0161)

被爆3日後の8月9日、姉とその嫁ぎ先、親戚の安否をたずねるために、山陽線海田市駅から徒歩で広島市内に入る。途中向洋あたりで、広島一中何某君の遺骨ここにありと戸板に大書して家族の迎えを待つ遺骨を先ず目撃。

比治山あたりまで来ると一面赤茶けた焦土、正に焼けただれた街が遠くまで目に入り、ビルのコンクリートだけ残り、それまで走っていたであろう電車、バスなどその場で赤錆色で停止したまま立っているのが、死がいを見るようで、ぎょっとした。

道路を行き交う人は、着衣は破れ包帯も痛々しい怪我人。むしろや焼けトタン板をめぐって身内をさがす人ばかり。爆心地近くを己斐方面へ辿ったため、道路端に防火用水槽にもたれたまま死んでいる人や、川面に胸に名札を付けた死者、馬、牛など家畜も無数に流されていた。

己斐近くに来ると、家は焼失せずに残っていたものの全部爆風で傾き、姉の家も2階の棟はくずれ、支え棒で支えてやっと残っていた。姉の夫はその前夜（8月8日）直爆の大やけどで収容先の古江小学校で死亡、姉の三男も生後4ヵ月で爆風で柱に頭を直撃即死した（8月6日）。

親戚のどの家にも死者、怪我人が多く出ていて、あの8月9日に見たこと、聞いたことは、40年経った今でもあざやかに目に浮び、生涯忘れることは出来ないと思う。

新型爆弾とかピカドンとか言って、当時は性能も判らずにいたが、この原爆の怖しさは体験したものには判らないと思う。

〔広島 入市 女 21歳〕

(27-0180)

40年の月日は流れても、あの恐ろしかった思いは忘れることは出来ません。

火傷の人、頭髪のない人、死人の山、泣く泣く大声の人、真黒の人、泣きわめく裸の人。私はぶるぶる震えて声も出ませんでした。私もはだしで歩いていました。歩くのに足ウラが（ハレテ）泣き泣き、生きた気持はありませんでした。

生地獄のような眼で、死人がにらんでいました。忘れません。

あの時は私大きなお腹をかかえて、3日間さまよい歩き、今思うと身震いします。どうか無事産まれてくれるよう祈りました。

〔広島 入市 女 23歳〕
(34-4550)

死んだ人の間をぬうようにして歩いたこと。

あんなに多い死人の間を歩くなんて、この世の中にある事ではありません。私が死んでも忘れられる事ではありません。

母も背中、顔半面、両うでをやき、髪もぬげ、30年に亡くなりました。ハイガンでした。タバコはすいませんでした。

〔広島 入市 女 23歳〕
(34-5093)

あの日は、死んだ人々とケガ人が、山のように、私等がのって来た列車に運んで来〔られ〕た。今もあの時の事は思い出したくない。

7日にいとこの(軍人)生死を知りたく相生橋近くまで行ったが、とてもこの中では無理と考えて、広町の生家に帰る。

14日、岩国の我が家に帰宅する道中、線路ぞいには死んだ人、まだ生きている人、もう顔や手足にはウジ虫が動いていた。良い方は新聞紙をしいて横になっているが、多くは地面にそのまま、目の当てることが苦しいほどでした。

何と言ってもベロベロにぶら下がった皮、赤く見える肌がいたいたい。

あの時の事は、もう思い出したくない……。その気持は今もかわらない。二度とこのようなことは無いようにと願う私です。

〔広島 入市 女 24歳〕
(23-0383)

それはまるで地獄絵でした。

人体が炭化している人々。苦しんで防火用水に入ったのでしょうか、外側にでている部分は炭化、水槽の中は人体の形をしていました。

川を流れていく多くの死体、半死にの人たち、兵隊さん水をくれと言ってる人たち、きれぎれの声でお母さん、お母さんとかぼそい声でいってる女性、赤黒く焼けただれて死んでいる人等々、罪も無い多くの市民たちが何故このように殺されねばならないのか、水をあげたくても2人の幼な児をつれての旅の途中で、暑さと死臭の街を通り抜けることに一生懸命でした。1人や2人なら水をあげることもできたでしょうが、大勢の人が街中に倒れて死にかけているのです、とても子供づれの私にできることはありませんでした。早く忘れたいことだと、今でも思っている位悲惨なものでした。

〔広島 入市 女 29歳〕

(13-11-030)

実父が中心地の製薬工場で直接被爆し、全身に火傷を受け、家屋の下敷きになったが、自力で這い出し、五日市の自宅までようやく戻ることが出来た。

その工場は焼失したが、五日市に仮工場が設けられ、父はその工場長として再勤務することになった。全身の火傷もそのものはほとんど治癒し、健康を取り戻しているように見えた。ところが、10月21日夜、父は残業後、五日市街道の路上で突然の死が訪れた。何人も発病状態を知る者もなかったが、医者は被爆が原因だと、明確に言った。

〔広島 入市 女 29歳〕

(13-29-004)

③ 30歳台（被爆時）

多くの人が水を求めて、防火用水に首をつっこんで死んだり、川に入って死んでいる人達。また、知人に会った時、やられたと一言、皮膚はボロ切れのようにたれ下がり、何と言って良いか、そうして上げれば良いか分かりませんでした。私は赤ん坊を負って父と主人を探すのに懸命でしたので、申し訳ないと思っています。

また、父は9日になくなったことは分かりましたが、主人が分かりませんので、収容所で探していました時に、やけどに（うじ虫）がわいているの見た時の（ショック）、何とたとえようがありませんでした。

私はその日、8月19日を最後に、主人をさがすことをあきらめました。けれども一生忘れることは出来ないでしょう。

〔広島 入市 女 30歳〕

（13-20-092）

当時私は疎開していましたが、市内宝町に住んでいた、父や兄の家族のことが心配で、生死も分からないので、7日朝、入市しました。私の目を見た広島は無くなっていました。一面焼野原のようで、私の歩く道も定かではありませんでした。どうしてこんなひどい事になったのか、訳も分かりません。人も少なく、何か煙って、いやな臭いや、見る死体でした。

家族のことがどうなっているのか、どこかへ逃げて無事でいてくれるようにと、祈るような気持で、夢中で歩きました。途中、日赤病院が、外形がありました。中に入ったら、コンクリートの床に、たくさんの被害者が、ずらりと寝かされていました。私はその人達の間を歩いて家族を探しました。皆同じように見えて、男女の区別も分かりませんでした。水を下さい、水を下さいと、私の足にさわりますが、何人もの人で、私にはその時どうして上げることも出来ませんでした。その人達は間もなく物を言わなくなって亡くなったのでしょうか。

家の焼け跡に行きましたが、熱くて入れませんでした。家族がどこへ行ったか分かりません。歩きつづけました。

川にはたくさんな死体が浮いていました。トラックが来ていました。死体をよせてはトラックに積んで、いっぱいになると出て、また、次のトラックが来ていました。死体は何カ所にも分けて、集めて焼いていました。死体を焼く臭いと煙で、顔をおそうようでした。私は今見ている姿が、地獄だと思いました。恐ろしかったです。

この時は、私はまだ、どこかに逃げていて帰って来てくれるのではないかと、私の前に姿をあらわして欲しいと願っていました。

〔広島 入市 女 32歳〕

(04-0357)

死人の姿が、こんな言葉はいけないけれど、まるでおぼけとはこのことかと思うようだった。男か女か、またなにも罪のない子供が真黒になって死に、また頭に大きな硝子がささったまま死んでいる。元安川には大根をたる〔の〕中につけたように死体があり、自分もけがし、布切れを身体にまといながら子供の名前を呼びながら、狂乱のごとく叫ぶ母親。その母親もついに倒れ死んでゆく、こんな悲惨なことを誰がしたといたい。

近隣の奥さんが、娘の子が動員で出されて中心に近いところで被爆して西の方へ走って行くのを見たということで、お母さんは24時間その娘の名を呼び続けてついに倒れた。その声を思い出すと今でも涙が出るほど可哀想で気の毒な、その娘さんも西へ逃れたので黒い雨にあい死んでいることだろう。全然わからなかった。ついに帰らなかった。

〔広島 入市 女 32歳〕

(23-0068)

道や橋の上に死んでいる人や、大やけどやけがで動けなくて、ただ水を下さい、水、水とうめくように言っている人々の中を、どうして上げることも出来ずに歩いたことが、今でも思い出すと何ともやり切れない気持です。

それにも増して、山中高女に2年生で行っていた娘を探しながら、人からの知らせで金輪島にいると聞き、親類の人と舟をやとって9日に行ってみたら、もう娘は7日に、そこで母さん、母さんと私を呼びながら息たえて、自分の名前を言ったと言い、髪の毛だけ少し市役所にあずかってくれていて、骨もなにもなく、大勢の人と一緒に焼かれていましたので、もう少し早く見つければ死に目にも会えたのにと、思い出す度に涙が出て、原爆さえ落ちなかったらと、忘れることがない毎日です。

〔広島 入市 女 33歳〕

(34-4555)

8月6日早朝、私達は芋畑で鋳仕事をしていました。原爆が落下した瞬間、鋳の先がピカッと光った。アラ不思議だこれは大変と言って、仕事をやめて家に帰る途中、広島方面の空に、白とピンク色できれいなわた菓子のごとき雲が、下から、しかも入道雲のごとく、空高く上がり、とてもきれいに見えました。

早速広島へ入市して、宇品から南観音まで歩きました。母親、兄、姉達は、皆顔や胸、手等に大やけどをして苦しんでいました。

己斐方面はまだどんどん燃えていた。川には死体が浮き、たくさん流れていた。路上の死体にはムシロがかけてあった。どこまで行っても死体がたくさんありました。妊婦の死体の腹は、4斗樽のように大きく、足は1升びんの大きさよりまだ大きくはれ上がり、かわいそうに、どんなにかつらかったでしょう。可哀想で、お気の毒で、私は涙が出てしばらく止まりませんでした。

原爆はおそろしい。戦争はいやです。今からのちは、もう戦争をしてはいけません。あの日の広島は、この世のあわれな地獄だと言う実感が、今でもはっきり思い出されます。

〔広島 入市 女 34歳〕

(34-4434)

私達家族は、当時徳山市と岩国市の中間あたりに住んでいました。8月6日朝8時すぎ、義弟がちょっとあれごらんと東の空を指差しました。見れば、その前ドーンと音がしてたので急いで東の空を見ますと、黒い塊のような雲がもくもくと高く広がってゆきます。あれ爆弾だ。この間光工廠へ落した時の煙は大きな黒い帯のように流れて行ったが、この雲のようなのは違う。岩国か、いや広島みたい。私フト夫のこと〔を〕考え不安になりました。

そのうち、昼すぎ頃から着衣がぼろぼろになった人、怪我で皮のむけたような人が駅から歩いて帰るのが見えます。そこへ近くの△△△△さんの親戚の人が飛んで来られ、広島で大けがして帰って来たので薬を分けて下さいと言われ、亜鉛華オリーブ油、赤チン、脱脂綿、ガーゼ、消毒薬などたくさん差し上げましたが、足らぬ足らぬと毎日のように来られ「奥さん広島は大ごとですよ」。そのうちあれはコバルト爆弾だ、広島は全滅だと風評が耳に入ってくる。私も居ても立ってもおられません。今に帰って来るかと待ちましたが、さっぱり様子がわかりません。

そのうち、福川に開業しておられた□□医師が（家の方よりデンワ）うちはトラックを工面して今日行ったが、家が倒れてケガして、島根県の方へ収容されたのであす行くとの事、うちでもそれじゃと、やっと汽車切符買って、義弟は広島の地理に詳しいので、夫の母と、私は生後10カ月の娘を背に、窓から押し上げてもらってやっと乗り、岩国すぎた頃から、どの家も東側の屋根瓦が波のようにずれて、広島へ近づくと従ってひどく、五日市あたりからその被害がひどくなり、魚の腐ったような臭気、焼けた家、まだくすぼっている所、広島駅は壁だけの廃墟。降りてみて、余りに残酷で凄惨で、話すにも胸が痛みます。

夫はどこにと、義弟について歩きながらも、病院のあったというあたり、練兵場あたり、川には死骸があり、まだ燃えている所もあり、知らぬ土地で疲れるばかりです。生存者名簿があるというので見ましたが、字が一字違う。それでももしやと思ったり。翌日も同じこと。はやこちらが疲れ切って、むごい状況見て気が滅入るばかり。その後の事は後述しますが、医師ばかりの集団（開業医のみ40歳～45歳位）だったけど、ちりぢりばらばらに逃げられたのか？なぜすぐ家へ帰れなかったのだろうと思う。上記の△△さんは、すぐ家で手厚い看病を受けられ、頭、顔、首、手も足もケロイドだらけでも助かられて、80何歳かで先日亡くなられた。うちの夫は、仮病院へ収容されたけど、ほとんど何の手当もしてもらえず亡くなった。当時、手当の方法がわからなかったからとの事だけど、可哀想で残念でなりません。

たとえ看病しても助からなかったとしても、少しはあきらめられる。

しかし、焼け死んだ方、死体も見つからない方、水をほしがってもあげられなかった方、家の下敷きになって助けて下さいと頼まれるのに、助けてあげられなくて、みすみす死なした方のことを考えれば、思わず合掌せずにはおられません。

〔広島 入市 女 37歳〕

(40-0738)

④ 年齢不明

直接被爆した多くの人が、ほとんど裸で、衣類は焼け落ち、身体は黒こげ状態で、本当に無残な姿で死亡された光景に、戦争の恐ろしさを見せつけられた感で、何といい表してよいかわかりません。

即死の人もさることながら、元気のように帰宅、あるいは学校、お寺に避難した人達が、数日の内に次々死亡され、また、大やけどした上に化膿して、生き人にうじ虫がわいて、本人はもちろん看病する人、家族の苦しみは大変なことでした。

また、当時は負傷しても薬がないので、ありあわせの生瓜や、せめて赤チン位で気やすめていどの養生、まして食糧難で、私のうちにも親類の人が来て、3人は後日、1週間以内に亡くなりましたが、本当にあわれで気の毒でした。

後から原爆のことを知って、腹がたつより情けなくて、聞けば前々ピラ等が落とされたとの情報も知り、おかみを信じきっていた国民が不利を見たのか、私にはよく分かりませんが、これから原爆等この世にあっては、決していけないことと思います。

〔広島 入市 女 年齢不明〕

(34-7165)

Ⅲ. その他

a) 男

私は当時組合の職員でしたので、死人の焼き方ばかりしていましたが、今考えてもぞっとして、思い出したくもないほどです。

一車荷車に5体～6体の死人を、縦横ぶっ違いに積み重ね、ウジの湧いた、焼けただけ、皮もズルムケの死体を焼場に運び、ガソリンをぶっかけて火をつけては焼く、これが1日に5～6回の繰返し、ムセルようなウダルような真夏に、人間のすることではないような非道なことの明け暮れでした。

その時私は考えたものです。こんな惨事はもういやだ。二度あってたまるかと、いきどおりを感じながら、手を合わせては焼きました。真に生地獄でした。

遺族の方が来られた時には、どれがどの方であるかもわからない有様でした。

〔広島 救護 男 42歳〕

(34-5279)

両親が死亡して2～3日目、おばあちゃん痛い、と苦しんでいた妹が最後に（母親の死亡したのを知っていた）お母ちゃん、お母ちゃん、痛いよ……と母を呼んだ声が、いまでも耳から離れない。

〔広島 被爆状況不明 男 8歳〕

(34-6068)

広島市内や長崎市内とも、悲惨な状態をあまり多く見ておりますから、書きたくありません。

〔広島・長崎 入市 男 37歳〕

(13-22-037)

b) 女

死体が皆火傷で真黒だったのが忘れられません。

自分は幸いに建物の中におりましたが、原爆投下時腰をぬかし、這いずって外へ出ました。

家族が皆ばらばらになって、分からなくなりました。

〔広島 被爆状況不明 女 14歳〕

(14-0074)

広島、長崎に投下数時間後に入市して、大型バクダンが落ちたとはいえ、想像を絶する死の惨状におどろいた。

8/10日長崎に入市。新興善国民学校の救護所に配置され、1週間は被爆者を戸板に二人ずつのせて集めあっていた。生きながらの地獄。うめき声の人達の悪臭……水、水、水……皮膚のない裸の人、人、……白いうじ虫、シラミ……目玉だけが光っていた。次々と死んで行く人達と、行方もわからずうろうろと迷う人、人、人……髪は抜けて。

これまで書くのがせいっぱいで、思い出したくありません。未だにいやですし、夜になって眠れなくなります。

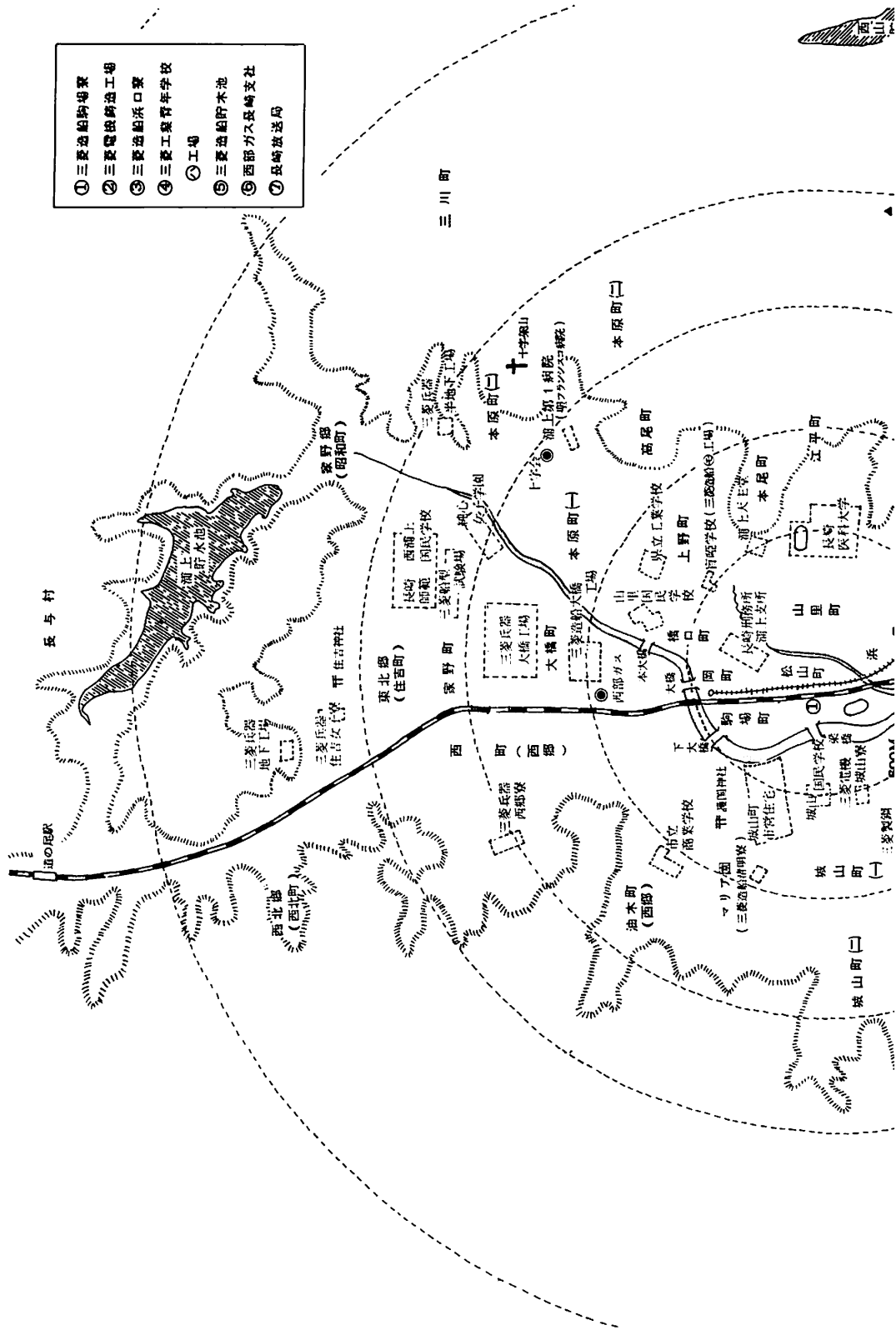
栄養注射をしながら救護をしましたが、ケロイドが残っています。未だに原爆投下の恐怖が、頭にこびりついています。薬で落ちつけて書きました。

〔広島・長崎 入市 女 17歳〕

(13-44-001)

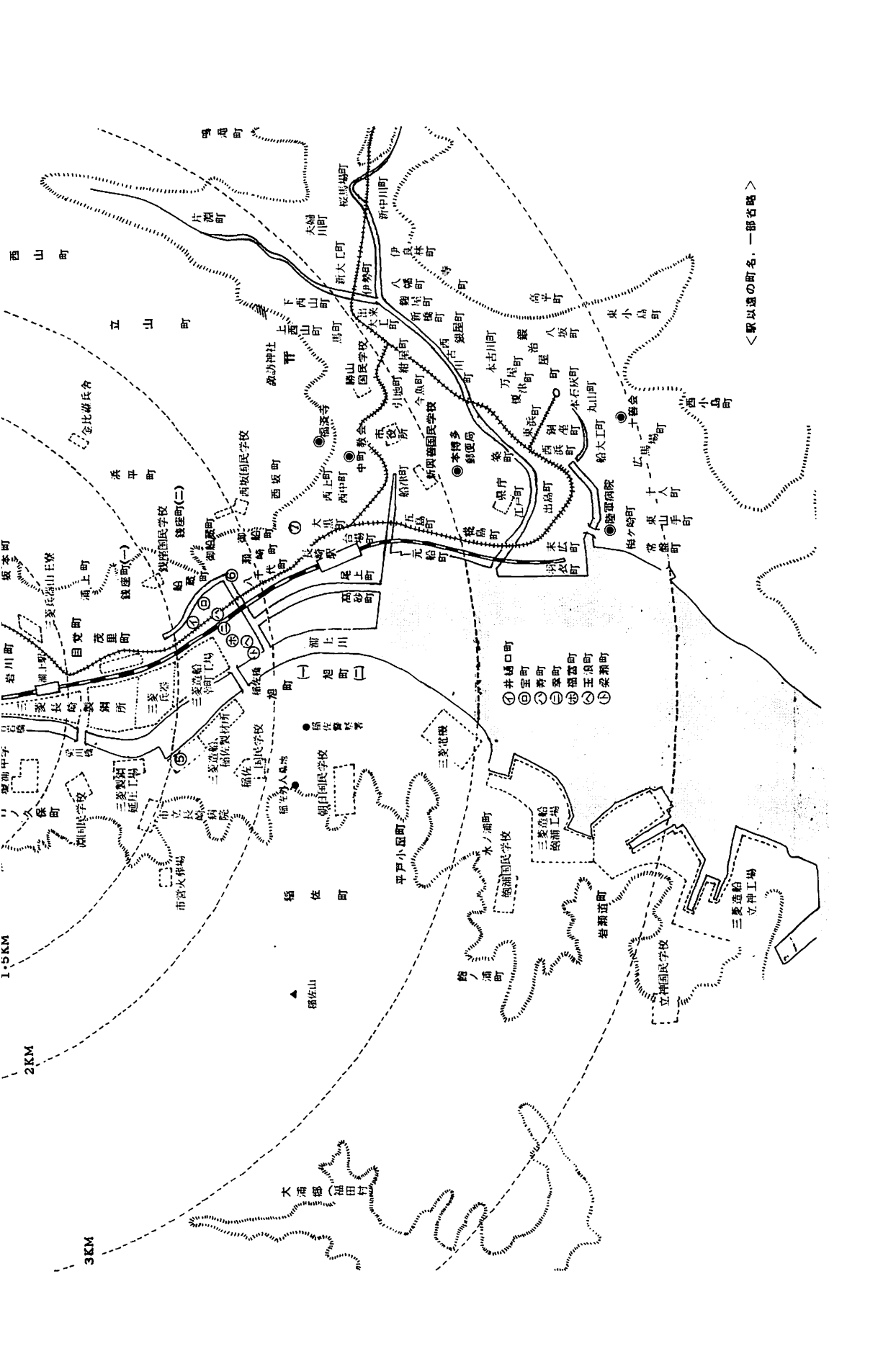


長崎



- ① 三菱造船船塢
- ② 三菱電機造船工場
- ③ 三菱造船浜口寮
- ④ 三菱工業青年学校
- ⑤ 工場
- ⑥ 三菱造船貯水池
- ⑦ 西部ガス長崎支社





＜駅以遠の町名、一部省略＞

- ④ 井樋口町
- ⑤ 至町
- ⑥ 至町
- ⑦ 至町
- ⑧ 至町
- ⑨ 至町
- ⑩ 至町

1.5KM
2KM
3KM

大浦郷 浦田村

三波造船立神工場

立神国民学校

岩瀬道町

三波造船立神工場

三波造船立神工場

水ノ浦町

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場

三波造船立神工場



I. 直接被爆

(1) 2.0Km以内(直爆)

a) 男

① 9歳以下(被爆時)

友だちとかくれんぼをしてあそんでいた。自分がかくれる方で、(防空壕)入った瞬間すごい爆音がしてビー玉ぐらいの穴に入口がなり、外に出ると友だちの姿はなく、家もこわれ、ひどい状況だった。

母親は家の下敷きになり、自分が助け出した。

[長崎 直爆0.5km 男 6歳]
(42-1630)

○火炎の中でもがき苦しんでいる人びと。

○道路といわず、畑に、枯れた川に苦しみもだえている人びと。

○母と再会した時、あまりに変わりはてた母、驚きと悲しみ。

○そして被爆より3日目に死んだ。祖母と幼い私の二人で母をダビにしたことなど。

[長崎 直爆1.0km 男 6歳]
(23-0359)

朝まで元気だった人が、急に大量の吐血をし、数時間後にはもう死亡という事態を数多く見た。

自分達もそうなるんじゃないかと、子供心にもおびえたのを思い出す。

[長崎 直爆1.0km 男 7歳]
(42-2338)

くやしさをばかり、恐怖を通りこして。

岩川町の墓に行き、花の水等飲む。

母、弟と一緒に自分の体を動かすことでせいっぱい。

ピカドン病がうつると貴重品等しょうきやく処分される。

頭に髪の毛がなくピカピカになり、タオルをかぶり、衣服はモンツキしかなく、それを着ていたので異様な様子だったと考える。

文書があり、その字の部分が白く灰状になって、他の所が黒く炭化していたこと。

〔長崎 直爆1.0km 男 8歳〕

(42-1733)

② 10歳台 (被爆時)

私はけがもなく、9日夕がた家にかえりました。帰るとちゅう、たおれた家の下から、川の中から、たすけて、くるしい、水を下さい、とたすけをもとめる声がかきこえても、なんにもしてやれなかったこと。家のしたじきになって、顔だけ出している人、それもたすけてやれなかったこと。今でも、あの日の事を思うとつらい。

夜になって、おじさんが、ひふがむけ、あごの下にぶらさげて帰ってきた。そうして2、3日してなくなりました。

今でも、あの日のこと、助けをもとめていた人、そして苦しみながら死んでいった人のことは、一日だって忘れたことはありません。

〔長崎 直爆1.5km 男 10歳〕

(13-23-035)

①投下後30分～40分頃より、全身焼けただれ、ヒフはぼろ布のようにぶらぶらさげ、口々に水、水とって苦しみながら水ガメの中に顔を入れたまま死んで行

く人を目の前でみた時。

- ②従兄も同じようすがたで私の家に来、母親及び妹、妻を坂本町の防空壕に入れていると行って来、近所の方の手だすけを受け、空襲警報の中をカゴにのせ、になって来てくださった時、伯母、従姉等のようすを見、いくら戦争とはいえむごいことをするものだと思い、また、苦しみの中で△の名を呼びながら死に行くその姿がいまでもマブタの奥に焼きついている。
- ③3日後、従兄の家の残った家族がどうしているかをしるために、同じ年の従兄弟と行く途中、穴弘法の上の所でなくなっている人を見つけた時、手足は普通の人の3～5倍にもふくれあがり、大きな石によりかかっているのを見、その後30年ぐらい、その石にはその人が大の字になっていられた所に同じ形の大の字形にツタがはえているのを見ていたが、いつの頃かわからないが、そのツタもカレ、いまではあと方もなくなっているようだ。その時の思い出の一つがこのように一つ一つなくなり、さみしいような、ほっとしたような、ふくざつな気持でいる。

〔長崎 直爆2.0km 男 11歳〕
(42-0595)

母、兄のことが印象的に残っています。

母はあの日に、建物の下敷きになって、這い上がって来ましたが、その時に下唇に火傷、死亡する1週間位前に、母が尻が痛いと言うので見ると、肛門の上の骨の部分に穴が開き、指一本通る位肛門に向かって穴が開いたことが、痛々しく思います。

兄は母と同様に穴が開き、あの日は大腿部の付け根より指先まで大火傷で、両足ウジがわきました。また、鼻下部分に穴が開き、口の中まで指一本通る位の穴で、体臭も物凄く臭い思いをしていました。死亡する時に、牛の肝の大きさ黒紫色の血塊を出して息を引き取り、死亡しましたが、母、兄の悲惨な姿を思い浮かべます。

母は実家で8月25日午前11時30分死亡。

兄も実家で10月1日午後4時死亡。

母の実家

長崎市本原町3丁目△△△ △△△△方にて

〔長崎 直爆1.0km 男 12歳〕
(42-2345)

あの時の話にふれると、落ちつかなくなるし、胸がしめつけられて息苦しくなる。無理に話そうとすると、精神状態が変になりそうで、とても話せない。

弟の死に様が目には焼きついている。あの時、呼んでも答えがなかったので逃げたが、ただ気を失っていただけではなかったか、そのことを思うと、五臓六腑がヒラヒラと動く。

〔長崎 直爆2.0km 男 12歳〕
(04-0802)

家の下敷きになり、叔父にたすけ出され、自家の見える所まで行った時、下の方からけがした人が大勢にげて来ていました。その人たちから、水、水といわれ、自分のはんだんで、この人はもうたすからないと思った人には水をやり、また、たすかると思う人には、水をのむと死ぬといって、水をのませなかったので、その後その人々が生きのびていてくれるのをねがっているが、もし死んでいたらと思うと、水をのませなかったことが心のこりです。

〔長崎 直爆2.0km 男 12歳〕
(42-2186)

被爆して平戸小屋町4-△△△の自宅に帰り、父と一緒に田舎（三重）に向かって歩き出した。途中、浦上川に大勢の人が水を飲みに行ったのか、ゴロゴロ横になっていた。何か手助けをしようにも、自分も父も着のみ着のままですらどうすることも出来ず、その場を去って、自分達が避難するのが懸命でした。

田舎に翌朝着いて、ようやく、ああ自分達は助かったのだなあーと思った時、途中の被爆者の苦しんでいることが、悲惨でなりませんでした。何と言ってよいか、言葉では表現できません。ただ私達が何もしてやれなくて申し訳なく思っております。

〔長崎 直爆1.5km 男 14歳〕
(13-23-013)

私の家は、坂本町で爆心地より800mぐらいの所でしたので、家の中にいた母と妹は、家の下敷きになり、燃えさかる家の中から死物狂いではい出し、坂本町の防空壕の中で、母は火傷と怪我をし、4歳の妹は家の梁に狭まれ、虫の息になっていた。私が三菱電機から帰った時は家は跡形もなかった。

坂本町の防空壕の中は、死んだ人や負傷者でいっぱいだった。あたり一面黒焦げの死体や被服が焼け落ち、半裸状態の人が、顔は腫れ上り、皮膚はただれ、折り重なるように死んでいた。中でも母親が幼い乳飲み子をしっかりと抱き、そばに子供達3人、親子5人頭を並べて死んでいたのが哀れだった。

家の下敷きになって「助けて下さい」、皮膚は焼けただけ全裸の姿で「水をくれッ」「水を下さい」と地面をのたうち廻り、這いずり廻る人を見ている、なすすべもなく、苦しい悲鳴と断末魔の声が一晩中続きました。父が焼跡から焼けた鍋を拾って、谷川から水を汲んで来ると飛びつき、むさぼるように水を飲むその人達は、しばらくするともう動かなくなりました。明けて10日、昨夜の断末魔のような声は消え、人々は死に絶え、まさにこの世の地獄で死の世界だった。

谷川も死体でいっぱい埋まっていた。10日早朝、妹が亡くなった。妹の遺体を焼跡において、怪我した母を連れ、父と3人で母の郷里東彼杵町に帰った。母は、妹と別れる時、ボロボロと涙を流し、「△△ちゃん、堪忍してね。母ちゃんは先に

帰っているけん、魂になって帰っておいで」と泣きながらいていた。その母も8月17日、水さえ喉を通らなくなり、病院から連れて帰る途中、私と弟で引っ張っていたリヤカーの上でもだえ苦しみ、肩で息をしてた息が急に止まり、母も亡くなりました。父は11日すぐ長崎に引返し、妹の遺体を探しに行きましたが、遺体はなく、そこら一面白骨の山だったそうです。おそらく軍隊が来ていっしょにまとめて油をかけ焼いたそうです。その父も、32年6月に疲労と病氣、胃癌で亡くなりました。

〔長崎 直爆2.0km 男 14歳〕
(41-0031)

私は被爆当時満14歳でした。あの閃光を、当時長崎市竹之久保町にあった3階建ての鉄筋コンクリートの校舎の1階で硝子の窓越しに見た。それっきり私は失神し、気がついたときは瓦礫の下に埋まっていた。自力で抜け出ることができたが、その校舎の1階にいた10人位の同級生は全部、その瓦礫の下で死んでいるもの、まだ動いてピクピクしている、助けてくれの連発であった。私一人で何ともできなかった。

広い運動場にさまよいでた。たった一人である。暑い日であったが、そこで目がくらんで倒れ込んでしまった。何か父や母や弟妹たちの安否が気になり、服はボロボロ、裸足で自分の家目指したが、まるで方角、方向の見当がつかずあちこちさまよい歩いたことを記憶している。

死体があちこち転がって、また火傷、けがした人が、半分化膿しかけた手で私の足を握って、水をくれと頼む。井戸のまわりには、半死半生の人がたかっている。中をのぞくと、死体が浮いている。それでも何とか水を汲み上げて、のませてやる。私ものんだことを記憶している。私はそのとき感じたことは、地獄とはこのようなものではないかと。

私は、戦争であるから仕方ないと言っても、原爆をつくった人、それを使った人を憎む。

〔長崎 直爆0.5km 男 15歳〕
(40-1160)

今でも頭の中は、あの当日のことは自分の命のあるかぎり忘れられないことであろう。なんの罪のない人々が苦しんで命を失って行かれたことであろう。今、この白い紙の上に書けと言う方がむごい。こうしてペンをとっていても非情と〔ママ〕悲しみに文字がかすんでいる。

自分も一度に10人の肉親を失って、今生きているのがやっとである。15歳で一人になって、やけになったこともある。今は肉親の安らかにねむれる所をと思っているが、今のところ子供を成長させてやるのに精一杯である。

〔長崎 直爆1.0km 男 15歳〕
(23-0220)

私は当時学生で、学徒動員により魚雷部品を製作する工場に勤務中のとき被爆しました。工場の破片が左眼に突き刺さり、あわてて抜いたのですが、黒目部分が1cm以上切れていたそうです。そのようなけがのため盲目状態で何とか工場を抜け出したのですが、重傷で倒れている人たちを助けることも出来ず、ほんとうに心残りです。

工場の外の山かげは、負傷者のかたたちが道ばたに横たわっていっぱいでした。私もそこでじっとしていたのですが、皆水を飲みたいといって死んでいきました。当時のことですから、勤労女学生等も君が代や海ゆかばを歌いながら死んでいったようで、ふびんでなりません。

幸い救援列車で大村の病院に運び込まれ、一命が助かりました。

終戦当時、何万人の人を一瞬にして殺せる武器を発明した人間が、なぜ、何万人もの人の命を救えないのだろうか、不思議でした。そして、もし将来戦争の不安が起きたら、平和のために命を捧げようと思いました。でもあれから40年、平和な

生活になれて、凡々と送っており、犠牲者の方にすまなく思っております。

〔長崎 直爆1.5km 男 15歳〕
(13-47-010)

顔全体と身体半身が火傷であり、頭はボケで何も考える余裕すらなく、原爆投下翌日浦上を通過して（今では爆心地）長与の実家に帰ったが、途中、大橋付近の怪我した人たちの姿は言葉では表現できない。印象に残っているのものは、水を求めて私の足もとにすがりつく人、立っている人はずたずたになった着物をまとっていると〔思って〕近寄ると、それは皮膚が破れたれ下がっている人であり、とても悲惨であった。

40年たった現在も、どうしても記憶できない事がある。それは浦上駅から浜口町（平和会館登り口）までの区間をどのように通ったか記憶していない。

〔長崎 直爆2.0km 男 15歳〕
(42-1384)

水の浦町の叔父の家に下宿していたので、被爆の日から3日目に父母の実家のある三重村へ向かって、浦上、松山、大橋、道の尾と、今思うと爆心地を通過して、16歳になる従兄と私（当時14歳）2人して帰郷しました。浦上に入ると、まだくすぶり続ける焼野ガ原、製鋼所の工場の鉄骨が「あめ」のようになぎ倒されている様子が、まず私達を驚かせた。道路の真中で荷車を引いていたであろう馬車馬が、腹を大きくして横たわってる。鼻をつく悪臭、2人ともたまらず手拭で鼻をおおう。

松山町へさしかかると、道路両側には、やけどをうけた人々が寝ころんだり、座っていたり、全然動くことさえ出来ない人も。声を出せる人々は、私どもに向かって例外なく「水をくれ」と悲痛なさげび！！私どもには何をしても出来ない。なるべく2人でくっついて道路の真中を歩く。

母親と子供2人が、濡いねをしていて、そのままの状態か、黒こげになった死体。眼をそむける。

かたわらの小川には、水を求めて力つきたか、重なり合って水面を確認することさえ出来ない。思い出すさえ身の気よだつ想いでペンも重くなる。

時々原爆写真展などを見る機会があると、正視することが出来ない。ほとんどの写真の現場を直接に見、そしてその現場の「におい」が鮮明にただよって来るのをどうすることも出来ない。

[長崎 直爆2.0km 男 16歳]
(13-53-002)

自分の名前や住所等を叫んでいた人達や、水をもとめ、助けをもとめて苦しんでいる人達を見ながら、なにもしてあげることができず、あの時、氏名や住所をはっきり聞いておけばよかったと、今でも心のこりに思っている。

[長崎 直爆2.0km 男 16歳]
(42-2329)

即死

頭にレンガが当たって割れ、脳ミソがはみ出していた男の子。

団子らしきものを口にくわえたまま、焼けこげていた母と子。

足がくずれ、腹ワタを出して焼け死んでいた馬車の馬。

畳ごとふとんごと川に吹きとばされて、死んでいた病人。

衰弱死

火傷あとがうみ、シラミがわき（とつてもとつてもあとからわいてくる）。

ガラスの傷や、ガラスの無数の破片が体につきささる。

以上は家族や知人でないので、心の傷としてまでは残っていない。

苦悶死

消防団の人に手が足りないからと言われて、まっ黒こげの人をタンカにのせて、救護所まで運んだ。当時16歳だった私には重すぎて、途中で落としてしまった。その時すでに死んでいるものとはばかり思っていたその人の口から「あいたた」と声もれた時の驚きは、わかってもらえるだろうか。申し訳なくて、力を入れなおして運んだが、あれが死を一層早めたかと、今も心のこりだ。

生の迫力で訴えたい

被爆直後、多くの人々がうつろな目で近くの山へ逃げていく姿は、幽霊さながらだったが、そういう姿を映画で再現されても、私には生の迫力を見てきているだけに、映画などでの表現は生ぬるい。いくら誇張しても誇張になっていない。それが原爆なのだとして強く叫びたい。生の迫力を伝えないと、世界平和の願いは届かないのではないか。

〔長崎 直爆1.5km 男 17歳〕
(13-20-044)

いっしょにいた友人が死に、その母親の配慮で列車で諫早市に運ばれ、諫早市内の小学校に収容されたが、ムシロの上におかされ、まわりにいた人たちがうわ言をいっては次々に死んでいった。手当をうけた腕にまいたホウタイの間からわいたウジ虫がポロポロこぼれてなさげなかった。

重症の人たちが死にたえ、海軍病院が空いたので、軽症から症状を悪化させた私たちが運ばれ、本格的な手当をうけるようになった。

病院では同じ部屋に入院していた被爆者が、最初は40～50人いたと思うが、熱を出してうわ言をいっては、次々に死んでいくので、つきそっていた母がゆり動かしてねむらせない日もあったくらいだ。

占領軍から海軍病院が接收される時(1～2カ月ほどたっていただろうか)生きのこった仲間は7人だった。

〔長崎 直爆2.0km 男 17歳〕
(42-1081)

軽い火傷でも大変痛い思いをするのに、私は原爆で上半身をやけどした時、その熱光線がおさまるまで無限に永い時間を感じ、死ぬような苦しみをしました。そして裏庭からやっとの思いで戸外に脱出した時、あたりに人影はなく、死の街と化したような印象を受けましたが、避難途中、家の中や防空壕の中に生き埋めになって、人々の助けを求める声にも手をかすこともできず、その人達が生きながら焼け死んだかも知れないと思うと、今さらながら心が痛みます。

その後、山手の方へ避難する時、麓から必死になって避難してきた人々がそこで力つき、狭い山道で倒れて、焼けただれた死体が累々と横たわっており、その人達はほとんど道端の小さな溝に顔をつっ込んで息絶えておりました。おそらくひどいのどの渇きで末期の水を求め、水を飲もうとしたのに違いありません。しかしその小溝には所々に少しばかりの泥水の水たまりしかありませんでした。それらの死体は焼けただれてふくれあがり、中には男女の区別さえ判らないくらいで、ひどい悪臭を放っていました。私はこんな光景を見て、まるでこの世の地獄を見ているような思いがして、その人達が憐れで可哀想でした。

その後私は大橋の救護所へリヤカーで連れて行かれた時、その広場で誰が誰だか判らぬまま、無数の死体が火葬されている臭いをかいで、はき気がしました。あの原爆は瞬時にして、生きとし生ける者の尊い命を奪い去ったのです。

またその後、茂木町の救護所に移送された時は、傷の痛みに耐えかねて発狂した人もいました。私自身も放射能障害で死線をさまよひ、生への執着を失くしました。部屋の中央近くで亡くなった人がおれば、その周囲の人々は寝床をその方へ引きずって行かれるので、その度毎に明日は我が身かなと思って、ただ死を待つばかりでした。ところが、こんな目にあっても、幸か不幸か私は命を取り止めました。

その後私は原爆の後遺症に侵され、被爆後40年たった今もお病気で、日夜を問わず苦しみ続けています。この苦しきは誰にぶっつけたらよいのでしょうか。私は原爆を恨み呪います。こんな苦しきは私達だけでもう結構です。世界人類の滅亡を救うために、核兵器の廃絶と戦争のない真の平和を心から切望します。

〔長崎 直爆2.0km 男 17歳〕

(42-1266)

電車のなかで被爆（1.2km）したあと、ほこりがおさまりに見通しきくようになって、ガレキのなかを我が家の方向に歩きだした。行き交う人はみんなベロベロにヒフがたれさがっている。しばらく行くとどこかで「兄さん、兄さん」と呼ぶ声があるので見回す。くずれた家のハリの下に女の人が押しつけられている。よくみると赤ん坊を胸にしっかりとだきしめ、ハリを背中で支えて押しつぶされないようにしている。私は手でハリをよけようとしたがビクとも動かないので、近くにあった材木でテコにして持ち上げ助けだした。母親の片ウデはダラリとしている。骨折でもしているのか。赤ん坊大丈夫みたいです。「ありがとう」と言っていずくともなく去って行った。その赤ん坊もいま元気であるかと思う。今なら119番して手当てうけられたらと思うが、あの時は仕方がなかったと自分にいいかかせている。

〔長崎 直爆1.5km 男 18歳〕

（42-1579）

例ア）～ウ）まで全て直接の体験済みのことなので、個々に取り上げ始めるときりがない。

現在でも夏、ゴミなんか燃やして煙を見ると、今でも当時の臭いがしてきて苦しくなる。こんな思いが頭の中から消えるのは、私が死んだ時でしょう。

私のように直接やけどもけがもせず、現在健康な人間でも、常に頭の中から消すことは出来ない。

やけどでケロイドなど残り、病気がちな人達の心の中には、40年経った今でも、誰も踏みこむことはできるまい。

〔長崎 直爆2.0km 男 18歳〕

（13-32-018）

逃げて帰る途中、稲佐川にかかる橋の上まで来た時、ここでも数人の人が死んでいた。焼けて死んだのか、怪我で死んだのかわからない。見ようとも思わなかったし、見る余裕もなかった。しかし、ただただ一体だけ未だに頭にこびりついている死体があった。それは女の人で、乳飲み子を右手にだき、橋の欄干にもたれて死んでいた。その人は首から上はなかった。その時は可哀想とも思わなかったが、未だに頭にこびりついていてわすれられない。

大橋の市電の車庫では、2、3台の電車が燃えていた。人は皆入口の所で折り重なり死んでいた。電車が一瞬にして燃えたため、人は皆乗車口にさっとうし出られなくなり、折り重なって死んだな一と思い、それに人間の体ってやけると小さくなるもんだな一とも考えながら家に急いだ。

当時私の家は大浦元町にあり、被爆地を端から端までつき抜けて帰った状態だったので、火のない所をと思い、稲佐川の川づたいに走りました。死体の数は川の中が多く、爆風で飛ばされたのか、それとも自分でとび込んだのか、それを見ても可哀想とか、むごいとか、そんななまやさしい感情はわいて来ませんでした。ただ私も当時18歳、兵隊検査も終り、令状を待つのみでしたので、兵隊に入ったらこの仇はきっととってやるぞ、とつぶやくのがせめてものなぐさめでした。

[長崎 直爆1.5km 男 19歳]
(13-23-061)

私達は、飽之浦造船所（三菱長崎）製缶工場で勤務していたが、20.7.29日の大空襲で工場が破壊、生産不能となり、幸町工場に移動、9日より直ぐ入場の指示があり、その日の出来事で、当日は朝10時頃空襲警報があり一時近くの横穴に待避し、帰社して間もなく（11時過）爆音を聞いたので、工場入口付近で金比羅山方向をみた瞬間、閃光を目にしたので直感的振り向くと同時、物凄い爆風で飛ばされ（約8m位）工場の下敷きとなり、数秒（失心）。たち上がると真暗で一寸先も見えず、そのままの状態ですと真黒い雲のようなものが上昇、見渡す限

り建物が破壊、どうなったんだと戸惑いながら我にかえり、周囲には二、三人の後輩が顔面に血を流し、頭を見ると血が吹いており、タオルで押さえ、どこか近くの救護所に行くよう指示。自分も避難しなくてはと走ろうとしたところ、右眼の上から熱い血が流れており、左手が具合が悪いので見ると、肘関節のところ突起していたので曲げて見たが、曲がるので脱臼でない知り、板切れを当てタオルで縛り、待避壕まで行く途中、中年の婦人でしょう、顔面血だらけ髪はちぢれ両肩の衣も部分に焼け、両手で赤ちゃんを抱き、裸足で茫然とし、泣いているのか声は聞こえたと涙は見えなかった。

その先では電柱に繋がれている馬が跳ねて、見ると鞍が燃えており、すぐ横に兵隊が銃を杖に立っており、手を貸してくれと声をかけられたので、どうしましたと言うと、腰をやられて動けないのです。自分も事情を話し立ち去り、待避壕に着くと、うめきで人が溢れ（おそらく火傷の方達）安堵したのもつかの間、前の製材所が物凄い勢いで燃え、煙が入って来ては大変と思い、他のところに行こうとすると、同級生の△△君（対馬出身）がいて、俺も連れて行ってくれと言うので、どうしたと聞くと、首を垂れうづくまって、わからないと言っておるので、体を調べたが外傷は見当たらず、ただ耳の後ろに箸で刺した程度の穴がありました。（後で知ったのですが、そのままの状態で死んでいたそうです）

その晩から左手が痛み一睡も出来ず、翌日造船所の病院に行ったのですが、廊下、控室等は足の踏み場もないほど患者がいてうめいており、ほとんど火傷患者で、背中等は水脹れで皮膚が（20mm位）浮いて両手を震わせており、その光景を見て愕然としました。結局自分の怪我は15日まで治療受けることが出来ず、手首まで内出血で脹れあがり袖も抜けない状態となり、15日福岡に帰省、約3カ月余りで完治、原因は3cmほど骨にヒビが入っていたのでした。

〔長崎 直爆1.5km 男 19歳〕
(23-0239)

③ 20歳台（被爆時）

仕事中右下肢にひどい傷を受け、私の身の周りは血の海となり、意識もうろうとして横たわって、その現場に動けずにいた時、同僚の△△△△君、▽▽▽▽君、××君が担架を持って助けに来てくれた時ほどうれしかった事はなかった。

浦上川の右岸の榎の木の下まで運ばれたが、出血が止まらずにいた時、その右岸ぞいに続々とけが、やけどした人が川平の方向に続々と上がって行った。私は道路にねかされうつろな目で苦しんでいた時、当時大橋兵器の診療所の外科医だった浦川先生と御会いした。先生も傷だらけで私を見るなり、逃げるのが精一杯の時、傷を見て下さり、今後、当座の処置をアドバイスして下さいました。

救援列車が来たと言われた時、先に書きました三人（他にも一人いたかも）が兵器の総合事務所前まで運んでくれた。累々と屍は重なり、その途中目の玉が片目胸の辺までさがった（とび出して血管や神経がひもようになってブラ下がっている）その母親が私の担架に託した赤ちゃんが死んでいた。それとも知らずに私等に預けるまで頑張り、我が子の死も知らず死んで行った母親のこと、無念さ、いじらしさ。

救援列車の床の上で、もがくことも、苦しむことも、声を出すことも出来ず、諒早刃りにつめたくなっていた私の左側にねかされていた女性。私自身ひどかったので何もしてあげられなかった。

松原の駅で、自分は大橋の巡査、派出所の巡査で、私の顔を知っていると言って私をオンブし汽車から降ろし、大きな握り飯を食べさせて下さった種村と言う巡査さん、ぜひお会いして心から御礼の言葉をのべたい。（自分の家が仮病舎の大村市松原小学校の近くにあったらしい。当時19歳位）

〔長崎 直爆1.5km 男 20歳〕
(42-1413)

とにかく被爆した者では〔でなければ〕分からない。
かわいそうな人。何を書いて良いやらわからない。

おそろしさと、にくしみでことばに出せません。

〔長崎 直爆2.0km 男 20歳〕
(40-1091)

当時長崎医大薬学専門部3年生で、ピカドンの時間薬用植物標本室にて整理中。

ア) の項

山の上に向い逃げましたが、山頂に兵隊がたくさん死んでおり、生きているものもいましたが、"ア、俺は生き残ったんだ"という意識しかなく、山越えて反対の村へ一目散に逃げたのみです。どんな格好かわかりもしません。

イ)

ア) の如く当日は(逃げる)ことだけでしたが、翌日も午後、何時かトケイ等ありはしませんので不明ですが、大学学生が気に入り、近づこうとしました。全く道という道はなく、久留米の衛生兵たちが患者対応、道路作りをしていたようです。方向が全く不詳、火災はありで、大学行きを断念。スワ神社付近軒下で野宿(ニギリ飯、ダイコン、ウメボシの隣組、市、軍の対応があったようです)

3日目は所詮まだ行けないと思い、ゆっくり当所で眠り続けまして、不確実ですが、4日目に大学現場に到着しましたが、同級生はすべて死亡し、清水教授と生存者でとむらい、後帰郷することになります。死者は手、腕、足が切れ、目玉はとびだし、または内臓がとびだし、or 10m余もとんで木にぶち当たり、くっついているといった状況でした。

ウ)

水をくれ、助けてくれと言うより、足音を聞いてか?目を開けてくれ!と言う叫び声が一番印象強く頭に残っています。

〔長崎 直爆0.5km 男 21歳〕
(13-47-021)

南瓜と私

無病息災を祈り、冬至には南瓜を食べる風習があるが、私にとってはこれが悪夢を思い出す原因となり、とても南瓜を食べる気になれない。私の人生を変えた原爆が、今に至っても戦慄の記憶となつてつきまとつていようとは、なぜ南瓜を見て脅えるのか、次に私の体験を記してみよう。

8月9日、火の粉を払いながら下宿（松山町）に帰り着いたのは夕方7時頃であった。すでに家は焼け、下宿のお婆さんは放心状態で突っ立っていた。そこにはご主人と孫娘の美智子ちゃんの死体が横たわっていた。気を取り直して、近くの南瓜畑で一夜を明かすことにした。その時の枕が南瓜である。

月はこうこうと照り、火はあちこちでくすぶり、傷心した負傷者の姿が見える。うとうとしている頃、近くに若い女性が這うようにして助けを求めて来た。「水を飲みたい、水を下さい」月明かりに照らし出された姿は、背中に硝子の破片がささり、動く毎に硝子が光って見える。瀕死の状態である。その中で必死に水を求める姿！水を飲んだら死んでしまうと論ずが聞き入れない、終りには狂人のように水を催促する。薬は無し、どうすることも出来ない。時が経つにつれ息も絶えだえにだんだん小さな声になって行く。細まりゆく声にも私も泣いて、隣に寝ていたお婆さんに助けを求めると「どうせ死ぬなら水をやりなさい」と言う。私は近くの泉から鉄カブトに水を一杯汲んで来た。さあ水だと言うと、彼女は横たえていた体をムックリと起こし、私の両手を握り、息もつかずにゴクゴクと飲んだ。そして「うまかった、有難う」と一言言ってまた横になった。これが末期の水となったのだろう、東の空が白みかけた頃、話しかけたが返事がなく冷たくなっていた。何のなすすべもなく死んで行った彼女の冥福をただただ祈るのみである。それ以来、南瓜を見ると悲惨な光景が蘇って来る。下宿のお婆さんも1カ月後亡くなった。

〔長崎 直爆1.5km 男 23歳〕

(40-0308)

火傷をして、まるでゆうれいのようになって工場の中から出て来た人々の様子。また、水をもとめる人々をふりはらって逃げて来たのが心のこりでならない。

また、けがをした手にうじがわいた時はぞっとした。

〔長崎 直爆1.5km 男 23歳〕
(42-1358)

原爆投下直後、工場の倒壊により負傷した若い女学生達を助け出した後、火災がひどくなり、大きなパイスタ等にはさまれていた人達を見ながら、助け出しきれず、苦しみながら死んで行った人達の姿が、未だ目の前に浮かび出てくる。

あの時火災さえ起こらなかったら、みすみす死なせず助け出すことが出来たのと思うと、残念でならない。

〔長崎 直爆1.5km 男 29歳〕
(40-1092)

家族全員死亡しました。そのむごたらしい事が忘れられない。もう戦争はいやです。世界平和を祈ります。

〔長崎 直爆2.0km 男 29歳〕
(42-2092)

④ 30歳台 (被爆時)

当時医大附属病院にいた。轟音一瞬真暗となって何も見えなくなった。室内の天井、周囲の壁は落下、ガラス窓は粉々、机、椅子等は跡形もなく破壊された。次第に明るくなり周囲が何とか見えるようになったが、そこには誰も見当らなかった。

とっさに屋外に出たが、黄塵が舞い上がっていた。市街および裏山からは火の手が上がって来た。看護婦さん達の白衣は吹き飛び、ほとんど全裸で倒れている死体を幾体か見た。医専の負傷学生に肩を貸して裏山に避難した。

真赤に咲いていたカンナもすっ飛んでしまった。かぼちゃ畠では、葉や茎はどこかに飛ばされて、黒い土の上にはかぼちゃだけが数個ころがっていた。墓地の石塔はめちゃくちゃに割れて跡形も残さない。

山伝いに逃げる途中、負傷のため歩行出来ないもの、水を欲する者、息絶えて死んだ人、熱傷のため蛙の皮をむいたようになった人等、いろいろの光景を見た。正にこの世の地獄だ。

夜は諏訪神社の高台より、市街地の大火災をしばし眺めた。当日は諏訪神社の防空壕で一夜を明かした。翌日は上町の友人の下宿に行ったら、生残り負傷者が5-6人寝ていた。自分一人で行くえ不明になった友人を探しに、再び被災地に向かった。市内はすっかり焼野原となり、焼死体はあっちこっちにごろごろとしていた。友達にめぐり逢うことは出来なかった。

彼等はどうとう帰って来なかった。

〔長崎 直爆1.0km 男 30歳〕

(13-15-130)

思い出したくないが、脳裏に焼け付いた地獄図は到底忘れることは出来ない。

あの一闪の光のあと、真黒になって逃げて来る人……人。全てが黒に焼かれ、黒く焦げた皮膚から吹き出している真赤な血潮。満足な姿をしている者は一人もいなかった。ほとんど男か女か見分けもつかない。

倒壊して黒く焦げた家屋から吹き出している真赤な炎。それに黒い雨。爆風で裸になった樹木。緑を失った自然。全てが被爆した私には黒と赤の印象しかない。

柿の木の下に、黒い顔に血をにじませた女の人がムシロの上に無表情で坐っていた。側には小さい子供が血にまみれて転がっていた。戦争に関係ない子供達まで犠牲にするとは……。

あの幽霊が前に手を上げてだらりと垂れている姿が、被爆した身体では一番染な

自然な姿だったとは、被爆して皮膚がピラピラ垂れた人が皆この姿だった。

[長崎 直爆1.5km 男 30歳]
(42-1623)

私は内地鉄道司令部要員で、当日、五島派遣部隊輸送処理および軍用貨物車両の輸送状況を調査のため、長崎出張を命ぜられ、8時頃の列車で一足早く長崎駅に到着し、部隊到着までの時間を構内軍用貨物輸送状況調査、浦上よりの構内にて貨車の下に待避被爆。私は完全武装のためか（軍装）、奇跡といってよいほど傷一つ受けていなかった。

被爆直後の状況はあまりの異状なる変化のため、頭がへんになり判断が出来ない。自分が傷一つないことが不思議でならず、これでは輸送処理どころではない、早く司令部に帰らねばと、浦上駅（方面）に向かうのは不可能なり、長崎駅裏より入江を渡り稲佐へ出て山越えしなければと入江に向かう。幸い伝馬船を拾い稲佐に出る。稲佐の町も完全に破壊され、廃墟と化した家屋の上を通り山上へと登る。途中家の下から助け求める声あるも手のほどこしようがない。今思い出しても私自身信じられない事ばかりのレンゾクでした。

その時の事を2、3思い出して見ると、私は完全軍装のため奇跡的にも無傷でした。母親と15、6歳の男の子に助けってくれと声をかけられた。子供の半裸体の背中に5、6cm余りの木片がささり、多量の血がでていいる。顔面真青だ。手のつけようがない。木をぬくと出血がひどくなるので、木のまわりに母親の袖をちぎりまきつける。精一杯の手当法であった。母親も顔半分やけただれていた。早く医者にかかるよう、心にもないことをいって別れた。

城山方面に向かう道路ぞいの半壊の家屋の下敷きになった女の人が、助けを求めている。近くのを柱を引き出し、テコにして出られるようにして手をにぎると、皮がズルズルとむける。ようやく助け出した。家の中に子供3人いると言うも、オウトウなし。1人は家の前に黒コゲとなり木切れのようにほうり出されていた。日光をさけ、すでに死者となりし母親と子供を日陰に移し、城山方面へ下山。まだまだ言葉に、ペンに表現出来ない事に遭遇。道の尾駅……浦上駅間の線路上にたどりつき、

それから先どうしたのかまったくわからなくなっていた。

〔長崎 直爆1.0km 男 31歳〕
(40-0843)

いつもすべての上の死と向かい合って生きています。死のかけが一念にしみついている。

あの時、生あるものすべての終りを感じた。

〔長崎 直爆1.5km 男 34歳〕
(13-23-017)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

父に聞いた話ですけど、私の妹が原爆で即死し、母は大変なきずを受けて苦しみながら、何日もかけて鹿児島の実家に帰ったこと。

実家に帰った時から母は病の床について、そのまま回復することなく死にました。幼い私と姉を残して死んだ母は、大変に心残りだったと思います。

〔長崎 直爆1.5km 女 4歳〕
(23-0027)

ちょうどその時トイレでおしっこをしていた。パッと明るくなったので窓を見ると、七色の光が、右上から左下に走った。びっくりして、おしっこをやめたいけど

止まらず、やり終わらせてあわててモンペを着て部屋に行くと、家の中がメチャメチャで、ガラスが散乱して、部屋のスミに母と妹、弟の他に、近所の子供3人が伏せていた。母がガラスで眉間を切ったこと。いっしょにいたジュン子ちゃんのお母さんと二人の姉さんが、家のそばまで帰っていて、外にいたため全身やけどで、お母さんと下の姉さんは誰であるか分かりましたが、上の姉さんは目がほほのところまで飛び出し、鼻はとけて形がくずれ、誰と見分けがつかないくらいだった。さっきまできれいなやさしいお姉さんが、こわくて近よれなかった。防空壕の入口の近くにムシロを敷いて寝かされていた痛々しい姿は、今も忘れられない。

次の日からガレキを集めて、死体焼きの手伝いをした。

〔長崎 直爆2.0km 女 6歳〕

(13-22-007)

防空壕の中で3日間、出るなど言われて、祖母や弟、妹とすごした。7歳の時で、何が何だか良く分からなかったが、ただ恐ろしさと空腹に、泣くことも忘れてじっと動かないでいた。外では異様な臭いとざわめきがしていたように思われます。

一番最初外へ出た時、目の前に家が一軒もなかったことも覚えています。

〔長崎 直爆1.0km 女 7歳〕

(13-32-048)

幸いにして家族に死者は出ませんでした。父親が顔面とお腹以外ほとんどやけどし、かやの中に腹ばいになって死にそうにしていた毎日でした。かやの中にいるその身に、うじ虫がわき、母親がピンセットで取っている様子を、今も時々思い出します。

進駐軍が上陸するというニュースが入り、近所の人々も皆リヤカーに荷物を積み、山の方へ逃げて行くのですが、父は、自分はそのままでいいから皆んなはにげなさ

いと、いいましたが、母が、私達も残りますとって、結局近所では家ぐらだけが残ったと思います。そしたらほんとうに進駐軍がやって来たのです。タタミの上を土足で上がって来て、色々物色していました。私達子供と、母は乳飲子に乳をふくませ、息をこらし、足音をしのぼせて水いも畑の中に身をかくしました。その時はほんとうにこわくてこわくて、一生忘れられない出来事になりました。

(ところで、水いも畑ってごぞんじですか？ 田んぼのように水のある畑に、里いもの葉のような大きな葉が出来るいも畑です)

[長崎 直爆2.0km 女 7歳]

(13-53-005)

○生きている人たちは食物がなく、苦しかった。

○死んでいった人の姿は、やけどで水を求めて川の中でたくさんの人たちがかさなりあって死んでいった。

○親、兄が大やけどで苦しみ、1週間後に口から緑色のような物をはき、死んでいった。

[長崎 直爆1.5km 女 8歳]

(23-0323)

私の家の近くが山でしたので、私達家族も皆、山ににげましたが、後から後から大勢の人々が山へ逃げて来ては倒れ、水をくれ、水をくれと叫んでは息たえていました。口もきけず、手もさしのぼしてやる事が出来なかったことを、今思うと残念でなりません。

[長崎 直爆1.5km 女 8歳]

(42-2320)

私の家の近くに親戚の家があり、その家の窓より近所の友達と話をしていた。その時「ピカッ」と異様な光がして、その瞬間、家の外へ出なくてはと思い、玄関の方へ走ったのですが、家の方が先に倒壊して、家の下敷きになりました。夕方、父が勤め先より心配して来て、助け出してくれました。

翌日、私の家も倒壊し、住むところもなく、ひとまず時津の叔母の家に、父におぶってもらい、姉と3人で行きましたが、その途中にはどこも黒く焼けた人々の死体が、川の中にも、道端にも、いたる所に、ずっと続いていました。山のかげには焼けただれた人達が「水を下さい、助けて下さい」と、そのむごたらしさは今でも忘れることが出来ません。

時津の家に行くと、怪我や火傷をした人達で室の中はいっぱいでした。父は（三菱造船所）に勤めていたのですが、ケガもヤケドもしていなかったのに、3週間ほどしてこの世を去りました。きっと父は、助かった私達を残して死ぬにも死にきれない思いだったろうと、父の死を思い出す時、胸が痛みます。

〔長崎 直爆2.0km 女 8歳〕

（42-2129）

その日私は国民学校3年生（9歳）でした。私の家の（現在長崎市油木町△△△）下の家に遊びに行っておりました。屋内ではありましたが、麦わら屋だったためか、目の前に赤い（真赤な）火柱が走ったと同時に、気がつくと4～5m奥まった所へとばされておりました。屋根のどろと、かべの土が、私の上にざらざらと降りそそぐかんじで落ちてきました。横を見ると炎がめらめらと赤い舌のようにもえて、とっさに外へ逃げなくてはとあせって、竹であんだえつり竹の中へ足を入れてしまいました。やっとの思いで足はずして、山の方へ皆のあとを追って逃げました。その時我家の方を見ると、瓦がまるで雪が降るような感じで落ちてましたので、家に帰ると危ないと思い山へ逃難しましたが、1人ぼっちになってしまったと思い込み、日が暮れて両親の顔を見るまで不安感でいっぱいでした。

〔長崎 直爆1.0km 女 9歳〕

（42-0594）

② 10歳台（被爆時）

当時警報があり、町内の横穴防空壕にいた。入口近くで飛行機の爆音がし、空を見上げたとたんに「ピカッ」と光り、爆風で壕の奥に吹きとばされていた。気がついた時は「けが」をした人がたくさん入って来てびっくり、何が何だか分からぬまま、皆について山の方に避難した。夜、父、兄、妹が来てホッとして眠る。

翌日、時津の叔母の家まで、浦上川のそばを歩いて行った。川の中、道端には黒こげの死体がいくつもころがっていた。目が飛び出た人とも出会った。肌が焼けてペロペロにたれさがった人も見た。全くこの世の地獄でした。

翌日から父は三菱兵器工場の救護に出かけた（勤務していたので）。2週間ほどして髪の毛が抜け出し、（もう死ぬとばい）と言っていた。無傷で帰って来ていたのに、救護活動のために死んだのだと思う。「子供を頼む」と言って死んでいった。子煩悩だった父にしてみれば、死ぬに死ねない思いだったに違いないと思うのです。

〔長崎 直爆2.0km 女 10歳〕

（42-2128）

私は親、兄弟、姉、妹を、数人を一度になくしました。人から何人と聞かれても指を折って数えなければすぐは言えないくらいです。あの時のことを思い出すことを懸命にさけてきました。私は女の子2人恵まれましたが、まだ一度もあの日の事を話したことはありません。思い出ただけでなみだがあふれ出して声になりません。

人びとが死んで行くのも、自分の身内が死んで行くのも、その時はただぼうぜんとしていました。私の身内では母が一番最後に死んだんです。その時が一番つらかった。母はもう頭がへんになっていました。私をしっかりとぎしめて「△△ちゃんも一緒に行こね、今雨がふっているから、雨がやんでから行こうね」何回も何回もくりかえしながら、いつの間か私もうとうととねむっていました。目をさました時には、もう母はつめたくなっていました。それから兄をおこして、翌日家のこわれた所から角材を拾い集めて、それこうごに重ねて、母をその上にのせて下から火を

つけてやいたんです。この時ばかり私も一緒にとび込みたかった。私が大声で泣きわめくと、兄は「泣くな」と大声でどなりました。その時私は、兄のことをなんと薄情な兄かと思ってなおもかなしくなりましたが、自分が大人になって、兄の気がわかりました。兄は私より大人、もっとつらかったんだということが。

〔長崎 直爆1.0km 女 11歳〕
(42-2133)

前夜まで元気でいた人が、翌日目をさましてみるとなくなっているという事が忘れられません。

また、兄達の死体が分からないのも心のこりです。

〔長崎 直爆2.0km 女 11歳〕
(42-2336)

ア) 道端には死体があっちにもこっちにも、中には水の近くで死んだ人々は、足でも手でも二倍、三倍にふくれている、とても見分けることは出来ません。やけどをした人などは、皮がはげて、ちょうど女性のストッキングを下におろしたようになり、赤はだが出て見ることが出来なかった事を覚えています。

生きている人は、水、水～と言って死んだ事。

イ) 苦しんでいても手を出してやるのがこわくて出来なかった。

ウ) 死ぬことなら腹一杯水をのませてやりたかった。

〔長崎 直爆1.0km 女 14歳〕
(42-0823)

動員学生として三菱兵器大橋工場の工作技術課で製図をしていました。被爆と同時に外に飛び出しました。

- 大学生が「どこか怪我していませんか」（自分を見てくれということ）。白いワイシャツはどうもしていません。「いいえ」というと、彼はパッと後向いて走り出しました。背中肉がぶら下がり血まみれでした。きっとどこかやられたと思っても、それがどこか気がつく余裕がないのでしょうか。
- 川の中へ逃げ込もうと思って線路を通ると、枕木が燃えていました。四、五歳の女の子が桃色に全身ただれ「お姉ちゃん助けてー」としがみついて来ました。恐ろしくて逃げました。あの子は怎么样了でしょうか。
- 川の中で右横にいた四十歳代の工具風の男の人が急に立ち上り「赤い花なら、まんじゅしゃげ」と歌いだしました。苦しそうな声をふりしぼって……「オランダ屋敷に」まで歌ってパタッと水面にたおれて死んでしまいました。住所も聞かず、家族はさがし当てたのでしょうか。

〔長崎 直爆1.5km 女 14歳〕

(40-0303)

○大橋町付近で人、馬が黒く焼けこがれているのが目についた。

○夕方、大橋町（現在の三芳町付近）のどこまで来て、城山、竹の久保方面は火災で燃えていたので、自宅（竹の久保、淵中学の下）に帰宅することが出来ず、当日は江里町（現在）付近の防空壕に入って休んだ。翌朝やけど人やけがをした人達は、たんぼの水を飲みに出た人々は、その場で死亡していた。

○自分もケガしていたので救援列車が来て乗車するように言われたが、竹の久保町（自宅）にいる母のことが心配になって乗車せず、後刻竹の久保町に帰ったが、家は倒れ焼失していた。母は発見出来ず、一週間後親類の人が焼跡から発見してくれた。

〔長崎 直爆1.0km 女 15歳〕

(42-1411)

たくさん、いろいろあって一口にはまとめられない。
本音は思い出したくない。

〔長崎 直爆1.5km 女 15歳〕
(13-29-015)

私達は工場の中に一列になってならんでいました。ピカッと光った時には屋根ははがれていました。男の人は目と歯ばかりで、血まみれでよろよろしては倒れて、私ゲタを片方だけはいてはしりました。

ぼうくうごうの前では馬がやけて鳴いて走るのでみんなきらっていました。

すこしたってから住吉の寮にいくとき、やけどや、けがしている人達に石をなげられながら、人について走りました。

その時の事は、今でも心の中にのこり、14歳の自分の何んにもわからなかった時代でした。当時のもようが目にうかびます。

〔長崎 直爆1.5km 女 15歳〕
(42-0882)

祖母、父、母、妹、弟、家族10人、被爆の日より2週間位の内に、つぎつぎに亡くなって、私1人生き残ってしまった。

そのような恐ろしい原爆を、戦争を終結させるという名目で、何の関係もない老人、婦人、幼い子供を犠牲にして、ほんとうに人間が恐ろしい。

しかし、現在の平和は被爆で亡くなった人々を始め、みんなの犠牲で、東の間の平和がこの日本にあるが、いつまで続くのか疑問です。この世から核を取り除いてほしい。

〔長崎 直爆1.5km 女 15歳〕
(42-2327)

当時私は家族4人で浜口町に住んでおりましたが、空襲が激しくなり、原爆投下のその日、朝から父と私2人で、少し田舎の方へ疎開家を探しに出かけ、山里町附近の道を歩いている途中被爆したのです。

その時あたりは真暗に、夜ようになってしまい、私達父娘は夢中で側にあった家に向けこみ、家のかべの下敷きとなり、しばらくの間気を失っていたようでした。

あたりの死人だらけの道をあちこちと逃げ廻り、やっと穴弘法山に登り、その登る途中、学徒報国隊の女の子が裸になり、やけどで息も絶えだえの体を、父は背におぶって歩きましたが、その途中、歌を唄いながらその子は死んでしまいました。その時の状態は、口、言葉でどう言い表して良いやら分からないほど、悲しいやら恐ろしさでいっぱいでした。2、3日間は食事も全然のどを通すことが出来ず、我が家の裏の電車の線路の上に、母の死体はころがり、真黒に手足などこげていて、弟の死体はとうとう見出せませんでした。

逃げ廻る途中でも、家の下敷きとなりちょうど七輪の中のような状態で、近くに火が燃え移って来るのに、助けようもなく、その場を逃げ廻った事など、まるで生地獄とはこの時の事でした。

焼け野になった我が家の近くの防空壕の中に、ただ一人、小さな子供が足の骨等折れたまま生きていたので、父はその子を救護所の方へ連れて行ったようでした。その後、フラフラの足をひきずり道の尾からの汽車に乗り、途中幾度も空襲を受けながら、やっと現在の地へたどりついたのでした。

地獄のような原爆の恐ろしさ、むごさは、私達一生忘れることが出来ません。

[長崎 直爆0.5km 女 16歳]

(40-1097)

諫早の海軍病院にいた時の事です。私の横に全身火傷の女の子がきました。頭から足の先まで全身ホウタイで巻いていました。動くことも出来ず大の字にねているだけです。私は涙がこみ上げて泣きました。この人に何か出来る事があればやって上げようと思いました。水をたいへん欲しがりましたので、看護婦さんに聞きましたけど、絶対に駄目ですよ、と言われたのです。水を上げると死ぬかも知れないと

言われました。私は傍らで、元気を出して頑張るとだけしか言えません。

しばらくして見にこられた先生が、だまって立ち去って行かれました。その間もずっと（水を少しでいいから飲ませて）と枯れるような声で私に訴えるのです。私はまた走りました。その時に、水を上げて下さい、と言われたので、私は急いで湯のみに冷たい水を汲んで、その人にのませて上げました。たいへんに喜んで、手も動かないのに指先を少し動かして、ありがとう、ありがとう、と何度もお礼を言ってくれました。

それから何時〔間〕たったでしょうか。私も疲れているので眠りました。そして目がさめた時は亡くなっていたのです。本当に痛くて辛かったですでしょう。

この方の名前は、北島ヒロ子（弘子）様です。

〔長崎 直爆1.0km 女 16歳〕
(40-0783)

看護婦養成所の同期生で親友だった人が亡くなり、死体もみつからないと家族が悲しんでいたと聞いていた。30年後、亡くなった親友の近くにいた人の話である。

被爆当日避難する際、コンクリートにはさまれ、手だけを出して助けを求めていたが、どうしてやることもできず、助けてやることが出来なかった、その人が親友だった。そこが焼けてしまったので死体も判らなくなったのだろう。

その話を30年後に聞き、非常にショックを受けた。長崎大学内にある〔友ここに眠る〕の墓に眠っていることと思います。

大学病院の裏山へはだか同然の姿でようやく避難して来た親子が、苦しんで芋畠をころがっていたが、その中静かになり動かなくなった。その傍らには子供の死体があった。そのような状況があちこちでみられたが、私達はそれをどうしてやることもできず、今思うと放心状態だった。

〔長崎 直爆1.5km 女 16歳〕
(23-0293)

あの当時は、自分がたすかっただけでもゆめのように思えるのに、人々のことがどうなったかは、かんがえるひまはなかった。またかんじたことは、その時は何も
ない。

人間おちつきが出て来て初めて、かんじることが出来るものである。
(口では、はなすことが出来るが、かくとなると、何から、どうかいてよいかわ
からない)

〔長崎 直爆1.5km 女 16歳〕
(40-1032)

原爆が落ちた後、気が付いて見ると附近は全部家もつぶれ、逃げる人々皆体中血
がつき、火傷された方は2倍に黒くはれ上がり、誰か見合わせることも出来ません
でした。それに足もとには死人が散らばり、脳みそは飛びだし、手足はちぎれ、本
当に地獄そのものでした。あの悲惨な姿。

家の下敷きになっている人からは助けての声聞きこえるのですが、自分も耳の後
ろから血がふき出しているし、それでも助けての声で手をかけて材木を取りのぞこ
うと頑張ってみましたが、どうすることも出来ず、救護の方が来られるまで頑張
ってと言って、あてもなく人がいる所にと行ってると、友達と逢い一緒に逃げてい
たのですが、私も動けなくなり、フランシスコ病院の所で横になってしまいました。
それから助けられました。今思い出しただけでも、地獄を目のあたりに見るよう
でいやです。

今から絶対に原爆投下、核実験はさけてもらいたい。

〔長崎 直爆1.5km 女 16歳〕
(42-1136)

私は学徒動員で兵器製作所に行っていましたが、原爆が落ちた時は親友と二人で話をしていましたが、ピカッとした瞬間に爆風で飛ばされ家の下じきになり、幸いにもはいだすことが出来ました。隣にいた友達は声は助けてと聞こえても、姿はどこにいるのか見えません。外に出ても建物はこわれ、人は皆黒くこげて、皮はびらびらはがれて、友達が建物の中にとり残されているのも助けに来てくれる人もいません。早く避難しなさいと言われて、線路を越えて避難しました。B29もまた来ましたが川の中にかくれて、身をかくしました。

夕方一番の救援列車で諫早海軍病院〔に〕入院しましたが、友達はとうとう生きてたままではい出すことは出来ず、亡くなったのでしょうか。今でも助けてという声が耳に聞こえて来ます。

父は八幡町の自宅で被爆しましたが、その夜から私をさがしに山越えして、兵器のあたりをさがしに歩き廻り、やっと三日目に海軍病院にいたことがわかり、つれに来ました。それから26年に亡くなりましたが、ずっと原爆の後遺症で、がんで亡くなりました。

〔長崎 直爆1.5km 女 17歳〕
(42-1221)

昭和20年8月9日のかの原爆一つのために、私の運命は思いもよらぬこととなり、死ぬまで一生忘れることは出来ません。

昭和20年8月9日より9月10日までの間に親、妹、弟、親戚、皆亡くなってしまい、この世にたった一人となり、何に例えようもありません。

怪我人の看病、死んだ者を自分の手で焼いたり、その時の様子はこの世の地獄としか言えません。死体を焼くにも燃やす物もなく、彼方此方から拾い集めて焼き、お骨は入れる物がなく、焼けあとに転んでいたやかんや鍋等を拾って入れ、墓に納めました。墓は大学病院の上にはありましたが、石塔は爆風で後ろに倒れ、周りの塀はくずれてしまいました。

私の町内で焼け残った家は一軒もありませんでした。一カ月余りは防空壕生活で、あと知り合いを頼り、諫早の方へ父、妹、祖母を連れて、市内の病院に入院させ、

そこで亡くなりました。死ぬ時は皆熱で顔はゆがむほどはれ、歯ぐきは真黒になり出血し、体全体に紫のはんてんが出、大便是真黒い物でした。

現在自分も体は丈夫でなく、病院へずっと通っていますが、40年の間の悲しみ、苦しみは口ではとても言い表わせないほどです。こういう悲惨な事は絶対全世界からなくなるよう、核兵器は絶対廃絶しなければ、本当の世界の平和は来ないと思います。

〔長崎 直爆1.5km 女 18歳〕
(42-0743)

家には父、母、弟がおり、爆風で父母は家の下敷きとなり、やっとの思いで、傷、火傷を受けて父親は脱出でき、母親は右太股を家の鴨居にはさまれ、助けて一と泣き叫ぶ声。どうする事も出来ず焼死して行く無惨な死を思い出すと涙が溢れ出、弟は爆風で吹き飛ばされ、真黒な死体となっていた。

〔長崎 直爆1.5km 女 19歳〕
(46-0072)

③ 20歳台 (被爆時)

私は三菱兵器製作所の中の材料研究課の事務所にいました。三菱兵器製作所の中でただ一箇所のコンクリートの3階建の2階でした。ピカドンの後いくらの時間が経っていたか分かりませんが、ハッと気がついて部屋を出た時には、5m位は離れた部屋から火がもえていました。事務室にいた3人と逃げ出しました。外に出ると前の総務課の建物は木造でしたので、助けてくれ、助けてくれとあっちからも、こっちからも聞こえて来ましたが、どうすることも出来ません。みんな4人ともやけど、けがをしている者だから、ただにげるのがせい一杯でした。

死体がごろごろしてる所を前の人が行く所について行くだけでした。あの時のことを考えるとぞっとします。あの総務課のペチャンコになった、あの大きな木造の家の下敷きになって、たくさんの方が亡くなられたでしょうに、助けてやれなくて本当に申し訳ないと思います。40年経っても50年がすぎても、生きてるかぎり忘れられない出来事です。ますます悲しみが深くなるようです。

〔長崎 直爆1.0km 女 20歳〕
(42-1486)

一瞬にして地上の物は吹き飛び、破かいされ、天地がひっくり返った光景で、この世の終わりではないかと思った。人間の姿は、着衣は、全身またはそれぞれの負傷で、もぎとられて、男女の区別がつかない。助けを求める声は耳にしても、自分自身が立上りにげるのが精一杯でした。助ける気力なし。

るいるいと死体は横たわり、足の踏み場がなく、死体を飛びこえ、飛びこえてにげまわった。この世の生き地獄の絵巻でした。筆や言葉で言い表すことは出来ない。私は全く目も見えなくなり、火傷で、高熱で1ヵ月余は生死の境。3ヵ月位は歩くことも出来ないで、その後廃虚を見た。

死亡した肉親は、遺体を入れる何物もなく、むしろや布に巻き、そうしきもすることなく、親が子を、子が親をモッコでかつぎ、ほうむったそうです。ほうむる場所がなくて、困り果てたそうです。

水を、水をと求めながら、水を口にすることも出来ないで死亡した。せめて水を満足するほどのませてやりたかった。死ぬ前は発狂して死んで行った。

〔長崎 直爆1.5km 女 24歳〕
(42-2126)

ア) 三菱兵器住吉寮で被爆、家の下じきとなってどのくらいか気を失っていた。気がついてはいだしてみたら、あたりのむぎわら家はぼうぼう燃えていた。友の1人が、△△さんと言ってよってきた。見ると右のうでは骨が見えるくらい肉がもぎとられ、顔中ガラスの破片がつきささって、だれだか見当がつかないくらい、声でわかった。すぐ上がトンネル工場だったので、2人でふとんをかぶって行った。中はまっ暗で血のにおいがぶんぶん、初めて血のにおいとはこんなものかと知った。

イ) 8月9日の夜、トンネル工場の上の山にいたが、たくさんの人が水、水と言いながら死んでいった。手をとられて、水下さいと言われてもどうすることも出来ない。しばらくして見るともう死んでいる。

ウ) 末の弟は被爆2時間後に死んだ。5歳だった。屋外にいて、全身やけどで皮膚はびらびら、抱くにも抱けないので、綿をさがし出してくるんでいたが、お母さん、お母さんと言いながら死んでいった。

母も外で（大橋附近で）被爆し家まで帰ってはきたが、8月18日に死亡。一緒にいた人の中で行方不明が多かったのに、家まで帰っただけでもよかったと思う。でも、18日死ぬまで、早くころしてくれ、ころしてくれ、親孝行と思うならころしてくれと言いつづけていた。よほど苦しかったのでしょうか。腹の中はただれてくさっていたのか、死人のにおいがしていた。歯ぐきもむらさき色になっていて、まるで生地獄だったと思う。

エ) 家族11人中5名（母、弟2人、妹2人）死んだ。死んだ人の方がよかったのではないかと思うほど、死にたいと思った時もあった。

〔長崎 直爆2.0km 女 25歳〕

(42-0806)

被爆直後に私は畠にいました。被爆した時には畠にふせていましたが、鼻からと口から、青と赤の火がいきをつかれないうちに出て来て、もうすぐ死ぬのではないかと苦しくて、そのことは今でも忘れることは出来ません。2分位つづいていました。

また、人たちがはだかで、皮はむけてただれた人が、何人も何人も通って来て、水をもとめていた人に水もやれなかった事。見わたすかぎり火の海のような事。家族の者がけがややけどをしていなくとも、次々死んでしまった時のかなしさ、今でも忘れることはありません。

また、死んで行った親、兄弟に、下着の1枚もかけてやれなかったことがおもしろいこりです。

〔長崎 直爆2.0km 女 27歳〕
(42-1353)

- ①現在の住吉市役所支所近くでは、私達は少し先の方の横穴防空壕へ行き、かえり道でした。やけどした人はまるでやき芋の丸やきのこがれみたいに、両足がまっ黒にこがれた14歳位の男の子も見ました。でも、その後1週間も生きていたかしら。
- ②両足原爆にて、若い男の人等、足のすね等、皮が両方とも、皮がびらびらして、さまよっている人も見ました。
- ③さまよっている人の中には、手のうで等、ちょうどにがうりみたいにぶくぶくふくれて、でこぼこにしていました。こんな人はその後死んだそうです。
- ④私の夫の兄の子、6歳でした。たんぼであそんでいて直しゃ〔射〕やけどで、薬のつけかえの時等(はえが)すいついてはなれなかったのです。きず口はただれていて、天かすをよせたようにしていました。

〔長崎 直爆2.0km 女 27歳〕
(42-2158)

④ 30歳台（被爆時）

竹の久保の三菱製材所の前の防空壕にようやくたどりついたトタン気が遠くなって倒れました。警防団のハッピを着た人が、私に語りかけてくれているのに気がつき、ここにねたら製材所の火でキケンだから、元気を出して壕の外に出て、人の後について歩きなさい、と言われたけれど、気分がわるくて歩けないので、また、防空壕の中にうずくまっていたら、私の歳年配のような女の人に来て何か飲ませてくれて「イッショに歩きましょう、元気を出して、私の肩につかまりなさい」と言って手をかしてくれました。そのやさしい姿に勇気が出て、防空壕の中から出てたすかりました。

後で気がついた時には、そのやさしい女の人とは、どこではぐれたのかわからなくなっただけれど、今でもその人の後ろ姿に感謝しております。もしかしたらその人は神様であったかも知れないとも思っております。

〔長崎 直爆2.0km 女 30歳〕

（42-1049）

自宅は爆心地から約100m内外の所にあった。

当時、私は子供4名（内1名は理由あって他家に養子にやり、当日は遊びに来ていた）を残して、稲佐の知りあい宅（△△方）に疎開の手続きに赴き、その用件をすませ帰る途中、浦上川沿いにある竹の久保町石切場付近と思われる所で、光、ピカドンと、物凄い音響と爆風に、石切場岩蔭の窪みにとぼされていたと思う。その後、頭をどんきで殴られた気持で、ふらふらと起きあがり、子供のことが気にかかり、心配で、心配で、どうして帰ったか思いだせません。

浦上方面は、全面が焼野が原で、むろん爆心地に近い自宅は、跡形もなく焼けていました。

自宅裏の崖を利用して造った防空壕も、跡形もなく落下していた。やけどした両手で、防空壕にかぶさった土を、勤務先から帰った主人と二人で、無我夢中で取り除き、また、付近一帯をさがしたが、子供達全員の姿は行方不明で、爆死、灰に化

して、遺体、遺骨はなかった。

[長崎 直爆1.0km 女 31歳]
(11-0099)

被爆のため臨月の女の人の腹がはじけて、へその緒を引いたまま横に転がっていたり、その他この世の地獄かと思われる状態をイヤと言うほど見ても、自分自身全く放心状態で何の感じも、恐怖もなくなっていました。

[長崎 直爆1.0km 女 32歳]
(42-1660)

⑤ 40歳以上(被爆時)

その日に死んだ子供を、4日後にやっと死がいがわかった。水もあたえなかったこと残念に思います。主人も4、5日後死にました。

子供をさがすのに毎日毎日あちこちとさがしあるきました。近所の人から0.5kmばかりはなれていたところの、みぞの中にくろがっているのがそうでなかろうかとしらされて、やっとその子に会うことが出来ました。バンドで見分けがついたのです。

[長崎 直爆1.5km 女 41歳]
(42-0820)

- 川の中に数時間つかり、その横をいくつもの死体が流れ、何とも言えない気持ちになりました。余りなむごたらしいことでした。
- あらかじめ決めておりました疎開先に逃げて行くまで、娘、父一男を連れて行くのに、途中足が熱気であつく、途中で落ちているものを脚の下にくくりつけて、とにかく逃げてゆきました。その時の脚の下の熱さはたいへんでした。
- 警報解除直後、夫は手洗いに行き、その時原爆が落下し、家はたちまち崩れ倒れました。夫は家の下敷きになりました。声はあり、助け出そうとしましたが、火はまわりにどんどん回って来て、夫の声はなくなりました。女手ではどのような手だても出来なくて、悲しみのなかで逃げざるを得なくなり、今でもその思い出が脳裏に焼きついています。

〔長崎 直爆1.5km 女 46歳〕
(13-12-121)

⑥ 年齢不明

父、夫は医療班として従事、銭座小学校にいたようになっているが、今にして死体確認はもちろん、その方法さえなく現在に至る。

あの惨状の中、息たえたのかと思うと、こわいのと、顔がうかんで、くるいそうだ。

〔長崎 直爆1.0km 女 年齢不明〕
(42-0582)

c) 性別不明

家屋の下敷きになり、生きながら焼け死んだ方々が多数おられたことを思うとき、

そのむごたらしいこの世の地獄を再現してはならない、生き残った者の平和に対する努力をいたさねばならないと痛切に思う。

大きな梁や木材にはさまれ、助け出すことが出来なかったことが、いつも心の隅に残って忘れることが出来ない。

年若い娘さんが衣類をはぎとられ、羞恥の念もなく、もうろうとした状態で助けを求めている姿が、いつも頭からはなれない。

兄が材木等で頭部をやられ、脳ミソがあらわれて、水を飲み死んでいった状況等、現在も脳裏に浮かんでくる。

〔長崎 直爆1.5km 性別不明 18歳〕

(42-2328)

(2) 2.0Km～3.0Km (直爆)

a) 男

① 9歳以下 (被爆時)

○被爆直後意識がモウロウとして、三菱電機の工場内の同じ場所をぐるぐると走っているところを、近所の方が自宅の近くまでつれていってくれたそうです。

○その後、母に水ガメの中につけられ一熱さに耐えられないと訴えたよう (自分では意識がない) です—そのまま何ら治療することもなく、防空壕に入ったままでした。その頃になると意識は少し取り戻したが、何故ヤケドしたのかも分からなかった。

○その後は、防空壕に何日間も寝たきりで、その間、一日に何回か母がカミソリで水ぶくれを切ってもらうのが治療らしい治療であった。この措置をしてもらわないと、右腕と両足の関節がくっつき、手足がのびなくなるため。

○数日後、北高湯江に疎開したが、髪は右半分抜けてしまい、右顔面、手足は膿だ

らけで、ウジがわいて、近所の人々は「化け物」が来ているという噂が立っていた。

〔長崎 直爆3.0km 男 6歳〕
(42-2317)

② 10歳台 (被爆時)

橋が全壊して、遠まわりをして帰った。

母親が水ぶくれのところを、何かつけてくれた。

一晚中火の海。

8月15日すぎて戦争が終っていたが、かみなりがなくても防空壕に入った。

いところが4人爆死。

火葬場がないので、やぐらくんで市内で火葬。

〔長崎 直爆3.0km 男 11歳〕
(13-23-079)

当時母と下の妹、弟は疎開して、中学に行っていた自分達と父が長崎で生活していた。

8月9日の日、父は帰って来なかった。自分達兄弟は自宅の門に「お父さん、先に防空壕に行っています」とチョークで書いて行った。

父はとうとう帰って来なかった。翌日兄弟と三人で岩川町にあった父の勤務先に父を尋ねていった。稲佐橋辺りでたくさんの死体を見た。父の勤務先で会社の人に案内してもらって、父の遺体と対面した。そして父は小さい骨つぼの骨となった。それを8月末に、母の疎開先に持っていった。母は腹膜炎を起こして寝込んでいた。

長崎の家は焼け、自分達はまだ中学生だ、これから長崎で再び暮らせるだろうか？

不安しかなかった。

〔長崎 直爆3.0km 男 11歳〕

(42-0555)

- 被爆者が皮膚をぶらさげたまま、疲れはてて歩いていた姿。
- 県庁―市役所―中町公会堂から北が、猛火につつまれていたこと。
- 兄が当日夜、疲れて帰ってきて、浦上方面の被害のひどさを語っていたこと。
- 伊良林小学校の校庭で死体を焼いていたこと。
- 兄が原爆症で苦しみ、死にそうだったこと。
- ABCCが兄をつれて行ってから、1年以内に盲目になると宣言されたと言って、ヤケクソ生活が始まったこと。
- 1年たっても盲目にはならなかったが、健康を害し、肺結核になり入院し、手術したこと。
- いまも精神に異常をきたしていること。

〔長崎 直爆3.0km 男 12歳〕

(13-27-051)

被爆地点は爆心地から2.3km離れた自宅内で、食事中であったが、突然まわりの空気が真黄色になり、猛烈な爆風の中でとっさに頭をお膳の下に入れ、伏せ、しばらくして起き上がったら、屋根瓦の落下、家中に物々が散乱、手足に窓ガラス、戸棚のガラスが無数の破片となってささっており、あわてて庭の防空壕へ避難し、ガラス片を兄と抜き合った。あとで気がついたが、家の中の柱に、ガラス片が散弾片のようにささっていたのに驚いた。

2日後、爆心地間近の父の勤務先、三菱電機(株)長崎製作所鋳物工場へ父を探しに行った折に、焼けただれた死体、おなかを風船玉のように膨らませて死んでい

た少年、橋の柱に背をもたれて、柱にくっきりと影を残していた死体、浦上川川辺で水を求めて下りて行って死んだ人々、死にかけてうめいていた人たち、ひっくりかえって四肢を上向けて死んだ馬、あたり一面の特有の死臭。

2日後であったので、被爆直後のあびきょうかんの惨状とは違って、結果として残った惨状であったろうが、大きな橋が破壊され、大工場がはりがね細工のように鉄骨のみが折れ重なっていた状況を見ながら、死体累々の川辺の道を、死体をのり越えて歩いた光景は、当時小学校6年生で、いま40年を経たにも拘らず、まさに地獄を見たという印象で、強烈に、鮮明に記憶の底に焼きつけられています。

〔長崎 直爆3.0km 男 12歳〕
(13-53-041)

ア) 被爆当夜あちらこちらで悲鳴をあげていたが、朝方にはみんな死んでいってしまっていた。

イ) 1週間後に兄弟全員(5名)が死亡してしまった。

ウ) 友人兄弟4人が焼けあとの家の内で黒コゲになり、かさなり合って死んでいたさま。

エ) 弟が死んだ時、他の姉、妹、弟の看病で手がはずせないため、私(12歳)で一人で火葬した時。

〔長崎 直爆3.0km 男 12歳〕
(42-0825)

当時私は客船の最年少の船員でした。コック長と言えは聞こえは良いが、単なる飯炊きです。そんな私に、海員養成所の一期先輩のT君が、私の代わりによく飯炊きをしてくれて、私は甲板員の仕事をさせてもらってました。

忘れもしません。あの日もそうでした。T君は私の代わりに船の食料品を買いに

行き、爆心地近くで被爆しました。私は幸い少しのけがでしたが、T君は半身大やけどで病院生活が続き、ケロイドも残って、その後亡くなられたと聞きます。私の心に一生消すことが出来ない負い目が残りました。

明暗を分かつ一瞬の閃光、非情の原爆は、二度とあってはならないと思います。

〔長崎 直爆3.0km 男 15歳〕

(13-27-003)

顧みれば、まさにこの世の出来事とは思われぬ、原爆閃光のもたらす、あの身の毛もよだつ一瞬の惨劇。それは人間の欲望がしからしめた愚かな歴史の一頁として、永遠に人類の心に焼きついていくことでしょう。それはまた、一点の曇りもない無邪気な多くの小さな生命をまで焼き尽くした。徐々に苦しみながら死へと追いやった。

ある者は一面焼野原の地面に焼けただれ、太鼓のようにふくれあがった両足を天上に向け、頭は地中に突込み、あるいは首の無い我が子を背負い、顔に滴り落ちる血に手を当てながら、狂気のようにどこかへ走り去っていく一人の母親。焼野原のどこかへ向かって合掌する老人の顔からは血が流れ、爆心地となった学校跡からは、挺身隊として手に油して機械に取り組んだ弱冠15、6の女学校生徒の死体。と、かすかに生きながらえている生徒のうめき声、そっと近寄ってみれば、風船のようにふくれ上がった体の女学校生徒、また、上級生たち、同級生。

一瞬を争うその生命、救護活動のため、食を探し求める余裕もなく、日々の空腹に耐えつつ、仮病院の小学校の薄暗い一室へ運ぶも、約30分必死の看病も空しく次々に周囲に横たわる数々の生命が絶えていく。

原爆という狂器〔ママ〕に対し憤激をこめた万人の憤慨をこめて、その若き数々の生命の生涯の結論を投げつけるかのようにして、煙となり、天上の雲となって去っていった。それらはとうてい同じ体験を得た者でなくては、万言を費やしても…とさえ想われます。

爆心地へ向かう途、ふと我が名を呼ぶ者あり、見れば顔はただれひきつっている。何かを求めようとしている。一言交わし爆心地へ急がねばならない。その同級生に

そのとき何故一言励ましの言葉をかけてやれなかったかー、彼は間もなくこの世を去ったと聞きました。

世界の平和なくして、個々の平和などあり得ないことです。

〔長崎 直爆3.0km 男 16歳〕

(13-53-019)

被爆は新大工町、移転工事中の仮電報電話局(戦後ABCCになった)内でしたが、ガラス窓が多く、その被害に遭った人が大部分でした。頭から血を流す人、ドアの下敷きになった人、近くで家屋が倒壊する音、駅の方の空は赤くなっていました。

上半身は裸で作業していましたので、シャツや弁当等爆風でどこに行ったのか分かりません。帰宅は上半身裸で帰りました。

同窓生は学徒動員で、三菱製鋼や三菱兵器の工場で働いておりましたが、大部分は死亡しております。

母校も現長崎西高で、先生を始め多くの学徒が亡くなりました。生存しているのがすまない気がいたします。

〔長崎 直爆3.0km 男 16歳〕

(42-1225)

- ①被爆したとき、女の人がしがみついていたのを、けとばして逃げた。
- ②学友(師範学校生徒)54名死亡。その救済にあたった。学級の1人をタンカで運ぶ途中、ものすごいケイレンをおこし、死んでいった。その死体はどうなったか、また、その学友が誰だったかは、覚えていない。それほど死にたいする恐怖感がマヒして、非人間的になっていたと思う。
- ③その夜、近くの小学校の体育館で、数百人の人々と横になって寝かせられたが、

苦しさに泣き叫ぶ人、うわ言をいう人、死んでいく人、献身的な看護婦にしがみつきたい思いだった。

- ④終戦は海軍病院。ここでは、うじのわく友人患者が多かった。それを一匹ずつとっていった。大きくなるとわからない。はさめない。
- ⑤学校に復帰したのは、3ヵ月ほどたってからだったと思う。

[長崎 直爆3.0km 男 17歳]
(13-32-038)

☆医大と浦上天主堂の間の山の中で、30～40歳くらいの母性を助けてくれと言われたのに、見殺しにした。

☆私の住居地である岡町は、白骨化した人ばかりで、母の金歯をたよりに探して回った。この探しても探しても見つからぬ絶望感は、今のように思い出される。

☆被爆して数日後、勝山小学校の近くの町内掲示板の朝日新聞第一面に「被害僅少」と書いてあったのを見て、体が震えるくらい腹が立った。

☆岡町付近近は一面「音の消えた地獄」だった。人間はもちろん、虫や朝顔などすべての生物が皆殺しにされた。

☆新興善小学校の体育館は「音の地獄」だった。そこに寝かされているけが人は、うめき声で充満していた。

[長崎 直爆3.0km 男 17歳]
(13-36-001)

③ 20歳台(被爆時)

水の浦三菱造船所内に被爆し、午後3時頃から自宅の橋口町、山里小学校下までに帰る途中、道路や家など稲佐町附近から延焼中で通れず、稲佐山中腹まで登り、

山と島のさかい目を行くと、母親の横たわれるそばで、3歳位の男児が母の名を、かあちゃん、かあちゃんと泣きくずれていました。母は火傷していてもう死んでおられた。ここまでひなんして来て息絶えられたのでしょうか。

帰宅して、家は跡かたもなく、家族10人全員死んでいました。また、かすりきず一つないのに、3日目位から、ノドがいたい、ご飯がのどを通らぬ、水が飲めぬ日1週間つづき、10日目死ぬ。あくる日見ると、これが妹の顔ともわからぬほどに、むらさき色に、二倍位にふくれていたこと。それでも何もしてあげられなかった。

〔長崎 直爆3.0km 男 28歳〕
(42-0837)

1. 戦友の家族の安否を探しに行ったところ、銭座町の焼跡から奥さんの遺体を発見した時の悲惨さは忘れられない。
2. 八百屋町付近で、日本軍の下士官に引率された、幸町工場からの英軍捕虜が、ボロボロの姿で歩いて来るのに出会いましたが、この有様も悲惨でした。

〔長崎 直爆3.0km 男 28歳〕
(42-2216)

④ 30歳台 (被爆時)

1. 大橋で電車の窓から母子が出ようとして、そのままの格好で死んでいたこと。それはとてもじゃなかった。手を合わせて通った。阿鼻叫喚とはこのことだろう。
2. 淵神社前で焼けただれた少年と父を、めぐりあわせてやったこと。その父は私の友人だった。友人は我子を前に言葉もなかった。早く名前を呼んでやれといって、名前を呼んだら「おとーさん」といって少年が抱きついていた光景は忘れら

れない。その後少年は亡くなったそうである。

〔長崎 直爆3.0km 男 30歳〕
(42-2214)

私は中国の戦野で2年間のあいだ何回かの戦闘に参加し、多くの死者や負傷者を目前に見て来ました。ところが、都市爆撃とか原爆による死とか負傷の、死に方、負傷の状況は比較にならない。現実見た者でさえも表現出来ない、生やさしいものではない。

あの日、いたるところで多くの生きた方に出会ったが、ただ出来ることは、元気を出しなさいと、はげましの言葉をかける以上に、自分まで魂のぬけたような人間同様に、手のつけられなかったこと。自分の生きること以外に考えられなかったことは、事実だったと思う。

6人家族で、メイを一人工場で行方不明にしたのみで、私以外の者は岩屋山3km位離れていた山中に疎開していたので、少し負傷した者もあったが、皆、命拾いした。

〔長崎 直爆3.0km 男 32歳〕
(42-2333)

身内をさがすのに爆死者の姿が重なりあって、真黒こげ、男女の区別もつかない。足をはりにはさまれて助けを求めても、自分のことが精一杯でふりむく人もなく、一杯の水を求められてもそれをしてやることも出来ない有様。これがじごくで、死んではじごくごくらくはないと思うすさまじさ、はたしてこれが人間の姿であろうとは、生きている内に人生のえずをみてしまった。

〔長崎 直爆3.0km 男 33歳〕
(13-23-062)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

ア) 当時2歳10ヵ月の私でしたが、脳裏に残っていることは、あのピカッとした光だけです。

イ) 大橋町三菱兵器製作所へ勤務していた叔母(母方)が、諫早市内の体育館に収容され、母につれられて(看病の手伝い)行っていた私が、18日後に亡くなってしまった叔母の前で、ずいぶん泣いていた記憶があります。被爆直後で、たくさんの方が広い体育館に寝ていたようです。きっと気分が悪い叔母の前で泣いていた私。8月9日が来ると、いつも心のすみで”ごめんなさい”とつぶやいています。

[長崎 直爆3.0km 女 3歳]

(07-0032)

被爆当時は4歳でしたが、幼な心に、浦上で被爆して真黒に焼けただれた人達が、アリの行列のように金比羅山を越えて、私達の住んでいた西山の方へ降りてきたことを、鮮明に覚えております。8月9日の夕方です。

爆風でガラスが割れ、全身にガラスを浴びた10歳の姉は、母に背負われて原爆投下後の街を、病院をたずね歩き、そのあまりのこわさ、ぶきみさに、自分の痛さを忘れ、帰ろうと泣き叫んだそうです。

その時父は、4月に駅前の爆撃で亡くなっておりました。

[長崎 直爆3.0km 女 5歳]

(13-23-063)

手足のない、まるでだるまさんのようにころがり、たすけをもとめる人。ピョン、ピョンとはねている人が、水をくださいと子供の私にすがる人。まるで目、鼻、顔、男女のくべつもつかない人の波。私はこわくて、早く我が家に帰りたい、でも道すらもない、こわれた家々のがれきの山。泣いていた私を消防団の方にたすけられ、家に帰りついた。

我が家は火の海で、その中を、母がわずかなにもつをはこび出して、やっとの思いで西坂町のぼうくうごうへひなんいたしました。ほんとうに思い出しても未だに鳥肌がたちます。

[長崎 直爆3.0km 女 9歳]

(13-21-011)

② 10歳台 (被爆時)

○9日の夕方、やけどをした人達が金比羅山の方から降りて来るのを見て、子供心(10歳)にあの山の向こうで何かが起こっているんだと、こわさで体がふるえてとまらなかったのを今でも思い出す。体の片側がまっくろこげで、半分は普通の顔、とにかくこわかった。思い出すだけで身ぶるいがする。とにかく戦争は絶対にあってはならない。

○外で友達と二人で遊んでいた時、東の上空にきらきら光るものが見えたと同時に体に熱風を感じた。近所の二階の板壁が砂けむりをあげてはげおちた。何が起こったのかわからず、こわくて家にとび込んだら、家の中にいた母親が頭と胸の所から血を流しているのがびっくりした。とにかくこわくてたまらず、防空壕に逃げ込んだ。母のけがの血が止まらないので姉が病院をつれまわったけど、人は誰もいなかった。

○二、三日たって浦上地区で焼あとの作業をして帰った兄から、浦上地区の実態を聞き、商売をしていた両親から、私と弟と二人を長与の山の中にある兄の会社の工場の倉庫ににげるようにと言われて、それは心細い思いで、お米を3升もらって、山道を心細くて泣きながら歩いたのを思い出す。肉親と別れる悲しさは今思

ってもきのうの出来事のようにあざやかに目に浮かぶ。子供達にあのような思いは絶対させてはならないと思う。

○25歳だった兄の死を思うとき、まだ原爆症の言葉すら人の口から聞かれない頃、死にたくない、死にたくないと言いながら、高熱で苦しみ、満足な治療も受けられず死んでいった兄、犬死にと同じ、と思うと口惜しくて歯ぎしりをしたくなるほどつらい。

姉も結婚しないで、年老いた母の看病に明け暮れる毎日。入院中の母88歳、姉60歳、この先の日々が心細く、不安な日が続くであろう。姉の心中を察する時、とてもつらい毎日である。原爆さえ投下されなければ元気に暮らしてるのではと、つい亡き兄を思い出す。そしてつらい。くやしい。

[長崎 直爆3.0km 女 10歳]
(42-0561)

ほんとに地獄でした。空地で市から届けられるオニギリを食べている前で、木材を重ね、その上で人をやくのです。放心状態でそれを見てました。

やけただれた人々が、ぶらりと両手を前に下げ、私は大丈夫でしょうかとたずね、少し歩いてはばたきと倒れて死んで行きました。

人を助ける、そのような事は後になって思ったもので、その時はただ逃げまどうのみでした。昼間とはいえ世は土色と化していましたし、家をやかかれても欲望もなく、ただ呆然としていたのです。家の中にはさまれて燃えて死んで行った人のことは忘れません。逃げまどいながら合掌したものです。

[長崎 直爆3.0km 女 11歳]
(40-0235)

稲光は原爆の青いセン光と重なって、40年たったいまも目や耳をおおうほど恐怖となっている。

あの日、軍需工場の鉄骨の下敷きとなり、救いだされ防空壕へ収容されました。そのなかには、ガラスやスレートの破片が体全体につきささっている人や、腸がとびだしたままで肉親の名を呼びつづけている人など、おびたしい負傷者がムシロの上でゴロゴロ寝かされ、なんら手当てを受けないまま次々と息をひきとっていった情景が、私の脳裏から離れません。

〔長崎 直爆3.0km 女 11歳〕
(42-1517)

あの日は一心報国のはち巻きもりりしく、私の先輩や先生方は浦上の兵器製作所で爆死して帰らぬ人になってしまいました。

その日は警戒警報も解除になっていたため、姉は町内の防空壕を掘りに行き、お昼前で私と交代で、現場に行き何となく爆音がきこえたと思ったとたんに、目をいるような光と、雷のような音と風に、思わず壕の入口に目を両手でおい体を伏せたが、爆風で壕の中へ押しやられた。その時にひじにいたみがあり、やけどをして水ぶくれが出来ていた。家は屋根は吹き飛ばされ、かたむき、親、姉達の居所も判らず、ちょうど隣のおばさんがいたので、「私を捨てないで」とその時はとても心細い思いをしたが、数時間後に家族と再会が出来た。

長崎の空という空は、まるで真夜中のように真っくらになり、町の中は人々が声をあげる人、だまる人と右往左往して、山の方より逃げて来た人は、皆、真黒こげになり、洋服の下から赤くなった肉がはみ出し、男女の区別もつかぬ有様で、それは目を被うような有様でした。

家をなくした私達は、安全な山の方へ逃げましたが、そこにもテントの中で傷ついた方々が苦しみにうめき、そのそばで死んだ人もいた。

数日後には、町のあっちこちで死体を焼き、夜はその隣が上がるのを見て、子供心にこわい思いと、戦争が早く終るように祈った事を思い出します。

〔長崎 直爆3.0km 女 13歳〕
(13-15-180)

自宅が爆心地の反対側の山の麓にあり、被爆者がつぎつぎと山をこえて、自宅前に立ち、すべての人々が水を求めてましたが、防衛団の人がメガホンで「長崎にも新型爆弾が投下された模様なので、負傷者には絶対に水を与えないよう、水を与えると内臓が破壊され、死をはやめるから」と言われ、苦しんでいる人々を目前にみながら心を鬼にして、私どもは息をのんで、声をひそめ、爆風でこわれた自宅の押入れの中で、恐怖にふるえていました。

それからしばらくして、横穴の防空壕へ入りましたが、入口付近にうずくまっている人々に、中へどうぞと衣服の上から背中手に手を当てると「いたい！」と一声大きな声を上げて、その場で動けなくなりました。私の想像では、おそらく衣服の下の皮膚が、原爆の光線でやけただれていたのではないかと思いました。

それから、市中のいたるところに火災が発生し、私どもの横穴も熱気でいられなくなり、脱出しましたが、郊外へ逃げる途中、衣服もなにもなく、やけただれた皮膚をむき出しのまま放心状態の多くの人に出会いましたが、どうしてあげることも出来ず、かける言葉もなく、ただただ私どもも歩きつづけました。

あのように多くの人々が苦しんでいるのに、治療が何一つうけられなくてなくなられた方々のことが、今も心残りです。また、現在も原爆の後遺症で苦しんでおられる方、また、自分自身もそうですが、いつ発病するかもしれないという不安になやまされている生活、心の不安は、とりのぞかれませんが、正直な気持、もうすべてを忘れたい、いや忘れようと努力している日々ですが、もう被爆者ということは作ってはいけないと思います。

〔長崎 直爆3.0km 女 14歳〕
(13-53-014)

使命感と若さにささえられる私は、当時女学校在学中で救護班の一員でした。

その日の原爆を原爆とも知らず、けが人のお世話をするため学校へと走りました。次々と校庭に集まって来る友人達の中に、ポーッとして顔中よごれて、モンペに肉片をつけ、手足も血やよごれがしみついて、側にいるだけではきけのするほどの臭いがただよっていた。

その日学校へ泊まり、翌日爆心地の叔母の一家をさがしに父母とともに行きましたが、目を覆うばかりの、人はもちろん牛、馬の頭蓋骨等焼けただれ、悪臭をただよわせ、男女の見わけもつかぬほどでした。水をもとめ、水の流れてる場所をさがしもとめて集まった人々だったのでしょう。今もあの光と悪臭。

その夜、町中は火の海、(ガソリントank)の破裂からの火と思います。私の見た場所からはそう見えませんでした。長崎市7%は焼け、飛びちり、運良く助かった者は毒ガスで殺されるとデマまで聞かされました。

叔母の一家は全滅でした。形とどまる物もなく、涙もかれて出なかったし、ただ恐怖のみが幼い私に、今もなお残っております。地獄絵図さながらと言えましょう。焼けただれた人にボロ布と思われたのが、実は皮膚がたれさがっていた。

〔長崎 直爆3.0km 女 15歳〕

(13-29-006)

ア) 落下時、上長崎小の校舎の中にいました。少し落ちついた時分に、浦上の方から山ごえして来た同級生や会社の人達が校庭に来ましたが、だれか分からない位でした。5時半頃までキズの手当て等して帰りました。

イ) 5時半頃富貴楼の下を通った時、山越えて来た人と思いますが、頭から足の先まで真黒で、お腹の左側から左足のヒザの辺まで皮がむけてたれ下がっていました。そのむけた後の桜色でもっと鮮やかなきれいな色をしていたのを、どうしても忘れることが出来ません。

ウ) 同じ村から来ていた友達2人が、1人は即死、学級委員だったためパッチで黒コゲの死体が分かったそうです。1カ月位してからお葬式がありました。おばあさんが「おわかれに△△子ちゃんを見てくれんネ」と泣きながら骨つぼを開けて

下さいました。覗きこんだら中はカル石をくだったような粉になっていました。
エ) もう1人の友達は菜種の花をうすくしたような、カシワの油のような肌に紫色の小さな斑点が体いっぱい出て、髪の毛も抜けてなくなりました。

[長崎 直爆3.0km 女 15歳]
(42-1717)

多くの事がありすぎて語りつくせない。とにかく体験した者でないと文や話には出来ないが、それもまどろしくて〔まだるっこしくて〕、この目、頭に聞いてほしいと言いたい。

当時の市のゴミ箱は、大八車の上に板で囲った物だったが、学校に収容された被爆者が次々死んで行く中、その死体をクサッタ魚でも捨てるように、投げ捨てる光景は何とも悲しかった。

軍医の傷の手当てに手伝ってまわったが、ガーゼをはぎ取ると2~3ミリのウジ虫がびったり! また、ポロポロ落ちてくるものも……。薬らしいものもないので、形だけの手当てで、見込みのない者には手当てをしない。その一方で次々死んでいかれた。

[長崎 直爆3.0km 女 16歳]
(13-27-001)

父です。城山町で、屋外であおむけにひっくり返った状態。直爆死。真黒く全身を焼かれ、両腕をつっぱり、足も片方は曲げ、片方はつっぱり、まるで虫けらのような姿で、思い出してもくやしく、情けなく、涙が出ます。徴用で動員しての事です。8月9日出勤時の様子は、昨日のように思えてなりません。

4人の中から、歯をこじあけて父を確認して、連れて帰りました。

〔長崎 直爆3.0km 女 16歳〕
(42-2215)

水を下さいとすがる人々を見捨ててきたこと。もちろん自分自身が必死で人を助ける余裕などはなかったが……。

小さな赤ちゃんを出し、水を下さいと言われたことは、特に忘れられない。

〔長崎 直爆3.0km 女 17歳〕
(23-0314)

直後、住吉まで歩いて行ったが、その途中焼けただれた死体が方々に散らんでいた。骨や水ぶくれした状態など、今も忘れることができない。死体にいたはえが、そばを通ると私達の背中にいっぱい来て、はえをからって〔背負っての意〕歩いているようだった。二度とあんな体験はしたくない。

〔長崎 直爆3.0km 女 18歳〕
(42-1359)

被爆直後、2、3時間して、駅前の忠霊塔の山に登り（避難）ました。後から後から墨のようにまっ黒になって、目だけがギョロギョロとして、大変苦しんで、付き添いの方が一生懸命励ましておられる方々。また、人間が魚のように皮をはぎ取られ、それをぞろぞろと引きずって、兄弟だったのかお互いが励まして病院を探しておられた状態が、今もなお一層脳裏に浮かび、若い頃は大変恐ろしくて、思い出したくありませんでした。

それで、弟が生死も分からず、早く探さなくてはと思っても、大橋の方向へはと

うとう足を運ぶことが出来ませんでした。父が一人で探しに行きましたが、とうとう分からず、あきらめておりましたところ、4日目だったと思います、包帯をぐるぐるまいて帰って来た時は、もう夢かと、家族一同喜び合い、最高でした。

私達は幸せだったのに、被爆者のため、何一つ人のため、慰める事、霊安かれと手を合わせた事等しておりません。今まではふれたくなかったのです。しかし、高橋真司先生のお話を聞き、これではいけないのだ、被爆の証人として語りつぐ事、核兵器をこの地球からなくすために、生きることに気づかせて頂きました。

〔長崎 直爆3.0km 女 19歳〕

(42-2229)

③ 20歳台（被爆時）

1番始めに、私は他人様の苦しんでる様子、また死んでいく姿はたくさんいやと言うほど見ましたが、肉親の死んでいく様子、また骨もさがし出すことは出来ませんでした。

家があった焼け跡をたった一人で掘ってみて探しましたし、また何日も何日もかかって浦上中さがしましたが、飛ばされて死んだのか灰と化してしまったのか、見つけ出してやる事が出来ませんでした。残念でたまりません。

私は会社の友の家に9日夜泊めてもらい（その日は浦上は火の海でかえれず）、10日の日、寝る所がなく、岩川町2丁目町会防空壕の前にきた時、空襲警報解除になり防空壕前で遊んでいたのであろう子供達6人が真っ黒こげのガレキとなり、目玉も飛びだしてカチカチになり死んでいた時は、そこに棒立ちになり、解除になり喜んで壕の外で遊んでいたのだらうと思って、可哀想で仕方がなかった。

また、壕の中に入った途端すごいうめき声が奥の方で聞こえてきた。いく所がなくそこに集まってきた人達がいうには、大ヤケドしてて今親戚の人がきて油を体中ぬってあげていられたそうだとのこと。そのうめき声（おそろしい程の断末魔のうめき声）は一晩中つづいた。私の家のすぐ近くのおばさんで、とてもきれいな人だったので、そのすごさは恐ろしいほどだった。朝静かになったので（アラ静か

になったね、少し痛みとれたのかしら)と側にいた人に聞くと、朝いってみたら「死んだんなさったとよ」といわれたので、私も奥の方にいって手を合わせてきました。

毎日、毎日、肉親をさがして歩いてる時、小学1年生位の男の子が地面に焼けただれておいて、私を通りかかると「姉ちゃん水ば、姉ちゃん、水ばくれ」と言って起き上がろうとしました。あまりのヤケドのひどさに、ヤケドは水をのむと死ぬと思い(ガマンセンネ、ガマンセンネ)といっていると、男の方が「もうどうせだめだから水をあげて下さい」と目で合図されました。私はそこから吹き出てる水をくんで飲ませると、その男の子はおいしそうに飲み、またヘナヘナと倒れてしまいました。もう少しみてあげればよかったのですが、私も家族をさがすのが気になり、その男の子をほって立ち去りましたが、どうして1人でそんなところにいたのか、家族の方がみつけどして下さったか、おそらくその後亡くなったのだろうに。

防空壕のあった前の浦上川では、人や動物たちの死がい重なりあって流されて行きました。恐ろしい光景です。

あの時の様子は一生死ぬまで、目の奥より消え去ることはないでしょう。

[長崎 直爆3.0km 女 20歳]
(13-19-036)

当時学校の寮にいましたので、被爆後実家(佐世保)に帰るのに汽車が不通で、二駅先まで歩いていかなければなりませんでした。途中、山越えをし、夜になり、爆心地に近い丘の上で友人と野宿するはめになり、不安と恐怖でねむれない一夜を明かしました。まわりには、原爆で重傷を負った人々が横たわり、水を下さい、水を下さいと叫ぶ声が、未だに耳の底から聞こえて来て忘れられません。

また、子供が親をさがして呼ぶ声、親が子供をさがして呼ぶ声が、一晩中たえまなく、眠れない夜空に流れ星だけが美しく印象に残っています。

[長崎 直爆3.0km 女 20歳]
(13-20-102)

女子挺身隊

同郷の友人が足をけがして歩けず、職場から寮までおぶって逃げ、やっと寮に帰りついた時、寮は跡かたもなくつぶれ、先生も寮生もおらず、けがをした友人をおぶって、先生がおられるであろう三菱の寮を探し、歩きまわる時のこわいこと。道にはたくさんの人のたおれた、重なって死んでいる様。それにつまずき起きあがれず、死体をてこにして立ち上がったたり、水をもとめてふき上げている水道に重なりあってしがみつ়く様。

茂木のピワ公園の方面に向かって逃げる人々の後をついて、火事の中をさまよったおそろしさ。

けがをした友人をおぶっての行動では、探し廻ることも出来ず、途中の木にモンペのヒモでしばりつけ、先生がみつかったも、みつからなくても、必ず帰って来るからけっして動かぬように、くれぐれもいいふくめ、市中を探し歩き、やっと先生のおられる寮にたどりついて、友人を迎えに行けた時のうれしかったこと。

うすれて行く思い出の中で、今でも時々思い出すことのある場面です。しかし、助かったと思った友人も、2年後には亡き人となりました。

(長崎 直爆 3.0km 女 21歳)

(13-12-044)

その直後、勝山学校の講堂は第1救護所となり、広い講堂を片付ける間もなく被爆者が運ばれて来た。またたく間に千人以上になり、足の踏み場もない位皮がめくれぶら下がり、目が飛び出してる人、血がダラダラと流れ息絶える人、水くれと叫ぶ声が小さくなって行く人、生き地獄とはこれだと、私も看護どころか気を失った。

女教師は俄か看護婦となった。

被爆3日後(8/12)浦上の中心地へ同僚職員(教頭)の家族の遺体発掘のため、学校長より召集、それより3日間(8/12~14)連続浦上へ。

長崎駅前は通行止めにて、本河内から山を伝って本原町へ。そこから市街地を一望した時、コンクリート建ての学校、工場等がくずれかかって残り、木造家屋があちこちで燃えていた。中心地に近づくにつれて、人、馬の死がい(黒こげ、半こげ)

そのまわりにウジ虫がたむろして、目をそむけたかった。

浦上川では水が見えないほどの死人が浮かび、水をもとめ、焼ける体を冷やそうと川の中を求めたであろう、最後の断末魔を見る思いがした。

目ざす教頭先生の家は倒れ、その中から奥さん、子供さん方を運び、あちこちから集めた古板、柱等をたいてダビにふした悲しさは一生忘れられない。

途中の小高いところの防空壕からはい出して（真っぱだか）来た女性に、2枚はいてたモンペをぬぎ与えたが、それをはく元気もなく（頭もいかれてた）そのあわれさに声を上げて泣いた。

3日間同じようにして死体の処理に当たった。

〔長崎 直爆3.0km 女 22歳〕

(23-0229)

私はその時、家屋の中で被爆しましたが、爆風にてカベや天井がとびました。その上県庁の方面よりものすごい勢いで火の手が上がり、みるみる間に燃えてきましたので、あまりのおそろしさに逃げ回りました。そしてもういるところもないので、思案しているところに主人の兄が来ました。兄の家族は時津の先の日南（ヒナミ）というところへそかいしていましたので、そこに行こうと兄と2人で行きましたら、またまたビックリ。長崎駅から浦上方面は火の海でした。こんなにひどいとは思っていませんでした。道もわからないし、鉄道の線路づたいに逃げて行きました。途中で、大橋の先にて、水を下さいとすがりつかれましたが、私達も水はなく、自分達も死ぬか生きるかの境ですから、日南まで逃げました。もう着いたときはグッタリでした。

〔長崎 直爆3.0km 女 28歳〕

(13-32-004)

④ 30歳台（被爆時）

父は海軍の軍医でしたが、当時は引退しておりましたけれど、爆心地の医者が全滅なので、聞き伝えて大勢の被爆者が救いをもとめて来ましたので、本職の父一人を素人の家族全員が助けて、治療にあたりました。

多少取り揃えてありました薬戸棚は、爆風で倒れこっぴみじん、わずかな石炭酸がただ一つの治療薬で、コンクリートやガラスの破片が体中にめり込んでおるのを、ピンセットで一つ一つ取り出し、そのあとは石炭酸で消毒するだけしか出来ない有様、家の浴衣や敷布をさいて包帯にして巻いてあげるだけ。その傷のむごさ、見た者でなくては想像もつかぬひどさでした。やけどもまた、これも目のあてられぬ悲惨なもの、どこから持ってきてくれたか、油をぬるだけ。

かなりの広い庭、爆風で荒れた家の中にも患者がいっぱい横たわり、すくいをもとめて、順を待っておりました。なにしろ患者の数が多いのと、看護人が少ないのとで手がまわらず、痛いよ、苦しいよとうったえながら順番のくるのを待ちきれず亡くなって行く方もありました。裏口の日陰にどろだらけで横たわって、順番を待ってる女性が、かけまわってる私に、いきも絶えだえに、お姉さん私助かるでしょうか、とすくいを求めておったあの姿、今でも目にやきついております。

やけどでひふがぶらさがり、体中のそここや、耳の中にうじが湧いてきこえないとうったえる人等々。包帯も家の物だけでは間にあわず、町会で使った（のぼり）の旗等をさいて持って来てくれたので、赤や黄色等の包帯をまいた患者がよろよると歩き廻ってた姿も、忘れられない光景でした。

かすかな声で、水を、水をと訴える人の頭を抱えて、口にそそいであげても、一口きりかめのないのです。私達は全力をつくしましたが、あれだけしかしてあげられなかったことが、悔やまれます。

二度とあんな悲惨なことの無いよう祈ります。

町会の方、親戚の人等も手伝いに来てくれて、ほんとに助かりました。

〔長崎 直爆3.0km 女 31歳〕

(13-15-040)

c) 性別不明

長崎市内で被爆いたしました。一瞬にして家がこわれ地面にたたきつけられ、立ち上がって見たら何も見えない位のほこり。しばらくしてあたりが見えるようになり、我に返ると、やけどのいたみ、裂傷の出血に気づきましたが、手当てするくすりも何もなくタオルで手当てをいたし、その夜防空壕に収容出来る人員ずつに別れ、座ったままで一夜をすごしました。しかし夏の事、上半身はだかの人が多く、上半身やけどの数名が、手当ても出来ず手もつけられもせず苦しむ姿を見ながらの一夜はほんとうにつらかった。

あくる朝、軽傷の20名位諫早にひなんすることになり、長崎市内から浦上のまだくすぶる惨状の中を通りましたが、いたる所に性別不明のるいるいたる死人の山、それに電車が数両、乗客が共に焼死している姿。また電車線路の下に下水が流れていましたが、いま考えてもぞおーとする、下水に両岸からすき間なく水を求めて、どぶに顔を突きこんで死んでいる惨状を見ていますし、また2、3日後、荷馬車で死体を山積して運び焼けのこりの材木の上で火葬している様子を見て、もう戦争はいやだと思います。

もっと詳しく書きたいのですがこれにて。

〔長崎 直爆3.0km 性別不明 16歳〕
(46-0065)

(3) 3.0Km～(直爆)

a) 男

① 9歳以下(被爆時)

当時私は2歳でしたが、空襲警報がなって、それがいったん解除になったので、

家に帰っていました。私の母は若い頃下半身に大やけどを負い歩行が困難でした。二度目の空襲警報が鳴ったとき、防空壕まで逃げる時間がありませんでした。4歳年上の兄をせかせて、2歳の私の手を引いて防空壕に急いでいた母が、私におおいかぶさるようにして道路の上にふしたことを、今でもはっきり思い出すことができます。

[長崎 直爆3.0km～ 男 2歳]
(42-1600)

- ア) 当時私は小学校3年生で、母は仕事で、兄たちも外出中で、家には一人だけでした。各町内の指定された防空壕があり、油屋町は風頭山の上の方にあり、隣の八坂町の防空壕は八坂町の立ちのきになった同じ町内にありました。
- イ) はだして外にとび出して、近所の人が止めるのもきかずに、割れたガラスの上を八坂町の防空壕まで走って行きましたが、八坂町の大人の人々が入口に立って、外町の人はいれないといって、中に入れませんでした。
- ウ) 入口の所に立っていましたが、すぐ前の道路を、血を流した人や、顔の皮がむけた人や、着ている物がこげたりした人が通り、本当にこわかったのを今でもおぼえております。
- エ) 暗くなって、山の上の油屋町の防空壕で母と会った時に泣いたのは、今でも忘れられません。
- オ) 母が大八車を借りて来て、一晩かかって母の実家の宮擡まで(10kmぐらいだと思います)逃げました。
- カ) 宮擡からでも長崎の方の空が真赤になって燃えているのがわかりました。

[長崎 直爆3.0km～ 男 8歳]
(42-0673)

原爆投下の後、7日目に島原にそかいするため、母と姉と一緒に爆心地を通って行ったが、人、馬、犬が無残な姿で死んでいた。まだいきがある人は水を求めていたが、私は水筒の水をあたえようとしたが、母から止められた。あの姿が未だにわすれることが出来ない。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 8歳〕

(42-1606)

私は姉をさがすために市内にはいった。道路のあちらこちらに死体や、私たちの足にすがりついて助けを求める人たちを、どうすることもできなかったことを、今でもくやんでいる。そのような戦争を二度とおこさないことを願う。

黒こげになって、目はとび出し、ぶらさがっている人、川の中には死体が浮かんで、水が真赤になっていた。生きたまま流されていた。見ているだけで、どうすることも出来なかった。

たおれた家の下じきになった人達が、水を下さい、苦しい、助けて下さいと、あちこちから聞こえて来た。口では言いあらわせない生きじごくだった。これだけの大量の人達が亡くなって、これから長崎はどうなるのかと思った。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 9歳〕

(13-23-034)

② 10歳台 (被爆時)

投下後、自宅裏にあった伊良林小学校に、被爆者がどんどん運ばれてきたため、婦人会より母たちが手伝いにかり出された。その時医者に、私がヤケド (胸部熱傷) しているので薬をくれるように頼んだが、薬はない、治療方法は、赤チンキを塗ってその上からシッカロールを塗っておくように言われたとのことであったので、そ

のようにしたところ、10日位で完治した。

上記小学校に行くと、患者が講堂に入りきれず、グラウンドにゴザやムシロを敷いてゴロゴロ寝ており、その中をぐるぐる見て廻ったが、身体半分が真黒に焼けている人や、顔だけ真黒になっている人達が、真白なおニギリを食べていたり、傷口にハエがたかっている人、人、人……その中で荒い息遣いの人が出たが、一廻りしてその場所へ戻ってみると、もう息絶えていた。当然真黒にヒフが焼けた人も、何日もたたずに死んでいったことでしょう。

当時、私は小学校5年生であったが、そのような悲惨な光景を見ても、ただ平然と見ているだけで、どうすることもできないという感情からか、戦争に負けたということはこのようなことかなーとしか感じなかったように思う。当時は国民全体が、そのような無感情な精神状態にあったのではないか。

死んだ人は、グラウンドにたくさんあった、縦2間、横1間位の防空壕に、20体位ほうり込み、角材（こわれた家の柱等）を積み重ねて、その上からガソリンをかけてダビに付していたが、そのような状況の中でも手を合わせている大人の人もいなかったように思う。

その灰や臭いが、昼食している我家まで入ってきて、ただでさえうまくない食事をするのもいやだったが、その迷惑料として、当時見たこともなかった砂糖の特配があったことを覚えている。

〔長崎 直爆3.0～km 男 12歳〕
(13-15-004)

私は小学校6年生でしたが、被爆によって全身火傷で水ぶくれしてうめきながら苦しんでいる子供さん達が運びこまれ、親さん達の一生懸命の看病にもかかわらず、どうすることも出来ず、3日目になくなって行かれたこと。また、被爆による頭髪の抜けていく方を見かけた時など、原爆のおそろしさを深く印象づけられました。

また、私自身もB-29から投下した落下傘を見ていて、ピカーとしたのですぐ家に飛び込んだ瞬間、ものすごい爆風でガラスはこなごなに割れるわ、かたむくわで、生きた気持がしなかった事をおぼえています。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 12歳〕
(23-0394)

山腹の防空壕に潜んでいたが、辺りをただようひどい臭いに、そこを駆り出された。

下の小学校（国民学校）の校庭一面に、焼かれた遺骨が散乱していた。日がたつにつれ、数は増えていった。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 13歳〕
(13-20-108)

海星中学（旧制）1年のときの旧友の、ケロイドの顔が忘れられない。

終戦後、校舎は米軍に接収され、鎮西中学の校舎で二部授業となったとき、ケロイドの顔で元気に登校してきたが、その後、気づかないままに、姿がみえなくなっていた。転校か？死か？全く先生方からの話もなかった。

また、被爆後の城山に伯母と入市したとき、死体を井ゲタ状に積み上げ、ダビにしていたことが、頭に焼きついて忘れられない。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 13歳〕
(13-35-018)

あの日、B29が飛んでくるのが見えたので、家の中にいた母親を呼んだ。落下さんが落ちてくるのが見えたので「あれは何だ？」と指さしたとたんピカッときた。自分はとっさに伏せたが、母親はまともに顔に光をあび、爆風で倒され、以後

目が痛いと言え、死ぬまで治らなかった。

3日後に親類が三菱兵器にいたのを、近所の人たちといっしょにリヤカーを引いてさがしに行った。自分たちは子どもだったので駅前までしか行かなかったが、そのときに見たすさまじい光景。もう、やけどやケガで死にそうな人のうめき声、それらの人々に救援の人たちが名前を呼び、叫んでいるありさま。

自分がリヤカーに乗せてつれて帰った叔母は、きんきんにふくれあがって顔もわからなかったが、ことばだけは言えた。5日目に死んでしまったが、その間のなんともいえない臭い、うめき声。

近所にいた友だちが広島で原爆にあって、死体をかき分けて防空壕から這い出してきたのに、また遭ったとってふるえ上がっていたありさま。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 13歳〕
(42-2007)

原爆投下の直前まで長崎駅にいた。乗車券を買いに行っていたのだが、途中で一度空襲警報になり、みんな避難したため、解除後は行列の早い順番にわり込んだ。それで切符が買えて、駅をはなれることができた。もし、はじめの順番だったら投下時にも駅にいたことになり、死んだ可能性が大きい。

だが、私がずるいことをして切符を早く買ったばかりに、だれかがワリをくって駅に残っていて、なくなったのではないか。その思いが、胸の中に重く残っている。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 14歳〕
(13-15-133)

自宅が小ヶ倉で、すぐ下は海岸です。当日は友だちと泳ぎにいていました。爆風で2メートルぐらいとばされました。このことはいまもわすれません。

当日どこもけがはなかったのですが、B29がきて、ピカッと光ったのもみまし

た。いま白内障で毎月1回駒込病院へ通っていますが、左眼は失明しております。薬は毎日のんでいます。

とばされたことと、ピカが一番心に残っています。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 14歳〕
(13-23-057)

いろんなことが頭に浮かびます。そしてそのどれもがまさに地獄でした。

私の家族は、私を含めて6人。重傷の父は行方不明でしたが、他はいずれも軽傷または完全に無傷。それが、無事をよろこび合ったのも束の間、2週間のうちに、重傷の父を除いて死んでしまったのでした。生き残った父も、負傷の傷跡と敗戦後の生活苦と、何よりも家族を失った悲しみの中で16年を生き、死去しました。とうとうみんな生きていてよかったとはいえないまま他界したのでした。

人間を焼き殺し、生きのびた者をなぶり殺す核兵器の真髄をここにみる思いです。とうてい許すことはできません。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 14歳〕
(42-2236)

翌日、爆心地の会社に勤めていた兄を探しに行ったが、一面火の海。家屋は焼け落ち、被爆した人たちの死体が無残な姿で横たわり、やけどで火ぶくれたその姿は地獄さながらでした。

兄の会社まではとうていたどりつけるものではないと断念しました。生きている望みは無いと半ばあきらめたところ、3日目にボロボロに焼けちぎれた服をまとい、背中一面に爆風でくれたガラスがささり、ひどい姿でやっとわが家にたどりつきました。

近所の親しいお宅へ爆心地から、重傷の人たちが大勢救助されて来たのですが、

火ぶくれーうみーうじが湧き、苦しみに苦しんだ末に、毎日1人かけ2人かけ、とうとう全員亡くなってしまいました。治療のしようもなく、手もつけられない状態で、みんな死んでいってしまいました。

多くの人たちがこんな苦しい思いをして死んで行き、不幸中の幸いで命びろいして生きのびた私たちも、皆何かの傷害が残っているのです。命のあるかぎり不安が続きます。次代のひとたちの健康をも案じながら生きています。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 15歳〕
(13-23-048)

①幼い兄弟が、全身火傷で寝かされていて、母親と思われる人が、うちわで蠅を追っているが、ハエはその傷口にたかり、子供達は「あついよう、あついよう」と泣いていた。爆心地近くの救護所で見たこの光景は、今でも痛ましく思い出される。

②ある橋の下に、黒こげになった死体が山積みされ、そのまま放置されていたが、しばらくして行ってみると、白骨の山となっていた。おそらく身元がわからないまま、野ざらしになっていたと思いますが、その方達の家族の事を思うと、心が痛みます。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 16歳〕
(07-0042)

ピカッと光線が体にささるようにして熱かった。家の中にとびこんだしゅんかん家具、その他の物が体の上にかぶさってきた。しばらくうつぶせになっていたが、その後何ごともなかったので外に出た。家より約10米はなれた庭先の防空壕に走り込んだら、庭先で遊んでいた妹や弟も、顔は青ざめ、体はふるえて入っていた。

爆弾はどこに投下したのかと周囲を見て廻るが、雲ばかりで自宅から良く見えな

いので山上に来た時、浦上上空が黒煙を吹き上げ、ところどころで赤い火を吹いているが、ただ呆然として見ている。一旦自宅に帰りそのままになった建具を建てるが合わない。その後4時頃戦場に行ったが、戦場は散乱し、まばらに人がいるだけ、あまりのこわさに逃げるようにして自宅へ帰る。

翌8月10日郵便車で出発、五島町まで来た。これより先は焼野原になっていた。駅の中には小荷物らしい物が焼けて散乱していた。ホームには11時11分発の列車が大破している。この列車は前にも空襲で襲撃された列車だなあと思いながら通り、井樋の口まで来ると電車が2台かさなるようにして焼けている。茂里町工場北側半分（ペシャンコ）。電車の鉄柱がななめに倒れている。右側は焼野原、山王神社の鳥居が片足で倒れるようになっていた。大学病院は廃墟となり煙突がへの字になっている。この附近から道路も散乱し、車もよく走れない。松山町まで来ると電柱が半分焼け残り直立していた。大橋附近まで来ると電柱が反対に倒れている。川の中に死体や被爆者の人がさげんでいる。消防団の人が被爆者をはこんでいる。田の稲もやけている。もう見たくないのに、車の中にうずくまっていた。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 16歳〕

(42-0843)

- 1) 原爆降下の翌日、原爆中心地浦上に行った。木や葉っぱが灰色になっているのに異様な感じを受けた。
- 2) 途中、女子挺身隊が先生に引率され、全身まっくろによごれ、着物はぼろぼろ、おのおの杖をついて、よろよろしながら並んでくるのに出会う。
- 3) 道の両脇に重傷を負った人達が、あるいは死に果て、あるいは目だけぱっちり開いて坐りこんでいるのを見て驚いた。
- 4) 田舎のぼつんぼつんとある一軒屋が、全部焼けているのに意外に思った。
- 5) まっくろに焼けた死体のごろごろころがっているのに驚いた。
- 6) 馬が立ったまま死んでいた。
- 7) 5歳位の幼児が、お父ちゃん、お母ちゃんと泣きながら、スコップで倒れて焼けた家を掘りおこしていた。

- 8) 防空壕に入っていた女の人から水を汲んできてくれとたのまれたが、その付近には水がないので非常に困った。
- 9) 老婆が一家全滅したといって、泣きながらお米をといでいた。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 17歳〕
(23-0181)

原爆落下翌日、会社の人や町内の人をさがしにいったのですが、浦上川の近所では水をもとめてくるしんでいた人。母親は死んでいるのですが、腹の中でうごいている子供。水のほしがる人がおるのですがどうすることも出来なかった。

何人かの人をはこんだのですが、病院はなく学校の庭にはこんだのですが、薬はなく、たいがい死にました。

けがはなく一寸のケロイドだったのに、顔をきにしていた友達も死にました。ひどい人が5、6年あとまで生きていました。

朝鮮の人がハダカでリヤカーにのり、ヒフはむらさきになっていて一寸さわるとベロッと1糶厚位の皮がむくれ、また、親指位の穴が背中等にあきウジがわいているが、薬もなく、クサクなんともいえないにおいがして、いまでもわすれることがなく、生きながらじごくで、その時は戦争だからと思い、今はこのような事は二度とあってはいけないと思います。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 17歳〕
(23-0183)

私は昭和20年8月9日飽之浦町1丁目にて被爆し、その日8月9日燃えさかる火の中をくぐり抜け、幸町にいる職場の上司を救護に向い、飽之浦町にある三菱病院にて手当をさせ、立神の自宅まで送る。

自宅に帰ったのが午後8時頃、帰ったら学校に行ってる弟が帰っていない。翌朝

早く家を出発し弟をさがしに油木町長崎市立商業学校に行くが生死不明。その後浦上周辺をさがし廻った。浦上川には水をもとめて死体の山、下大橋には頭がない胴体だけが橋げたにもたれて立っている。上大橋には子供が飛び出た産婦の死体。また、2歳位の女の子が茶わんのかげらをもって川に水をくみに行き、母親にわたそうとして消防団に取り上げられ、また、川に水をくみに行くをくりかえし、何とも言えない。

まだいろいろな事が書けばいくらでもあり、文面では書きあらわせません。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 17歳〕
(42-0505)

爆心地の近くに伯母家族が住んでいたため、翌日より三日間伯母の家族捜索と遺骨収拾に入市したが、浦上川の水面に、熱風で体をやかれ、裸で水を求めて入水した老若男女の肌をピンク色にそめ、空気を入れた風船人形のような姿で死んでいる大勢の人びと。また、路上に荷車を引いた馬が内臓を出して死んでいるさまを見た時、地獄絵を見た思いで、昨今でもきれいになった浦上川の川筋を通るたびに、あの時の事が思い出されます。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 18歳〕
(42-0507)

原爆炸裂のときは、もうもうたる砂、土けむりが空に舞い上がり、しばらくしてから樹木、倒壊家屋がぶすぶすと燃えはじめた。山王神社の生い茂ったクスの大木が丸ハダカとなり、大学病院の窓から白衣の看護婦、医師、患者が飛び降りていた。――それはまるで落下傘をみるような風景で、黒煙の中からパッパッと白い姿が落ちていったのである。

家屋がバラバラに倒壊した中に、人がいる。火が吹き出したその下にいる人々を

救出することが出来なかった。――助けて、助けて――と呼ぶ声に、耳にフタを
するようにして金比羅山の山道を這いずって逃げた。

学徒報国隊、奄美群島の乙女たち、モンペも引きちぎれ、シャツは焼きとぼされ
て、ハダカ同然で山道を這いずっている。目の前でパタパタと死に絶えていく。黒
い雨がポタポタとその死に顔に降り注ぐ……。

まるで地獄の使いのような大粒の黒い雨が、蒼白な顔を汚していった。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 18歳〕

(42-0531)

○弟（11歳）が近くの神社で遊んでいた時に被爆し、顔や手足の皮膚がはがれて
見わけがつかないようになって家へ戻ってきた。（8月10日に死亡）

○死骸が多く転がっている側を通った時、水を求められたが、上空を飛んでいる飛
行機の方が恐ろしくて、水を与えることもできずに立ち去った。（死人は恐ろし
くはなかった）

〔長崎 直爆3.0km～ 男 19歳〕

(42-1803)

③ 20歳台（被爆時）

原爆は生物に対し敵である。

昭和20年8月9日夜8時に呼び出されて、隊員62名とともに、原爆の落ちた
中心地の少し先の浦上の大橋まで行き、大橋の手前左側の空地に、亡くなった人達
の遺体を一方所に寄せる作業をしましたが、実にこれが戦争かと思いましたが、余
りにも悲惨な場面でしたので、自分自身が今実際に生きており、この作業を隊員と
ともに行なっているのかなあと思ったくらいでした。

長崎署の前にあつまり、署員から乾パン1袋と肉缶と思います、を貰って、署長の訓示を聴いて、長崎駅までやっとたどりつき、そこからは鉄道の線路を進路にして、浦上まで行く途中に亡くなった人達を懐中電燈で見ながら、浦上の大橋まで行きました。

真裸になった体で、水をくれ、水がのみたいと言っておりましたが、水をやると、のむと、死ぬとの話でしたので、水をやらずに通りました。今思うと心に残ります。あの時、水をあげたらよかったと今思うようになり、仕方ありません、可哀想でなりません。

また、防水桶に入って亡くなった人が、何と相撲取さんみたいな大きく脹れておりましたので、桶から出してあげようと思って数人で出そうとしても、桶の中で脹れて出ませんでしたので、コンクリートの桶でしたので、壊して死体を出し、寄せる場所まで行きました。何とも話しようありません。

また、浦上周辺で亡くなった方達を1カ所に寄せはしたものの、全部は出来ませんでした。朝方6時頃消防隊員達が来ましたので交代して、長崎署に報告に帰り、道中防空壕をのぞいて見ましたら、座ったまま死んでおりますが、何と両手首と足首のみ黒くこげて骨が見えました。また、手首には金属の時計バンドは着いていました。黒地の服は焦げて、白地の服は残っていました。

これ以上書けません。余りにも悲惨な状態でした。8月10日と11日は、亡くなった知人達を皆埋葬の作業をしました。思い起こします、死んだ人達がちょうど炭鉱で使う、焦げた坑木のようなものでした。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 23歳〕

(13-12-066)

今なお印象に残っているのは、8月10日午前7時頃、妹捜索のため三菱兵器製作所に行く途中、多分岩川町の道路端で、家庭防空壕でしょうか1m位の深さの中で、母親が乳飲子を左手で抱え2、3歳の子供が這い上がっているのを右手で止めている形で黒焼けして死亡しておられた事が、目に焼き付いております。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 29歳〕
(42-0761)

④ 30歳台（被爆時）

8月9日11時過ぎに稲光がしたので何だろうと思った。10秒ぐらいして近くに爆弾が落ちたと思った。その後浦上方面に火災がおきて、時間がたつにつれて全滅との情報が流れたので、家族のことが心配で浦上の方へ急いで見ると、稲佐橋の所の電燈会社が燃えていた。行き過ぎる人に聞くと、浦上方面の家は全部燃えていたとのことです。

自分の家族は岩川町に住んでいたのですが、この原爆のために妻と子供二人なくなりました。台所附近で妻らしいと思う骨が見つかっただけで、子供二人のはどこにも見つけることが出来なかった。未だに子供のは分からないままです。それだけに心のこりです。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 32歳〕
(42-1261)

- イ) 8月9日事業所三菱造船所より帰る途中、浦上川には全身焼けただけだ被爆者の山をなし、水を求めて集まり、焼けた身を水につけたり、のどが渇くので水を飲む等、実に可哀想なものであった。
- ロ) 道路には首が飛んだり、手足がとんだり、これまた死体の山で、実に、まさに生地獄そのものであった。
- ハ) 自宅に夕方たどり着いて見ると家族全員被爆し、家は倒れて燃えていたのを、被爆した家族でまず火を消し、即死した者を家外に出し、生あるものだけ防空壕に集まっていた。家族13人中わずか4人、他は死亡または行方不明であった。
- ニ) 家族の死体捜索、負傷者の治療連行、食事、近所の手伝い等、実に多忙である。

- ホ) 被爆者中、元兵器製作所が仮病院になったので、そこに運ばねばならず。
- ヘ) 防空壕内で死亡したる者は、材木を集めて死体を乗せて、あたかもイワシを焼くように5人の死体を並べて焼き、骨は破れた筆筒の引出しに入れて、雨ざらしして3カ月位置きざらし。
- ト) 兵器製作所内の仮病院に運んだ被爆者の2人は1カ月後に死んで、遺骨は出島の三菱会館に納骨してあるから取りに来いと連絡あり、貰いに行くと、何万という遺骨箱が山積してあった。その内のだれか分からないから自分でよいと思うものを持って行きなさいと言われて、適当なのを貰って帰り、信じて祭っている。
- チ) 原爆で死んで行った者も哀想だと思ったが、生き残った者も苦勞の限りで、いっそのこと死んだ方がよかったと思ったこともあった。

〔長崎 直爆3.0km～ 男 36歳〕
(42-0815)

b) 女

① 9歳以下(被爆時)

8/9日ちょうど小学校近くにお使いに行き(解除時の折)ピカドンと同時に大人の(男性)がこわきにかかえ近くの大きな家に逃げてくれたが、いつどこでケガ(顔面)したか血が流れていた。

どうして我が家へ戻ったかは覚えていない。

8/11日、立神～浦上駅まで徒歩の間、(あちこちで)死体の山、とくに浦上川の死体は未だ頭から離れない。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 6歳〕
(23-0373)

昭和20年4月私は小学校へ入学しました。入学したものの、学校へ行っても防空壕へ入ったことばかりが思い出されます。

8月9日、原爆投下の日です。私は家の下の川で友達5、6人で泳いでおりました。飛行機の音とともに目の前にピシャーと言う音がして、かみなりが落ちた時のような感じでした。

少したってから家に帰ると、障子等倒れ、妹（生後6カ月）は障子の下になり死んでると思い、すぐ障子をたてると生きていました。子供心にもよかったと思いました。

しばらくして道路の方へ出てみると、なんだか真黒にこげ、顔もよく判断出来ないほどの火傷の人が、何人も下の方より登って来ます。水がほしいと言われたのですが、当時6歳の私は、こわくなり逃げました。

あの時、水をあげたらよかったと心残りがします。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 7歳〕

(42-0912)

○当日朝から町内の防空壕に行って、附近の墓で遊んでいた。

○お昼近く、お墓でおにぎりを食べようとしたら、B29が飛んで来て空襲警報が鳴ったので、あわてて防空壕に入ろうと走り出すやいなや、ピカッと光をあびて、急に黄色い世界になり、何も見えなくなって、やっと防空壕に入ったとたん、分厚い戸がすごい勢いでしまった。（爆風で）

その夜の空は血の色で気味が悪くて、食べ物ものどに通らなくて、両親のことが気になり、両親が来るまで泣いていたのを覚えている。

○原爆が落ちて2、3日して、学童は全員そかいさせられて、私はうちで働いていた、ねえやさんの家へ母と二人で歩いて行きました。日見トンネルに入ったとたん、異様なにおいと変なうめき声が聞こえ出し、うす暗い中をよく見ると、やけどした人、けがした人と、トンネルの入口から出口までうずくまっていた。水をくださいという人もいたし、助けてという人もいましたが、子供心に可哀想というより気味が悪いと思った。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 9歳〕

(13-23-014)

9歳の夏、スリッパ1枚着ただけで外で遊んでいました。ピカーといいようのない光とともに、座敷でねころんでいた姉が外へ飛びおりて来て、私をひっぱるようにヒイラギの木の下にふせました。

建具はほとんどたおれ、ガラス戸はこわれ、店のウインドもめちゃめちゃ、天井もふきとんでいました。

小学校の講堂は病室に変わり、あとからあとから、やけどで苦しんでいる人々がかつぎこまれ、当時は脱脂綿もなく、新聞紙できず口をふいていました。きずぐちにはうじがわき、御飯茶ワンですくい取ると、とてもきもちよさそうにしていました。教室の机がベットになり、血のついた机、うみ等でよごれた机、何カ月後に小学校の前の川で洗ったことをおぼえています。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 9歳〕

(13-23-050)

② 10歳台 (被爆時)

身体の半分が、日にあたっている所だけやけどして、日にあたっていない所はやけどしてなかったり、やけどの皮がブラブラして、はいつくぼって、水、水と言って助けをもとめているひと。

私の父は、全身に火がついているじょうたいで、家の近くまでにげて帰って来たが、全身やけどで、もう、それは、それは、父とは思えません。

まさに生きじごくですね。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 10歳〕

(13-15-123)

私は6年生でした。母に連れられて竹の久保の伯母さん達を探しに行きました。焼け野原で臭いがひどく、母のあとについて行くのがやっとでした。竹の久保に着いたら、式見よりおばあちゃんが来ていて、バケツに骨を入れていました。親子5人重なりあって死んでいたようです。

あっちでも、こっちでも、水、水……。イタイ、イタイ……と泣いている人達が、今でも目にみえて来ます。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 12歳〕
(42-1011)

私自身小学生でしたが、今でも鮮明に覚えています。

自宅が赤十字社の近所でしたので、多くの人が入り出していました。その空地で、夕方4時頃から材木等井型に組み、亡くなられた方を焼き、お経の音が夜11時まであたり聞こえて、なかなか床についても眠られませんでした。あくる朝になると、死臭とともに燃えきった材木の灰などが目に止まり、何かしら悲しい心持で、磨屋小学校に登校するためその横を通った毎日でした。

また、私の祖父母が病床について間もなく、髪の毛が抜け、歯ぐきより出血し、一日一日弱って行くのを、子供心に悲しく思いました。満足な看病も出来ず亡くなり、それが心残りです。その祖父母には私の母だけの唯一の子供だったことと、郷里が石川県なので親戚もなく、また、私の父は戦地に6年間行ったきりでしたので、何かと不自由でした。

世界の地図の中で、お互いの国の中で、小さな争い事が起きているようですが、いつも犠牲になるのは女の人、子供達です。1日も早く平和であって欲しいものです。人間の生命は無限ということはないのですから。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 12歳〕
(42-1961)

当時12歳で、郊外に位置した所に住んでいた。

原爆の日の翌日位から、爆心地を逃れて、徒歩で何時間かかりでたどり着いた人々がかなりあった。その人達は幸運にもけがも火傷もなく、無傷の人達であった。ところが、その人達の間でほんの2、3日位から死者が出始めた時、無傷の人々が死んで行くのに、暗たんとした思いが心に焼きついた。その思いは今でも心奥に残って消えたことが無い。

[長崎 直爆3.0km～ 女 13歳]
(13-53-024)

私の家は爆心地より0.5km内にあったため、家の中にいた母と第二人の計三人が圧焼死して、遺体に会うことが出来ませんでした。

私と父はあきらめきれず、毎日、遺体またはどこか逃げのびているのではと、毎日探し歩きました。三日後、焼跡に立ち骨を探し求めました。弟達の骨は真白く浮き上がっていました。母らしき骨はまだ生焼けでしたので、木切れを拾い集めて焼き直しました。

40年たった今でも、遺体を確認していないため、テレビ等の対面を見ると、もしや私も逢えるのではと、あきらめることが出来ません。

[長崎 直爆3.0km～ 女 13歳]
(40-0842)

- 一緒に(そばにいた)いた幼児、光線が顔にあたり、ひどいやけど、その後(数年後)死亡。
- 3ヵ月位後に爆心地に行った。浦上天主堂の周囲、やけあとに死体の足や髪の毛がついた木材、小石等を見て息苦しかった。
- 黒こげになった石段や血液のしみついた、黒色に変化した家具類を見た。

○浦上川の水、どろ水、水ぎわに死体のやかれた跡が何カ所もあった。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 14歳〕
(13-32-023)

伯母が浜口町に住んでいて、親子二人焼死。二人とも白骨状態。父母（私の）が当時骨壺なんてありませんでしたので、バケツに骨を拾い、田舎に連れて行き納骨しました。

終戦後従弟と妹と三人で浜口町の伯母の家に行った。瓦は灰となり、ふむとザクザクとくずれてしまった。一升瓶はアメのようにとけ曲がってしまっていた。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 14歳〕
(42-0506)

親類の者が中心地で被爆し、男の児2人が頼って私の家に来、1週間を経ずして亡くなったが、杖をついて現れた2人が着いた時は、いくらか力もあって、様子を話すことも出来たのに、安心したのか元氣なく（どんどん悪化してということか）亡くなったということは信じられない位で、被爆したことで気も動転している中で、その表情まで今でも思い出せる。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 15歳〕
(13-47-019)

○女子商業にっていたいたいが被爆し、顔にウジがわき、3日しか生きられなかった。同じ年だった。まだ15だった。

○目の前で被爆した瞬間、抱いていた赤ちゃんが水ぶくれのようにふくれ、痛々しかった。

○被爆したあと、また、敵の飛行機がくるかもしれず、畳の上ではなく防空壕の中で息をひきとった。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 15歳〕
(42-1969)

ヤケドのすさまじさは、言葉では表現出来ません。

手当てしているのにウジが湧き、ウミが湧き出ているようでした。

ガスを吸っただけで、口の中がただれて行き、それがだんだん内臓をおかして行き、1週間飲まず食わずで、意識がはっきりして、最後まで死にたくないといって息を引き取って行きました。

安楽死させてやりたいと思いました。

すさまじい様を見て、何としても自分は生きていたいと思いました。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 16歳〕
(13-17-029)

- ア) 数は分からない位、数千とも思える死体や、まだ生きて横たわっている人を見た。死んでいる人は普通の3倍位ふくれ、生きているのにうじ虫がはっていた。皆、水をほしがっていたが、水はどこにあるのか分からなかったし、水をのませるとすぐ死ぬと聞いていたので止めたが、今思えば、おそらくあの人は死んだのではないかと思われ、せめて水を口一ぱいでものませて上げたかったと思う。
- イ) 医大のガードのようなところに、「まき」のように死体を積み重ねてあるのを見て、全身の力が抜け、血がこおるほどのおそろしきで、ふるえて動けなくなった。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 16歳〕
(42-2163)

8月9日私は風邪のため工場（学徒報国隊で兵器に行っていた）を休んで、女学校の寄宿舎に寝ておりました。舎監の先生は、生徒の引率監督のため、各々の工場を廻っていらっしゃる時、その途中護国神社の所で被爆され、駒場町の救護所まではって行かれ、知らせでタンカで迎えに行き、帰られた時の様子、大やけど、片腕は脱臼、片方の腕は何かのはへんがはいり、指の所よりはへんが出て、手両方ともぶらりとしていらっしゃるし、やけどのにおい、生きていらっしゃるのに死人のにおいと、幽霊そのもので、8月11日夜7時頃、目をつらせたり、苦しがつて亡くなれましたが、お医者もいらっしゃらず、亡くなくてもお坊様にお経もあげてもらうことなく、荼毘にしました。それも16歳～13歳位の女学生徒が主になってです。今思えば身ぶるいします。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 16歳〕
(42-2306)

男か女かわからないような、黒こげの死体のごろごころがっていた。早く茂木へ逃げようと思って、その死体にだきついたり、けつまずいたりしながら歩いた。死体にだきついても、こわくなかった。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 19歳〕
(13-50-002)

自宅で昼寝をしようとした時、爆発音と同時に天井のススが一面。何も判らず外に飛び出たら、浦上の方でキノコ形の雲も見た。医大の近くに祖母と叔父親子が住んでいるので、母が買出しに行っていたので帰るのを待って、浦上に行く。

中島川（出島）附近で電車が焼けている。その中に人がたくさんいる。ムシ焼きだ。これは大変と思い、その日は交通止めで二日後に坂本町に行く。途中死体がごろごろ、半焼け、丸焼け、二目と見られない。どこともなくウメク声、水をほしがるかすかな声、生地獄。

坂本町に着いた。何もなくどこか判らない。たしかにこの附近だと話し合っていたら水道管があり、そのそばで祖母が孫をふところにだき、祖母は丸焼けになっていた。叔母はすこしはなれた台所附近で死んでいた。

そばが医大だが、死んだ人もたくさん。また、息のある人をタンカで運んで来る。大変だ。病院はないのに何とかしようという気持で病院に着くと、呼吸が止まって死んだ人もたくさんいる。正に焦熱地獄。こんな惨状は子供達に見せたくない。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 19歳〕

(23-0122)

伊良林小学校の救護所で、△△先生宅に看護見習にいた関係で、2、3日学校の方へ行きました。

バラにつり下げられた人や、身体中焼けただれ息もたえだえの人など、むしろに寝かされ痛いのも判らなくしている人などさまざまで、何とも言えない爆弾のきょうふでいっぱいでした。今にも息がきれそうな、声にはならない声で「水を下さい、水を下さい」と私達の姿、いや、気配で感じるのでしょうか、言っていましたけど、先生からの注意でやる事が出来ませんでした。助からない人達とは思っていても、「水をやればすぐ死んでしまう、ほんとうに可哀想だけど、身内の人に会えるまでは、10分でも20分でも生きていてほしいから」とのことで……。

△△先生宅でも娘さん2家族、全部で8人の遺骨が二階に安置されました。

40年過ぎた今でも、いや一生「水を下さい」の声、私の耳をはなれないでしょう。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 19歳〕
(42-0631)

私たち母子は爆心地から遠いこともあって、たいした事にはならなかったが、母の父は勤務中浜口町で爆死した。「とても生きてはいないだろう」とまわりからいわれながら、死体を確認するまで半狂乱で爆心地付近をさがしまわる母に手をひかれて、とにかく歩いた、歩いた。

日頃は忘れていたが“あの日”が近づくと、また資料や写真を見ると、祖父を焼いた赤黒い炎が喉の裏にゆらめく。

浜口の現場で死体を見つけたのは、あの日から3日もあとの「8月12日だった」と母たちの話で後になってわかったが、あの夜からずっと夜だけが記憶に続いて、いきなり15日のぬけるような青空と、妙な静けさだけが鮮やかだ。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 19歳〕
(42-1711)

③ 20歳台（被爆時）

(光) それですべてです。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 20歳〕
(13-33-005)

直爆死した父の体が、顔は黒こげで、目は穴があき、手は黒く骨だけなのに、直接光が当らなかった腹の方は服の布地が残り、一晩中プップと音を立て血が出て

いた事。

はめていた時計が1時たって止まっていた事。

また近所の人が、爆心地近くから全身大やけどのつるつるのからだで歩いて自宅まで帰って、3日苦しんでなくなれましたが、生きている内から死臭がただよい、ハエがたかり、うじがわいていた事。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 20歳〕
(40-1099)

私は20歳の時被爆し、救護班として穴弘法さんに行きました。その行き帰りの時、息もたえだえの方々会い（決して水をやってはいけない、すぐ死亡することでした）水をほしがり足もとにまつわりつくありさまでした。その形相、どう説明してよいかわかりません。でも帰宅の途中どうしてもそこを通ってみたい、どうしているやろか、どうぞ生きていて下さいと祈る気持でたどりつく。もう一度会いたく、みると苦しんだまま両手のつめが土を掘るようなかたちでなくなっている。私は何日も何日も同じことのくり返しのように、水筒の水を口にそそぎ、ごめんねこんな事になるなら息のあるうち飲ませてあげてやりたかったと、目をそっとねむらせ、泣き泣き何度そこをはなれたことか、今でもあの亡くなった方のお顔がかさなっては消え、かさなっては消え、どうぞ成仏して下さいと念ずるものの一人です。

また、昨日きれいに消毒した切りきずより、大きなうじがもぞもぞと、本人は何のいたみも、かゆみもうったえることも出来ず、ただうつろな顔をしているのみ。私はもう思い出すことも、ペンもとることもたえられない気持です。何を書いたか乱文にて失礼と思いましたが、一つ二つ書かせていただきました。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 20歳〕
(42-1372)

あの日の朝早く、母と2人、残して来た家の整理に疎開先より帰り、山小屋に置いていた衣類を取り出している時に、敵機来襲の鐘とともに飛行機のぼく音も聞こえ、あわてて近くの防空壕に飛びこむと同時に、物凄いばくれつ音と、地震と、もうもうと煙のような、壕の中も外もまっくらになりました。すぐ近くに爆弾が落ちたと思いました。母が心配で、恐る恐る外に出ましたら、変な雲が。それがキノコ雲でした。

その夜は、家がつぶれ、また山に登って、一晩中燃えさかる火の海の浦上方面を見ていました。どうなるのかしらと不安の中で。

夜明けを待ちかねて下山。爆心地を通り抜けないと疎開先の滑石町には行かれませんが。長崎駅前手前あたりから浦上駅、ずっと先まで一望のもと、ガレキの道。黒こげのフクレ上がった死体、ケガ人の幽霊のような姿、馬の立ったままの死、恐ろしさにふるえました。その無残な有様、思い出すのさえ恐ろしいのです。昨日の朝、朝食をすましたまま、何一つ口に入れるものもなく、暑さと、飢えと、恐ろしさに、地獄を見たと思いました。

まだまだその恐ろしい光景は続きますが、もうこれ以上、つらくて、恐ろしく、筆は進みません。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 21歳〕

(01-0117)

防空壕にやけどをした人たちが帰ってきた。悲鳴、泣き声、水をくれ。

なんとなく落ちつかなくて、見たい気持もあった。長崎駅までウロウロと歩いて、20日以内にいった。白骨化したもの、やけただれた死体、そしてバラバラだった。生臭さ。

自宅まで帰る時は、自分がおびえて、いったいどうなるんだろうと……。

ちょうよう工具に皆いていた。兄が職業紹介所のえらい人だったので、私を工具にとるなといていたので、助かった。友だちはほとんど女工で死んでいった。

ピカを見たから眼の調子はずーとわるく、悩みである。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 22歳〕

(13-53-028)

私は被爆翌日伯父が浜口町工場に行き帰らないので、まだ火の中を、上小島より現在茂里町付近まで歩きまわり、たくさんの死体を自分の足にけつまづいたり、グラマンの飛行機が低空にて飛んで来て機銃掃射されました。驚いて防空壕に入ると、そこにはたくさんの人が死んでいました。今考えるととても恐ろしいのに、自分の気持が張って恐ろしいと思いませんでした。子供全部死なれて気がふれた人、また、大橋の川には何百人の人が赤くなり、黒こげになり浮んでいました。

鉄道の線路には、学徒報国隊の学生がたくさん、水を下さい、下さいとさけんでいました。水を上げようと近くに行ったら兵隊からおこられ、可哀想に水をのませなかったこと、今でも心残りです。

また、私の父はエントツからおちて来て、頭を大きくけがをしました。現在は他界していませんが、原爆手帳も交付を受けず、苦しんで73歳なくなりました。その時医者から原爆症ですನೆと言われました。

二度とこのひさんな事は起こしてはいけないと思います。現在の自民党の軍備拡張に不安を感じます。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 23歳〕

(13-23-045)

被爆で亡くなった人を、ごみ箱から引きずって、解体した材木の上で焼いていたのを思い出すと、何とも言えない気持になります。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 23歳〕

(42-1055)

私は10日に主人の姉一家を探しに上野町まで行くことになり、川平を今の小学校の所まで来るまで、どれだけの人がたすけを求めていたか、ほとんどの人がはだかでいた事。また、皮膚がずりおちて足首のところまで服がぬげて〔いるように〕ひきずっている姿、首が半分ちぎれ、水を、水をとさげんでいる姿など、今でもおそろしく思っています。

その日はとうとう上野町まで行くことは出来ませんでした。11日に今の船型試験場のあたり（その頃はコールタールで何かをやっていたようでした）の前の畠の中を通り、やっとの思いでたどりついて見たら、姉さん一家は一人も見つからず、家は全部焼けおち、けむりが少しくすぶっているだけでした。それから、おばの娘を大橋を通り市商の所まで行き、探しました。姉の主人も市立商業高に勤めていたし、おばのむすめは「ていしんたい」でそこに勤務しておりました。でも人の死にざまって、死体なんて、こんなにも大きくなり、はだかのままでいる死体、ほんとうにあわれで、今も思い出したくありません。すさまじいといしか言うことが出来ません。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 23歳〕
（42-1213）

当時46歳の父は、大橋の三菱兵器で働いていました。爆風で吹き飛ばされた父は、ガラスの破片につきさされ、大やけどを負って、時津付近で倒れていたのを、大村の陸軍病院に収容されました。家では帰って来ない父を心配して、私は1週間位浦上方面を探しまわりました。病院から本籍地の諫早に通知があり、疎開していた母は、諫早から歩いて長崎まで知らせに来ました。私はすぐ病院に行き、いたましい父の姿を見ました。まだ意識のあった父は、苦しみながらも、私にその日の事を話してくれました。しみじみ親子が語り合ったのは初めてではなかったでしょうか。忘れることの出来ない、父の一言、一言です。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 24歳〕
（42-2159）

私の家では義父、母、妹、主人と4人の者の葬儀をしましたので、また、家も8分倒壊でしたので、他の人のことをどうすることも出来ませんでした。

また、9日から15日までの間、敵機はずっと飛んで来ましたので、皆、自分各自を守りながら作業しました。そして、私達も2、3日のうち、このようになって死ぬのだろうと思って、15日まで、皆おろおろしているばかりでした。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 25歳〕
(42-2308)

私は主人が出征していたので、子供2人を連れて長崎の三ツ山町（睦別当町）に父母と兄と6人で暮らしておりました。兄は長崎の市電に勤めておりました。

岡町の義姉と姪。山里町の従兄と子供3人。茂里町の叔母と従妹。本原町の叔父、叔母、従妹。船蔵町の叔父と従兄。13人？。

父と兄と私達で必死に探しました。

兄は20年10月に肝臓病から心不全で亡くなりました。27歳でした。

父は22年に肥大性肝硬変で亡くなりました。66歳でした。

探し歩きましたが、本人の遺骨さえ見つかりませんでした。父も兄もそれだけが心残りだと言って亡くなりました。

この世の生き地獄を見て来た私は、東京で勤めを続けましたが、娘が2人結婚するまでは、被爆したことを一度も人に話したことはありませんでした。長崎の弟があまり進めるので、47年に原爆手帳をいただきました。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 26歳〕
(13-23-049)

- 1) 子供を連れて配給物を取りに行く途中で、突然ピカッ、ドンとすごい音響のあと、大型の台風のようにウオーッと爆風がやって来た時には、生きた心地はしな

かった。

2) 近所の女の子さんが、学徒の挺身隊で三菱兵器製作所に長崎県立高女から勤員されていて、8/10夕方、まるで「こじき」みたいなボロボロの服装で帰って来た。その後高熱を出し、ウワ言を言い、下痢、ハキ気の重体で、私も看護婦の経験者ですので一生懸命に看護して上げました。どうにか命は助かりましたが、頭の毛がツルツルに抜けました。

[長崎 直爆3.0km～ 女 27歳]
(42-1914)

故夫の焼けただれた苦しいうめき声に、ただ、どうしよう、どうしようと、胸は高なり、生きた心地もなく、周りの悲惨な姿にはどうしてやることも出来ませんでした。こうして書いていても、胸がどきどきして、ふるえて来ます。もう思い出したくはありません。

[長崎 直爆3.0km～ 女 29歳]
(13-35-008)

④ 30歳台(被爆時)

家の中だった。横あなにいった。まちははたらきにいていた人たちがやけて、水、水ときこえてくる。水をやれば死ぬと思っていた。水そうの水でもいいといひながら死んでいったのが耳にのこっている。

駅から西にいったとき、死がいがふとくなっていた。それを焼いていた。馬もよこたわっていた。そのときは放心的で、みてもおそろしいとは思わなかった。自分だけしか考えられなかった。今思うとおそろしいと思う。

諫早まであるいていった。島原に汽車でいくとき、にもつはのせられたけど、自

分たち女や老人、子供はなかなかのれなかった。自分たちのことだけを、人は考えるということをもざまざとかんじた。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 31歳〕
(42-2146)

- 父は頭の毛はやけてしまい、顔の皮はむけてたれさがり、言葉も出ないようになって死んでいったこと。(10日死亡)
- 母は目がとびたしたようにはれあがり、のどのいたみをうったえ、もだえにもだえて亡くなりました。(21日死亡)
- 19歳の妹は右半身やけて、胸の傷口にうじ虫がわき出るようについて、うめき声が耳底に残って消えない。(25日死亡)
- 12歳の妹は死ぬ三日前から鼻血が出て止まらず、かみの毛は抜け落ちてしまっ、その上家の下じきになってはい出して、出るとき右の乳を真二つに、たてに割っていた姿が、ザクロのように真赤になっていた。永井博士に御診察いただいたが、あぶないと頭をひねられたことが印象に残る。
- 長大病院に勤めていた妹の友達が、一緒に、三日目にたどりついて来た。その人は上五島の調の浦の人でした。腸をひどく悪くして下痢がひどく、最後には便器を使ってしまつてやった。

〔長崎 直爆3.0km～ 女 32歳〕
(42-0928)

⑤ 40歳以上(被爆時)

原爆後、死んでいった人達を空き地で焼いた情景が、今でも心の奥深く残っている。

当時の知人、友人が原爆症と思われる症状で、次々死んでいったことは忘れることが出来ない。

[長崎 直爆3.0km～ 女 43歳]
(42-2344)

⑥ 年齢不明

家は全壊に近いこわれ方で、弟は10日に亡くなり、母はやけどがひどく、でも10月まで生きましたが、言いあわせないくるしい毎日でした。

亡くなる前に、右の脇の下に十円玉ぐらいのあながあき、なんとも言えない異様なにおいの醤油みたいな物が、おどろくほどでました。お薬とてなく。10月まで生きましたけど、後にまだ弟、妹が3人のこされ、今でも本当にさむけがつくおもいです。

[長崎 直爆3.0km～ 女 年齢不明]
(42-2222)

Ⅱ. 入市被爆

a) 男

① 10歳台(被爆時)

投下当日は、さっそく諫早駅へ行き救護活動に当るが、長崎から入ってくる汽車に乗り込み、死体はそのまま(長崎では死亡してない)、生きている人を優先に、

市内各病院へ運搬する。それが終ると、死亡した人達を汽車よりホームへはこんでいると、いつの間にかホームは死体の山となっていた。

諫早駅にはおろされないとわかると、汽車は次の大村駅へと続き、最後は早岐まで、そのようなくりかえして行った。

そのような状況が2日～3日続き、諫早駅に戻ると、病院へはこぼれた人達の救護に廻され、ケガをした人達がすでにキズ口にウジがわいているのをピンセット（竹で作った）で取り除く作業を3日～4日程して、死亡した人達の火葬へと動員され、3日程したらさらに長崎市内の救護活動に動員され、約1週間程度してやっと学校に帰ることができたものの、終戦と同時再びケガをして、病院学校の体育館等へ救護活動へ廻る。

〔長崎 入市 男 15歳〕

（40-0578）

原爆の直後と言っても小生の場合は8月21日入市からのことですが、当時は牛熊町には式見関係の汽船の便しか交通はなく、それもなかなか都合の良い便はあまりなく、従って良く歩いて油木坂を経て長崎市内へ入る場合が多く、大半がこうして歩いて仕事にも通ったものですが、その折にまだ8月の末になっても、当時の市立商業の校庭の隅やまだあった畠の隅など、まだまだたくさんの死体の山があり、それ等を焼いている光景を何度も何度も見ました。

母を原爆でなくした小生にとって、そのむごたらしい姿の死体を焼いている人達の心境を思っていると、とてもまともにその死体を見るにしのびない気持であるのに、焼かねばならない肉親の人達の辛い気持は、普通の火葬場にはない特別な複雑なものであったと思います。焼いている現場を覗きたい気持と、覗くのが恐ろしい気持は、母が死んだ翌日、葬式のあとに復員した小生には、母もせめて葬式でも出してもらえたことには良しとせねばと思ひ、葬式どころではなく野焼き同然のように原爆で直接焼死したもの、あらためて野焼きされた人々のさびしいこの世との訣別もいかばかりであったか、すさまじいばかりの臭いと、その立ち登る煙の光景は、戦場の第一線さながらのものであったろうと、今でもあの光景をフィルムのように

はっきり思い出せる。

特攻隊で死ぬはずであった小生が生き残り、民間の（母も含めて）人達がかくのごとき死に様をさらしたことに、当時は小生よりもっと、家族全員、家、土地等々を何も残さず焼かれて、その後に帰って来た元特攻隊員が、特攻くずれと言われる乱暴者に變化したことは、まだ覚えてられる方々もおありと思うが、気持は内にこもって怒りの持って行き場のない憤りが、そうさせたものだと思う。よくわかります。もうごめんですね。敵より味方のわからずやをやっつけたい心境ですね。

〔長崎 入市 男 17歳〕

(42-0675)

- 8月11日（原爆手帳では8月10日になっている）私は死体のあとかたづけに、長崎市爆心地付近の浜口町に入りました。岩川町あたりから白骨をひろいあげたりしましたが、それはそんなに苦痛ではありませんでした。浜口町までいったときびっくりしました。溝の中に落ちこんでいる死体を見たからです。一瞬逃げ出したいと思いました。……が……何とかしなければと思いました。体は二倍にも大きくなり、長い髪はみだれ、顔は紫にはれあがっていました。体をもち上げようと手足をもつと、皮膚がずるーとはげてきて、軍手にくっきました。スコップをおなかの底あたりにさしこむと、今度はおなかの皮膚が破けて黄色い液体がだらだらと流れ出しました。やっとタンカにのせ、私はタンカの後ろをもちました。その死体はもの凄いの悪臭を放ちました。顔を横向きにし、どこまでそれを運んだのか、もうおぼえていません。そこを逃げ出すように浦上川のほとりに来ましたが、そこにも数十の死体が全裸のまま大きくはれあがって浮かんでいました。何とかしなければとまた思いましたが、その数の多さやむごさはうしろ髪をひかれる私の思いを残し、そこから逃げ出してしまいました。（救護の人々はまわりにほとんどみえず、これではどうにもならないと思いました）
- 数日、数カ月後は下級生（△△君、▽▽君……）など直接被爆の人々の皮膚にうじがわき、その手当方法もなく、ただそのうじを一つ一つとり上げるのが何とも言えない心のいたみでもありました。

〔長崎 入市 男 17歳〕
(42-1410)

S20年8月11日青年団で近所の娘さんを大橋町三菱兵器工場まで探しに行く途中、駅前よりちょっと先の方で婦人会の人達からにぎり飯2、3個をもらい、浦上駅付近で、母親はモンペも焼けひざから下はヒフがたれ下がっている、5、6歳位の男の子の手をひいてくるのに出あった。子供も顔、手、足〔の〕ヒフがたれ下がっている。にぎり飯を差し出すと「メシはいらん、水がのみたい」と母子ともいっていた。私達は水は持っていなかった。くる人くる人のにぎり飯は差し上げたが、誰もが水がほしいと。

松山町付近の川の中には電車の残ガイ、馬は足を上にあげて約2倍位にふくれていた。

兵器の門近くでB29の爆音、そばの溝に飛び込んだ。亡くなった人の上に手をついた。ベトリとヒフが……。ようやく門を入り、あちらこちら死体がおり重なって、腕の時計は11時02分で止まっていた。探す娘さんとは会えなかった。12日明け方、家に帰って来られた。髪も焼け、身体に火傷をうけて……。

その後会社より死体焼き、燃えあとの木材を井桁に組み、5、6体一度に焼く。1日に2回、3日間。

〔長崎 入市 男 17歳〕
(42-1602)

まるで材木のようにころがっている姿を見ても、なみだも出なかった。そばに寄って見ると、体中にあずきいろのはんてんが出ていて、口やはなからは、ものすごいにおいのする毒が出ていた。

一生忘れない。

〔長崎 入市 男 19歳〕
(42-2319)

② 20歳台 (被爆時)

8/20日、入市した時、道の尾駅から線路つたいに家に帰る途中、(岡町だと思えます)人々がつみ重なって、くさりはて山のようにになっている姿や、浦上駅近くでは、ほうぼうで燃えくすぶっていた。牛馬など(人間)など、ほうぼうでくさり、ウジ虫などがたくさんわいていた。人々の死んでいる死体などかたづけられていない状態であった。

生きている人々の背中にウジ虫にウジがわいている人も多くいた。自分たちで(ウジ虫)とることもできないのでしょう。

〔長崎 入市 男 20歳〕
(13-19-012)

- ア) 救援の第一歩を踏み入れたとき、文字通り黒焦げの皮膚から血が吹き出し、長髪はちぢれ、ほとんど半裸の女性?と子供があてどもなくさ迷っている状態に出会い、予想だにできなかった状況にただただ愕然としたのを思い出す。
- イ) 生きていながら建物の下敷きとなった人々の、救助も思うにまかせず、むざむざ放置せざるを得なかった、得も言えぬ心境を、今日になっても思い出として険に焼き付いている。
- ウ) 考えられない死体状況の一つに、特に印象付けられたものは、被爆が盛夏であったせいか、全く無傷で一糸まともぬ全裸の死体があったこと。
- エ) 一方黒焦げで、性別も判らない、黒い風船人形のような死体にも出会い、原爆の恐ろしさをまざまざと見せつけられた。

〔長崎 入市 男 21歳〕

(13-14-027)

茶毘にした父、母、弟の遺骨が、紫蘇や味噌の瓶であった。

姉の家族も、家財ともに焼かれ、着たきり雀で父母達を探して8日目、骨にした日の夕方、海軍服の私に泣きすがった。

あくる日、リュックに大きな骨壺を背負い、片手にも瓶をさげた。

浦上川の大橋の上から、累々と手を差し伸ばした死骸の数々、もちろん牛馬も浅い流れに横になって死んでいる。見逃かす山々も赤く焼け、路々に臭気を発す褐色の骸。

姉は言う。ここで△△(弟)が死んでいた。母さんはここ。父はドブ水の中の溝に顔を埋めて耳だけ、見えた耳が父の発見の動機だったらしい。

目の前は駅の丸通の広場、窓無しの電車に立ったままの車掌。昇降口の手摺りを両腕で〔つかみ〕胸を張る下りようとする姿。背後にさかさまの二本足が見える。5、6人のもつれる姿、それ等はみんな死人だ。

私は息を飲み、立ちすくむ。足元は馬の頭の骨を踏みつけて立っている私なのだ。やがて墓に向かえば、石塔は立ったまま3、4米遠くに、バラバラに離れていた。

〔長崎 入市 男 22歳〕

(11-0082)

あの日20年8月12日〔ママ〕になっても、長崎本線道の尾駅の前小さな小川は、焼けただれた罹災者で埋まっていた。路傍にもこれ等の人が倒れたりうずくまったりして、炎天下に異臭が漂っていた。道の尾駅から出る汽車に乗ろうと、精一杯に辿り着いたのであろう。

爆心地浦上に近づくにつれ、人は倒れたまま白骨化しているものが多かった。その中に親子と思われる大小の白骨が、抱きあったままになっているものも見られた。

牛馬の死体は黒紫色にこげて、小さな飛行船のように膨らんでいるものや、一瞬にして白骨になったもの等、すべてが地獄絵図の惨状を呈していた。

道の尾駅から長崎駅の近くまで、人が行き交う程度に、死体や白骨を分けて通路にしていた。広々と見渡す限り死体と白骨で、点々とコンクリートの塔が崩れかけた残骸を見せていた。

一瞬の閃光が、人類の滅亡を示す威力をもつ、当時の新型爆弾に、人間としての怒りと恐怖を感じたものだった。

〔長崎 入市 男 24歳〕

(13-15-157)

私は久留米陸軍病院の衛生兵として、原爆被害の発生した8月9日長崎へ向い、救護活動に出発した。10日午前中、長崎大橋地区から活動を開始し、敗戦の15日夜引き上げ命令のでもまで被害者の手当てにあたった。この間被害地域を爆心地を中心とする円内を、北の1kmから南の3.7kmまで歩いた。その間に見た被害の状態は私の人生観を一変させる惨状だった。

特に幼児の半焼死体の肛門から出た腸、老婦人の裸身が防火水槽内で煮上がって死んでいる姿に驚がくした。余りの状況に多く出合い、列挙するにはページが少なすぎる。

救護所での看護状態は、四十年を過ぎても、不十分な看護、手当しか出来なかったことが、今でも心の傷として残っている。

一人残された4～5歳の男の子、爆風の挫傷によるチンコの裏の傷から尿が漏れて、苦痛と不安にウツロな顔で見られた時のやるせなさ、血便を出し衰弱して行く体で母を呼ぶ少女。娘を護送の途中で亡くした母の叫び「生きかえらしてください 兵隊さん」心の芯が冷える思いだった。脳症で頭を中心にして足で無意識に半円を書いて廻る工業学校生を、手当もできず体を押えるしかないつらさ。背中一面の火傷で4日間ウワ言をあげつづけて死んだ壮年の工具。脳みその見えている老婦人が念仏を唱えながら孫と並んだ姿。これらの人びとを命令とは言え、みすてて引き上げた15日夜の長崎に、国家の戦時機関のこわさを今でも感じている。二度と繰り返

返してはいけない罪悪である。

〔長崎 入市 男 25歳〕
(40-0396)

③ 30歳台 (被爆時)

三菱長崎造船所電装設計課艦艇係に担当技師として在勤中、20年8月7日東京艦政本部に、当時長崎造船所で建造中の特殊潜航艇の機器受け取りのため、出張のため出発。8月9日長崎より、被爆により混乱あり大至急帰社せよとの連絡あり、直ちに東京発の列車で長崎に向い、道尾駅までしか列車は行かず、道尾駅より歩いて浦上駅まで帰る途中に、人の死体が転がり、また、馬があちこちに焼けこげて転がり、町並みは焼けただれて跡形もなく、附近の山々まで焼けてしまって、全くこの世の中の様子ではなく、地獄とはこのようなものかと思われる惨状でした。

わが家はどうかと心配になり、竹久保町△△△番地にある家に行ったが、全部焼き果てて何一つなく、防空壕の中に妻と長男(生後6カ月)がそれこそ見るに見られぬような姿で生存していることが分かり、当時深堀町にいた義姉の所に、竹久保から歩いて行ったが、途中長崎駅前を通過して大波止を経て行ったが、人の死体、馬の死体等あちこちに散乱していた様子は未だに忘れることは出来ない事である。

深堀に着いた妻子は、しばらくは元気の様子だったが、十日位経つと妻が髪の毛が抜け始め、肌に斑点が出来始め、いわゆる原爆症が現れ、血をはくようになり、9月9日死去。近くの川原で茶毘にして遺骨を義姉の家に預け、長男を抱いて子供用の配給のミルク等をリュックサックで背負い、当時西彼杵郡大瀬戸町雪浦に住んでいた母、姉等のいる所に約10里の道を歩いて帰った。

あの当時の事は忘れようとしても忘れられない事である。

〔長崎 入市 男 30歳〕
(42-0870)

大波止から上野町の間には人の死んでいる顔、苦しんでいる顔、子供がケガをして水、水と言っている声、馬の死体等を見ながら家につくと、妻が家の下敷きになっていて、ようやくひっぱり出して戸板にのせた時は、もうすでに死んでいた。

母も苦しんで14日に死んでしまいました。

このくるしみは一生わすれることは出来ません。

〔長崎 入市 男 31歳〕

(42-0694)

1. 隣に住んでおられた△△△△氏宅、家族6人全員白い灰と化し、白骨だけが家の焼跡に並んでいた。□□□氏宅は、祖母、奥さん、お子さん7人が同様に真白い白骨と化し、その骨の様子で誰と名前がわかるほど、1カ所に並んで死んでおられた。(これを見て、いかに熱度高き閃光であったかが伺えた)
2. 故永井隆博士(長崎の鐘の著者)と路上で会い、その要請で大学病院内の負傷者を救出する作業に3日間従事したが、私と協同で担架をかついだ田川氏が3日目から出て来ず、前夜急死した由で、私も急に恐怖を覚えた(彼が無傷だと自慢していたので)。担架で救出した負傷者を病院の裏の段々畑に仮搬出し、再び病院に引返して次の負傷者を運び出して見ると、先刻の救出した負傷者がすでに死亡していて、作業が徒労に帰すことが数度あった。しかし病院内の倒壊物の下敷きになってうめいている、物凄く多数の人達の断末魔の悲痛の声は、今なお耳朶に鮮烈に残っている。
3. 妹の白骨死体が座敷の中央と覚しき場所に、形をくずさず横たわっており、移動する間もなき瞬時の出来事であったことが想像される。焼残りの棒切れで、その白骨の肋骨部を持ち上げようとしたら、ガラガラと音を立ててくずれ、妹の悲しみがとたんに胸に迫り号泣した。附近には半焼けの馬の膨れた残がい横たわり、毎日に腐臭がひどくなった。
4. 松山町から浦上教会へ行く途中の橋(私共は松山橋と呼んでいた)の下、普通は水面まで約3米ほどの空間があるのに、人間の死体で橋桁に届くまでに川全体が死体の山であり、中にはまだ動いているものもあった。川底の少量の水を求め

て、人々が次々に飛び込んだ悲惨な姿であった。道行く婦人らしい人が、帯を引きずっているので不思議に思い、よく注視したところ、それは帯ではなく、彼女(?)の背中や足の皮、足の皮を引きずっていたことがわかって、目をそむけた。

5. 側溝に倒れ込んだ人々の、水を、水をとやううめき声、助けてくれと叫ぶ力なき声等、こもごも耳に残り、焼跡の防空壕の中に起居した数日は、地獄絵巻そのものであったろう。持っていた救急袋の中の品物は、全て使い果たし、その上なおズボンをつかんでなさない負傷者をふり切って逃げ出した後、幾日も慚愧の想いで寝つかれぬ夜が続いたことを生々しく思い出す。
6. 8月10日長崎に入ろうとしたが、まだ浦上全体が燃えており、熱くて入れず、火勢の衰えるのを金比羅山上から見下ろして待ち、浜口町の我が家へ足を踏み入れたのは10日の夜半、それから1週間の滞在中、自宅の井戸水を一口も飲まず、外の破裂して吹き出している、生ぬるい水道水だけを飲んで過ごしたことが幸いしたと後日悟った。井戸水には強度の放射能があった由(井戸の表面に猫の死体が浮いていたので)

(順序不同の記述です。)

[長崎 入市 男 33歳]

(40-1042)

④ 40歳以上(被爆時)

長崎市内から30分の城山町の市営住宅150戸は、全部跡形もなく焼失し、瓦もこなごなにこわれ、焼きはらわれ、電柱、樹木だけが残っていたのには驚く。この中に同僚の8人家族が全員焼死され、工場のコンクリートの蔭にいた本人独り残り、茫然としておられ、誠に気の毒。

途中の川辺には水を求めて倒れている人、防火用水に上半身をつつ込み死んでいる人。

郊外で農作業をしていて助かったとよろこんでいた方々も、引続き農作業を続けていたため、1週間後、2週間後、35日後に次々と死んでいった。

隣の造船所のタービン工場に勤労奉仕の女学生150人も、工場内で全員焼死。

1カ月前に兵器製作所の所長が異動で、東京本社から転勤して来られ、構内を視察して歩いていて被爆し、大村海軍病院へ入院され5日後死去。遺体引受けの命を受け、14日夜遺体のわきで通夜し、15日終戦の日、村の火葬場で火葬をし遺骨を持って工場跡へ帰ったが、途中死（焼）された者はそのまま放置されており、死臭が鼻をつき大変であった。

このように原爆で大量に殺戮されたときは何週間も放置され、集められ、焼かれ、葬式はおろかお経の一つもあげてもらえず処理され、誠に気の毒だなあと思いました。

〔長崎 入市 男 40歳〕

(23-0418)

b) 女

① 9歳以下（被爆時）

私は直接被爆ではありませんが、姉（当時15歳で）が女学校で学徒動員で、長崎の茂里町三菱兵器で作業中被爆し、一瞬の暗闇の中、気がついた時は大きな広い工場の鉄の屋根の下敷きになっていた。～ちゃん、～ちゃんと声をかけたが、返事があるのは3～4人だけだった。

一番仲良しのていちゃんが、助けてー！助けてー！と声をふりしぼって叫んでいるのが聞こえた。やっとの思いで鉄の屋根のすき間から這い出して助けようとしたが、火がそばまできてて、ていちゃんの手を引っぱったが、身体がはさまれて動かず、ていちゃんは姉の名を呼び、シーちゃん逃げて！早く逃げて！シーちゃん！シーちゃん！と叫ぶ声が今でも耳に残ってやりきれない思いだと言っております。

〔長崎 入市 女 8歳〕

(13-29-020)

私の母親の兄さんが長崎市内で馬車を引いて被爆。暑い時だから胸を出して歩いていたそうです。馬は死に、おじは馬車の下になって、顔から胸、手と、黒と赤身の出た体で帰って来たのです。ほうたいも無く、母がゆかたをやぶってつなぎ合わせ、体中白いほうたいに変わりました。その姿を見た私達は、今でも忘れません。お手洗いに出て来ると逃げ廻ったものです。恐れでした。

酒が大好きな人で、助からないからと一升びん一本を飲ませたのが、命拾いでした。しかし、2年後、亡くなりました。

〔長崎 入市 女 9歳〕

(13-23-044)

② 10歳台（被爆時）

髪の毛が抜けてしまい、皮と骨ばかりのような状態で、ただ生きている、呼吸をしているだけのうつろな目をして、顔面蒼白で身動きひとつしないというよりは、出来ない人の姿がいつも目に浮ぶ。

〔長崎 入市 女 13歳〕

(23-0366)

従弟が浦上の爆心地の近くで被爆して、島原に帰ってきたが、首から背中へかけて、肉がえぐられており、そこにうじがわいていた。苦しみぬいて16日死亡したが、その時の状況が忘れられない。

被爆当日、私は報国隊員（学徒動員）だったが、逃げて来る時、首が飛んだ人、内臓が飛びだした死体、ガラスの破片まみれの死体などの中を歩いた。

〔長崎 入市 女 15歳〕

(13-19-044)

長与の長崎鉄道管理部にいましたが、しばらくして空を見ると太陽がはっきり、かき色に見えまして、地球がどうかなるのではと思ったことでした。真夏の太陽がまぶしくて見えないのに、お月様を見てるようでした。

十人町の自宅へ帰る途中、爆心地を通り帰る時、真黒になった人、馬も何頭か死んでいました。小さい子供はお母さんの胸に抱かれもしないで死んで行ってしまったのかと、短い命があわれになり、その小さい死体が今も心に残っています。

命の尊さを考え、二度とあのような事のないよう、戦争をこの地球上からなくし、核のおそろしさを、せめて自分の身のまわりの人達に話して聞かせることです。

〔長崎 入市 女 15歳〕

(42-1781)

あの日から2日目、大学病院に妹をさがしに行った。

道の尾から歩いて浦上の方に行く途中、馬がやけぶとって死んでいたり、小さな子供がまっ黒にやけ死んだり、道の途中であう人たちはやけどをしたり、けがをした人たちをおぶっておられた。みんな血やどろでよごれ、生きていらっしゃるんだろうかと思うような様子でした。病院前に行ってみると、またびっくり、死人の山でした。

やっどのおもいで妹がみつきり、つれかえろうとすると「△△さんはいいなあ」と一緒にいた人が言うんです。「あなたたちも、もうすぐむかえにこられますよ、元気をだしてね」と言ってわかれましたが、妹だけつれてかえるのが悪いような気もしましたが、しかたありませんでした。

ほんとうにあんな死に方、あんなけが、やけど、生きじごくとでも言うんでしょうか。あんなに水をほしがった人たちに、はら一ぱい水をのませてやれなかったことがごん念です。

二度とくり返してはならない。

〔長崎 入市 女 18歳〕

(42-2080)

8月10日朝7時に日進丸（川南工業の船）にて市内に入り、そのものすごさにびっくり、声も出ない。救護所の本部大光寺について、思わず両手で目をかくした。私はプロの看護婦、でもそのすさまじさ、むごさ、この世のものではない光景を目のあたり見て、これがほんとに生地獄。全身火傷、全身ケガ、さまざまな人がごろごろしていた。看護婦さん水、水をのませて、あっちからもこっちからも、その声が聞こえなくなる時はもう息を引き取っている。なんとひさんなことか、悲しいことか、その人々があわれで、かわいそうで、何もしてやれない我が身がつらい、情けない。

トラックにて中心地を患者収容のためと、姝を探しながらまわりました。浦上川のほとりには人、人、人、皆死んでいる。馬も牛も、地獄よりもっとひどい。道を歩いている人の背中、シャツがやぶれているのかと思うと、背中の皮がやけただれて風にヒラヒラとあおいでいる。顔は真黒、男か女かもわからない。

トラックいっぱい患者をのせて大光寺に帰る、また行く、の連続であった。ある患者さん（オバサン）親一人子一人、この仇きと取ってくれと言いながら死んでいった。その一人一人に水ものませてやることが出来なく、患部の痛みや火傷の痛みもやわらげてやることも出来ないまま、息を引き取っていった人々に申しわけなく、今40年経っても忘れることは出来ない。私の心残りは、私が死ぬまで続くでしょうね。私達看護にあたった者全員が同じ気持だと思う。

核兵器、もういやです。私達長崎人と広島人でたくさんです。

〔長崎 入市 女 19歳〕
(42-0798)

③ 20歳台（被爆時）

体全体が紫色になって、痛いと言っても、さすってやるにしても皮がはげるし、どうすることも出来なかった。それを見て泣く泣く死んでいった親に孝行も出来ず残念でした。

〔長崎 入市 女 20歳〕
(23-0094)

主人が西町の三菱の農場で被爆し、全身やけどで、25日に苦しみぬいて亡くなりました。足の内がわにウジ虫がわき、むざんな死に方でした。

母や姉も西町の田で除草中に被爆して、目もとび出し、全身の肉も皮もだらだらになって、9日の夜と10日に死にました。

40年たった今でも、昨日のように思い出されます。

〔長崎 入市 女 20歳〕
(42-2221)

8月9日東山手町活水女専の校庭には、近くの海軍病院の患者さんが、警戒警報になりますと、校庭の防空壕に入っていっちゃいました。その日は朝早くから警戒警報が出ておりましたので、患者さんは防空壕に入り、元気な衛生兵さんは日向に出て、お仕事をやっていたら、その方達がピカー一つで紫褐色になり、苦しまれ、毎日次々と天国にめされました。

また、被爆4日目に山里町、上野町の中心地に友人、先生、親類の者を、鍬を肩にさがしにまいりました。長崎駅から浦上駅へと歩いて行きますと、工場は鉄骨がねじ曲がり、たくさんな死人がごろごろ、白骨化してる方、半分焼けてる方、馬の死骸、子供と母親が抱き合ってる方、その方達の顔を見ますと、悔しさで歯をくいしばっているように見え、口には言い表わせない気持でいっぱいでした。

ピカー一つで恐るべきことがおこったのです。地獄と申しまして言い過ぎではないと思います。

もう戦争はこりごりです。世界平和であるように祈っております。

〔長崎 入市 女 21歳〕
(13-35-006)

ア) 真黒こげになっていたり、骨だけで人間の形をしていたり、大きな水槽に浮かんでパンパンにふくれていたり、髪の毛を少しつけていただけの首がころがっていたり、本当に見たものでなければ分らない、悲惨な光景でした。

また、歩いている人達も1人として満足な人はいず、ぼろぼろの衣類に、頭には髪の毛もなく、よろけながら、ほうような形で歩いていた。男か女かの区別すら分らないような悲惨な光景は、今でも頭からはなれません。

イ) 戦争に何の責任も関係もない一般市民が、何故このような悲惨な目に会わなければならないのかと、戦争というものに対しての憤りで胸がいっぱいでした。

ウ) けがをして、防空壕の中でうずくまっている人達に、おにぎり一つあげられなかった事です。

〔長崎 入市 女 21歳〕
(13-52-004)

ア) 隣のお嫁さんの妹が爆心地より探し出されてきたが、被爆翌日より急性の原爆病症状により、2日間苦しむだけ苦しんで、婦人従軍歌を唱いつつ死んだ。許せない(哀れなり)。

イ) 被爆後3日目、強制連行されたと見える1人の朝鮮人の男子に水を求められ、死なせたくない故に与えなかったことを、今もって人生の重荷としてしょっている。合掌。

〔長崎 入市 女 21歳〕
(23-0231)

終戦後も原爆におびえ、何年間はおみなの音といはずまの光に恐怖感を感じていた。

原爆でかろうじて生き残った方が、やけどでうじがわき、悪臭をはなち、うめき

ながら道端のごぞの上で死んでいった方や、元気な方が急に亡くなっていった。私や家族も何時死ぬのかと毎日不安な気持で送っていた。

戦争とは人の心をふみにじり、真心まで変えて行く生地獄のようなものと思う。現在は平和の尊さを心より感謝している。

人間が極限状態におちた時、あんなにもあさましいものかと感じた。防空ごうへ入ろうとしても、前に入っている人たちが後の人たちを入れようとしな。入口でウロウロしたら、敵に見つかってしまうからと。

〔長崎 入市 女 21歳〕
(42-1916)

8月9日夜中、疎開している私の所へ実家の弟がたどり着き、長崎市内の惨状を聞く。母は直爆死、家の近くには熱気で近づけなかったそうだ。気遣っていた父も、翌日着のみ着のまま、頭に怪我をしてたどり着く。たいした傷でなくほっとする。

11日、父と二人で母の遺体をさがしに長崎市に入る。異臭はなはだしく息もつけぬほどで、松山町から近道の坂を上がり(今思うと爆心地のそば)実家のあった山里町へ入る。途中あちこちに性別も分からぬ黒こげの遺体が転がり、家の方向へ近づくとつれ遺体の数は多くなり、胸がつまる。ようやく着いた敷地内には母の遺体はなく、見渡す限りの無残な焼野原で、そこかしこに黒こげの遺体が転がり、茫然として声も出ず、隣家の敷地内に(3人家族)7体があり、その中にほぼ間違いなく母だと思われる遺体を捜し当てる。あまりにも深い悲しみのためか涙も出ないのが自分でも不思議だった。

原爆とは何と残酷なものか、あの時の悲惨な有様は今もありありと目に浮かぶ。おそらく生涯忘れることはないであろう。

人類の平和のためにも、核兵器は廃絶すべきだと思う。

〔長崎 入市 女 26歳〕
(23-0197)

当時川南工業の配給所に勤務していました。当日昼近く大きな爆発音がしました。窓ガラスが破れ散りました。兄が時津町に住んでいましたので、兄の安否を尋ねました。

11日に浦上方面に行きましたら、行けば行くほど焼の原でした。大勢の方々に死体を運ぶ方々、木を積んでその上に死体を乗せて焼く人々でした。牛か馬は白骨になって横たわり、右左には道ばたに家族らしい人達が、ここが炊事場だった、ここが風呂場だったと言って、煙の出る所をさがしていたのです。また、目をおさえて泣く方々もいました。私も臭気で一生懸命で通りました。

そんな惨状の中を往復しましたのに、何もして上げられなかったことを残念に思います。

〔長崎 入市 女 26歳〕
(42-0704)

城山小学校のぼうくうごうの入口まではい出してきて、水をもとめたり、助けをもとめたりする人々に、水も飲まずことが出来ないほど自分自身心がみだれていたのでしょうか、もうすぐ助けに来るからがんばってと言いつつどうすることも出来ませんでした。

また、おじいさんでしょうと思います、ぼうくうごうに半身入りながら、男の名前を呼んでいる人、泣きながら走り歩く人、コモをはいで死体を見る人。私も同様探し廻りましたが、浦上川の岸にはすわったままなくなられた人もいました。

今思い出しても身内がふるい出して寒くなります。

〔長崎 入市 女 29歳〕
(42-0801)

④ 30歳台（被爆時）

爆心地1.2kmのところでは被爆しました主人を迎えに行き、自宅より16km位のところですが、リヤカーを持って行きましたが、道中の様子はまるで地獄そのものでした。

会社でも男女の見分けがつかず、言葉にはなりません。あまりの悲しみとおそろしさ、むごさに、涙も全く出ませんでした。

人間は極地に追いこまれた時は、涙など出ぬものであると思いました。

義弟が被爆者として祀られてないのが悲しみです。

当時は何が何だかわからず、家族の心残りです。

主人は被爆者として祀られています。

〔長崎 入市 女 30歳〕

(13-27-023)

ア) 着物やモンペの下まで火傷で、皮膚がくずれて、どこを持って起こして小水等の手伝いをしていいか分からないような人が、頭を並べて学校や病院に収容され、翌日は悪臭を放ち、うじがわき、生きながらの地獄。苦しんでいる人を見ては、即死の方がまだましだと思った。

イ) 二度とないように祈りたい。

ウ) 水ぐらいなら上げられても、薬もなくて傷の手当ても出来ず、少しも楽にして上げられなかった。

〔長崎 入市 女 32歳〕

(13-36-007)

○牛やら馬やらわからないような死体がいっぱい。

○あちらこちらで子どもを焼いているのをみた。かわいそうで涙がでた。

○向いの家のひろ子さん（22歳、挺身隊）の死にかた……。今思っても、筆にもことばにもならない。まったくかわいそうだなあと思う。

目がとびでて、口も鼻も全部でてしまって、見るかげもない。私にむかって「おばさん、お母さんのこと頼むね」といい、「（顔に）ハンカチかけてよ」「さようなら」……それっきりだった。

〔長崎 入市 女 37歳〕

（13-50-001）

Ⅲ. その他

a) 女

① 10歳台（被爆時）

原爆投下の日、普通は市内茂里町の製鋼所に通っておりましたが、その日は牛熊郷（現在は牛熊町）の小学校内にある青年学校に出席するため、牛熊郷から製鋼所に通勤していた全員が出席し製鋼所は休みました。そのため爆心地近くの製鋼所へ、各地区から出勤していた人達は全員被爆、死亡というのが大半で、生存している人はホンの少しの人達で、それも大やけどや、大けがの後遺症の人達ばかりです。爆心地近くではないが、5.5kmの自宅附近で被爆し倒れたり転んだりしましたが、幸いけがもやけどもしなかったけれども、そのことを思う時、1日の違いで死んで行った人達を思う時、本当に助かった思いより残念であったろうと、友をなくした無念の思いや、さまざまな悔恨が残って仕方ありません。

40年も経過した今日でも、まだ後遺症に苦しむ人達を見るにつけ、今後はどんな事があってもかような事のないよう、核反対に気を進めたいと思っております。

〔長崎 特例地域 女 15歳〕

(42-0674)

焼けただれた数知れない人々が、次から次へと貨車からおりて来て、たちまちのうちに諫早駅前広場をうめつくしてしまい、あるけなくなった。黒こげになった人々が、私達学生にむかって、水をくれ、私の耳がついているかと、次から次へと問いかけ、寄って来るのにおそろしくなりましたが、私達はおそろしくなり、後はただ夢中で動くことの出来ない人々を4人1組でタンカに乗せて、海軍病院まで力のかぎり走り続けました。

病院も私達の学校の体育館も、まっ黒な人の山に、何がなにやらわからず、こわさと悲しさで、ただ無我夢中でした。

〔長崎 救護 女 17歳〕

(13-23-102)

戦後40年余を過ぎた今でも、はっきりと当時の事が目の前に浮かんで来ます。

原爆投下の翌々日の11日の午後3時頃だったと思います。被爆者の方達が汽車で長田駅に運ばれました。一目見ただけでびっくりしました。無惨な姿、異様なうめき声、わめき声、生きながらの地獄とはこのことでしょう。体は焼けただれ、着ている物はボロボロに引きちぎれ、水ぶくれでぶよぶよに腫れている人、大腿から下腿までガラスで切れたのか、肉がザクロのように割れている人、この人は私達と同じ位の年代でした。でも、もう亡くなっておられました。

私達は歩ける方には肩を貸し、歩けない人は戸板に乗せて、長田小学校まで運びました。そうしている間にも、虫の息だった人は亡くなっていかれました。治療といっても何もなく、ただ赤チンキを顔などにぬり、目、鼻、口と穴を開け、そっとはってやる位でした。

運搬、看護と2、3日を過ごし、その時は気が張っていたのか、4、5日位して

から夜な夜な苦しいうめき声が聞こえたり、亡くなられた方が枕元に立たれたり、夜になるのが恐ろしく、不眠症になり、1カ月近く半病人のような生活をしました。

〔長崎 救護 女 17歳〕

(42-2065)

ア) 板の間やコンクリートの上にねかせられた被爆者は、やけどの傷口は赤くただれ、あぶらがにじみ出て、まわりの方は木灰でもかけたように黒くてよごれ、そこにハエがとまり、それをはらうことも出来ず、いたみを告げることも出来ず、ただ目だけがうごいていました。

イ) この世の中に、人間世界に、このようなことがあって良いものかと思い、口には言えなかったけど、早く戦争がおわってほしいと思いました。本当に戦争は許すことは出来ません。戦争は恐ろしいです。

ウ) 当時私に出来る事は、水をあたえたり、ハエを追うぐらいしか出来ませんでした。今思うと、当時大人であつたらもっと何か出来たのではと心のこりです。死体をはこんだりしたことを思い出すと、胸がいたみます。

〔長崎 救護 女 18歳〕

(42-2089)

② 20歳台 (被爆時)

救護所へ運びこまれる被爆者を見て感じたこと。

1. 医薬品の欠乏、特に火傷の薬など……。バケツに入った真っ黒な薬？をみんな塗っていた。
2. 外観上特に異常もなかったような人々でも、翌日に行ってみると死亡していた。
3. ほとんどすべての人が下痢と嘔吐に悩まされ、その排泄物に追われる状態であ

- った。当時伝染病の疑いがあるから注意して消毒をするようにと言われていた。
4. ある老婆から足、背がカユイから搔いてくれと言われ、見ると5㎝円形に丸く波打って白くキラキラ光って見えるので、何だろうとよく観察したら、傷口を埋めつくした蛆の頭が動くたびに波打っているのだと分かりゾツとした。1日1回回られる先生にピンセットでつまんで出して戴く。
 5. 被爆者の中に朝鮮人の一団がおられたが、故郷を遠く離れて呻吟する人達に囲まれ、その心細さにかアイゴー、アイゴーと声高に泣き叫んでいたのが、特に印象深く残っている。
 6. 時々敵機襲来のサイレンが鳴りひびくと、皆一様に早く防空壕に連れて行ってくれと言われ、生への執着の凄まじさに打たれた。あの恐ろしい地獄図の中を通って来られた人達だから、その思いも切実なものだったに違いないと思った。
 7. 昼食の時間になったが、胸がむかついてとても食べられなかった。
 8. 消防団の人々が次々大八〔車〕で運び込み、また、死亡者を続々大八に積んでどこかへ運んで行った。まさに地獄絵図。

〔長崎 救護 女 27歳〕
(42-1937)

③ 30歳台(被爆時)

長崎より原爆被爆者が小学校にはこぼれて来たので、救護に行きおどろきました。これが被爆なのかと、ぼうぜんとして立ちすくんでいた私も、被爆者の方々が、水をくれ、助けて下さいと言う言葉に思わず水をとりて走って行きましたが、水をやってはいけないと言われ、引きかえして見ますと、その人はもう死んでいました。ああ少しでも水をやっておればよかったのにと心のこりでもありませんでした。

もう戦争はいやです。戦争のない平和がほしい。

〔長崎 救護 女 32歳〕
(42-2119)

諫早国民学校で救護して、今でも忘れられない事。

講堂には少しもすき間もなく床にごろ寝していました。演台の前方に顔を床に伏せ、両手を顔に当てた青年がアイゴー、アイゴーと泣いていたあの声は忘れられない。その心中を思い胸がつまる思いでした。

南側の入口に30代の男の方の左足のすねの傷からうじが這い出しています。私は紙をもんで傷口をなでるようにしてうじを出し、また、蠅がとまらぬようにゆかたの布で作ったほうたいで、薬をつけて傷口を巻いた。その男の方は身動きもせず目を閉じたまま具合が悪そうだった。

一休みしていたら講堂の入口の上がり段で足をふみはずしてか、よろよろと前方にうつ伏した20歳代の女の方が倒れたので、私達2、3人かけ寄って尋ねると、便所に行きたいとのことでした。とても一人で歩けそうもないので、私の肩ともう一人の方の右手を貸して、ゆっくりゆっくり便所まで連れて行きました。用を足し、再び講堂まで連れて行く途中、背中を見てくれとのことで見ると、肩よりちょっと下が赤く水ぶくれして痛そうでした。敷布で作ったほうたいで薬をつけて貼って上げました。この女の人の顔面は黒くこげたようにしていました。この人は一寸私に目礼して、また目を閉じました。

戦争は再び起こしてはならない、強く思いました。

右を見ても、左を見ても、重症な方ばかり、ウーウーとうめいて苦しんでいる30歳ぐらいの男の方を担架に乗せられる警防団の方に手をかしたこともありました。

患者の便所はよごれがちで、下痢便や血便でした。灰で始末してあとクレゾール液を流したこともありました。

8月31日は教室のよごれに血こんなど、縄で作ったたわしで洗い落としました。戦争が起こってはならないと神仏に祈念するほかありません。

〔長崎 救護 女 33歳〕

(42-2064)

1989. 3. 28

日本原水爆被害者団体協議会

〒105 東京都港区芝大門1-3-5
ゲイブルビル902

☎03(438)1897